

レクリエーション研究

第16号

第16回日本レクリエーション学会 (大会発表論文集)

(1986年10月24日(金))

(パシフィックホテル沖縄 〈沖縄県那覇市〉)

日本レクリエーション学会

1986年10月

「レクリエーション研究（大会発表論文集）」投稿規定

暫定措置として昭和61年度は下記の投稿規定にて実施し、問題点があれば、次年度、修正を加えるものとする。

1. 投稿者は本会の正会員・特別会員であること。
2. 論文は他誌に未投稿のものに限る。ただし、外国人会員については欧文での投稿も受け付ける。
3. 論文は新かなづかい、制限漢字使用を原則とし、A 4判、横書き、400字詰原稿用紙を使用する。また、本学会所定のタイプ用紙と同じサイズ、同じ様式（B 4判・縦2段コラム）であればワードプロセッサによる原稿も受け付ける。
4. 欧文要約は不要である。
5. 論文の第一頁表題の下にはかならず氏名、所属をつけ、図版・写真にもタイトルをつける。
6. 図版はかならず白紙に墨書きとし、図版・写真類は、上下の別を明記し、原則として図表の文字も活字で入れる。
7. 論文は400字詰原稿用紙にて20枚以上30枚以内を原則とする。
8. 投稿する原稿は、手書き（またはワープロ）のオリジナル原稿とそのコピー3部とする。
9. 審査を通過した論文（手書き）は投稿者に返送する。投稿者は、本学会所定の用紙に和文タイプライターまたはワードプロセッサ（24×24ドット以上）にて原稿を活字化しなければならない。活字化されていないなど様式に適合しない論文は受け付けない。校正は投稿者の責任において行うものとする。
10. タイプの打ち上がりは、本学会所定の用紙に原則として4枚以上6枚以内とする。規定の枚数を越えた場合は投稿者の実費負担とする。
11. 活字化するために論文を投稿者に返送するが、かならず必要な額の切手および宛て先を記した返信用の封筒を同封すること。

研 究 発 表

日 時：10月24日（金） 午前9時～14時30分

場 所：パシフィックホテル沖縄内 A会場, B会場

発表時間：1 演題の発表時間は12分とし、質問と討論時間を7分とする。

10分（発表終了 2分前） ベル1回

12分（発表終了） ベル2回

19分（質疑終了） ベル3回

《 A 会 場 》

No	発 表 時 刻	発 表 演 題	演 者	所 属	座 長
A 1	9 : 00	幼児の運動遊びと親の養育態度	綿田 育代	日本大学	
A 2	9 : 20	子どもの社会化過程と運動・スポーツ行動－親の意識分析から－	松村 悦博	日本大学	
A 3	9 : 40	勉学志向とスポーツ・レクリエーション行動（第2報）	桃沢 聖子	日本大学	
A 4	10 : 00	幼児保育の今日的課題－「就学前教育」－『課業と遊び』－の予備的考察－	浅田 隆夫	目白学園大	
A 5	10 : 20	「幼児期」における発達課題について－基本的生活習慣・母親の期待像等を中心として－	梅津 迪子	女子聖学院大	
A 6	10 : 40	幼児の社会的な生活習慣の育成について	堀 良子	帝塚山学院大	
A 7	11 : 00	領域：「音楽リズム」に関する幼児の遊戯行動	深山千穂子	女子聖学院大	
A 8	11 : 20	幼児教育における「課業（領域「自然」「健康」「絵画製作」）」遊びとの関係についての考察	松浦三代子	東京女子体育大学	
A 9	11 : 40	ソビエトのピオネールキャンプに関する研究	里見 悦郎	東海大学大学院	
（ 昼 食 ・ 総 会 ）					
A 10	13 : 10	児童キャンプの教育的効果に関する一研究－自主性診断検査（DTI）からみた自主性の効果を中心として－	馬場進一郎	日本体育大	
A 11	13 : 30	キャンプ期間についての基礎的研究－中学校教員の意識の分析－	福田 芳則	大阪体育大	
A 12	13 : 50	レクリエーションスキーの技術評価に関する研究	金子 和正	共栄学園大	
A 13	14 : 10	アメリカにおける野外教育の歴史と展望	星野 敏男	明治大学	

《 B 会 場 》

No.	発 表 時 刻	発 表 演 題	演 者	所 属	座 長
B 1	9 : 00	「レクリエーション」に対するイメージの研究－とくに大学生の事例比較を中心に－	高橋 伸	国際基督教大 学	
B 2	9 : 20	学生生活における Re-creation 行動に関する研究－N大学の場合－	阿部 信博	日本大学	
B 3	9 : 40	日本厚生協会設立までの経緯	沢村 博	日本大学	
B 4	10 : 00	女子従業員のレクリエーション参加と職場環境認知	増田 慧	日本大学	
B 5	10 : 20	余暇・スポーツデータベースの情報サービスの現状と課題	山口 泰雄	鹿屋体 育 学 大	
B 6	10 : 40	体育・レクリエーション・プログラム評価に関する経営学的研究－ライフサイクル理論の応用－	原田 宗彦	鹿屋体 育 学 大	
B 7	11 : 00	高齢者の健康・レクリエーション教室参加とその効果	小俣里知子	日本大学	
B 8	11 : 20	高齢者スポーツの振興に関する研究－高齢者スポーツの在り方とその方向性について－	山本 英毅	日本福 祉 学 大	
B 9	11 : 40	コミュニティ・レクリエーション活動圏と日常生活圏の関係について	海老原 修	東 大	
(昼 食 ・ 総 会)					
B 10	13 : 10	ニュージーランドの都市空間における創造的野外レクリエーションの実態とその事例	杉尾 邦江	プレック 研 究 所	
B 11	13 : 30	都市公園の利用者による評価等に関する研究－船橋市内二公園の比較から－	小川 貫	日本大学	
B 12	13 : 50	キャンプ場の利用状況と施設の評価について－白州町宮尾白の森キャンプ場の場合－	朝倉 徳雄	日本大学	

A 会 場

幼児の運動遊びと親の養育態度

○ 綿田 育代 田中 鎮雄
(日本大学) (日本大学)

枇沢 聖子 武田 正司
(日本大学) (日本大学)

運動遊び、社会化過程、養育態度、「期待」と「現実」

I. 目的

田中は¹⁾、日本人特有の女性らしき志向の社会的風土が、女性のスポーツ参加に対する抑制要因として働いていることを示唆している。また、枇沢らは²⁾、高校生を対象として、勉学志向とスポーツ・レクリエーション志向との関係を追究し、性差に注目しながらも全般的には勉学時間の増大に伴ってテレビ視聴時間を減少させ、未組織的スポーツ活動や趣味活動を楽しむなど、限定された状況下でもレクリエーション志向性を失わない傾向のあることを示唆して

表 1

項目	男		女	
	人数	割合	人数	割合
6 歳	8	12.1	8	16.3
5 歳	32	48.5	25	51.0
4 歳	26	39.4	16	32.7
合計	66	100.0	49	100.0

いる。

上記の研究をふまえながら、対象を就学前の幼児にしぼり、その親(母親)に回答を求める形で、男女別に幼児の運動遊びをはじめとする社会化過程を親がどのように認知し、どのような養育態度をとっているかを比較検討しようとしたのが本研究の目的である。

II. 方法

1. 調査対象：東京都内のN幼稚園児の母親。園児及びその母親の年齢構成は表1及び表2に示すとおりである。
2. 調査方法：質問紙法
3. 調査時期：昭和61年7月
4. 有効回収数：115(男児66、女児49)
有効回収率：70.6%
5. 質問紙の構成：

質問紙は、幼児の現状に対する母親の認知に関する項目、幼児の発達に対する母親の期待水準に関する項目及び基礎項目から構成されている。

幼児の現状に対する母親の認知に関する項目(項目1~25)と、幼児の発達に対する母親の期待水準に関する項目(項目26~50)は、例えば、「(最近のお子さんは)戸外で遊ぶことが大好きです」(項目6)と「(お子さんが小学校入学の頃には)戸外で遊ぶことが大好きな子であってほしい」(項目31)のように、その質問内容が対応

するようにつくられている。また、これら50項目はさらに次のようにカテゴライズされる。すなわち、項目1~5・項目26~30は、「勉強」に関するカテゴリー、項目6~10・項目31~35は、「運動遊び」に関するカテゴリー、項目11~15・項目36~40は、「情操教育」に関するカテゴリー、項目16~25・項目41~50は、「しつけ」に関するカテゴリーである(表3参照)。

なお、これら50項目それぞれに対する回答はリッカート法により、「全くその通り」(5)、「それに近い」(4)、

表 2

項目	男		女	
	人数	割合	人数	割合
20歳代	7	10.6	5	10.2
30歳代	55	83.3	38	77.6
40歳代	4	6.1	6	12.2
合計	66	100.0	49	100.0

「どちらともいえない」(3)、「その反対に近い」(2)、「その反対」(1)の5件法がとられている(ただし、項目5及び項目10は、「全くその通り」(5)または「その反対」(1)のいずれかに回答するようになっている)。

基礎項目は、幼児の「年齢」・「入園年数」・「進学予定」・「健康状態」、母親の「年齢」・「最終学歴」・「運動部経験の有無」・「スポーツ参加状況」・「スポーツクラブへの所属状況」・「おけいこごとの経験の有無」・「塾通いの経験の有無」から成り立っている。

6. データ処理：

日本大学文理学部コンピューターセンターIBM4331 LO2(SPSS)で行った。

III. 結果と考察

表3は、幼児の現状に対する母親の認知(現実)及び幼児の発達に対する母親の期待水準(期待)の50項目について、男女差(表3の太線枠内)と、対応する項目間の差を示したものである。

1. 幼児の現状に対する母親の認知

表3の項目1から25に注目してみると、勉強の項目(1~5)では、項目1、2、3、4にみるように、男女児、いずれも絵本を見たり、絵を書いたり、物を作ったり、本を読んでもらうことにかかなり強い興味を示しており、数字や文字を自主的に学習する意欲も高い傾向にある。このような中で、項目5及び

表3 幼児の運動遊びと親の養育態度

項目	内容	男児(項目間の比較)			女児(項目間の比較)			t検定 (男女児間の比較)
		M	SD	t検定	M	SD	t検定	
勉	1 26	絵本を見るのが大好きです 新しい絵本をすすんで読む子であってほしい	4.273 4.561	0.795 0.558	**	4.327 4.592	0.801 0.674	*
	2 27	絵を書いたり物を作ったりするのが大好きです 絵を書いたり物を作ったりするのが好きな子であってほしい	4.227 4.561	1.005 0.682	*	4.469 4.633	0.819 0.602	
	3 28	数字や文字を自分から覚えようとしています 数字や文字を自分から覚えようとする子であってほしい	3.909 4.667	1.160 0.591	***	4.265 4.694	0.861 0.619	***
強	4 29	本を読んでもらうことが大好きです 物語りを聞くことが好きな子であってほしい	4.500 4.500	0.789 0.789		4.612 4.653	0.731 0.631	
	5 30	進学準備のために塾に通っています 進学準備のためにすすんで塾に通う子であってほしい	1.606 2.682	1.445 1.098	***	1.408 2.429	1.223 1.080	***
運	6 31	戸外で遊ぶことが大好きです 戸外で遊ぶことが好きな子であってほしい	4.500 4.803	0.749 0.437	**	4.490 4.776	0.767 0.468	**
	7 32	友だちと活発な遊びをすることが大好きです 友だちと活発な遊びをすることが好きな子であってほしい	4.379 4.652	0.799 0.595	**	4.367 4.653	0.755 0.631	**
	8 33	新しい運動やスポーツに強い興味を示します 新しい運動やスポーツに興味の持てる子であってほしい	3.682 4.546	0.963 0.661	***	3.918 4.408	1.017 0.788	**
遊	9 34	親子で一緒に運動やスポーツを行っています 親子の運動遊びをリードできる子であってほしい	2.803 4.227	1.070 0.780	***	2.306 3.918	1.084 0.862	***
	10 35	スポーツ教室やスポーツクラブに通っています スポーツ教室やスポーツクラブにすすんで通う子であってほしい	2.879 3.682	2.012 1.166	***	2.061 3.306	1.784 1.045	***
情	11 36	家族や友だちにやさしい心づかいができます 家族や友だちにやさしい心づかいができる子であってほしい	4.197 4.909	0.706 0.290	***	4.449 4.898	0.614 0.306	***
	12 37	親子一緒にいつも楽しく遊んでいます 親子一緒にいつも楽しく遊べる子であってほしい	3.712 4.409	0.837 0.894	***	3.449 4.143	0.709 0.866	***
	13 38	小鳥や犬・猫などをよくかわいがります 小鳥や犬・猫などをよくかわいがる子であってほしい	3.591 4.364	0.960 0.777	***	3.694 4.510	1.194 0.711	***
操	14 39	木々の緑や草花が大好きです 木々の緑や草花が好きな子であってほしい	3.530 4.470	0.881 0.706	***	4.184 4.714	0.905 0.577	***
	15 40	音楽を聞いたり歌ったりするのが大好きです 音楽を聞いたり歌ったりするのが好きな子であってほしい	3.864 4.303	1.036 0.803	***	4.551 4.633	0.792 0.698	***
し	16 41	「男の子らしい遊び」「女の子らしい遊び」をしています 「男の子らしい遊び」「女の子らしい遊び」をする子であってほしい	4.242 4.515	0.878 0.707	**	4.163 3.510	0.850 0.938	***
	17 42	あいさつや返事がしっかりできます あいさつや返事がしっかりできる子であってほしい	3.818 4.939	0.875 0.240	***	3.980 4.939	0.854 0.242	***
	18 43	整理整頓がかなりできます 整理整頓がしっかりできる子であってほしい	3.121 4.697	0.985 0.581	***	3.245 4.796	1.090 0.456	***
つ	19 44	ひとりで身じたくをしようとしています ひとりで身じたくができる子であってほしい	3.909 4.864	0.988 0.346	***	4.245 4.939	0.925 0.242	***
	20 45	お手伝いをすすんでします お手伝いをすすんでする子であってほしい	3.424 4.258	1.024 0.730	***	3.959 4.674	0.957 0.516	**
け	21 46	食べ物に好き嫌いが多い方です 食べ物に好き嫌いが少ない子であってほしい	3.197 4.818	1.427 0.605	***	3.389 4.816	1.412 0.441	***
	22 47	缶ジュースなどを自由勝手に飲んでいます 缶ジュースなどを自由勝手に飲まない子であってほしい	4.500 4.455	0.864 0.748		4.714 4.633	0.677 0.782	
	23 48	テレビの番組は勝手に見ます テレビの番組は決めて見る子であってほしい	3.546 4.500	1.243 0.707	***	3.776 4.571	1.066 0.645	***
	24 49	ファミコンやゲームウォッチに熱中しています ファミコンやゲームウォッチに熱中しない子であってほしい	3.106 4.409	1.469 0.803	***	4.184 4.367	1.149 0.994	***
	25 50	家族と一緒に夜おそくまで起きています 夜ふかしをしない子であってほしい	3.955 4.606	1.329 0.677	**	4.143 4.755	1.000 0.480	***

注) 項目21、22、23、24、25は「全くその通り」(1)、「それに近い」(2)、「どちらともいえない」(3)、

「その反対に近い」(4)、「その反対」(5)

表4にみるように、幼児期から進学準備のために塾に通う子どもが全体の13%にも及ぶ事実注目しなければならない。

運動遊びの項目(6~10)では、項目6、7、8にみるように、戸外遊びや友だちとの活発な遊びを好む傾向にあり、新しい運動やスポーツに興味を示すなど、男児、女児にかかわらず、この時期の活動性の高さが示唆される。このような傾向を示す中で、親子での運動・スポーツへの参加(表5)は、女児より男児の方が積極的であることがわかる。

情操教育の項目(11~15)では、男女児共通に高い平均値が認められるのであるが、とくに女児では男児より、草花や音楽を好む傾向が強く、やさしい心づかいもできるようになることが明らかである。

しつけの項目(16~25)では、男女児いずれもあいさつや返事、ひとりでの身じたくがしっかりできるようになるとともに、整理整頓も次第にできるようになってきていることが理解できる。また、お手伝いにも積極的な態度をもつようになるが、とくに、女児にこの傾向が強く認められる。一方、項目16にみるように、この時期には、男児は「男の子らしい遊び」を女児は「女の子らしい遊び」を志向するなど、遊びの傾向に性差がはっきりしてくることが示唆される。項目21~25は、しつけの状況を裏側からみたものである。缶ジュースなどの飲用やテレビ視聴、夜ふかしなどに対する放任状況はとくに認められないが、食物の好き嫌いには、かなりの個人差がみられる(表6参照)。また、ファミコンやゲームウォッチなどの近年とみに流行してきた遊びは、男児に有意に多くみられ、室内遊び傾向の強化を示唆するものとして注目される。

以上のように、男児、女児それぞれにみられる社会化過程と運動・スポーツ行動の現実を、母親の認知からみた場合、次のような点が指摘できる。すなわち、(1)男児は、女児よりも、スポーツ教室等の組織的スポーツ活動への参加に積極的で、親子での運動遊びにも活発な傾向がみられる。(2)一方、女児は男児よりも、やさしさをもち、草花や音楽を好み、手伝いにも積極的であるなど、女性的な役割を取得していく傾向がみられる。(3)このことは、社会化過程での重要な他者としての母親からみた結果であるため、この性差のもつ意味は、一層その重みを増してくるのである。

2 幼児の社会化過程に対する母親の現実認知と期待感

表3の左欄は、幼児の現実と期待についての母親の意識の相違を男女児別にみたものである。表3を一見して明らかのように、男児、女児のいずれにおいても、期待に関する項目のほとんどの平均値が現実のそれより有意に高いことが理解できる。

ここでとくに、表3の項目30と表7に注目してみると、進学塾志向は、男女児の親に共通して「どちらともいえない(3)」か「その反対(1)」のいずれかに回答する傾向がみられる。この一見あいまいな反応傾向は、短大ないし大学への進学予定が男児で95.5%、女児で89.8%にものぼる(表8)点を考え合わせると、小学校就学以前からの受験競争の激しさを示唆するものとして注目される。

このように勉学志向の強さが推測される中で、運動遊びに目をむけてみると、項目35と表9から、スポーツ教室やスポーツクラブへの参加希望は、女児よりも男児の母親に強いことが明らかに認められる。

これに対して、項目39、40、41、45から明らかとなり、自然を愛し、音楽を好み、積極的にお手伝いすることなどは、男児よりも女児の方に強く期待されており、ここでも女児に女の子らしさを期待する傾向の強さを垣間みることができる。

しかし、「(男の子らしい遊び)、(女の子らしい遊び)をする子であってほしい」に対する回答傾向をみると、男児の平均値が女児よりも有意に高いことがわかる。これを表10からみると、男児の母親はこの質問項目に肯定的に反応しているのに対して、女児の母親は、「全くその通り(5)」(24.5%)か「どちらともいえない(3)」(61.2%)のいずれかに回答するものが多い。このような母親の回答傾向の解明については、改めて精密な調査分析を試みる必要があると思われる。

IV. まとめ

東京都内のN幼稚園児の母親115名を対象に、質問紙調査を実施し、分析・考察を加えた結果、次のような知見を得た。

- (1) 子どもの現状を母親の認知からみると、男児には運動遊びの活発さが、女児には情操面の発達が注目される。
- (2) 小学校入学の頃までの子どもの発達に対する母親の期待水準は著しく高まりながら、期待内容は、(1)とほぼ同じ傾向を示している。
- (3) 小学校入学以前では、進学準備に対する母親の意識は、まだ、混沌としている。
- (4) 小学校入学の時点で、男児には男の子らしい遊びをするように期待される一方、女児には女の子らしい遊びを期待されなくなる傾向は、今後、解明すべき興味ある問題であると思われる。

V. 文 献

- 1) 田中鎮雄：「わが国における社会的風土と女性のスポーツ行動」、研究紀要第30号、日本大学人文科学研究所、1985、pp. 263 - 278.
- 2) 梶沢聖子、田中鎮雄、山岸明郎、武田正司：「勉学志向とスポーツ・レクリエーション行動」、レクリエーション研究第14号、日本レクリエーション学会、1985、pp. 68 - 73.

表 4

進学準備のために塾に通っています

項 目	男	女
全くその通り	10 15.2	5 10.2
そ の 反 対	56 84.8	44 89.8
合 計	66 100.0	49 100.0

表 5

親子で一緒に運動やスポーツを行っています

項 目	男	女
全くその通り	4 6.1	2 4.1
それに近い	10 15.2	4 8.2
どちらともいえない	31 46.8	14 28.6
その反対に近い	11 16.7	16 32.6
そ の 反 対	10 15.2	13 26.5
合 計	66 100.0	49 100.0

表 6

食物に好き嫌が多い方です

項 目	男	女
全くその通り	17 25.7	14 28.5
それに近い	12 18.2	12 24.5
どちらともいえない	15 22.7	9 18.4
その反対に近い	11 16.7	7 14.3
そ の 反 対	11 16.7	7 14.3
合 計	66 100.0	49 100.0

表 7

進学準備のためにすすんで塾に通う子であってほしい

項 目	男	女
全くその通り	4 6.1	1 2.0
それに近い	5 7.6	4 8.2
どちらともいえない	38 57.5	25 51.0
その反対に近い	4 6.1	4 8.2
そ の 反 対	15 22.7	15 30.6
合 計	66 100.0	49 100.0

表 8

子どもの進学予定

項 目	男	女
中学校まで	0 0.0	0 0.0
高校まで	0 0.0	4 8.2
各種専修学校まで	3 4.5	1 2.0
短大まで	0 0.0	5 10.2
大学まで	63 95.5	39 79.6
合 計	66 100.0	49 100.0

表 9

スポーツ教室やスポーツクラブにすすんで通う子であってほしい

項 目	男	女
全くその通り	21 31.8	9 18.4
それに近い	14 21.2	6 12.2
どちらともいえない	25 37.9	28 57.2
その反対に近い	1 1.5	3 6.1
そ の 反 対	5 7.6	3 6.1
合 計	66 100.0	49 100.0

表 10

「男の子らしい遊び」をする子であってほしい
「女の子らしい遊び」をする子であってほしい

項 目	男	女
全くその通り	42 63.7	12 24.5
それに近い	16 24.2	4 8.2
どちらともいえない	8 12.1	30 61.2
その反対に近い	0 0.0	3 6.1
そ の 反 対	0 0.0	0 0.0
合 計	66 100.0	49 100.0

df = 1. p < 0.05

子どもの社会化過程と運動・スポーツ行動

— 親の意識分析から —

○ 松村悦博 田中鎮雄 田辺英夫 久保木 優 武田正司
 (日本大学) (日本大学) (日本大学) (日本大学) (日本大学)

社会化過程、運動・スポーツ行動、親の認知

I. 目的

女性のスポーツ参加が近年とみに盛んになるなかで^{1)~7)}、田中は「スポーツ風土調査(Sport Climate Inventory)」を実施し、歴史的・文化的・社会的な諸環境がわが国に特徴的なスポーツ風土を形成し、このことが女性のスポーツ参加に対して今日でもなお抑制的に機能していることを示唆している⁸⁾。一方、梶沢らは、うえの「スポーツ風土調査」を用いて調査分析し、進学中心校の勉強志向性の強さが、スポーツ活動を抑制するなかで、特に女性にその傾向が顕著であることを明らかにしている⁹⁾。

表1 サンプルの構成

子供の性別

	男	女	合計
サンプル数	159 69.1	71 30.9	230 100.0

親の年齢構成

	30才未満	35才未満	40才未満	45才未満	45才未満	合計
男	0 0.0	26 16.4	93 58.5	36 22.6	4 2.5	159 100.0
女	1 1.4	3 4.2	48 67.7	15 21.1	4 5.6	71 100.0

これらの研究結果をふまえ、今回親にアンケート調査を実施し、親の目からみて幼児期・児童期・中学期までの発達段階で、先行研究⁹⁾と同様の傾向が認められるか否かについて調査分析を試みようとするのが本研究の目的である。

II. 方法

調査期日：昭和61年7月

調査対象：高知市内の進学面で有名な私立K中学校2年生の親。子どもの性別および親の年齢構成は表1に示すとおりである。

有効回収数：230 有効回収率：95.4%

調査方法：質問紙法

調査項目：子どもの社会化過程と運動・スポーツ行動に対する親の関与に関する60項目。この60項目は、小学校入学以前(20項目)、小学校3・4年生の頃(20項目)、および中学2年生現在(20項目)の3つの発達段階別に回答を求めるようになっている。また、各20項目は、これら3つの発達段階と対応する意味内容をもつように作成した(表2参照)。なお、これら60項目に対する回答は、「全くその通り(5)」、「それに近い(4)」、「どちらともいえない(3)」、「その反対に近い(2)」、「その反対(1)」の5件法のかたちをとっている。

データ処理：日本大学文理学部コンピューターセンターのIBM4331LO2(SPSS)を用いた。

III. 結果と考察

表2は、男女別に60項目それぞれについて、平均値、標準偏差および性差または項目間の差異を示したものである。

1. 子どもの社会化過程、運動・スポーツ行動にみる性差

1) 幼児期の傾向について

表2の運動遊び・スポーツ行動についてみると、項目1、2、4、5にみるとおり、これらすべての項目に男女共通して比較的高い平均値が認められる。なかでも、ひとりで運動遊びをすることに對して、男子の方が女子よりも高い平均値を示している点に注目したい。また、項目18、19にみるとおり、男子、女子にかかわらず運動時には力いっぱい頑張るとともに一番になりたいと思うものも比較的多

いことが理解できる。一方、みるスポーツ(項目3)については、男女とも、それほど興味を示していないことがわかる。

次に勉強・おけいごとや遊びに対する他者の励ましについてみると、勉強に対する励ましでは(項目10~12)、男女ともに「どちらでもない」に回答する傾向がみられるが、女子では、男子よりおけいごとなどに対する励ましを多く受けていることが明白に認められる。また、元気に遊ぶことに対する励まし(項目13~15)については、男女とも「少しは励ましを受ける」程度で同じ平均値を示している。

以上のことから、小学校入学以前では、男女とも運動遊びを活発に行う傾向がみられる中で、男子により活動性が高く、女子におけいごとなどを早期に開始する傾向のあることが示唆されて興味深い。

2) 児童期の傾向について

表2の項目21~40についてみると、運動遊び・スポーツ行動(項目21、22、24、25、38、39)は、男女とも活発に運動する傾向にある。特に、友だちと一緒に活発に遊ぶ傾向が認められるなかで(項目25)、男子にみるスポーツを好む傾向が明白になってくることが注目される(項目23)。また、項目38、39からはスポーツや運動では力いっぱい頑張っていることや勝ちたいという気持ちの強いことが認められる。

運動以外の余暇活動(項目28、29)では、女子の方が男子よりも高い値を示しており、男子よりも女子の方が趣味活動が豊かであることを示している。テレビ視聴に關し

表 2 各項目の平均値、標準偏差および検定結果

	項 目	男		女		t 検定
		M	S D	M	S D	
1	小学校入学以前は、とても元気な子どもでした。	4.264	0.958	4.070	1.060	
2	小学校入学以前は、運動神経の発達した子どもでした	3.793	1.050	3.648	0.972	
3	小学校入学以前は、スポーツをみるのが大好きでした	3.220	1.017	3.028	0.985	
4	小学校入学以前は、ひとりでも活発に運動遊びをしていました	3.862	0.997	3.380	1.087	* *
5	小学校入学以前は、友だちと一緒に活発に遊ぶのが大好きでした	4.195	1.032	4.169	1.028	
6	小学校入学以前は、スポーツ教室などに入っていたことがあります	1.818	1.475	1.620	1.324	
7	小学校入学以前は、テレビをみる時間がかなり長かったです	3.333	1.157	3.394	1.089	
8	小学校入学以前は、運動以外に好きな活動(趣味)がありました	2.899	1.351	3.366	1.312	*
9	小学校入学以前から、勉強やおけいごとなどを始めていました	2.585	1.647	3.803	1.644	* * *
10	小学校入学以前は、勉強やおけいごとで、親がよくほめたり励ましたりしたものです	2.818	1.326	3.761	1.281	* * *
11	小学校入学以前は、勉強やおけいごとで、兄弟や友だちがよくほめたり励ましたりしたものです	2.403	1.086	3.155	1.203	* * *
12	小学校入学以前は、勉強やおけいごとで、近所の人などがよくほめたり励ましたりしたものです	2.509	1.237	3.127	1.158	* * *
13	小学校入学以前は、元気に遊んでいると、親がよくほめたり励ましたりしたものです	3.635	0.957	3.747	0.906	
14	小学校入学以前は、元気に遊んでいると、兄弟や友だちがよくほめたり励ましたりしたものです	3.245	0.959	3.197	0.839	
15	小学校入学以前は、元気に遊んでいると、近所の人などがよくほめたり励ましたりしたものです	3.459	0.986	3.437	0.874	
16	小学校入学以前から、「男の子らしい身体」「女の子らしい身体」のちがいに気づいていました	2.774	1.232	2.690	1.237	
17	小学校入学以前から、「男の子らしい行動」「女の子らしい行動」のちがいに気づいていました	3.076	1.225	2.873	1.253	
18	小学校入学以前は、運動するときはいつも力いっぱい頑張っていました	4.283	0.929	4.282	0.848	
19	小学校入学以前は、運動するときはいつも一番になりたいという気持ちの強い子でした	3.623	1.129	3.507	1.170	
20	小学校入学以前は、男の子と女の子が同じ運動をするのが当たり前でした	4.176	0.911	4.282	1.044	
21	小学校3・4年生の頃は、とても元気な子どもでした	4.390	0.864	4.324	0.953	
22	小学校3・4年生の頃は、運動がかなり得意な方でした	3.937	1.112	3.563	1.065	*
23	小学校3・4年生の頃は、スポーツをみるのが大好きでした	3.591	1.069	3.028	1.108	* * *
24	小学校3・4年生の頃は、ひとりでも活発に運動遊びをしていました	3.723	1.136	3.239	1.035	* *
25	小学校3・4年生の頃は、友だちと一緒に活発に遊ぶのが大好きでした	4.390	0.913	4.268	0.810	
26	小学校3・4年生の頃は、学校や地域のスポーツクラブなどで活発に運動したものです	3.560	1.439	2.887	1.489	* *
27	小学校3・4年生の頃は、テレビをみる時間がかなり長かったです	3.434	0.952	3.479	1.169	
28	小学校3・4年生の頃は、運動以外に好きな趣味活動がありました	2.969	1.265	3.479	1.361	* *
29	小学校3・4年生の頃は、勉強やおけいごとなどのため、かなり多忙でした	2.654	1.331	3.211	1.319	* *
30	小学校3・4年生の頃は、勉強やおけいごとで、親がよくほめたり励ましたりしたものです	3.277	1.108	3.789	1.120	* *
31	小学校3・4年生の頃は、勉強やおけいごとで、兄弟や友だちがよくほめたり励ましたりしたものです	2.943	0.982	3.296	1.047	*
32	小学校3・4年生の頃は、勉強やおけいごとで、先生がよくほめたり励ましたりしてくれました	3.478	1.024	3.563	1.010	
33	小学校3・4年生の頃は、運動やスポーツのことで、親がよくほめたり励ましたりしたものです	3.698	0.891	3.507	1.081	
34	小学校3・4年生の頃は、運動やスポーツのことで、兄弟や友だちがよくほめたり励ましたりしたものです	3.359	0.888	3.141	0.930	
35	小学校3・4年生の頃は、運動やスポーツのことで、先生がよくほめたり励ましたりしてくれました	3.491	0.947	3.254	0.952	
36	小学校3・4年生の頃は、「男の子らしい身体」「女の子らしい身体」を強く意識するようになっていました	3.025	0.871	2.944	1.013	
37	小学校3・4年生の頃は、「男の子らしい行動」「女の子らしい行動」を強く意識するようになっていました	3.233	0.901	2.986	0.978	
38	小学校3・4年生の頃は、スポーツや運動では力いっぱい頑張っていました	4.258	0.887	4.113	1.008	
39	小学校3・4年生の頃は、スポーツや運動では勝ちたいという気持ちの強い子でした	3.874	1.023	3.732	1.028	
40	小学校3・4年生の頃は、男子と女子が同じ運動をするのが当たり前のようにでした	3.648	1.001	4.141	0.915	* * *
41	中学2年生現在は、ひと一倍元気な子です	3.616	0.940	3.732	0.956	
42	中学2年生現在は、スポーツや運動がかなり得意な方です	3.478	1.101	3.423	1.117	
43	中学2年生現在は、スポーツをみるのが大好きです	3.887	1.096	3.606	1.140	
44	中学2年生現在は、ひとりでも、ジョギングやなわとびなどよく運動します	2.629	1.235	2.239	1.101	*
45	中学2年生現在は、グループで運動することを楽しみにしています	3.598	1.170	3.634	1.198	
46	中学2年生現在は、スポーツクラブや運動部で活発に運動しています	3.403	1.669	2.930	1.701	
47	中学2年生現在は、テレビをかなり長い時間視聴するのが普通です	2.912	1.093	3.028	1.158	
48	中学2年生現在は、運動以外の趣味活動を楽しんでいます	2.887	1.345	3.254	1.391	
49	中学2年生現在は、学習塾や自宅での勉強が大変なようです	3.289	1.193	3.479	1.157	
50	中学2年生現在は、勉強のことで、親がよくほめたり励ましたりしています	3.585	1.051	3.761	0.933	
51	中学2年生現在は、勉強のことで、兄弟や友だちがよくほめたり励ましたりします	2.874	0.946	3.211	0.940	*
52	中学2年生現在は、勉強のことで、先生がよくほめたり励ましたりします	3.044	0.909	3.254	0.840	
53	中学2年生現在は、スポーツ関係で、親がよくほめたり励ましたりしています	3.384	1.168	3.254	1.038	
54	中学2年生現在は、スポーツ関係で、兄弟や友だちがよくほめたり励ましたりします	3.138	1.052	2.953	0.764	
55	中学2年生現在は、スポーツ関係で、先生がよくほめたり励ましたりします	3.000	1.000	3.141	0.883	
56	中学2年生現在は、「男の子らしい身体」「女の子らしい身体」を強く意識するようになりました	3.931	0.969	4.042	0.869	
57	中学2年生現在は、「男の子らしい行動」「女の子らしい行動」を強く意識するようになりました	3.837	0.960	3.901	0.864	
58	中学2年生現在は、スポーツや運動では力いっぱい頑張っています	3.969	1.116	3.831	1.171	
59	中学2年生現在は、スポーツや運動で勝ちたいという気持ちの強いようです	3.962	1.049	3.803	1.142	
60	中学2年生現在は、男子と女子が同じ運動種目をするもおかしくないと思っています	3.120	1.116	3.634	1.233	* *

て(項目27)は、男女とも視聴しすぎる傾向は認められないようである。

次に運動・勉強やおけいごとに対しての励ましについて(項目30~35)は、全体的にあまり積極的に励ましを受けていない点で、男女とも同様の傾向を示しているが、勉強やおけいごとの面で、女子の方が男子より多く励ましを受けていることが明白である。このことは女子がおけいごとに参加する機会の多いことから当然の結果といえよう。

性役割意識についてみると(項目36、37)、男女ともに「どちらともいえない」に多く回答しており、児童期にはまだ性役割意識が強いことを示している。項目40の「男子と女子が同じ運動をするのが当たり前のようにした」に対しては、男子の平均値が有意に低く、男女が同じスポーツ種目を実施することに対して、女子がより肯定的態度をとる傾向のあることが明らかである。

3) 中学期の傾向について

運動・スポーツ行動(項目41、42、43、45)に関する項目では、いずれも比較的高い平均値を示しており、運動・スポーツ行動が比較的活発であることが理解される。このような中で、項目44の「ひとりでも、ジョギングやなわとびなどよく運動する」の数値をみると、女子の値が男子よりも有意に低く、女子が単独では体力づくり運動などあまりしていない傾向のあることを示している。

運動以外の余暇行動についてみると(項目47、48、49)、男女ともにテレビ視聴や運動以外の趣味活動をあまり楽しんでいない傾向がみられる。

次に勉強やスポーツをとおしての他者の励ましについてみると、女子が男子より勉強の面で友人などからの励ましが多い傾向のあることがわかる。

性役割意識についてみると(項目56、57)、男女共通して両性の身体的成熟度および性役割についてかなり意識するようになっていることを示している。項目60の「男女が同じ運動・スポーツを行うこと」についてみると、男子の平均値が女子よりも有意に低く、男子が女子と同じ運動種目をするをより否定的に受けとめる傾向のあることが認められる。この場合、「同じ運動種目をする」ということが「男女が同じ種目をするのがおかしい」か、それとも「男女が一緒に同じ運動をする」ことがおかしいかはさだかでないにしても、男子の異性に対するこの種の意識が、女子のスポーツ参加を抑制する要因のひとつになっていることはまちがいない。

2 児童期と中学期との間にみられる傾向の変化

表3は、児童期と中学期との間にみられる変化について示したものである。

1) 運動・スポーツ行動にみる差異

表3から明らかとなっており、児童期の方が有意に高い平均値が認められる。特に「とても元気な子どもでした」、「友だちと一緒に活発に遊ぶのが大好きでした」、「スポーツや運動では力いっぱい頑張っていました」など元気いっぱいの運動遊びや頑張って運動するのは児童期までであり、中学期になるとそれらの傾向があまりみられなくなる。その一方で、女子のスポーツをみる傾向の強化にともなう、この面での性差も消失していく。

次に運動以外の余暇活動についてみると、「テレビをみる時間」(項目27、47)は、男女とも小学期よりも中学期に有意に低い平均値を示している。このことは「勉強や

おけいごとなどのため、かなり多忙」になるためであるとみられ(項目29、49)、特に男子にその傾向が強い。これらの傾向は、かなり学習塾や自宅での勉強時間が長くなってきていることの反映であると思われる。

勉強・スポーツで他者の励ましを受ける傾向は、男女共通に児童期の方が強く、「勉強やおけいごと」(項目32、52)と「運動やスポーツ」(項目33、53)との両方に同様の傾向が認められる。

項目36、37、57から性役割意識についてみると、明らかに児童期に比べて中学期の方が有意に高い値を示しており、中学期子どもたちが男女を問わず、第2次性徴期に入って意識・行動に性差が鮮明になったことを親たちがはっきり認知していることを示している。これに対して、項目40、60で男女ともに中学期に平均値が下降していることは、子どもたちの運動・スポーツ参加に性別意識が働きはじめることを示している。

N まとめ

高知県下の進学面で有名な中学校(私立)2年生の親230名を対象に、子どもの社会化過程と運動・スポーツ行動等について調査分析した結果、次のような知見を見た。

1) 幼児期では、特に男子に活発に運動遊びをする傾向が著しい中で、女子にはおけいごとなどを早くから始める傾向が認められる。

2) 児童期では、身体面ないしは行動面での性別意識が未分化でありながら、男女が同じ運動種目をするに対して女子がより肯定的な態度をとる傾向が認められる。

3) 中学期では、一様に第2次性徴期に入らる中で、児童期と同様に女子が男子と比べて同じ種目への参加を当然とする傾向のあることは注目に値する。

4) 運動及び運動以外の余暇行動は、勉強のきびしくなる中学期に入って減少し、特にその傾向は男子に著しい。

文 献

- 1) 総理府：「スポーツに関する世論調査」、1957、1962、1965、1972。
- 2) 大橋美勝：「現代スポーツの文化的考察」、体育社会学研究2、道と書院、1973、pp. 63-84。
- 3) 嘉戸 脩・永島淳正・川辺 光・萩原美代子・加藤藤子：「直接的スポーツ関与の分析とその要因に関する研究」、体育社会学研究6、道と書院、1977、pp. 25-56。
- 4) 江刺正吾：「一流競技者のスポーツへの社会化にみられる性差とその規定要因の検討」、一流競技者の社会学、道と書院、1981、pp. 1-34。
- 5) 江刺正吾：「スポーツ参与の社会化にみられる性差の検討—児童・生徒・学生のスポーツ意識と行動を中心に—」、体育・スポーツ社会学研究1、道と書院、1982、pp. 137-160。
- 6) 江刺正吾：「現代日本の成人にみられるスポーツ参与の変動と性差の検討」、体育・スポーツ社会学研究3、道と書院、1984、pp. 97-117。

表3 児童期と中学期との間にみられる傾向の変化

	項 目	男			女		
		M	S D	t検定	M	S D	t検定
21	小学校3・4年生の頃は、とても元気な子どもでした	4.390	0.864		4.324	0.953	
41	中学2年生現在は、ひと一倍元気な子です	3.616	0.940	***	3.732	0.956	***
22	小学校3・4年生の頃は、運動がかなり得意な方でした	3.937	1.112		3.563	1.065	
42	中学2年生現在は、スポーツや運動がかなり得意な方です	3.478	1.101	***	3.423	1.117	
23	小学校3・4年生の頃は、スポーツをみるのが大好きでした	3.591	1.069		3.028	1.108	
43	中学2年生現在は、スポーツをみるのが大好きです	3.887	1.096	***	3.606	1.140	***
24	小学校3・4年生の頃は、ひとりでも活発に運動遊びをしていました	3.723	1.136		3.239	1.035	
44	中学2年生現在は、ひとりでも、ジョギングやなわとびなどよく運動します	2.629	1.235	***	2.239	1.101	***
25	小学校3・4年生の頃は、友達と一緒に活発に遊ぶのが大好きでした	4.390	0.913		4.268	0.810	
45	中学2年生現在は、グループで運動することを楽しみにしています	3.598	1.170	***	3.634	1.198	***
26	小学校3・4年生の頃は、学校や地域のスポーツクラブなどで活発に運動したものです	3.560	1.439		2.887	1.489	
46	中学2年生現在は、スポーツクラブや運動部で活発に運動しています	3.403	1.669		2.930	1.701	
27	小学校3・4年生の頃は、テレビをみる時間がかなり長かったようです	3.434	0.952		3.479	1.169	
47	中学2年生現在は、テレビをかなり長い時間視聴するのが普通です	2.912	1.093	***	3.028	1.158	**
28	小学校3・4年生の頃は、運動以外に好きな趣味活動がありました	2.969	1.265		3.479	1.361	
48	中学2年生現在は、運動以外の趣味活動を楽しんでいます	2.887	1.345		3.254	1.391	
29	小学校3・4年生の頃は、勉強やおけいごとなどのため、かなり多忙でした	2.654	1.331		3.211	1.319	
49	中学2年生現在は、学習塾や自宅での勉強が大変なようです	3.289	1.193	***	3.479	1.157	
30	小学校3・4年生の頃は、勉強やおけいごとで、親がよくほめたり励ましたりしたものです	3.277	1.108		3.789	1.120	
50	中学2年生現在は、勉強のことで、親がよくほめたり励ましたりしています	3.585	1.051	**	3.761	0.933	
31	小学校3・4年生の頃は、勉強やおけいごとで、兄弟や友だちがよくほめたり励ましたりしたものです	2.943	0.982		3.296	1.047	
51	中学2年生現在は、勉強のことで、兄弟や友だちがよくほめたり励ましたりします	2.874	0.946		3.211	0.940	
32	小学校3・4年生の頃は、勉強やおけいごとで、先生がよくほめたり励ましたりしてくれました	3.478	1.024		3.563	1.010	
52	中学2年生現在は、勉強のことで、先生がよくほめたり励ましたりします	3.044	0.909	***	3.254	0.840	*
33	小学校3・4年生の頃は、運動やスポーツのことで、親がよくほめたり励ましたりしたものです	3.698	0.891		3.507	1.081	
53	中学2年生現在は、スポーツ関係で、親がよくほめたり励ましたりしています	3.384	1.168	***	3.254	1.038	*
34	小学校3・4年生の頃は、運動やスポーツのことで、兄弟や友だちがよくほめたり励ましたりしたものです	3.359	0.888		3.141	0.930	
54	中学2年生現在は、スポーツ関係で、兄弟や友だちがよくほめたり励ましたりします	3.138	1.052	*	2.958	0.764	
35	小学校3・4年生の頃は、運動やスポーツのことで、先生がよくほめたり励ましたりしてくれました	3.491	0.947		3.254	0.952	
55	中学2年生現在は、スポーツ関係で、先生がよくほめたり励ましたりします	3.000	1.000	***	3.141	0.883	
36	小学校3・4年生の頃は、「男の子らしい身体」「女の子らしい身体」を強く意識するようになっていました	3.025	0.871		2.944	1.013	
56	中学2年生現在は、「男の子らしい身体」「女の子らしい身体」を強く意識するようになりました	3.931	0.969	***	4.042	0.869	***
37	小学校3・4年生の頃は、「男の子らしい行動」「女の子らしい行動」を強く意識するようになっていました	3.233	0.901		2.986	0.979	
57	中学2年生現在は、「男の子らしい行動」「女の子らしい行動」を強く意識するようになりました	3.837	0.960	***	3.901	0.864	***
38	小学校3・4年生の頃は、スポーツや運動では力いっぱい頑張っていました	4.258	0.887		4.113	1.008	
58	中学2年生現在は、スポーツや運動では力いっぱい頑張っています	3.969	1.116	**	3.831	1.171	
39	小学校3・4年生の頃は、スポーツや運動では勝ちたいという気持ちが強い子でした	3.874	1.023		3.732	1.028	
59	中学2年生現在は、スポーツや運動で勝ちたいという気持ちが強いようです	3.962	1.049		3.803	1.142	
40	小学校3・4年生の頃は、男子と女子が同じ運動をするのが当たり前のようでした	3.648	1.001		4.141	0.915	
60	中学2年生現在は、男子と女子が同じ運動種目をしてもおかしくないと思っています	3.120	1.116	***	3.634	1.233	**

- 7) 日比野朔郎：「スポーツと性についての一考察」、体育・スポーツ社会学研究4、1985、pp. 123-130.
- 8) 田中鎮雄：「わが国における社会的風土と女性のスポーツ行動」、研究紀要30号、日本大学人文科学研究所、1985、pp. 263-278.
- 9) 柗沢聖子、田中鎮雄、山岸明郎、武田正司：「勉学志向とスポーツ・レクリエーション行動」、レクリエーション研究第14号、日本レクリエーション学会、1985、pp. 68-73.

勉学志向とスポーツ・レクリエーション行動

(第2報)

○ 桃 沢 聖 子 田 中 鎮 雄 武 田 正 司
(日 本 大 学) (日 本 大 学) (日 本 大 学)

勉学、スポーツ、レクリエーション

目 的

受験生活とその影響に関する一連の研究から受験勉強のきびしさが、運動部への加入率やクラブ活動にかなりしわよせがあり、受験生の余暇行動には進学しない高校生の場合と異なる傾向がある¹⁾²⁾³⁾⁴⁾という指摘をふまえ、われわれは、進学率の高い高校とそうでない高校を対比させ、発達段階に伴ういくつかの行動パターンの違いをみてきた。⁵⁾これらの結果をふまえて、われわれは次の様な仮説を設定することができる。すなわち、

(1) 進学率の高い高校の女子において、早くから学習活動が開始され、男女とも中学期、高校期と勉強時間を上昇させる傾向を示す。

(2) 中学期までは、男女ともかなり活発に「スポーツクラブや運動部で運動をする」が、高校期になって進学率の高い高校では、運動部をやめていくものが多い。

(3) 進学率の高い高校において、高校期には男女ともテ

表1 サンプルの構成

項 目	男		女	
M 高(岩手)	112	38.6	80	34.0
G 高(高知)	178	61.4	155	66.0
計	290	100.0	235	100.0

レビ視聴時間が著しく減少する。

(4) 進学率の高い高校の男女に共通して、勉強時間の増大する中学期、高校期を通じて趣味活動を大切にしてきた傾向が認められる。

以上の仮説を検証する中で、発達段階に伴う性差を明らかにしようとするのが本研究の目的である。

方 法

1. 調査対象

対象は岩手県および高知県の2校の2年生525名(男子290名、女子235名、有効回収率91.8%)である。サンプルの構成は表1に示すとおりである。なお、これら2校は本研究の目的から、いずれも県下で一流の進学校と目されている高校として有意抽出したものである(表2参照)。また、岩手県の高校は県立、高知県の高校は私立であって、いずれも男女共学校である。

2. 調査時期

岩手県の高校は昭和60年2月、高知県の高校は昭和61年3月である。

3. 調査方法

集合法による質問紙調査である。調査者が各質問項目を読み上げ、被調査者は即時に所定の回答用紙にあてはまる答えの番号を記入するように指示された。なお、質問紙は「スポーツ風土調査」^{5)6)注1)}を用いた。

4. データ処理

日本大学文理学部コンピューターセンターのIBM4331LO2、プログラム「SPSS」で行った。

結果および考察

1. 「勉強・おけいごと」について

まず、表3から幼児期と児童期(項目9・29参照)についてみると、女子の平均値は3.345で男子の2.069よりも有意に高い値を示しており、おけいごとを含む学習活動が女子の場合、男子よりも早期に開始されている様子が推測される。中学期には、これまでの傾向を逆転して男子が女子を凌駕してゆく。同じ線にそって、一層勉強のきび

表2 卒業後の進路

項 目	男		女	
大 学	279	96.2	197	83.8
短 大	1	0.3	18	7.7
各種専修学校	4	1.4	10	4.3
就 職	2	0.7	5	2.1
そ の 他	4	1.4	5	2.1
計	290	100.0	235	100.0

しさをうかがわせるのが高校期であるといえよう。

高校期の勉強のきびしさを項目69からみると、男女の平均値はそれぞれ2.952と2.566であることがわかる。この数値は、一見勉強していないようにみえるが、当該質問項目のワーディングが、「現在勉強にかなり時間をかけています」となっているため、この中のかんりのために「そのとおり」と回答するのをためらった結果であり、現実には相当勉強しているものと思われる。ちなみに、昨年度の大会で報告したB校(進学率の低い高校)にみられた同項目の平均値は1.84および1.96どまりであった。このことから、今回の報告における高校生の勉強のきびしさの一端がうかがえよう。しかも性差に注目すれば、男子の方が女子より勉強にかなり時間をかけていることが明白である。

2. 「運動・スポーツ行動」について

表3から児童期までの運動・スポーツ行動についてみると項目1・21、5・25、18・38、19・39から明らかのように、友だちと一緒に活発に遊ぶことが大好きな元気のよい子どもたちであったことがうかがわれる。しかし、中学期以降になると、項目42・62、44・64、59・79な

表3 各項目の平均値，標準偏差および検定結果

項目	男		女		t 検定	項目	男		女		t 検定
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差			平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
1	3.859	1.193	3.740	1.276		21	4.090	1.025	3.966	1.136	
2	3.197	1.161	3.038	1.228		22	3.441	1.216	3.281	1.367	
3	3.041	1.205	2.723	1.108	**	23	3.600	1.199	3.128	1.177	***
4	2.962	1.203	2.826	1.257		24	2.987	1.185	2.732	1.261	*
5	4.180	1.010	3.906	1.271	**	25	4.293	0.963	4.217	1.090	
6	1.524	1.206	1.523	1.241		26	3.241	1.571	2.843	1.579	**
7	3.228	1.266	2.757	1.229	***	27	3.521	1.206	3.081	1.219	***
8	3.041	1.396	3.557	1.438	***	28	3.566	1.358	3.855	1.296	*
9	2.069	1.616	3.345	1.818	***	29	2.431	1.383	2.991	1.304	***
10	3.090	1.025	3.187	1.045		30	3.103	1.139	3.162	1.154	
11	3.110	1.050	3.366	1.047	**	31	3.072	1.071	3.323	1.116	**
12	3.410	1.427	3.740	1.313	**	32	2.562	0.969	2.762	1.014	*
13	4.190	1.027	4.145	1.131		33	3.145	1.068	3.226	1.040	
14	3.245	1.307	3.767	1.251	***	34	2.741	1.038	2.817	1.048	
15	3.176	1.135	3.153	1.185		35	3.203	1.093	3.319	1.076	
16	2.372	1.272	2.043	1.146	**	36	3.072	1.106	2.880	1.064	*
17	2.649	1.286	2.421	1.280	*	37	3.293	1.088	3.013	1.100	**
18	3.944	1.139	3.949	1.218		38	4.145	1.012	3.996	1.080	
19	3.562	1.190	3.263	1.323	**	39	4.007	1.029	3.774	1.207	*
20	4.117	0.945	4.375	0.954	**	40	3.407	1.085	3.826	1.162	***
41	3.400	1.115	3.302	1.183		61	3.438	1.064	3.289	1.106	
42	3.397	1.187	3.013	1.293	***	62	3.235	1.132	2.847	1.234	***
43	3.879	1.227	3.677	1.280		63	3.976	1.172	3.911	1.164	
44	2.748	1.373	2.366	1.272	**	64	2.714	1.391	2.213	1.250	***
45	3.593	1.245	3.387	1.346		65	3.631	1.236	3.404	1.344	*
46	3.590	1.550	3.051	1.744	***	66	2.862	1.695	2.336	1.580	***
47	3.035	1.258	2.898	1.253		67	2.541	1.239	2.783	1.280	*
48	3.645	1.308	3.740	1.253		68	3.645	1.326	3.809	1.272	
49	2.728	1.328	2.677	1.127		69	2.952	1.115	2.566	0.942	***
50	3.128	1.171	3.077	1.192		70	2.841	1.105	2.975	1.176	
51	3.097	1.096	3.153	1.133		71	2.783	1.074	2.979	1.123	*
52	2.800	1.020	2.860	1.071		72	2.721	1.053	2.821	1.118	
53	3.128	1.085	3.170	1.168		73	3.000	1.150	3.060	1.149	
54	2.817	1.028	2.740	1.052		74	2.693	1.068	2.766	1.030	
55	3.110	1.138	3.064	1.102		75	2.607	1.051	2.813	1.029	*
56	4.269	0.821	3.834	0.953	***	76	4.283	0.901	3.953	0.984	***
57	4.248	0.840	3.915	0.988	***	77	4.317	0.894	4.157	0.990	
58	3.959	1.109	3.715	1.155	*	78	3.907	1.076	3.757	1.131	
59	3.986	1.081	3.562	1.267	***	79	3.910	1.119	3.553	1.184	***
60	2.610	1.130	2.843	1.235	*	80	2.593	1.253	2.698	1.267	

ま と め

どにみるように、いずれも男子に有意に高い平均値がみられ、運動が得意とするものや、ひとりで活発に運動するもの、スポーツや運動をするときは勝ちたいという気持で力いっぱい頑張るなど、男子に特徴的な行動傾向が認められる。この様に体力や活動性および運動参加態度に性差が認められながら、中学期では男女とも学校の運動部や地域のスポーツクラブなどに所属して積極的に組織的なスポーツ活動を行うようになる。これは中学校における教育と制度的慣行によるものと考えられるが、女子に比べて男子にその傾向が著しいことは、他の要因が伏在することを示唆するものである。すなわち、中学期は項目56・57から明白なように第2次性徴期にあたり、男女が同じ運動種目を実施することに対する男子の否定的な態度が一層鮮明になる時と軌を一にしているのである。

我国における社会的風土ともいえるこの様な男性の見方が、女性のスポーツ参加を消極的にさせる重要な要因の1つになっていることは否めないであろう。しかも、項目66にみるとおり、勉強がきびしくなるに伴って、男女とも高校期に入ると、この組織的なスポーツ活動参加率が著しく低下しているのであるが、特に女子に組織的スポーツ活動からの離脱傾向が認められるのも、上と同じ理由によるものと考えられる。このような中で、男女いずれも「グループで運動するのが楽しみ」だとする項目65の平均値が中学期のレベルを維持している点は見逃がせない。

一方、「みるスポーツ」に対する関心についてみると、項目3・23・43・63からも明らかなとおり、発達段階に伴って男女とも平均値に上昇傾向が認められる。特に女子が高校期で男子とほぼ同じ平均値を示している点は、スポーツへの2次的参加が補償行動的ないしは交友関係のためのメディア的機能を果たすことを示唆するものとして興味深い。

3. 「テレビ視聴傾向」について

表3の項目7・27・67からテレビ視聴傾向についてみると、幼児期から児童期にかけて女子より男子の平均値が有意に高く、男子の方がテレビ視聴時間が長かったことを示している。しかし、勉強がきびしくなる中学期に入ると男女ともその平均値は低下し、高校期(項目67)では男子の平均値が急降下するため、女子のそれより有意に低い値を示すようになる。

上のことからきびしい自宅学習を必要とする進学中心校の生徒、特に男子生徒の場合、中学期以降テレビをより限定的選択的に視聴する傾向のあることが明らかである。

4. 「運動以外の趣味活動」について

表3の項目8・28・48・68に注目してみると、幼児期、児童期に女子の平均値が男子のそれより高く、女子の方がより豊かな趣味活動を楽しむ傾向のあることを示している。しかし、受験勉強の本格化する中学期から高校期にかけても平均値は下降線をとらず、趣味活動志向に男女ともほぼ同様の傾向を示す点は、進学中心校における中学生や高校生のレクリエーション活動を特徴づけるものとして注目される。

一流進学校における高校2年生男女の性差を中心に、勉強・スポーツ行動の変化ないしは推移について項目別に分析した結果、次のような知見を得た。

(1) 進学中心校における学習活動は、女子の方が幼児期から早期に開始されるが、受験勉強のきびしさの増す中学期からは、男子の方が女子より時間をかけるようになる。

(2) 高校期に入ってからの勉強時間の増大に伴って、男女とも組織的スポーツ活動への参加が低調になる中で、特に女子にその傾向が著しい。

(3) きびしい勉強に追われる中でも、その一方では「グループで運動すること」や「みるスポーツ」を楽しむ傾向がみられる。これらのことは、彼等にとって補償行動的ないしは交友関係のためのメディア的機能を果たしているものと思われる。

(4) 受験勉強がきびしさを増す高校期には、当然のことながら男女ともテレビ視聴時間を著しく減少させる。しかし、そのような中で運動以外の趣味活動を大切にしている傾向は、受験生が限定された時間構造の中でも、健全なレクリエーション志向性を失わない傾向を示しているものとして注目されるのである。

文 献

- 1) 松井三雄他:「受験生活の心身に及ぼす影響およびその対策に関する体育学的研究」、体育学研究5-1、1960、pp. 81-87.
- 2) 田中鎮雄:「進学と体育」、「新体育」、1960、10、pp. 81-87.
- 3) 田中鎮雄:「体育と入試」、「新体育」、1963、11、pp. 48-55.
- 4) 徳永幹雄他:「身体運動に対する態度と行動に関する研究」、健康科学第1巻、九州大学健康科学センター、1979、pp. 53-61.
- 5) 枇沢聖子他:「勉強志向とスポーツ・レクリエーション行動」、レクリエーション研究第14号、日本レクリエーション学会、1985、pp. 68-73.
- 6) 田中鎮雄:「わが国における社会的風土と女性のスポーツ行動」、研究紀要第30号、日本大学人文科学研究所、1985、pp. 263-278.

注1 「スポーツ風土調査」質問項目

	そのと おり	それ に近い	どちら とも	その 反対 に近い	その 反対	
1	小学校入学以前は、とても元気な子どもでした	5	4	3	2	1
2	小学校入学以前は、運動神経の発達した子どもでした	5	4	3	2	1
3	小学校入学以前は、スポーツをみるのが大好きでした	5	4	3	2	1
4	小学校入学以前は、ひとりでも活発に運動遊びをしていました	5	4	3	2	1
5	小学校入学以前は、お友だちと一緒に活発に遊ぶのが楽しみでした	5	4	3	2	1
6	小学校入学以前は、スポーツ教室などに入っていたことがあります	5	4	3	2	1
7	小学校入学以前は、テレビをみる時間がかなり長かったです	5	4	3	2	1
8	小学校入学以前は、運動以外に好きな活動(趣味)がありました	5	4	3	2	1
9	小学校入学以前から、勉強やおけいごなどを始めていました	5	4	3	2	1
10	小学校入学以前は、元気に遊んでいると、お父さんがよくほめてくれました	5	4	3	2	1
11	小学校入学以前は、元気に遊んでいると、お母さんがよくほめてくれました	5	4	3	2	1
12	小学校入学以前は、兄弟・姉妹とよく活発に遊びました	5	4	3	2	1
13	小学校入学以前は、同性のお友だちとよく活発に遊びました	5	4	3	2	1
14	小学校入学以前は、異性のお友だちとよく活発に遊びました	5	4	3	2	1
15	小学校入学以前は、幼稚園やスポーツ教室の先生も活発に遊ぶのを認めてくれました	5	4	3	2	1
16	小学校入学以前から「男の子らしい身体」「女の子らしい身体」のちがいに気づいていました	5	4	3	2	1
17	小学校入学以前から「男の子らしい行動」「女の子らしい行動」のちがいに気づいていました	5	4	3	2	1
18	小学校入学以前は、運動するときはいつも力いっぱい頑張っていました	5	4	3	2	1
19	小学校入学以前は、運動するときはいつも1番になりたいという気持ちが強かったです	5	4	3	2	1
20	小学校入学以前は、男子と女の子が同じ運動をするのが当たり前でした	5	4	3	2	1
21	小学校3・4年生の頃は、とても元気な子どもでした	5	4	3	2	1
22	小学校3・4年生の頃は、運動がかなり得意な方でした	5	4	3	2	1
23	小学校3・4年生の頃は、スポーツをみるのが大好きでした	5	4	3	2	1
24	小学校3・4年生の頃は、ひとりでも活発に運動遊びをしていました	5	4	3	2	1
25	小学校3・4年生の頃は、お友だちと一緒に活発に遊ぶのが楽しみでした	5	4	3	2	1
26	小学校3・4年生の頃は、学校や地域のスポーツクラブなどで活発に運動したものです	5	4	3	2	1
27	小学校3・4年生の頃は、テレビをみる時間がかなり長かったです	5	4	3	2	1
28	小学校3・4年生の頃は、運動以外に好きな趣味活動がありました	5	4	3	2	1
29	小学校3・4年生の頃は、勉強やおけいごなどのため、かなり多忙でした	5	4	3	2	1
30	小学校3・4年生の頃は、お父さんがスポーツや運動で、よくほめたりはげましたりしてくれました	5	4	3	2	1
31	小学校3・4年生の頃は、お母さんがスポーツや運動で、よくほめたりはげましたりしてくれました	5	4	3	2	1
32	小学校3・4年生の頃は、兄弟・姉妹がスポーツや運動で、よくほめたりはげましたりしてくれました	5	4	3	2	1
33	小学校3・4年生の頃は、同性の友人がスポーツや運動で、よくほめたりはげましたりしてくれました	5	4	3	2	1
34	小学校3・4年生の頃は、異性の友人がスポーツや運動で、よくほめたりはげましたりしてくれました	5	4	3	2	1
35	小学校3・4年生の頃は、先生がスポーツや運動で、よくほめたりはげましたりしてくれました	5	4	3	2	1
36	小学校3・4年生の頃は、「男の子らしい身体」「女の子らしい身体」を強く意識するようになっていました	5	4	3	2	1
37	小学校3・4年生の頃は、「男の子らしい行動」「女の子らしい行動」を強く意識するようになっていました	5	4	3	2	1
38	小学校3・4年生の頃は、スポーツや運動では力いっぱい頑張りました	5	4	3	2	1
39	小学校3・4年生の頃は、スポーツや運動では勝ちたいという気持ちが強かったです	5	4	3	2	1
40	小学校3・4年生の頃は、男子と女の子が同じ運動をするのが当たり前でした	5	4	3	2	1

	そのと おり	それ に近い	どちら とも	その 反対 に近い	その 反対	
41	中学校2年生の頃は、ひと一倍元気な子どもでした	5	4	3	2	1
42	中学校2年生の頃は、スポーツや運動がかなり得意な方でした	5	4	3	2	1
43	中学校2年生の頃は、スポーツをみるのが大好きでした	5	4	3	2	1
44	中学校2年生の頃は、ひとりでも、ジョギングやなわとびなどよく運動しました	5	4	3	2	1
45	中学校2年生の頃は、グループで運動することが楽しみでした	5	4	3	2	1
46	中学校2年生の頃は、スポーツクラブや運動部で活発に運動しました	5	4	3	2	1
47	中学校2年生の頃は、テレビをかなり長い時間視聴するのが普通でした	5	4	3	2	1
48	中学校2年生の頃は、運動以外の趣味活動を楽しんだのもでした	5	4	3	2	1
49	中学校2年生の頃は、学習塾や自宅での勉強が大変でした	5	4	3	2	1
50	中学校2年生の頃は、お父さんがわたしのスポーツ参加をよくはげましてくれました	5	4	3	2	1
51	中学校2年生の頃は、お母さんがわたしのスポーツ参加をよくはげましてくれました	5	4	3	2	1
52	中学校2年生の頃は、兄弟・姉妹がわたしのスポーツ参加をよくはげましてくれました	5	4	3	2	1
53	中学校2年生の頃は、同性の友人がわたしのスポーツ参加をよくはげましてくれました	5	4	3	2	1
54	中学校2年生の頃は、異性の友人がわたしのスポーツ参加をよくはげましてくれました	5	4	3	2	1
55	中学校2年生の頃は、先生がわたしのスポーツ参加をよくはげましてくれました	5	4	3	2	1
56	中学校2年生の頃は、「男らしい身体」または「女らしい身体」を強く意識するようになりました	5	4	3	2	1
57	中学校2年生の頃は、「男らしい行動」または「女らしい行動」を強く意識するようになりました	5	4	3	2	1
58	中学校2年生の頃は、スポーツや運動では力いっぱい頑張りました	5	4	3	2	1
59	中学校2年生の頃は、スポーツや運動では勝ちたいという気持ちが強かったです	5	4	3	2	1
60	中学校2年生の頃は、男子と女の子が同じ運動種目をしてもおかしいと思っていました	5	4	3	2	1
61	現在(高2)は、ひと一倍元気な方だと思います	5	4	3	2	1
62	現在(高2)は、スポーツや運動がかなり得意な方です	5	4	3	2	1
63	現在(高2)は、スポーツをみるのが大好きです	5	4	3	2	1
64	現在(高2)は、ひとりでも、ジョギングやなわとびなどよく運動します	5	4	3	2	1
65	現在(高2)は、グループで運動するのが楽しみです	5	4	3	2	1
66	現在(高2)は、スポーツクラブや運動部で活発に運動しています	5	4	3	2	1
67	現在(高2)は、テレビをかなり長い時間視聴するのが普通です	5	4	3	2	1
68	現在(高2)は、運動以外の趣味活動を楽しんでいます	5	4	3	2	1
69	現在(高2)は、勉強にかなり時間をかけています	5	4	3	2	1
70	現在(高2)は、お父さんがわたしのスポーツ参加をよくはげましてくれます	5	4	3	2	1
71	現在(高2)は、お母さんがわたしのスポーツ参加をよくはげましてくれます	5	4	3	2	1
72	現在(高2)は、兄弟・姉妹がわたしのスポーツ参加をよくはげましてくれます	5	4	3	2	1
73	現在(高2)は、同性の友人がわたしのスポーツ参加をよくはげましてくれます	5	4	3	2	1
74	現在(高2)は、異性の友人がわたしのスポーツ参加をよくはげましてくれます	5	4	3	2	1
75	現在(高2)は、先生がわたしのスポーツ参加をよくはげましてくれます	5	4	3	2	1
76	現在(高2)は、「男らしい身体」または「女らしい身体」を強く意識しています	5	4	3	2	1
77	現在(高2)は、「男らしい行動」または「女らしい行動」を強く意識しています	5	4	3	2	1
78	現在(高2)は、スポーツや運動では力いっぱい頑張ります	5	4	3	2	1
79	現在(高2)は、スポーツや運動では勝ちたいという気持ちが強いです	5	4	3	2	1
80	現在(高2)は、男子と女の子が同じ運動種目をしてもおかしいとは思いません	5	4	3	2	1

幼児保育の今日的課題

——「就学前教育」-「課業と遊び」-の予備的考察——

○浅田 隆夫
目白学園

幼児保育・幼児教育、発達課題、就学前教育、集団保育、はじめに

今日のわが国は、科学技術の進歩により高度な文化をつくりあげた。この文化を維持発展させていくのは21世紀を背負う子ども達である。思うに、現在わが国の食料自給率やエネルギー保有率は極めて低い。これを打解するには、今後の日本人の創造性 — 子育てのあり方 — に期待するところが大きい。

筆者は、このようなことを考えながら、女子大で一般教育に関っているのだが、常々感じることは、彼女達は卒業後、数年足らずで家庭をもつことになり、好むと好まざるとに拘らず、子育てにかかわることになるのに、子育てについては関心もなく、全くといってよい程知識に乏しいことである。況や、子育ては、受胎してから小学校に入るまでの比較的早い時期が最も重要な一時期であることの科学的根拠や子どもの発達課題はもちろん、子どもが育てられている家庭や社会が現在どのような状況にあるのか……などについては余りにも知識がないのである。

例えば、現在子どもはどのように育てられ、その結果、どんな子どもになりつつあるのか、その原因は何か。現在保育園や幼稚園ではどんな問題が生じており、そのためにどんなことが考えられつつあるのか。子育てはどのようにすればよいのか……などあげれば切りがない。

もちろん、この種の保育問題については、従来から多くの実践と研究が繰り返えされてはいるが、今日の社会変動の激しい状況下では、保育に関心をもつ人達が結集して集団保育への道を切り拓いていくところまでに至っていない。それにはまず、保育者が子どもをとりまく環境と子どもとのかわりを鋭く見抜く確かな目と実践力とを養うことが必要であり、また、ここからはじめなければならないと思うのである。

筆者に続く、4人の演者の発表も今後の就学前教育のカリキュラム編成体制づくりを模索するための予備的調査結果の報告である。

1 幼児をとりまく今日の教育の荒廃状況

1) 子どもの体と心について

最近、保育者に気づかれる子どもの体のおかしさとして発育発達上の危機が訴えられ、これが小学生から高校生まで及んでいる。

例えば、背中が丸い、背骨が曲っている、左右の肩胛骨の高さが違っている、腹が出ている、扁平足・X脚・O脚の子どもが多い、体力が弱く抵抗力がない、歩き方がおかしくベタベタと歩く、特に足が弱く坂道を登ったりしゃが

んだりできない……などがあげられている。

正木⁽²¹⁾は、「この子どもの体のおかしさは、背筋力と大脳で起っており、人間の退歩に連がるのではないかとまでいっている。

心のおかしさも生じている。疲れ易くあくびいねむりが出る、意欲がなく集中力がない、依頼心が強く自分でどうするか判断することができない、6才になっても相手の気持ちを思いやれず人を平気で傷つける……など、3才児の未分化な状態をそのまま持ち越し、いつまでも幼児化を残しているといわれる。

これらの原因には種々のことが考えられるが、親子関係だけに限ってみると、次のようなことが考えられる。すなわち、3才以後はそれ以前と違って自己中心化が進み自己像が形成されてくる。また、この時期は混同的思考期といわれるように、自己と対象との区別が未分化で両者間が極めて流動的だから、保育の仕方によっては分化が十分促進されずに過ぎてしまう危険性もある。一般に、母親は子どもが3才から幼稚園に入園するということもあり、また、これまで甘やかして育ててきたということもあって、3才になると園まかせの放任ということにもなる。したがって、3～5才の子どもの保育は、より一層医療や教育と結びついた世話が必要になるし、第1反抗期を充分経験しないで成長した子どもには、特にこれが重要になる。

2) 家庭について

保育という観点から家庭の問題点⁽²²⁾をあげてみると、(イ) 両親の学歴が高くなり、他の保育者をあなどる傾向がみられる、(ロ) 両親に感謝の念が薄い、(ハ) 親としての義務を果さず、権利のみを主張する者が多い、教師や保育者を批判し協力する気持が少ない、(ニ) 共稼ぎの家庭が多く、子どもは家庭の安らぎ・憩い・楽しみ・団らんの体験がなくなっている、(ホ) 子どもの数が少なく核家族化のため精神力の強さや適応性が育ちにくくなっている、(ヘ) 子どもの数が少ないため過保護・過干渉が目立ち自律性が育ちにくい、(ト) 両親は子どものことを考えず学歴偏重にはしり受験競争の過中に流される傾向にある、そのために、豊かな心情を育てる家庭の役割が充分果されていない、などである。

上述の家庭は一般家庭についての保育上の問題だが、単親家庭となるとさらに条件は悪くなる。しかも、今日これらの単親家庭は増える傾向にある。単親家庭とは、母親か父親か、いずれかひとりが子どもを扶養している家庭のことだが、その世帯数は、厚生省の調査⁽²³⁾では、母子家庭71万8千、父子家庭16万7千世帯となっており、また、母子家庭になる原因は、死別によるものは1961年・77(17)％、

'67年・66(24)％, '73年・62(26)％, '78年・50(38)％, '83年36(55)％—注()内は、離婚によるもの—と年を追って減少しているにも拘らず、離婚によるものは逆に多くなってきている。しかも、20～30才代の母親が1973年で31.3％, '78年では35.3％を占めるようになった。これは低年齢の子どもを抱えた母子家庭が増加していることを示すものである。父子家庭についてもこれと同じことがいえる。もちろん、このような単親家庭を欠損家庭とみなすかどうかは、社会的に決められることで、単親家庭は到底子育てについてうめあわせできない家庭であるとみるかどうかにかかっていることである。確かに、一部には母子家庭でも立派に親子関係を築き、両親そろった家庭以上に「欠損」を克服している家庭はあるにはあるが、やはり、これは極めて限られた数であろう。母親が一家の生計を支え、かつ子育てをすするということは、余程恵まれた家庭環境でない限り至難なことである。因みに、母子家庭の年間平均所得は、一般家庭のそれに比し46％に過ぎないし(厚生白書, 1980年)、女子は男子に比しはるかに一家を支えるに足る十分な賃金が得られる職場の少ないことから察せられる。

3) 社会について

最近の高度情報化社会の出現により、都市部はいうに及ばず農村部も従来の温かいきづなを崩壊し、個人はばらばらにされ、伝統的な地域の連帯感喪失されてしまった。また、子ども同士の遊びや集団生活の経験も不足し、保育園や幼稚園の既成の枠組の中で型通りの生活のしかたが行われ、このために、子どもの人格形成が画一化される結果となっている。

さらにテレビなどマスコミからの影響も大きく、はるかに園の教育を上回るほど強力になっている。幼児の調査ではないが、東京都の小学校4年生から中学校3年生までの1,944人についての調査(昭和59年度)では、テレビ視聴が「3時間以上」19.5％, 「2時間位」29.4％, 「1時間位」28.2％, 「30分位」11.8％, 「見ていない者」11.1％となっており、平均93分で、各学年とも1時間30分前後、テレビを見ている結果となっている。

もちろん、テレビもよい番組もあり教育として是非視聴の望まれる場合もあるが、一般に、資本主義社会におけるテレビ報道は、商品を宣伝せんがためにとかくせん情的になり、不健全なものになり易い。特に、民放にはこの種のものが多くなるので、健全な生活体験に反するものは何らかのチェック機能を果す機関の設置が望まれる。

とにかく、都市では住宅が過密で広場の乏しいこと、交通の危険性の多いこと、友達が近くに得られないことなどのために止むなく家の中でテレビに接することが多くなるものと思われる。

2 幼児保育の特徴

1) 発達と保育——事例に基づいて

保育とは、子どもの現在の発達課題を未来に向けて発達

させ、その不足を補っていくことである。つまり、(イ) 子どもの望ましい発達課題が自然に開かれていく環境を創出すること、(ロ) そこで子どもが主体的に環境に働きかけるよう手助けすることである。ここでの手助けとは、子どもの未熟な部分を補って、子どもの行動を発達課題に照して完成させていくということである。具体的に事例を2つあげて説明してみよう。

事例Ⅰ——乳児は10カ月もすれば這うことができるようになるが、これに対して十分「ハイハイ」ができる空間を設定することは保護者の義務でもある。乳児にとって物的環境は母体(胎内)の延長でもあるからである。「ハイハイ」をせずに、つかまり立ちから直ちに歩いたような子どもは、上肢・下肢・背筋・腹筋の弱いこともあって、道で転んでも手がつけず、その結果、頭や顔を地面にたたきつけて大負傷をすることが多い。手を使うということは、人間の原点であり、心と体を支える手は対象認識の媒介をなすものである。したがって、「ハイハイ」は手を訓練する絶好の機会である。手が使えるということは、世界について具体的に操作し行動して認識を深め、世界を体で把握することができるということである。筆者はかつて(助手時代に)「体育は、身体↔運動↔文化認識の肉化に他ならない」と述べたことがあるが、この肉化に最も寄与するもののひとつは手の働きであり、この意味で、「ハイハイ」で上体と手を鍛えるということは、人間形成の基礎づくりであるといっても決して過言ではないのである。

事例Ⅱ——生後1年を過ぎると、第2信号系(言語系)の形成が始まり、これまで培われてきた第1信号系(体に直接経験される反射系)との間に弱い緩い連関ができる。ここでも上述の手の自由性の拡大が直接、身体的経験を拡大し言語系の分節を豊かにしていく。そして、3才ごろになると第1信号系より第2信号系が優位にさえなり、さらに仲間とのかかわりで幼児同士の体験が共有され、自己像の形成と同時に、仲間意識の基礎づくりを確固たるものにあげていく。このようにして、発達は3才までに無条件反射↔第1信号系↔第2信号系へと3つの領域が相互に関連し、初期の人格構造を形成していくが、しかし、各領域の発達も各領域間の交流・分節もまだ未分化であり確かなものではない。これを子どもひとり一人の発達課題に則して、いかに独自性をもたせていくかが大切なことであるが、独自性をもたせるに当って自己の内部に他領域とのしこりや断絶ができると、なんらかの疎外現象が生じこれが障壁となる。「詰め込み教育」とか「天才教育」、「ことばだけの教育」とかいわれることがらは、これらの障壁(「カベ」……図1参照)の原因になることが多い。この「カベ」は、意識の上位層より下位層が、意識の社会層より自己層が、つまり、意識の周辺領域より中心領域で生ずる方が、より疎外現象が大きくなるといえる。

一般に、幼児期は、このような疎外条件や疎外となる障壁が点在し、流動的に点滅しているところに特徴があるので、保育者はこの未分化で流動的なところに働きかけて、

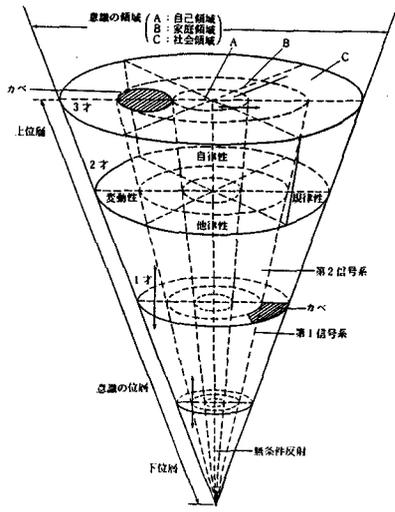


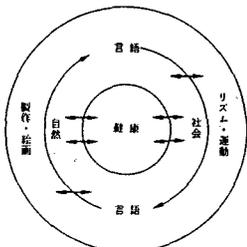
図1 人格形成過程における構造モデル

自律性を培うべく自主的活動を導き出し、より一層分化と総合が促進するようにし、いやくも疎外化が固定化したり肥大化しないように保育と世話を怠ってはならないのである。

2) 就学前の保育と教育

わが国では、就学前保育・教育機関に通う子どもは、5才児で約9割(幼稚園約6割、保育園約3割)に達しており、1955年以降幼稚園だけをみると、10年で約2割ずつ通園率がふえてきているから、近い将来には、100%近くになるであろう。

ところで、現行の「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」は、内容が6領域(健康・社会・自然・言語・音楽リズム・絵画製作)に分かれており、この「領域」で枠づけされた課業を与えることによって人格の完成を計ることにねらいがおかれている。この「領域」相互の関係を図示すると、図2のようになるであろう。



また、ある一面的な能力だけに限定して学習体験をさせようとする早期教育や英才教育も行われている。しかし、早期教育の弱点は、清水民子(註4)もいうように、幼児が日常生活の中でゆっくり獲得していくものが、凝縮した形で短時間で形成されるところに問題があるのであって、子どもはこのために、自分の時間と空間が奪われ、ひいては、子どもの自発的行動や友達が失われることになるのである。

この他、最近では保育者サイドからの目的的文化伝承と子どもの自発的活動を統一した「活動」をプログラミングして両者をおおまかに組み合わせ、これを「課業」と「遊び」とに分けて子どもの発達を促進させようとする努力もなされつつある。これはいわば、歴史的な幼児文化の継

承発展と幼児の遊びとをいかに幼児の発達課題にマッチさせて教材化するかということにもなる。もちろん、教材化に当っては、園での教育内容・方法と小学校でのそれらとの間でどのような関連をもたせるかとか、また、両者の関係を一貫した視点でとらえ、相互に組み入れる内容は組み入れ、就学前教育と小学校教育との差をできるだけ縮めるといったことも必要になる。さらにはこの他、家庭と園との連絡調整機能のあり方を検討することも望まれる。家庭は園とは違って論理的筋道よりも情緒的なコミュニケーションに依存し、未分化な規範体系を志向し勝ちだが、園では集団としてまとまって、より全体的により分化した規範体系へと導くように配慮すべきだから、保育・教育の内容・方法は、両者の特色を充分考慮して編成する必要がある。

思うに、さきの「課業」と「遊び」との関係は、小学校でいえば教科と教科外との関係に類似している。つまり、「課業」—園—教科、「遊び」—家庭—教科外といった関係が成り立つだろう。この点からしても、幼稚園と小学校低学年の教育内容・方法とは、これを統一的に把握し、両者間で再検討し、より望ましいカリキュラムの編成体制をつくりあげていくことが期待される。事実、ある地域の幼稚園のPTAでは、年長組の親を対象に、小学校の教師を招いて話を聞いたり、小学校の見学日を設けるなど園と学校間で相互理解が進められている。要は、制度の改善に向けて、手のつけられるところから始め、これをさらに盛りあげて自治体レベルで協議、改善を要求し、さらには、国レベルまでこれを拡大していくことが望まれる。

試みに、フランスでは幼稚園を終えた子どもが小学校に入る前には、(イ) まず小学校1年生におくる「連絡資料」を作成することが考えられている。この「連絡資料」は、年長児クラスの1年間の活動とそれぞれの活動のねらい、およびクラス全体の達成度の記録簿やひとり一人の子どものことについて、その子どもの心理的特性、その子どもの育った環境、個々の活動の到達度や能力などを記載した記録簿のことである。(ロ) 次に、両者の教師が定例的に会合したり相互に授業を参観したりなど、幼小合同の諸活動をする事、(ハ) 幼稚園の年長クラスの教師が、小学校1年生の担任をするといったもちあがりを考えること、(ニ) 幼小の教育内容や方法について小学校では幼稚園の生活様式の特徴を持続させたり、幼稚園では小学校1年生の学習の基礎づくりをすることなどが強調されている。

イギリスでは古くから幼児学校といわれ、5才から2年間入学することになっており、日本の幼稚園の年長クラスと小学校の1学年とをドッキングさせた形となっている。

ここの内容は、1年生では午前、自由遊び・片づけ・間食・外遊び・入室・自由活動・読み書き算の勉強、午後は音楽・散歩・手仕事。2年生になると、いづらか読み書き算の時間がふえる程度ということになっている。いわば、イギリスの幼児学校は、半「幼」・半「小」型といえよう。

3 幼児保育の今後の課題

1) 保育者自身の課題

戦後の教育は、戦前の教育を否定する考え方で進められたせいもあって、何が正しくて何が正しくないかを予め決めておらず、このために、保育者はどんな教育をしどんな習慣をつけたらよいかに気をつけない人も多くなったように思われる。もちろん、よい保育をしたり基本的習慣づけに反対する親はいない筈だが、その内容・方法となると保育者によってまちまちである。余りうるさく言わず、本人が気づくまで待つという親、どんなしつけをすべきかどうか迷っている親、しつけの仕方を工夫しない親、自分で示範を示さないで口うるさくごごとをいうだけの親などさまざまである。

他方、家庭は電化によって母親の自由時間は増大したが、この時間を保育にあてないで、家庭外の活動に振り向け、育児の細やかなしつけを疎かにする親があるかと思うと、逆に、子どもの少ないこともあって、子どものしつけに干渉し過ぎる傾向もみられる。両者とも、保育に当って最も大切な子どもの自律性の発達を疎外することになる。

子どもが自律性を発達させつつあるかどうかは、子どもが日常生活でどれだけ生き生きしているか、どれだけ張りを感じているか、自分をそれにどれだけ堵けているかどうかということであろう。子どもの場合は、それが遊びであっても逸脱した行動であってもよいのであって、それはまた子どもであるということでも許されることである。

子どもが生き生きしていないということは、また、保育者も生き生きした活動をしていないということであって、これはまた、例えば、母親が子どもに手づくりのおやつを与えたり、子どもの衣服を子どもの前でつくったり、父親が家庭で何かのしごとで打ち込んだり……などする姿を子どもが経験する機会がなくなったこととも関係がある。これはモデリングといわれる学習ともいえるが、確かに、このような自然のうちにされる社会化学習の場面の少なくなったことも問題である。戦前では、このような場面は性別役割行動の規準を幼児が自然に身につける好機会でもあったのである。このように、母親であって「母なるもの」、父親であって「父なるもの」の不在という今日の現象は、さきの単親家庭や離婚・別居などの問題と合わせて、例外はあるにせよ、子どもの教育には決してプラスに作用しないであろう。

とまれ、情報社会といわれる中での幼児の保育は、何といても両親を軸に保育者が力を合わせて前向きに、生き生きと生きていく姿こそ望ましいし、このためにもまた、保育者は自らの主体性を支えてくれる仲間関係をつくっていくことが必要なのである。そして、子どもはこうした母親達の仲間関係の中での協力の体験が、自然に自らの脳に像となって刻み込まれ、その場に母親や仲間がいなくても「内なる仲間」を心の支えとして能動的に行動がとれるようになると思うのである。

2) 今後の課題

保育は教育とともに国民の権利であり、そのために権利

は法的に制度化され、国民ひとり一人の主体的な行為で内容を充実していかなければならないものであり、さらには、広く他の社会的制度（母子年金・児童扶養手当・事業開始資金・就職支度資金・住宅資金等）の充実と相俟って徐々に整備されていくものである。今日では、保育園の受け入れ体制の整備が特に望まれるところである。

かつて、中央児童福祉審議会保育制度特別部会の中間報告(1963年)で、「養育不安は、核家族化や近隣社会における連帯性の欠如と養育に関する経験的伝承のないことにあり、母親が孤立していることに原因がある」と指摘されたことがあるように、今日では当時より一層、母親の孤立化と分裂が進んでいるので、一段と社会的保育施設の支えが必要になってきている。

少なくとも、保育者に今求められているのは、育児や家事が自分だけにしわよせされている家族関係や生活関係を代え、家庭からより広い居住集団へとび出し、そこで望ましい仲間関係を創出し、母性の強さ・暖かさ・賢しさを豊かに発展させ、それをより生き生きとした保育に反映させることである。現在のように、家庭やその他の保育施設をそれぞれ自己完結的に考えないで、子どもの発達課題をより広い社会圏（大人と子ども、子どもと子ども、子どもと文化施設等）の中で考え、大人の発達ともかわらせていく総合的関連的な保育のあり方にもっていかなければならない。とにかく、保育の問題は、まず、母親を中心に保育関係者がより広い社会圏で共感し共働し、いわば、手まひまをかけた保育の働きかけが必要と思うのである。

参 考 文 献 (含、引用文献)

- (1) 正木健雄著、「子どもの体力」, 大月書店, 1979.
- (2) (財)日本教育研究連合会編、「教育改善委員会 中間報告」, P. P. 14~15, 1986.
- (3) 厚生省編、「厚生白書」, 厚生省 P. 14, 1983, '80.
- (4) 清水民子「乳幼児保育をめぐる発達研究の問題」, 『講座 日本の教育』第11巻, 新日本出版社, P. 89.
- (5) 大田 堯 他編, 『岩波講座 子どもの発達と教育 4』, 岩波書店, 1984.
- (6) 堀尾輝久編, 『岩波の子育てブック, 幼年期』, 岩波書店, 1986.
- (7) 浅田隆夫編著, 「幼児・児童・生徒の学ぶ力・生きる力の解析に関わる予備的研究」, 筑波大学学校教育部, 1983.
- (8) 浅田隆夫編, 「幼児の健康教育」, 学術図書出版社, 1985.
- (9) 浅田隆夫編, 「幼児の運動教育」, 学術図書出版社, 1985.
- (10) 浅田隆夫著, 「幼児の体づくりと心づくり(相互性)」, 地域保健, 17巻8号, 1985.
- (11) その他, 文部省編, 「幼稚園教育指導書」一般篇及び領域篇, 1986. 並びに厚生省児童家庭局編, 「保育所保育指針」1986. 等.

「幼児期」における発達課題について

—基本的生活習慣・母親の期待像等を中心として—

梅津 迪子（女子聖学院短期大学）

幼児教育、基本的生活習慣、発達課題

はじめに

文部省は、幼稚園教育の中で人とかかわる力、自然との触れ合い、基本的生活習慣等の強化を推め、小学校低学年には「生活科」を取り入れる方針を発表した。

このことは、現代にみられる子どもの三無主義傾向や、「青い鳥症候群」「モラトリアム人間」といった若者の現象を反映したものと推察できる。

身体面ではからだの持続力不足、身体の「モノ化」、指示待ちの身体に変化されている傾向がうかがわれ、精神面では個人主義からくる仲間との共同性維持の欠如・若者の未発達、未成熟から生じる人間関係のまずさが指摘されている。

このような状態は社会・文化の変化に伴って核家族化、少子家族化、両親の役割不明確家庭の増加を招き、その結果、家庭教育機能の衰退と、機能そのものが社会への外在化へ転嫁しつつあるためと思われる。

それにともなって、都市型の核家族にみられる現代の母親の育児不安は、母子関係の孤立化に深くかかわっており、母親の行動が幼児に良い面でのモデリングの効果をもたえないことから、子どもの自立性は育ち難いことが言われている。

また、この育児不安が母親の余暇感、余暇行動をもたえないことも指摘されている。

研究の目的

親の養育態度は、時代や文化の影響を受け多くの要因によって変化するものであるが、現実の社会状況のなかで、今の学生達の将来が、育児不安から生じる余暇感、余暇意識へのゆとり、余暇行動参加への期待等がマイナスの方向へ行くことが予想される。

幼児期における「何が出来なかったか」「何を失ったか」を問うところみはなされていない。また、幼児の発達や行動を調査したものは多いが、現在の若者の「幼児期」についての調査はされていない。

そこで現在の若者像をふまえながら、学生の「幼児期」に焦点をあて、発達状況と親の養育意識、行動の実態を把握することにより、「どこにどんな問題があるのか」を探り出し、

1. 幼稚園教育（集団保育）のあり方

（幼児の保育についての社会的場づくりの設定に関する問題）

2. 家庭のしつけのあり方

3. 学生の余暇行動に参加させるための指導方法等の研究の予備調査とする。

研究の内容と方法

文部省の幼稚園教育指導要項と厚生省の保育所保育指針から六領域（健康・言語・音楽リズム・絵画製作・自然・社会）を領域別に、目的、内容、方法を分類、領域別に年齢（3、4、5、6、）と発達課題を検討。

幼児期における基本的生活習慣の内容を年齢別に分類し、各領域と関連させながら発達達成度を把握するため質問事項を作成した。

質問事項はⅢ部から構成されており、

I. 「幼児期」当時の家庭形態、母親の出産年齢、当時の仕事、主に育児に当たった人、子どもの通園、幼児の頃の基本的生活習慣の自立年齢、親の養育態度、居住地に関するもの。

II. 六領域と基本的生活習慣に関係するもの。

76問（質問用紙2枚）

III. 子育てに関係するもの。7問

親のみ記述式で記入

以上4枚を学生と親にアンケート調査した。

現在、18歳の学生の「幼児期」についての質問である。

調査対象

埼玉県	S短大（女子）	235名	
東京都	M短大（女子）	118名	
東京都	M大学（男子）	108名	計 461名
	その親（S短大、M短大）	282名	

調査時期

昭和61年 7月

結果と考察

「幼児期」における領域「社会」から、社会的習慣育成についての諸問題を掘が考察、領域「音楽リズム」の立場から遊戯行動についての考察を深山が担当し、領域「自然・社会・健康」から遊びとの関係についての考察を松浦が担当、本人は基本的生活習慣と発達課題、母親の期待像を中心として考察する。

I. 「幼児期」における基本的生活習慣と発達課題

1) 幼児期における基本的生活習慣とは

基本的生活習慣とは、日常生活のもっとも基本となる食事・睡眠・排泄・衣服の着脱・清潔に関する習慣をいう。この習慣をひとりではできないという行為が自我の形成を培い独立心、自立心を育て、やがて社会生活（集団の場）への適応化に伴って生きる力となっていく。

従って、習慣は毎日反復されることにより確かなものとなる。

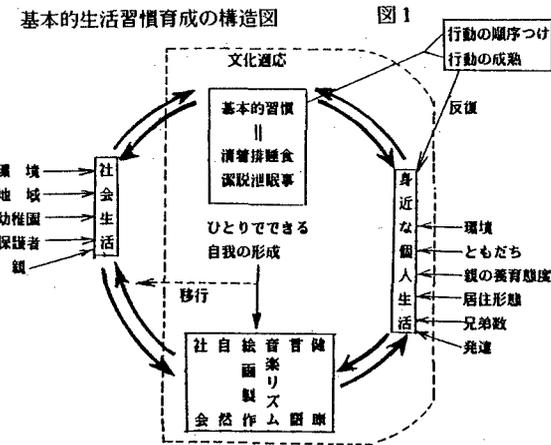
それには行動の順序づけがなされていなければならない。
 (例えば、朝起きるとおはようの挨拶ができ、顔を洗い、
 歯をみがき、自分で服を着る……)

その行動も、発達に即した方法をとることが大切であり、
 幼児の心理的特徴の把握と、身体諸機能の成熟、なかでも
 運動機能の発達を考慮し、行動の成熟を待って親も保育者
 も指導することが望ましい。

一連の行動も周囲の社会・子どものまわりの文化が求め
 ている所に合うように生活する仕方を身につけていかな
 なければならない。

このことをケゼルは「文化適応」と名づけているが、適
 応した生活ができるような習慣をつけることが習慣の第一
 歩と述べている。そうした習慣は、家庭生活の中で特に、
 幼児期においてつけられるべきものであり、親の意識、行
 動が影響すると思われる。

したがって家庭での基本的生活習慣を土台として、幼稚
 園教育の六領域の中にも同時に平行して生かされていくこ
 とが望まれる。各領域での体験が、個人の基本的生活習慣
 をさらに確かなものにしていくであろうし、その関係は家
 庭と領域がフィードバックされる状態である。



2) 幼児期における基本的な生活習慣の発達課題

ケゼルは、5歳すぎると幼児は彼としての一つのまと
 った人格をもつようになるというが、その有力な条
 件の一つは基本的な生活習慣である。

そして、基本的な生活習慣における自立ということが、幼
 児の性格の発達形成に、きわめて重要な意味をもつと考
 られている。

それは、個人的側面の自立だけでなく、社会集団の1人
 として位置づけさせることも必要であり、幼児は集団の中
 で、集団の力で発達することから、社会の中で適応する方
 法も身につけなければならない、それには年齢と発達の関係
 が中心となる。

表1は、習慣の形作られて行く全体の流れが、年齢との
 関係において発達的にはっきりしてくる様子を表している。

基本的な生活習慣の発達課題 表1

習慣	年齢	内容	
		発達課題の内容	
食	1.0	茶碗をもって飲み、スプーンが使える	
	2.0	手を洗う	
	2.6	はしと茶碗、スプーンと茶碗(両手で)	
	3.0	いただきます、ごちそうさま、挨拶ができる。こぼさないで食べられる	
	3.6	手伝ってもらわないで食べられる	
便	0才	ひとりでする(紙張をしない)	
	4.0	排便時にトイレに行く 夜間帯に覚醒する 排便時の挨拶をする	
排	2.6	誰かについていけばひとりでする	
	3.0	パンツをとってあげればひとりで行ける。トイレでノックする	
	4.0	完全にひとりで行ける。手を洗う	
	4.6	紙を使って始末ができ完全自立	
衣	2.0	ソックス、帽子が脱げる、服を脱ぐ	
	3.0	ボタンをはずしたり、かけたりできる	
	3.6	衣服を自分で着る	
	4.0	袖を通し、前後を間違えない	
	5.0	履脱行為の完全自立	
清	2.6	手を洗う	
	4.0	顔を洗う、顔を拭く、うがい、鼻をかむ、歯をみがく	
	5.0	口をすすぐ、髪をとかす	

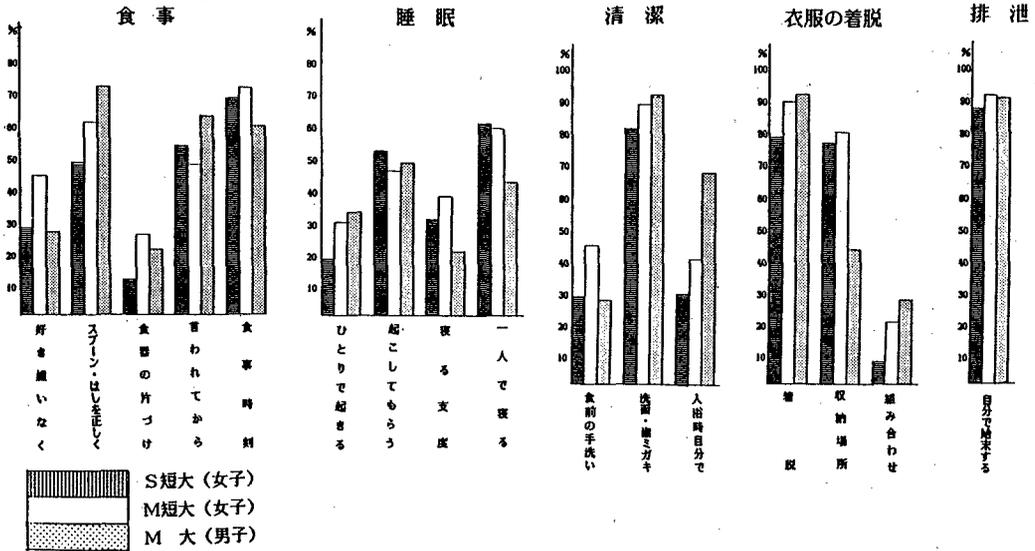
3) 基本的な生活習慣における発達課題の学校別・男女差
 現在の幼児期の基本的な習慣を調査したものは多くみら
 れるが、現学生達の15年前の「幼児期」に焦点をあてたも
 のはみられない。ゆえに記憶をひもときながらの回答であ
 り、記憶の程度、基本的な生活習慣の内容解釈の個人差も当
 然考慮されなければならないが、傾向をみることはできよ
 う。

男女差が顕著にみられたのは、スプーン、はしが正しく
 使える、の項目で男子が女子より16.3%高く、入浴時自分
 で体を洗ったり、拭いたりできるという点では女子との差
 が30.9%あったことである。その他、わずかながら女子と
 の差がみられるのは、1人で起きることができる、衣服の
 組み合わせ、洗顔、歯ミガキが自分で行えるという項目で
 あった。

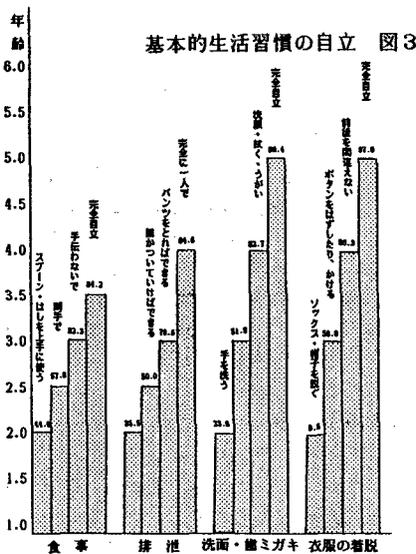
男女差はみられても全体的には、1人で起きられる項目
 も34%であり、衣服の組み合わせも30%に満たない。こう
 した点からも自分でやらせるといふ親の意識や準備が不足
 していることが分かる。そして、男子が女子より低い項目
 では、寝る支度、食前の手洗いに關して10%低く、特に1
 人で寝るといふ項目では、女子は60%以上が1人で寝て
 いるのに対し、男子は43.5%と18.7%の差がみられた。

このことは、住宅事情によるのか、親の男の子に対する
 接し方が過保護であるのか、本人の自立心の欠如のためな
 のであろうか。

基本的生活習慣の達成率 図2



4) 基本的生活習慣の自立について



歩行は、個人差はあっても 1.3 年でひとりで歩くけるようになるのが普通である。ここでは、早い人で8ヶ月から歩行が始まり93.7%が1.3年で完全歩行している。これは平均的な発達であることが分かる。歩行は個人の発達ゆえ、兄弟数の影響はみられなかった。

人見知りは、生後半年経つと周りの知っている人と見えない人の区別ができるようになり、そのため機嫌が悪くなったり、泣いたり、顔をかくしたりする行動である。一面では、社会性の成長の一つの段階といわれ、ここを通過して未知の人と接触していくことができるのであるが、7~8ヶ月までに人見知りをしたのは33%、人見知りをしないのが、29.3%、人見知りの内容を理解できていないのか

1歳以上と回答したものが27.1%もあり、1才から6才までの開きがみられた。人見知りをしないのが1/3近くみられるのは核家族の中で、外部の人と接触の場や、接触回数が不足のためと思われる。

図3が示すように、自立が一番早いのは食事である。手伝わってもらわないで食べられるのが3.5歳であるから、84.2%が達成しているのは平均的発達である。しかし、食事の内容(こぼさないで食べられる。はしが上手に使える。食事時間20分位)の確認はされていない。排泄は紙を使って始末ができるのが完全自立としている。4才で94.6%自立している結果になっているが、親の排泄に対する意識の程度に差があることから、評価に点の甘い、辛いがあり、判断基準がまちまちであることを考慮しなければならない。

洗顔、歯磨きの面にしても、2歳で手を洗う基準から見ると23.8%は低いと言わざるをえないが、今までの発達状況から考慮して、手の動きが劣っているのではなく、親の清潔に対する関心度が低いため、行動を促し、自ら進んでできる環境に導かないのではないかとと思われる。

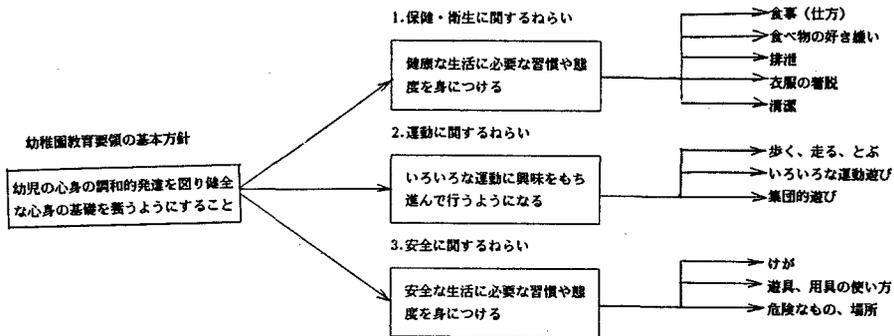
5) 領域「健康」における内容達成率の親子の差異

①「健康」の内容とは

図4に示したように、幼児の発達に即して3つの立場から具体的な経験や活動することをねらいとしている。

しかし、幼児の生活は常に全体的なものであり、生活全般にわたって関連したものであるから、身体の健康に関するものを中心として、他の領域とあわせて総合的に捉えなければならないであろう。また、「健康」での活動は領域「社会」「言語」との関連が密接である。(図4参照)

領域「健康」の内容 図4



「健康」親子同一項目達成率 表2

ハイと答えたもの(60%以上)

兄弟数	項目	外遊びの 方が好き	同年齢と あそぶ	危険な 場所	備考
ひとり	学生26				65.4
	親 25				84.0
二人	学生46		65.2		65.4
	親 48		69.6		78.3
	学生63			69.8	65.4
	親 27			88.5	92.3
	学生48	66.6	68.6		64.6
	親 26	70.3	70.3		78.4
三人以上	学生52		81.5	65.4	
	親 48		81.7	82.9	

親子間に差異がみられる項目

兄弟数	項目	家の中で 絵本	ボール あそび	同年齢と あそび	危険な 場所
ひとり	学生26	38.5			53.8
	親 25	68.0			88.0
二人	学生46				53.8
	親 48				71.7
	学生63	44.4		53.2	
	親 27	65.4		68.8	
	学生52		45.8		56.3
	親 48		64.9		83.8
三人以上	学生52				
	親 48				

ここではS短大のみにおいて考察する

「健康」の23項目のなかで親子ともに60%以上達成していたとされる内容は、基本的な生活習慣と同様であるが、全体的に親の方が達成されていたとする率が学生より高くみられることである。
 (基本的な生活習慣と重なっている項目図4-1は省略する)表2が示すように、学科別による違い、兄弟数による違いがみられ、あそびの活動

II. 子どもに対する母親の期待像

1) 母親像の特色

今回の調査では、家族形態は核家族66.4%、家族以外同居は33.6%であり、子ども数はひとりっ子14.1%、2人が63.2%、3人以上が22.7%であった。3人以上の兄弟では出生順位3番目の人が多くみられ、母親の出産年齢も26~30歳までが42.3%、次いで21歳から25歳までが41.6%、そして31歳から35歳までが15.4%となっている。

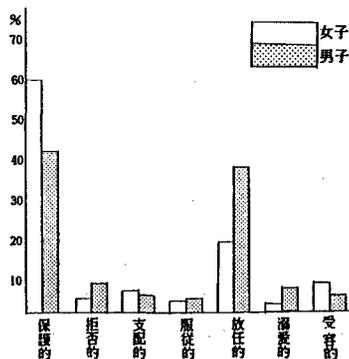
80%以上が、30歳までに2人の子どもを出産し、育児にあたる年齢は20代~30代のはじめと思われる。

子どもを育てる環境は住宅地、次いで団地、マンションと続き、当時の母親の仕事の状況は有職者27%、パート7.3%、無職65.7%であるが、パートを含めると1/3は仕事をもっていた事になり、無職の中にも内職を記入した者が10名みられた。

主に保育に当たった人は父母が86.7%と多く、祖父母と一緒に記入したものが13.2%であった。

そして、親の養育態度は(子どもからみた)図5のように、保護的な親が全体の55%を占め、兄弟数から分析すると、ひとりっ子、

親の養育態度 図5



としては、児童教育学科(兄弟数2人)だけが66.6%であるのは、外あそびを親子とも好んでおり、同年齢の子とのあそびが多くみられる。しかし、あそびの活動に関しては、親子間にかかなりの差がみられ、家の中で折り紙をしたり、絵本を読んだり、絵を画く方が好きでしたかと言う点では、ひとりっ子の親子間の差は約30%近くもあり、国文科においても同様の傾向がうかがえる。表2以外の項目にもこのような傾向がうかがえるが、この差は幼児期のあそびに対する記憶の薄れであろうか。子どもがどんなことをしてあそんでいるか、どんなことを好んで活動しているかを注意深く、関心をもって観察していれば、また、別の違った傾向がみられたのではないだろうか。

と、ひとりっ子、2人の親は保護的が65.4%となり、3人以上になると保護的な親は半分に減少し、42%が放任的、次いで保護的な親が35.4%と続く。
 やはり、子ども数の増加に伴い、親の養育態度も変化していくのが分かる。

2) 両親の養育態度からみた子どもに対する
母親の期待像

親の子どもに対する期待像 図6

目 標	内 容	方 法
1. 思いやりのある子に	やさしい、素直な あたたかい、感動できる 思いやりのある、心の広い	動物を飼う、植物を育てる おけいごなどをさせる、レコードを 聴いたり、絵本、童話を読んでやる
2. よい子に (道徳性に富んだ)	正直な、他人に迷惑をかけない、約束を守る、年寄りを大事にする、良い悪いの区別ができる、挨拶ができる	挨拶をきちんとさせる 良い悪いを教える よく意見を聞く、その都度話し合う
3. 明るい子に	明るい、のびのびした	好き嫌いをなく食べさせる 外あそびをよくさせる みんなと仲よくあそぼせる
4. 粘り強い子に	責任感がある 粘り強い 最後まで何事も頑張る	地域活動に参加させる
5. 元気な子に	自分のことは自分でする 自分の意見ははっきり言う 自分で考えて行動がとれる	いろいろな体験をさせる 手伝いをさせる
6. 子どもらしい子に	他の人と同じように 女の子らしく、常識的な 誰とでも仲よく	特にしらない 親が手本となる 親の生活をみていけばよい

親の子どもに対する期待像は、学科別、兄弟数、大学別による差はみられず図6のように分類することができる。男女差は、M大での親の標本数が少なかったため集計基準に記載されていないが、男らしい、たくましく、丈夫な、いい大学に、いい成績で、運動もできるといった内容のものが多くみられた。

記述式で複数回答のため数字は記載しないが、子どもに対する期待像は順番に並べると、1.が圧倒的に多く、次に、3.、2.、6.、5.、4.といった順位となる。

しかし、4.、5.は非常に少ない。これは、母親が子どもに期待する特性として、男性役割、女性役割への期待の違いが示され、女兒には伝統的な女らしさ、協同性を期待していると思われる。

期待像を達成するためにはどのような方法をしたかという点では、特別何もしないと回答したものの11.5%、無記入19.2%を合わせると30.7%となり、意識をして子育てをしないのか、夢中で育てたのか、自然と育つと考えたのか、学生の親の声には「そんなこと、考えてもいなかった」とか「気がついたら大きくなっていった」と言って記入できなかったことが報告されている。

この期待像を受けて、しつけに関連する質問についても図6の方法と同様の行動をみることができる。そして、ここでも、当時のしつけが現在お子さんにどのように生かされているかといった質問では、生かされている点がありません

はつきり述べられないこと、少数であることであり、しつけも特別なないと回答したもの、無記入を合わせると12.6%であった。しつけが生かされていない点では、後片づけができない、整理整頓ができない、物事を親に相談してから決め自分でできない、言葉が乱暴であるといった内容の順になっている。

生かされていない点に関する無記入が59%あることは、どのように解釈すればよいのであろうか。

現在小・中学校に対する生活指導内容として「基本的生活習慣」への要望が第1位にあげられ、一方で83%の親は「しつけがうまくいっている」と回答していると述べており、しつけの内容、方法に問題があり、そこにはしつけを「礼儀」「立居振る舞い」「言葉づかい」などと一面的に捉える誤ったしつけ親が介在していることが報告されている。実際は、それほど意識をして子育てをしていないので書けないと捉えるのか、旨くしつけがなされていて、生かされていない点がないと理解されるのであろうか。

まとめ

領域「健康」と基本的生活習慣、親の養育態度から、どこにどんな問題があるのかを考察してみたのであるが、基本的生活習慣の自立は年齢相応に発達している傾向がうかがわれた。このことは身体面からの発達であり、発達と自立に対する考え方は、親の基準にかなりの相違点があることが見出された。

どの程度までをひとりやせようとしているのか、どこまでできれば、達成したと考えているのか、内容はどんなもの、どんな順序でやらせたいのか、といった具体的内容が把握できなかったが、基本は各個人の達成基準、自立程度を自覚した上で育児に望まなければならないということである。

達成動機の高自立訓練を意識的に母親が行なった場合、達成動機の高い子は高い自立を示し、達成動機の高い子どもは、逆に依存欲求が強くなるとされている。しかし、子ども自体にも生来的な行動基準があり、それが母親の養育方針と一致すれば、よい方向へ育成されていくと言われてい

るが、ここでは親の方針に一貫性、基準性がみられなかったことである。

例えば、人見知りの行動も年齢にかなりのバラツキがみられたことから分るように「人見知りとは、どのような行動のことか」といったことが把握されていないのではないかと推察されるのである。

基本的な生活習慣も達成されているように見えるが、収納場所（おもちゃ、衣服）は80%以上が決まっているにもかかわらず、自分で服の組み合わせをさせていない。

このことは、自分でするという行為と、衣服の色や取り合わせのバランスも自然に身につけてくると考えられるからである。

また、洗濯物をたたむ手伝い（役割）をさせ、自分の物はきまった収納場所に片づけさせるという習慣がなされていないため、しつけが生かされていないという点で後片づけ、整理整頓の未熟さが現在出てきているのだと思われる。

その他

○ひとり寝の習慣、特に男子についていないこと。

○入浴時も自分で洗ったり、拭いたり行動が少ないこと。

○後片づけをしない、言われてからするといった行動が多くみられたこと。

○外での遊び行動が少なく、工夫して遊ばれている傾向がみられないこと。

○スプーン、はしが上手に使えるといった項目も半数である。それが正しく使えるためには、正しい持ち方を教えていなければならないし、習慣化されなければならないのであるが、現在の学生の姿から習慣が身についたとは思えないのである。

以上のことから、自立行動をするためには、家庭における基本的な生活習慣が確実に身につかなければならず、特に「幼児期」になされなければならない。親自身が子どもに対し、どのような人間に育てたいのか、そのためには何が必要なのかという問いかけをすると同時に、身のまわりの始末は自分でできるようにさせることが、自立への第一歩であり、1人前になるための条件である。

そのような観点から、改めて基本的な生活習慣の内容を確認する必要があると思われる。

また、女子に対する期待像も、それぞれの親によって相違しており、母親自身の特性も反映している。

その親の影響が自立への行動を左右し、自分が将来、子育てをする時の基準となることから、そこに焦点をあてて、今後の幼児教育のあり方、家庭のしつけのあり方、学生の余暇行動に参加させるための指導方法を研究課題としたい。

文献

- 1) 文部省「幼稚園教育指導書一般編」 1969
領域編「健康」
「言語」
「音楽リズム」
「自然」
「社会」
「絵画製作」
- 2) 全国社会福祉協議会「保育所保育指導」
全文とその見方 1973
- 3) 大月書店「子育てと家庭の役割」和田典子 1985
P.101
- 4) 講談社現代新書「ことばを失った若者たち」
桜井哲夫 1986 P.123、160
- 5) 朝倉書店「幼児心理学」山下俊郎 1986 P.310～348
- 6) 日本保育学会「家庭の養育態度」 1985 P.19～20
P.78～79
- 7) 日本文化科学社「幼児心理学講座3」藤永保 1975
性格とパーソナリティ P.143、144
- 8) 岩波新書「子どもとことば」岡本夏木 1985 P.62
- 9) “ 「ことばと発達」岡本夏木 1985
P.156、157
- 10) “ 「小学生になる前後」岡本夏木 1984 P.32
- 11) 中公新書「伸びてゆく子どもたち」詫摩武俊 1985
幼児期の家庭教育 P.51～53

幼児の社会的生活習慣の育成について

堀 良子 (帝塚山学院大学)

領域「社会」、個人的生活習慣、社会的な生活習慣、遊び

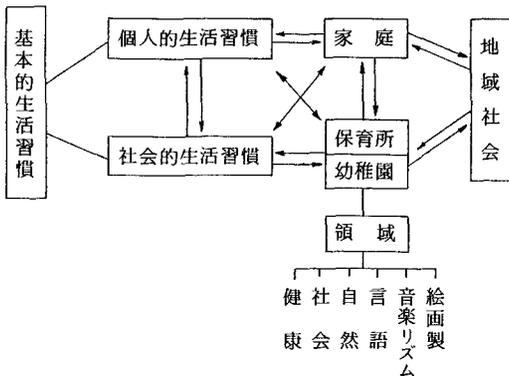
表 1. 領域「社会」について

はじめに

今日、若者の未発達について種々問題にされている。これは子どもを取り巻く環境の変化—核家族化、兄弟の数の減少、住居・生活様式など—に起因するといわれている。特に幼児の保育の拠点である家庭のあり方、親の養育態度、幼児期に体験されるべき集団保育の基本的な生活習慣の未確立などが考えられる。

集団保育の場での社会性は、家庭で行なわれる基本的な生活習慣がしっかりと身についた上ではじめて育てられるものと思われる。生活習慣は図1の如く、個人的習慣と社会的習慣の2本の柱からなる。個人的習慣は基本的には家庭で教育(しつけ)されるものである。一方、社会的習慣は対人関係・きまりを守る・公共物をたいせつにするなど、幼稚園や保育所の集団保育の場で友だちとの生活・遊びを通して習得されるものである。しかし、それぞれが単一に切り離されるのではなく、互いに有機的に関連しながら、家庭・幼稚園・保育所・地域社会の総合された環境の中で育てられるものである。

図 1. 幼児期における社会性の構図



本研究では、このようなことを考えて、幼稚園教育における領域「社会」からみた、幼児の集団保育の場における社会的な生活習慣の育成についての問題を考察する。領域「社会」の内容は、基本的な生活習慣と正しい社会的態度を育成し、豊かな情操を養い、道徳性の芽ばえをつちかうようにすることを基本方針としている。具体的内容については表1に示すものである。

- | | |
|----------------------------|---|
| 1. 個人生活における望ましい習慣や態度を身につける | <ul style="list-style-type: none"> 1. 身のまわりのこと 2. 自他の区別 3. 自分の意識 |
| 2. 社会生活における望ましい習慣や態度を身につける | <ul style="list-style-type: none"> 1. 園での生活 2. 友だちとの関係 3. 父母と教師 |
| 3. 身近な社会の事象や興味や関心をもつ | <ul style="list-style-type: none"> 1. 園での生活 2. 近隣の生活 3. 行事への参加 |

1) 調査方法・内容は梅津の研究に同じ

2) 本研究で取りあげる調査項目

調査項目76項目のうち領域「社会」に関わりのある18項目を本研究の調査項目とした。

1. 名前を呼ばれたらキチンと返事をしていましたか。—以下項目1「返事」
2. ごあいさつ(おはよう、おやすみ、ありがとう、いただきます)がよく言えましたか。—以下項目2「あいさつ」
3. 家の中より外で遊ぶほうが好きでしたか。—以下項目3「外で遊ぶ」
4. 一人遊びが好きでしたか。—以下項目4「一人遊び」
5. 同じ年齢の子と遊ぶほうが多かったですか。—以下項目5「同年齢の子」
6. 遊具を利用する順番を守らせるように(守る)していましたか。—以下項目6「順番」
7. 使った道具、絵本などの後片付けはしていましたか。—以下項目7「後片付け」
8. いつも嫌がらないで保育園や幼稚園に行っていましたか。—以下項目8「嫌がらず通園」
9. 自分のものと他人のものとの区別はできていましたか。—以下項目9「自他の区別」
10. して良いことと、悪いことの区別はできていましたか。—以下項目10「よい悪いの区別」
11. 遊ぶ時は必ず行き先を言って出かけましたか。—以下項目11「行き先」
12. 先生やお母さん、友だちとの約束は守れましたか。—以下項目12「約束」
13. 日頃役割を与えさせて(与えられて)いましたか。—以下項目13「役割」

結果と考察

1) 考察の視点と方法

前記の調査項目を次の4つの視点から、考察をすすめることにした。

- (1) 学生(女子)と親との比較
- (2) 兄弟の数による比較
- (3) 学生(男子)からみた親の養育態度からの比較
- (4) 男女による比較

考察の方法については、比較すべき対象において、「ハイ」の回答率が①両者とも高いもの、②一方が高くて、他方が低いもの、③両者ともに低いものとした。

尚、兄弟の数による比較にあたり、留意すべき2点を述べておく。

第1点は、ここでは男女の区別を考慮していないこと、第2点は、兄弟が複数の場合、その順番による区別を考慮していないことである。従って同じ3人兄弟の範囲には、長男も、三女も含まれる。

2) 結果の考察

(1) 学生(女子)と親との比較

学生と親との間に認識上の大きな違いは少ないが、総体的に親の評価のほうが高くなっている。

両者ともに「ハイ」の回答率が高い項目(資料1参照)は、項目1「返事」では、学生78.1%、親80.9%、項目2「あいさつ」では学生70.5%、親77.7%、項目5「同年齢の子」では学生63.1%、親69.3%、項目6「順番」では学生61.7%、親67.3%、項目9「自他の区別」では学生86.6%、親94.9%、項目10「よい悪いの区別」では学生81.3%、親85.3%、項目11「行き先」では学生77.9%、親84.4%の以上7項目である。項目により回答率に程度の差はみられるが、以上の項目に関する動作、行動は幼児期に習慣化されていたと、学生、親ともに判断されている。

次に、学生、親との回答率で最も大きな差があった項目(図2参照)は、項目8「嫌がらず通園」の学生64.1%、親85.3%であり、親は嫌がらず通園したと判断する者が多いのに対して学生の回答とは約20%の差がみられた。項目12「約束」についても学生67.5%に対して、親は81.2%と高く、親のほうに動作、行動の習慣化されていたと高く評価している傾向がみられる。

両者ともに「ハイ」の回答率が低い項目(図2参照)は、項目3「外で遊ぶ」では学生53.1%、親57.7%とやや低い回答である。項目7「後片付け」では学生44.0%、親43.1%、項目13「役割」では学生30.6%、親33.0%と低く、これらの2項目については習慣化が十分でない判断したい。項目4「一人遊び」は学生26.7%、親27.4%となっている。この項目についてはむしろ「ハイ」の回答率が低いほうが望ましいのである。人間は生まれながらにして対人的関係、社会的環境の中に身を置くことにより、はじめて成長するよう運命づけられている。項目3、4にみら

図2. 学生と親との比較

一両者の「ハイ」の回答率に大きく差のある項目及び回答率が低い項目一

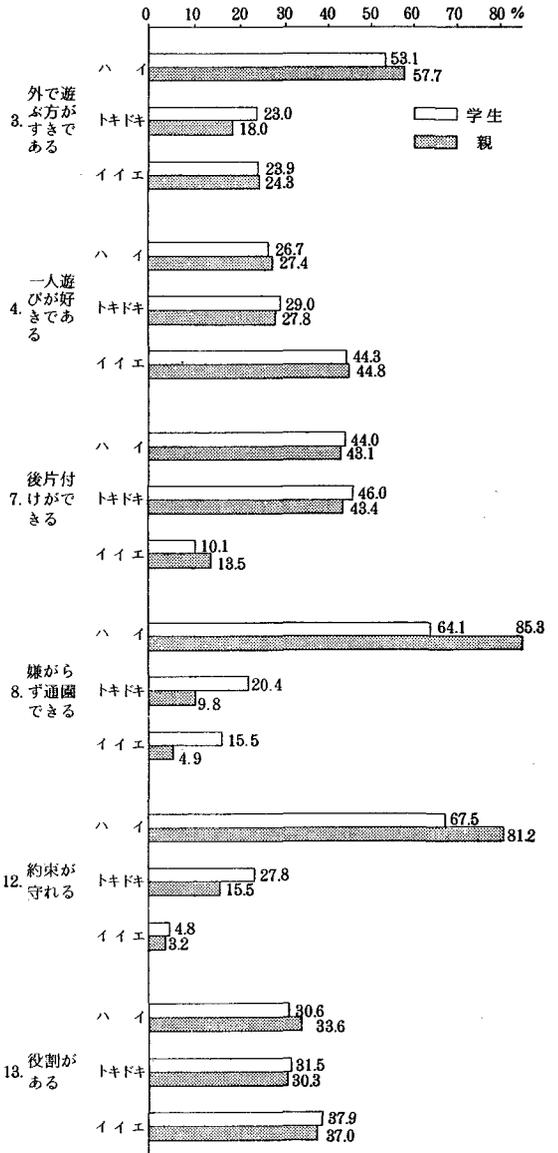
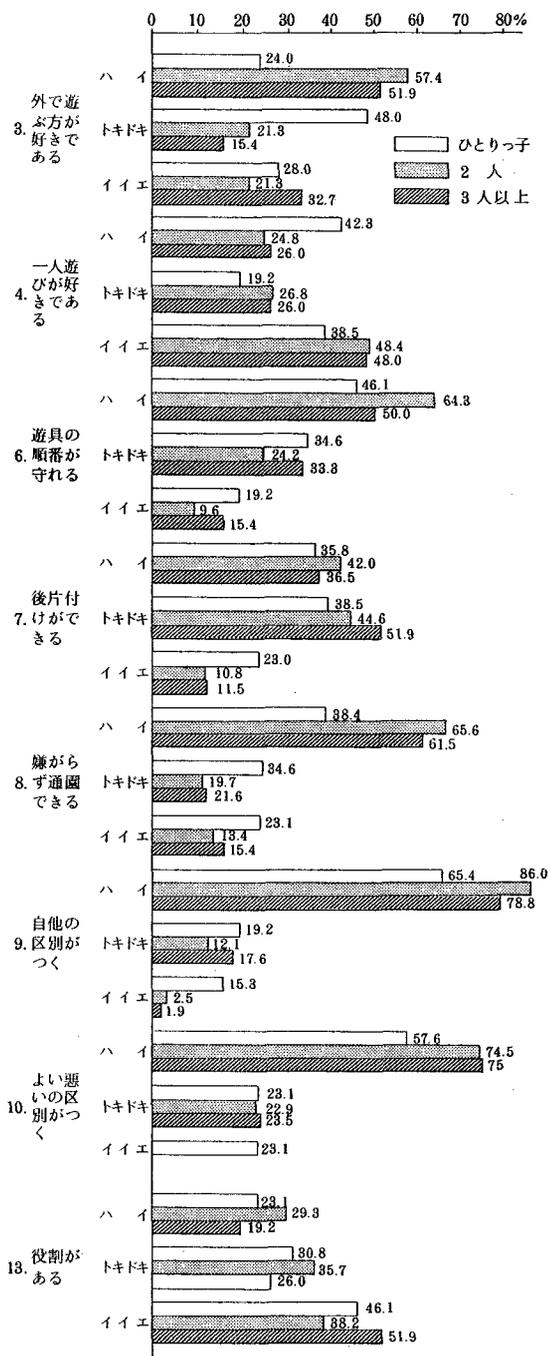


図3. 兄弟の数による比較

一兄弟の数での「ハイ」の回答率に差のある項目及び回答率が低い項目一



れるように、外で遊ぶより家の中を、一人遊びを好んでいた傾向がみられることに問題があると思われる。項目13の役割についても、役割を持っていたのが全体の3分の1である。子どもは自我の芽ばえとともに、自分の存在を回りに認めさせるための行動をする。「役割が与えられる」ことは、子どもの存在が認められることであり、行動に責任を持たされることである。それは自立の芽を育てることになる。しかし、調査結果からはこれらについての配慮が十分でなかったことが示されている。動作、行動の習慣化は子どもの発達の時期と、それらをくり返し練習することが重要と考える。

(2) 兄弟の数による比較

兄弟の数に関わりなく「ハイ」が高い回答率で同じような傾向を示した項目(資料2参照)は、項目1「返事」では1人69.2%、2人67.5%、3人以上66.7%、項目5「同年齢の子」では1人57.7%、2人61.7%、3人以上61.5%、項目11「行き先」で1人73.7%、2人76.4%、3人以上73.0%の3項目と、やや低くなるが項目12「約束」の1人57.6%、2人59.2%、3人以上59.6%の項目である。以上の項目についてはよい傾向であると判断したい。

3者間の回答に差が示されたのはひとりっ子である(図3参照)。項目3「外で遊ぶ」24.0%、項目4「一人遊び」42.3%、項目8「嫌がらず通園」38.4%、項目9「自他の区別」65.4%、項目10「よい悪いの区別」57.6%の5項目に、2人、3人以上の兄弟より約15~30%の低い回答率である。一方、2人兄弟では項目3「外で遊ぶ」57.4%、項目6「順番」64.3%、項目7「後片付け」42.0%、項目8「嫌がらず通園」65.6%、項目9「自他の区別」86.0%、項目13「役割」29.3%の以上6項目(図2参照)に他の2者より高い回答率でよい傾向が示されている。

次に、「ハイ」の回答率が3者ともに低い項目(図2参照)は、項目13「役割」の1人23.1%、2人29.3%、3人以上19.2%が最も低く、続いて項目7「後片付け」で1人35.8%、2人42.0%、3人以上36.5%、項目4「一人遊び」で1人42.3%、2人24.8%、3人以上26.0%の項目である。項目4については「ハイ」の回答率が低いほうが望ましいことから、他の3項目との同一判断はできない。

以上の結果からひとりっ子に問題が多く示された。先にも述べたように人間は人との関わりの中で成長してゆく。幼児の社会的環境の基本的集団は家庭である。この生活の拠点としての家庭で、両親や兄弟との相互の関わりの中で具体的行動を通して体験し、反復練習により生活の基本的習慣として習慣づけられるのである。兄弟との関わりのないひとりっ子に対して、親による生活体験の場の拡大が必要と思われる。3人以上の兄弟が、2人兄弟よりも習慣化が低いことについても親の養育態度の問題として考えたい。

(3) 学生(男子)からみた親の養育態度からの比較

M大107人のうち、親の養育態度が保護的とした45人(42.1%)と放任的とした39人(36.4%)の両タイプによる比較である。

両タイプともに、「ハイ」が高い回答率であった項目(資料3参照)は、項目1「返事」で保護的82.2%、放任的74.4%、項目2「あいさつ」で保護的60.0%、放任的59.0%、項目3「外で遊ぶ」で保護的68.9%、放任的79.5%、項目5「同年齢の子」で保護的73.3%、放任的71.8%、項目9「自他の区別」で保護的82.2%、放任的92.3%、項目10「よい悪いの区別」で保護的80.0%、放任的79.5%、項目12「約束」で保護的62.2%、放任的74.4%の7項目である。項目により約10%の差もみられるが、両タイプとも60%をこえることから、概ねよい傾向で習慣化されていると判断したい。

しかし、両タイプ間に差があり、やや低い回答率であった項目(図4参照)は、項目11「行き先」の保護的68.9%に対して放任的43.6%、項目8「嫌がらず通園」で保護的53.3%、放任的48.7%の2項目で、前者では25%、後者では12%の差が示された。この2項目には両タイプの養育態度の違いが示されているように思える。

両タイプとに「ハイ」の回答率が低い項目(図4参照)は、項目4「一人遊び」で保護的22.2%、放任的12.8%であるが、この項目については低いほど望ましい傾向といえるが、項目6「順番」では保護的51.1%、放任的48.7%、項目7「後片付け」では保護的31.1%、放任的38.5%、項目13「役割」では保護的31.1%、放任的30.8%の3項目では両タイプ間の差もほとんどみられず、習慣化の低さを示している。

以上の結果から親の養育態度による著しい差は大きくみられなかったが、保護的タイプにやや習慣化の低さが示されている。

(4) 男女による比較

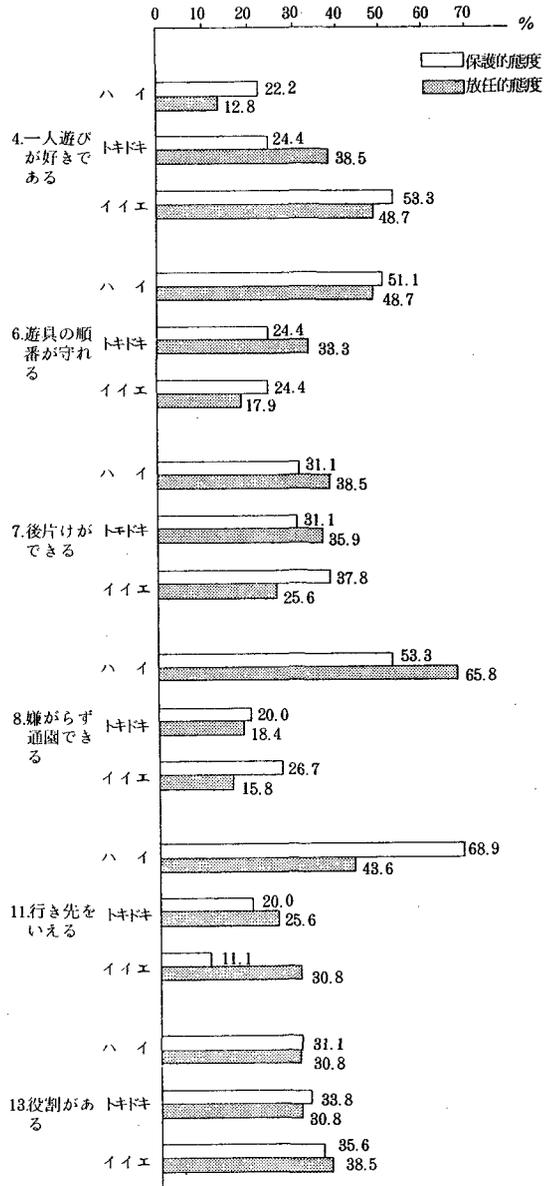
男女ともに「ハイ」が高い回答率を示している項目(資料4参照)は、項目1「返事」で男77.8%、女78.1%、項目9「自他の区別」で男88.9%、女86.6%、項目10「よい悪いの区別」で男80.6%、女81.3%が80%以上である。やや低いに項目5「同年齢の子」男68.5%、女63.1%、項目8「嫌がらず通園」男60.2%、女64.1%、項目12「約束」で男67.6%、女67.5%の3項目がある。

両者間に大きな違いが示された項目(図5参照)は、項目2「あいさつ」で男57.4%、女70.5%、項目3「外で遊ぶ」で男73.1%、女53.1%、項目6「順番」で男49.1%、女61.7%、項目11「行き先」で男57.4%、女77.9%の4項目で、「外で遊ぶ」以外は女に12~20%の高い回答率を示している。これらの項目から男女の性差が習慣化へも影響しているように思われる。

一方、「ハイ」の回答率が低い項目(図5参照)は、項目4「一人遊び」男20.6%、女26.7%、項目7「後片付

図4. 学生からみた親の養育態度からの比較

—両者の「ハイ」の回答率に差のある項目及び回答率が低い項目—



け」で男34.3%、女44.0%、項目13「役割」で男34.4% 女30.6%となっている。項目4については、回答率が低いほど望ましいのであるが、両者とも全体の4分の1に近いものが「一人遊びが好き」としている。このように友達を必要としない、友達と遊ぶことを好まない子どもが将来大人になった時、どのような影響もたらされるのか考えさせられる回答である。「後片付け」は身のまわりのこと、自分のこととして、又次の動作、行動への準備となる基本的な習慣である、にも拘らず習慣化が十分にされていないことについては、他の項目とともに、今後の課題としたい。

以上を要約すると、次のようになる。

- 1) 社会的生活の習慣化について、学生と親との間に認識上の大きな差は少ないが、総体的に親の習慣化に対する評価のほうが高くなっている。
- 2) 兄弟の数からみた習慣化については、ひとりっ子に低く、集団生活への適応も低い。3人以上の兄弟に特によい方向への傾向はあまりみられず、2人兄弟に習慣化のよい方向の傾向がみられた。
- 3) 親の養育態度からみた保護的タイプ、放任的タイプとの間に差はあまりみられず、保護的タイプにやや習慣化の低さが示された。
- 4) 男女による比較では、女子に習慣化がやや高くみられた。

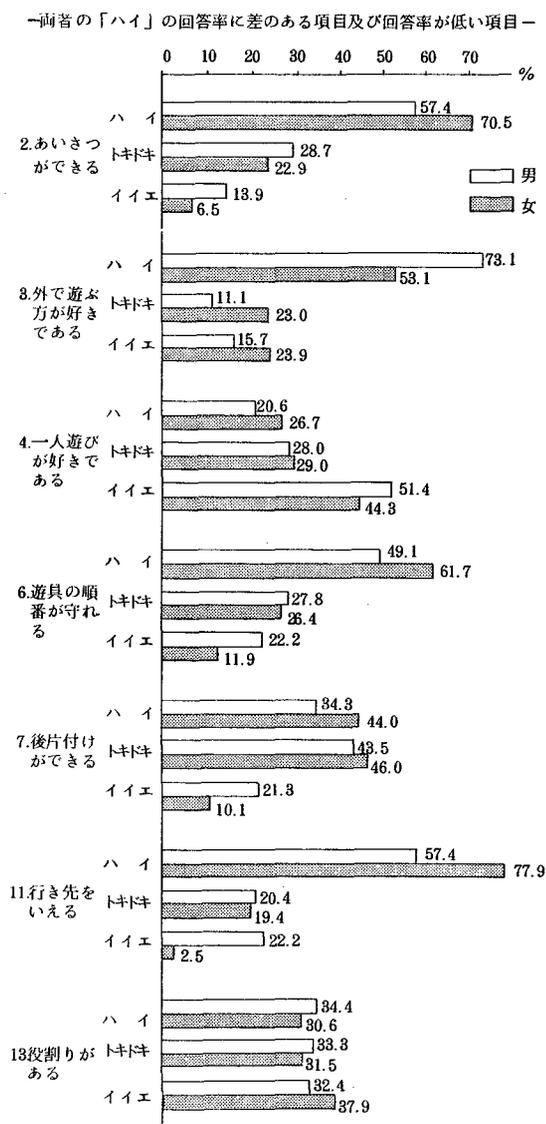
なお、最後に幼児の社会的生活習慣の育成について指導の手だてと思われることがらに触れると次のようなことがあげられる。

- 1) 家庭における基本的な生活習慣化は、子どもの自律性をそなわれないように、まず条件反射的な反復練習と母親のモデリングが何よりも望まれる。
- 2) 1)の条件をベースにして集団保育の場では、人との関わりを育てる場として、友達との遊びの中で豊かな体験や活動ができるような配慮が望まれる。
- 3) 幼児は自ずからの環境体験を、自己の生活に都合よく改善することはできない。従って環境改善は大人に委ねられている。

参 考 文 献

- 1) 文部省「幼稚園教育指導書」一般編 1968年
- 2) 文部省「幼稚園教育指導書」領域編, 社会 1968年
- 3) 岡田正章・植松治子・野間郁夫編「幼児社会教育法」東京書籍出版 昭和52年
- 4) 藤永保「幼児の心理と教育」有斐閣 昭和60年
- 5) 藤永保「幼児の発達と教育」有斐閣新書 1984年
- 6) 和田典子「子育てと家庭の役割」国民文庫 1984年

図5. 男女による比較



資料1. 学生と親との比較(%)

項目	回答 対象		ハイ	トキドキ	イイエ	M 短 大			S 短 大		
						ハイ	トキドキ	イイエ	ハイ	トキドキ	イイエ
1.	返事ができる	学生	78.1	17.2	4.9	80.7	16.8	1.3	67.5	26.8	5.6
		親	80.9	14.1	5.1	91.7	4.2	3.1	74.2	20.1	6.0
2.	あいさつができる	学生	70.5	22.9	6.5	76.5	17.6	4.2	61.8	29.2	9.0
		親	77.7	18.2	4.2	84.4	13.5	2.1	68.1	20.0	4.9
3.	外で遊ぶほうが好きである	学生	53.1	23.0	23.9	54.3	23.3	22.4	52.6	22.8	24.6
		親	57.7	18.0	24.3	62.1	13.7	4.2	55.4	20.3	24.3
4.	一人遊びが好きである	学生	26.7	29.0	44.3	25.9	35.3	38.8	27.1	25.8	47.2
		親	27.4	27.8	44.8	21.1	33.7	5.3	30.9	24.6	44.6
5.	同年齢の子と遊ぶ傾向にある	学生	63.1	16.6	20.3	66.9	15.3	17.8	61.2	17.2	21.6
		親	69.3	19.0	11.7	75.8	16.8	7.4	65.9	20.1	14.0
6.	遊具の順番が守れる	学生	61.7	26.4	11.9	62.2	24.4	10.9	59.1	27.2	11.9
		親	67.3	14.3	18.4	67.7	12.5	6.7	62.6	14.3	18.1
7.	後片付けができる	学生	44.0	46.0	10.1	48.7	44.5	5.0	40.5	45.5	14.0
		親	43.1	43.4	13.5	39.6	43.8	5.6	44.0	42.3	12.1
8.	嫌がらず通園ができる	学生	64.1	20.4	15.5	65.5	17.6	16.0	61.7	21.7	14.9
		親	85.3	9.8	4.9	87.2	10.4	2.3	80.0	9.3	6.0
9.	自他の区別がつく	学生	86.6	10.5	2.8	93.3	3.4	0.8	82.1	14.0	3.8
		親	94.9	4.0	1.1	94.8	4.2	1.0	92.9	3.8	1.1
10.	よい悪いの区別がつく	学生	81.3	16.4	2.3	94.1	4.2	1.7	72.8	22.1	2.6
		親	85.3	13.7	1.1	94.8	5.2	0	80.2	18.1	1.6
11.	行き先きをいえる	学生	77.9	19.4	2.5	82.4	16.0	1.7	75.3	21.3	3.0
		親	84.4	12.9	2.7	78.1	8.3	3.1	80.7	14.3	2.2
12.	約束が守れる	学生	67.5	27.8	4.8	76.5	16.0	5.9	57.4	35.3	3.8
		親	81.2	15.5	3.2	86.5	8.3	5.2	78.0	19.2	2.2
13.	役割がある	学生	30.6	31.5	37.9	40.0	31.9	26.9	26.4	32.8	42.1
		親	33.0	30.0	37.0	35.4	26.0	37.5	30.8	31.3	35.7

資料2. 兄弟の数による比較(%)

項目	対象 回答	ひとりっ子			2人			3人以上		
		ハイ	トキドキ	イイエ	ハイ	トキドキ	イイエ	ハイ	トキドキ	イイエ
1	返事ができる	69.2	23.0	7.7	67.5	27.2	5.2	66.7	27.5	5.9
2	あいさつができる	69.2	19.2	11.5	65.0	24.8	16.6	46.2	46.2	7.7
3	外で遊ぶほうが すきである	24.0	48.0	28.0	57.4	21.3	21.3	51.9	15.4	32.7
4	一人遊びが好き である	42.3	19.2	38.5	24.8	26.8	48.4	26.0	26.0	48.0
5	同年齢の子と遊 ぶ傾向にある	57.7	26.9	15.4	61.7	17.5	20.8	61.5	11.5	26.9
6	遊具の順番が守 れる	46.1	34.6	19.2	64.3	24.2	9.6	50.0	33.3	15.4
7	後片付けができ る	35.8	38.5	23.0	42.0	44.6	10.8	36.5	51.9	11.5
8	嫌がらず通園が できる	38.4	34.6	23.1	65.6	19.7	13.4	61.5	21.6	15.4
9	自他の区別がつ く	65.4	19.2	15.3	86.0	12.1	2.5	78.8	17.6	1.9
10	よい悪いの区別 がつく	57.6	15.4	23.1	74.5	22.9	0	75.0	23.5	0
11	行き先をいえる	73.7	23.1	33.8	76.4	21.0	2.5	73.0	21.6	3.8
12	約束が守れる	57.6	38.8	11.5	59.2	35.7	3.2	59.6	37.3	51.9
13	役割がある	23.1	30.8	46.1	29.3	35.7	38.2	19.2	26.0	1.9

資料3. 学生からみた親の教育態度からの比較(%)
保-保護的 放-放任的

項目	回答		ハイ	トキドキ	イイエ
	返事	対象			
1	返事ができる	保	82.2	13.3	4.4
		放	74.4	15.4	10.3
2	あいさつができる	保	60.0	24.4	15.6
		放	59.0	30.8	10.3
3	外で遊ぶ方が好きである	保	68.9	15.6	15.6
		放	79.5	7.6	12.8
4	一人遊びが好きである	保	22.2	24.4	53.3
		放	12.8	38.5	48.7
5	同年齢の子と遊ぶ傾向にある	保	73.3	13.3	13.3
		放	71.8	38.4	10.3
6	遊具の順番が守られる	保	51.1	24.4	24.4
		放	48.7	33.3	17.9
7	後片付けができる	保	31.1	31.1	37.8
		放	38.5	35.9	25.6
8	嫌がらず通園ができる	保	53.3	20.0	26.7
		放	65.8	18.4	15.8
9	自他の区別がつく	保	82.2	8.9	8.9
		放	92.3	5.1	2.6
10	よい悪いの区別がつく	保	80.0	11.9	8.9
		放	79.5	12.8	7.6
11	行き先をいえる	保	68.9	20.0	11.1
		放	43.6	25.6	30.8
12	約束を守れる	保	62.2	24.4	13.3
		放	74.4	20.5	5.1
13	役割がある	保	31.1	33.3	35.6
		放	30.8	30.8	38.5

資料4. 男女による比較(%)

項目	回答		ハイ	トキドキ	イイエ
	返事	対象			
1	返事ができる	男	77.8	15.7	6.5
		女	78.1	17.2	4.9
2	あいさつができる	男	57.4	28.7	13.9
		女	70.5	22.9	6.5
3	外で遊ぶ方が好きである	男	73.1	11.1	15.7
		女	53.1	23.0	23.9
4	一人遊びが好きである	男	20.6	28.0	51.4
		女	26.7	29.0	44.3
5	同年齢の子と遊ぶ傾向にある	男	68.5	17.6	13.9
		女	63.1	16.6	20.3
6	遊具の順番が守られる	男	49.1	27.8	22.2
		女	61.7	26.4	11.9
7	後片付けができる	男	34.3	43.5	21.3
		女	44.0	46.0	10.1
8	嫌がらず通園ができる	男	60.2	19.4	19.4
		女	64.1	20.4	15.5
9	自他の区別がつく	男	88.9	6.5	4.6
		女	86.6	10.5	2.8
10	よい悪いの区別がつく	男	80.6	10.2	8.3
		女	81.3	16.4	2.3
11	行き先をいえる	男	57.4	20.4	22.2
		女	77.9	19.4	2.5
12	約束を守れる	男	67.6	24.0	17.6
		女	67.5	27.8	4.8
13	役割がある	男	34.4	33.3	32.4
		女	30.6	31.5	37.9

領域：「音楽リズム」に関する幼児の遊戯行動

深山 千穂子

(女子聖学院短期大学)

幼児教育 音楽リズム 遊戯行動

はじめに

人間の健全な社会生活に、最も重要な要件は、心身の調和のとれた発達であると言われている。

ところが日本では、知的な活動—ことに学業成績—について、異常と思える程の関心が幼児期から持たれている。

人間の価値が、成績で決められるかのように錯覚され、学業における競争が激化している。しかし、人格形成や精神発達に最も大切な役割を果たす、基本的な生活習慣の自立や、自主性、創造性、感受性などを伸ばすことは軽視される傾向にある。

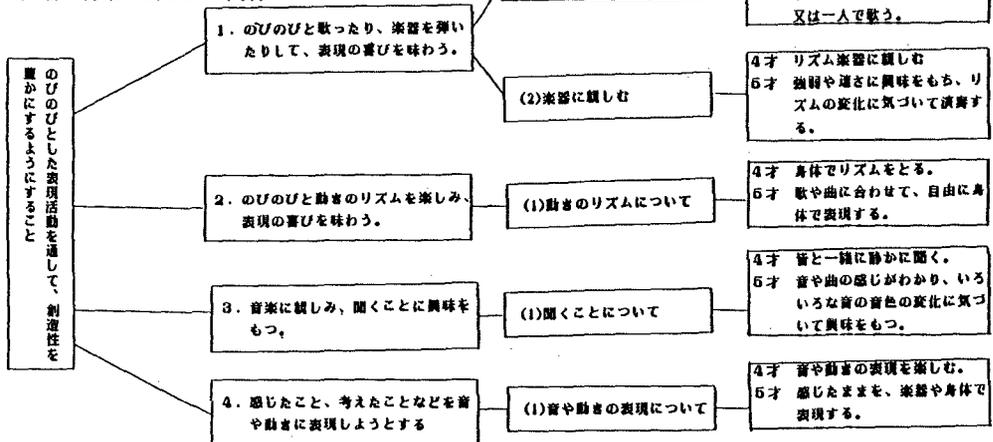
特に幼児期は、その後の人格形成や精神発達の基礎を築く時期であると言われている。したがって、幼児期をいかに過ごしてきたかが、その後の人間性に大きな影響を与えることになる。

一方、現在の大学生を見ていると、当然これまでに身につけておくべき、基本的な生活習慣や、社会性を初めとして、生活全般にわたる行動や言動が、その年齢や身体の発達に比べて、アンバランスである場合が多いように見受けられる。

音楽リズムの分野に関連した活動においても同様で、自主性や想像力に乏しく、感性が磨かれていない学生が目立つ。表現についても、画一的で、型にはまっており、リズムについても、身体の中から出てくるような、自然なリズム感をもつ学生は、極めて稀である。

それらの原因としては、学生達の育った時代や、社会環境もあるが、それに加えて、彼らが、その出生から現在までの中で育った、それぞれの家庭や、親の養育態度から受けた影響も大きいのではないと思われる。

図1 領域「音楽リズム」の内容



目的

本研究では、現在の大学生の幼児期における6領域から見た行動について調査し、学生達の現在の音楽に関する活動と、幼児期の活動との関連を見ながら、どこに、どのような問題があるのかを探る。そしてそれらの問題の原因を考察する。

1. 幼児期における、音楽リズムの重要性

1. 音楽リズムとは

幼稚園教育の目的・目標を達成するための、具体的なねらいを、幼稚園教育要領では、六つの領域に分類している。その中で、音楽、動きのリズムに関する領域をまとめて、音楽リズムという。したがって、「音楽リズム」は、幼稚園教育の中だけで用いられる名称である。

領域「音楽リズム」の基本方針は、図1に示すように、のびのびとした表現活動を通して、創造性を豊かにすることである。幼児の表現している過程を尊重し、外部から押しつけたり、型にはめたりせず、又、大人の基準で判断したり、結果のみを問題とすることなく、表現活動ののびのびと、楽しく行わせているうちに、自然に創造性が芽生え、豊かになっていくとするものである。(1)

2. 幼児期と音楽活動

幼児期の活動の特徴は、音楽活動をも含めて、遊びと結びついていることであろう、

遊びは、子どもの興味と関心を中心として、自発的に行なわれる活動(2)であり、子どもは遊ぶことによって、知

能を伸ばし、運動能力や情操を養っていく。

一方、幼児の音に対する興味は、身の廻りのあらゆる種類の音に向けられており、幼児は、音や音楽を全身で受けとめ、反応する。

このように、幼児は日常生活の中でさまざまな音やリズムを、楽しみながら、身体全体で受けとめる経験を繰り返すことによって、聴く力や、感じる力—感受性—を育てていく。(3) この聴く力や感じる力は、音楽活動の重要な要素でもあり、豊かな感受性は、音楽性や、豊かな精神活動にもつながっていく。

そして、遊びの中での音楽活動は、空想の世界を広げたり、リズムを楽しんだり、身体で表現したりすることにより、創造性、即興性、思考力、集中力、持続力を養う。また、音楽を介して、相手とかかわりあひながらの活動は、自主性、思いやり、責任感といった社会性も身につけていくと思われる。

このような意味からも、幼児期における、豊富な音楽活動の経験は重要であると言える。

II. 領域「音楽リズム」の調査結果

音楽リズムに関する質問は、6項目あり、それぞれ、

(1)ハイ、(2)トキドキ、タマニ、(3)イエ、で答える。

調査対象 M短大(女子) 119名、親 96名

S短大(女子) 235名、親 182名

M大学(男子) 108名

調査日時 昭和61年7月

それぞれの項目の集計結果は、図2～図7の通りである。

図2 お母さん自身何かの楽器を弾くことはありましたか

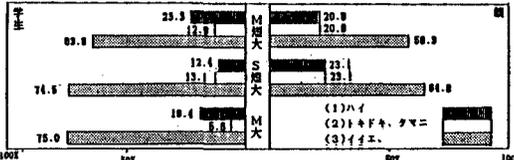


図3 お母さんと一緒に童謡を歌ったり聞いたりしましたか

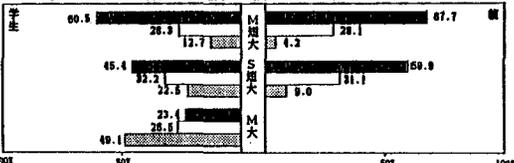


図4 何か楽器を弾くことはできましたか

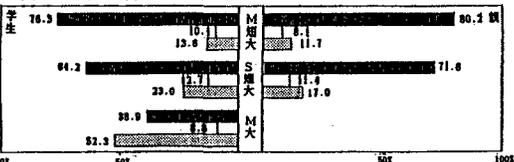


図5 曲に好き嫌いを示すことができましたか

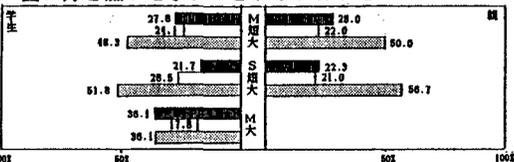


図6 曲に合わせて歌ったりハミングする方でしたか

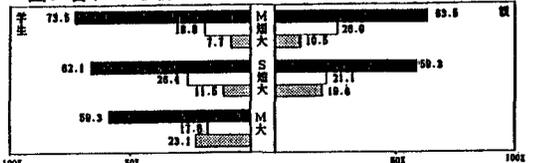
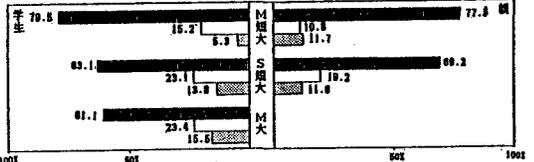


図7 音の高低や強弱はわかりましたか



1. 集計基準から(属性による差)

(1)男女差

図2～図7でも明らかのように、女子大である、M短大とS短大は、回答の比率がほぼ同じような傾向であるが、男子のM大は、項目によって、女子とは全く異なる。

男女差に開きが見られたのは、親子で一緒に歌う項目と、子供が楽器を弾ける項目で、ハイとイエの比率が逆転している。

ハイと答えた比率を比べて、男子が女子を上まわるのは、親が楽器を弾く項目と、曲に好き嫌いを示すことがあるの項目である。しかし、親が楽器を弾く項目では、女子のS短大の比率が低いために、女子全体の比率が低くなっており、男女差というより、学校差であると考えられる。

親子で一緒に歌う項目と、子どもが楽器を弾けるの項目では、比率の差に開きが見られることから、今回の調査では、女子の方が男子よりも、幼児期においては、活発な音楽活動をしていてことがわかる。

(2)親子の差

何れの項目もM短大、S短大共に、ハイと答えた親子の比率には、差が見られない。それぞれ1～2項目、僅かに(3%以内)学生の比率が、父母の比率を上まわっているほかは、父母の比率の方が高い。

これは記憶の違いと共に、質問に対する判断基準の相違などによるものであろう。

(3)学校差

女子大であるM短大とS短大を比較すると、いずれの項目においても、親子共に、M短大の方がハイと答えた比率が高く(7.9%～16.4%)、イエと答えた比率は低い。(3.5%～8.5%)これは、学生の居住地、親の養育態度、おけいごとなどの違いが関係していると思われる。

(4)兄弟数による差

母親が楽器を弾く項目では、学生は、M短大、S短大とも、兄弟数が増えるに従い、イエの比率が高くなる。M大では殆ど差は見られない。(図8)ところが、父母は逆に、兄弟数が増えるに従い、イエの比率が減っていく。(図9)この相反する結果は、どのように解釈すればよ

いのだろうか。

親子で一緒に歌う項目では、学生の女子は、兄弟数が増えるに従い、ハイと答えた比率が減っていく傾向にある。

(図10)

兄弟数と音楽活動との相関は女子に多く見られ、男子には殆ど見られない。

図8 親が楽器を弾く (イエ、学生) 図9 親が楽器を弾く (イエ、父母) 図10 親子で一緒に歌う (学生)

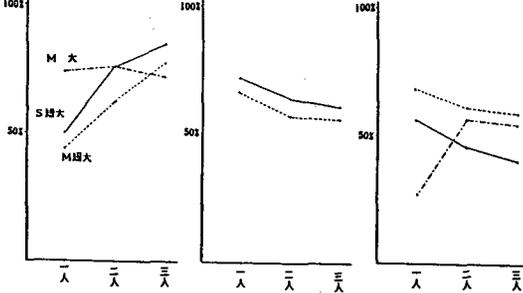


図11 親の養育態度による差 (S短大父母)

養育態度	親子で一緒に歌う	子供が楽器を弾く
保護的、服従的 溺愛的、受容的	65.2%	74.1%
放任的	39.1%	39.1%
全体	59.9%	71.6%

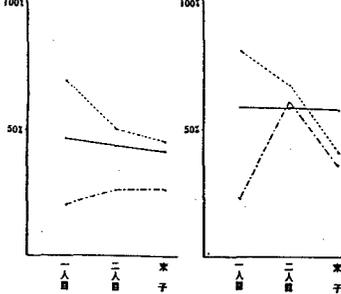
(5) 親の養育態度による差

親の養育態度を、大きく2つに分けて、音楽活動との関連を見ると、放任的な親の場合、子どもの音楽活動が少なくなることがわかる。

(6) 出生順位から見た差

出生順位を、一人目、二人目、末っ子とわけて、親子で一緒に歌う項目と、子供が楽器を弾ける項目についての差異を見た。(図12、13)

図12 親子で一緒に歌う 図13 子どもが楽器を弾く



どちらの項目についてもM短大は、末っ子になるに従い、比率ははっきりと減っていく。S短大は僅かに減っていき、M大では、全く違った傾向を示す。出生順位から見ると、女子の場合は、これら2つの項目に相関関係が見られるが、男子の場合は、見られない。

2. 活動を規定する条件の違いから

(1) 親が楽器を弾く場合

楽器を弾ける親の場合、子どもと一緒に歌ったり、子どもが楽器を弾ける比率は高くなると思われるが、調べてみた。(図14-1、14-2)

図14-1 親が楽器を弾ける場合、弾けない場合

学校	条件 活動	楽器を弾ける親	楽器を弾けない親	一緒に歌う 全体
		一緒に歌う	一緒に歌う	
M短大		90.0%	56.9%	67.7%
S短大		81.4%	49.2%	59.9%
M大		*	16.5%	23.1%

図14-2

学校	条件 活動	楽器を弾ける親	楽器を弾けない親	子供が楽器を弾ける
		子供が楽器を弾ける	子供が楽器を弾ける	
M短大		80.0%	74.9%	80.2%
S短大		93.0%	64.1%	71.6%
M大		*	30.7%	38.9%

* 標本数が少な過ぎる

図14-1、14-2に示すように、楽器を弾けない親の場合よりも、子どもの音楽活動は活発になることがわかる。

(2) 親子で一緒に歌う場合

一緒に歌う親子の場合も、そうでない場合よりも、子どもの音楽活動は活発になると思われるが、図15-1、2、3、4のような結果となった。

図15-1 親子で一緒に歌う

学校	活動	子どもが楽器を弾ける	全体
M短大		91.7%	80.0%
S短大		82.2%	71.6%

図15-2

学校	活動	曲に好き嫌いを示す	全体
M短大		32.2%	30.2%
S短大		29.9%	22.3%

図15-3

学校	活動	曲に合わせて歌ったり、ハミングする	全体
M短大		67.2%	63.5%
S短大		69.8%	59.3%

図15-4

学校	活動	音の高低や強弱がわかる	全体
M短大		81.4%	77.5%
S短大		77.6%	69.2%

(3) 子どもが楽器を弾ける場合

子どもが楽器を弾ける場合に、他の音楽活動がどのような傾向を示すかは図16-1、2、3の示す通りである。

以上の結果から、幼児期における音楽活動は、それぞれ相互に関連していることがわかった。

図16-1 子どもが楽器を弾ける場合

学校 \ 活動	曲に好き嫌いを示す	全体
M短大	38.8%	28.0%
S短大	29.6%	22.3%

図16-2

学校 \ 活動	曲に合わせて歌ったり、ハミングする	全体
M短大	67.9%	63.5%
S短大	68.3%	59.3%

図16-3

学校 \ 活動	音の高低や強弱がわかる	全体
M短大	83.1%	77.1%
S短大	74.6%	69.2%

III、考察

今回のM短大、S短大、M大の調査では、それぞれの大学の立地条件、学生の質の差、標本数の差などもあって、同年代の学生達と、その父母を対象とはしているが、必ずしも出てきた数字のみを比較することは困難であると考えられる。このことを前提としながら、考察を進める。

全体的に考察すると、母親が楽器を弾けたり、親子で一緒に歌う家庭では、他の音楽活動も活発であることがわかる。又、男女差、兄弟数、親の養育態度、出生順位によっても、子どもの音楽活動に違いが見られた。

これらのことから、幼児期における子どもの音楽に対する興味や関心は、家庭の中に音楽を楽しむ雰囲気があるかどうか、音楽に対する親の関心度によって左右され、音楽活動につながっていくことがわかる。

幼児は、音やリズムを全身で受けとめ、反応する⁽⁴⁾と言われている。したがって、曲に合わせて歌ったり、ハミングし、身体を動かすことは、幼児期の特色である。ところがこの調査では、このような活動をしていたという答えは、50~70%台にとどまっている。しかも他の音楽活動が活発な子どもの場合にも、その比率は殆ど変わらない。

一方、音や、音楽に対する興味や関心があれば、音楽活動に際しても、なぜ、どうしてという質問がなされるはずである。しかも、3~4才は、質問期であると名付けられる程⁽⁵⁾、なぜ、どうしての多い時期と言われている。しかし、今回の調査では、言語の領域に関連した、「なぜ、どうしてという質問が多かったですか」という質問項目に、30~50%台しか、ハイと答えていない。

幼児期の発達の特徴として、広く認められている事実

反する、この二つの結果は、質問に対する判断基準の相違も原因となっているかもしれないが、それだけとは言えない。幼児期における自立性が育たないため、あらゆる物に対する、なぜ、どうしてといった好奇心に乏しかったのではないだろうか。そして、その原因の一つとして、今回の調査の対象となった学生達が幼児期であった、昭和40年代の社会的背景が考えられる。この時代は、テレビの子ども向け番組が急激に増加し、充実、強化された時代でもあった。そのような時代にあって、テレビの見方に対する適切なしつけが行われなかったのではないだろうか。テレビ視聴において、子ども達は、常に受身であり、相手との対話もなく、感情も育つとは考えられない。したがって、自発性や好奇心も育ちにくくなり、刺激に対する反応も鈍くなる。

このようなテレビの影響のほかにも、子どもの生活している場に騒音や雑音も含めた多くの音が氾濫し、幼児の感覚が鈍くなってきていることも、原因として考えられる。

したがって、幼児期において、親や保育者は、子どもの発達を考慮しながら、子どもにとって大切なものは何であるかを考えて、感性を育てる環境を整えること、親や保育者自身も心から音楽を楽しみ、子どもと共に楽しむことが、子どもの音楽活動を活発にしていくために必要であろう。このような経験を繰り返すことにより、子どもは感受性を養い、豊かな精神生活へと入っていくことができる。又、全ての発達の基礎となる自主性を育てることに、注意の目が向けられなければならない。

現在の学生達も、身体全体で音やリズムを感じ、反応すること、それらが、喜びにつながることを経験しておかなければ、将来、親や保育者となった時、又、同じ事を繰り返していくかもしれない。

これは学生達を教える立場にいる人間の一人として、私自身の今後の課題でもある。

(引用文献)

- (1)文部省編 幼稚園教育指導書 領域編 音楽リズム
フレーベル館 1986 P.4
- (2)深谷昌志、深谷和子著 遊びと勉強
中公新書 1986 P.82
- (3)新保育内容講座5 音楽リズム
光生館 1982 P.11
- (4)同上 P.13
- (5)山下俊郎著 幼児心理学
朝倉書店 1986 P.252

幼児教育における「課業（領域「自然」「健康」「絵画製作）」」遊びとの関係について

○ 松 浦 三代子
 (東京女子体育大学)

幼児、遊び、保育、指導者

1. 研究目的

幼児教育の目的は、幼児の調和のとれた心身の発達の基礎を養うことである。その基礎となるものは、基本的な生活習慣であり、それと同時に社会に適応できる態度を身につけさせることであり、また、自然に対する興味や関心をいだし、思考力の芽を培うことである。

現在の子どもをとりまく条件は必ずしもよいとはいえず、三問条件の欠如(仲間、空間、時間)がもたらす、遊びの変容に関する報告が多くなされている。また、高学歴志向の波は、幼児の世界にまで影響をもたらせ、幼児教育産業による商業主義は、受験体制に幼児期からスタートさせようとしている。「自分の子だけは」という親の態度は当然、幼児の生活を管理するようになり、支配的、過保護の養育態度となって、子どもから、本来の子どものらしさを奪い、遊びで育つさまざまな能力の場を減らさせている。

母親の態度をみると、異常なほどの教育に打ち込むタイプと無関心タイプの二極に分化されているのではないかとと思われる。このような幼児教育体験で育つ子どもは、人に対する思いやり、感動する心、美しいものを美しいと感じる心、情緒が育つとは考えにくい。今こそ、自然環境の場の設定を数多くすることによって、そこへ出かけて行き、そこで、興味や好奇心の芽を育てていかねばならないであろう。忍耐強く、そのような場の体験を重ねていくうちに、思考する力もそなわり、遊びの世界も発展するのではないだろうか。

現在の子どもの遊びを対象とした研究は多いが、ここでは15年前の「幼児期」に焦点をあてている。親の教育態度や、幼児の行動が、領域「自然」「健康」「絵画製作」等の面から、「遊び」や「場」に「どんな問題があるのか」を探り出し今後の幼児教育における「遊び」「場」の生活化をさせる指導方法の資料としたい。

2. 結果、考察

(1) 領域「自然」

調査対象者の60%以上の者が、親子で近隣の公園、遊園地、植物園等に出かけ、遊んだと回答しているが、山、川、海などには、電車や車に乗って出かけた体験は全体に少ないのである。S短大国文科の親子の61.9%が最も高く、M短大、M大学(男子)の場合は50%台であった。車社会といわれる今日にしてはやはり、数値が低く、親子で遠距離に出かけてまでの野外散策は、対象者の幼児期には少なかったように思われる。

幼児と自然の触れあいは、この世に誕生とともに始まり、幼児は自然に育まれ、成長するといっても過言ではないと思われる。しかし、幼児は環境を選ぶ能力を持ち合わせていないので、自然との関わり方について、早い時期から正しく適応できるように導くことが大切である。

(2) 気象、天体

幼稚園教育指導書、領域編「自然」(P27)に山川、気象、天体などの自然の事象におどろきや親しみを感じ、その美しさや大きさ

などに気づくと記載されている。この事項は、山川、気象、天体などの自然の事象に対し、幼児なりにその美しさや、偉大さなどを全身で感じとって、自然に対する感動を育てることをねらっている。

調査結果をみても、この項目に関するものは、M大学(男子)が40%台で、S短大、M短大の場合は30%台という低い数値であった。

国民の祝祭日も増え、家庭の年中行事の中に、歳事がどのように催されているのかをみると、七夕(31.3%) 盆(17.0%) 節分(12.0%) 月見(5.4%)といずれも関心のうすさが数値に現われている。

幼児は運動会や、遠足などの前日には明日の天気を大変気にしたり、急に化する夕立の空や雷の音、雪、風、などの気象、山、海、川、草、木などの自然物、太陽、月、星などの天体について、親や保育者はその都度の事象との関係を大切に言葉を通して、幼児の心に入るよう導くことが大切と思われる。

ますます科学が生活様式を大きく左右する時代となって来たことを考えると、幼児期はのちの正式な科学の学習と教育のための基礎となる部分、すなわち準備状態を形成する大切な時期なのである。科学とは何か、科学的な興味をもたせ続けるためにも、気象や天体は親や保育者にも手頃な教材ではないだろうか。

(3) 植物の栽培と観察

親子で植物を栽培したり、観察をした体験者は、(表-1)にみられる通りM短大は他大学に比べ体験者が多い。なかでも一人子81.3%は注目される数値であり、植物への関心の深さがみられる。

学校	兄弟姉妹	科	N	%
S短大	1人	英	26	73.1
		国	46	45.7
	2人	国	63	50.7
		児	48	54.2
3人以上		52	55.7	
M短大	1人		16	81.3
	2人		72	66.7
	3人以上		31	72.4
M大学(男子)	1人		23	56.5
	2人		63	61.5
	3人以上		22	63.6

(表-1)

植物の栽培、観察、親子の体験

(4) 動物や虫の世話

好きな動物や虫には、親しみを感じて、その世話の手伝いをしたり、それらと遊んだりし、それを通して愛情が芽ばえて可愛がるようになる。幼稚園教育指導書領域編「自然」(P26)に記載されているが、実際は住宅環境の問題もあり、調査対象者の幼少期は家庭で犬や猫も飼うことができなかったように思われる。

調査結果からも、持家居住者の多いM短大の場合68.7%を占めた

が、他は50%にも満たなかった。男女差をみると男子の方に関心の深さが見られる。男の子の方が、小さい頃から動物や虫に対して興味を持っているという傾向が見られた。

言葉を持たない動物や虫を世話することは、相手の立場を考えて世話をせねばならない。そのようなことから、相手への愛情が深められるのであろう。幼稚園教育指導書（P7～P10参考）。

3歳頃になると好きな動物に対しては親しみを覚え、その世話の手伝いをしたり、遊んだりして愛情が芽ばえてくる。この時期は自己本位であるために動物に触れたり、持ったりでその度合いもわからないために結果として動物をいじめたかのように見られることもある。親や保育者の飼育の手伝いに始まり、5歳頃になると、動物の立場も理解でき、世話も上手になってくる。動物や虫などに対する愛情を育て、いたわったり、かわいがったりする心をつくることは、豊かな人間性を育てることで重要なことである。そのためにも課業の中で飼育のための環境の整備をはじめ、親や保育者がいちばんに動物や虫が好きでよく世話をすることだと思われる。それらの態度に出るやさしい言葉や動作が幼児の身体に入り込み、保育者の模倣をするのである。

幼児は模倣遊びから動物や虫への愛情が育ち情緒の発達へとつながるのである。これら飼育の中には動物は特に季節により、事物の変化が見られるのでその変化に気づいて、春、夏、秋、冬等時間の意識が育つ機会ともなる。

3. 領域「健康」

領域「健康」は保健と運動と安全という三項目から成り立っている。この項では主として遊戯行動との関係の中で考察をする。

大学	きょうだい	項目	人	ブリ台で遊んだべ		ボール遊び		同年齢遊ぶともだ		縄遊び		屋外遊び	
				数	%	%	%	%	%	%	%		
S 短大 (女子)	1	人		26	84.6	34.6	53.8	34.6	23.0				
			英	46	84.8	45.6	65.2	43.4	47.8				
	2	人	国	63	82.5	28.5	52.3	42.8	55.5				
			児	48	81.3	45.8	66.6	54.1	66.6				
	3人以上		52	78.8	48.0	61.5	44.2	51.9					
M 短大 (女子)	1	人	16	81.3	—	—	—	—					
	2	人	72	58.9	45.3	45.4	44.5	52.9					
	3	人	31	87.1	—	—	—	—					
M 短大 (男子)	1	人	23	87.0	78.2	73.9	26.0	82.6					
	2	人	63	66.7	73.0	68.2	26.9	68.2					
	3人以上		22	90.9	72.7	63.6	18.1	77.2					

〔表-2 (幼児の遊戯行動)〕

(1) 遊具への親しみ

〔表-2〕幼児の遊戯行動に示した通り固定遊具の代表的存在であるブランコ、すべり台はたくさんある遊具の中で最も親しまれていることがわかる。これは園庭をはじめ家庭、近隣公園と幼児の行動

範囲に最も多く存在する遊具であるためと考えられる。

M短大兄弟2人のグループが示した58.9%が最小値であり、大半の70%以上の体験をみることができた。M大学3人以上兄弟グループの場合は、90.9%の高い数値を示した。

すべり台が楽しめる理由は、てっぺんに上った時の視界の広さの感動とスピードをつけて滑り降りるときのつかの間の喜びを味わえることでないだろうか、これも全身運動の一つと考えられる。

ブランコは空中にいるときのリズムカルな動きの中に満足感が得られるのであろう。幼児の中にはリズムカルな動きやスピード感覚がとれない者もいる。そのような場合には、ブランコのように揺れる活動のできるような工夫を親や保育者はせねばならない。

こどもと遊具は切り離して考えることはできない。どの幼稚園にも同じ固定遊具が設置されている。ここにも画一化教育の現われのように思われた。

(2) 固定遊具と応用遊び

ブランコや、すべり台、シーソーなど恐がらなかったか、またブランコやすべり台を工夫して滑ったりしたか、ようするに固定遊具をどのように応用して遊んだかをみたのであるが、調査の中から期待していたものはみることができなかった。ほとんどの幼稚園や公園では、固定遊具に関しては安全のための必要なルール、すべり台の場合には足を下にして滑る。押しはいけない等、幼児の冒険を試みる機会を与えていないのである。てっぺんまで昇るのに、ジャングリズムのように、鉄骨をよじ登ったり、滑り台の方から昇ったりより難しく障害の方法を選んで遊べる子もいるのである。これらを踏まえて課業の中で、安全に配慮しながら幼児にいろいろなチャンスと道具と勇気を与えることが大切と思われる。

(3) 遊具・ボール

幼児の遊び集団をみるためにボール遊びをとりあげてみた。ボールには多種多様なものがあり、遊びの目的により、大きさ、硬さ、軟かさ、色、はずみ等、応用の範囲も広く利用できる教材である。調査結果、M大学の場合70%以上を占めたが、S短大、M短大の場合には50%にも満たなかった。またこの種のもは男子には好まれるものの女子には、あまり好まれな傾向が見られた。

ここでは遊び集団との関係を目的としたのであるが、ボール遊びの仲間は大半同年齢集団であり期待は得られなかった。

ボールは1人で「まりつき」として遊ぶこともできる。幼児期のボール遊びは、敏捷性、平衡性、筋力、パワー等を育てる。

遊びへの導入は、ボールそのものの性質を理解させる。その性質を使ってゲームの構成に入る。幼児にはボールを見つめる気持を育てる。ボールから目を離さない、幼児の動きに合わせてゆっくりと遊ぶことにより、幼児はリズムに乗って、楽しく遊べるようになる。

ボール遊びは、グループの皆など協力し合ってこそ、楽しさが生まれるものであり、このような活動を通して仲間意識が育まれていくのであろう。

(4) 遊具「縄」

園庭をはじめ、近隣公園でも幼児が自由に遊べる縄が遊具として設置されているところは皆無といってもよい。縄の種類は特別に指

定せず、縄とびをはじめ、荒縄でも、短かくは「あやとり」の紐も考えたのであるが、実際この種の遊びの体験者は少なかった。S短大児教グループは54.1%で最も多く、他は50%にも満たなかった。男子M大学の場合30%にも満たないということは、男子は好まないものと考えられる。

縄遊びは、縄そのものを使って、縄とび、縄投げ、綱引き、登り綱等に利用でき、縄1本あればいろいろな遊びがつけられるのである。領域「自然」からみても、長さ比を例に考えると、縄を直感的に比べたり、重ね合わせて比べたり、また任意単位のいくつ分などの比べ方なども遊びを通して意識づけることができる。

(5) 屋外遊び

幼児は屋内よりも屋外を好むと言われている。また集合住宅居住の幼児は、特にその傾向が強いと報告されている。一方高層住宅居住者の場合、5階以上の幼児は屋外に出る傾向が少ないとも云われている。これらは親の養育態度とも関係が深いと考えられる。

本調査からもS短大の一人子が屋外遊びの体験が少なく23%であった。男女差をみるとM大学の場合は1人子82.6%、2人兄弟68.2%と全体に女子よりも高い数値を示した。一般に女子は屋内遊びを好み男子は屋外遊びを好む傾向がみられた。

古くから人は天を父に、大地を母にたとえ、天地の恵を父母の恩になぞらえて来た。人は大地に立つと安らぎ解放感を感じるのである。

屋外遊びは健康と精神衛生のために、たとえ屋内における「決められた課業」がうまくいっているとしても、屋外遊びは必要と思われる。幼児の一日の生活の中には、医学的見地からも、健康と精神衛生のためには、屋外遊びが必要である。屋外には新鮮な空気があり、身体的な訓練がじゅう分できると思われる。

4. 絵画製作

絵画製作では、いろいろな色や形に興味や関心をもち、それらを集めて並べたり、組み合わせたりする。また、色や形を使って、さまざまな表現をする。材料に親しみ適切に使う。身近な環境を美しくする。これらの内容から領域「自然」に包摂して考えることができる。

この領域では幼児の思考の表現されるものである。のびのびとした表現活動を通して、創造性を豊かにすることであると指導書にも記載されている。この創造性を豊かにすることは、想像的活動も含めて、幼児が興味をもって取り組む自己活動を通してはじめて可能になりうるもので、それは「自然」のねらいの中にも示されているのである。

大学	きょうだい	項目	人数	粘土・折り紙の完成		玩具づくり	ハサミの活用	ナイフ・鋸	想像を膨らませたか	作品評価
				%	%					
S短大(女子)	1人		26	38.4	38.4	69.2	38.4	57.6	60.0	
	2人	英	46	60.8	52.1	36.9	32.6	34.7	71.7	
		国	63	42.8	30.5	49.2	33.3	58.7	81.5	
	3人以上	児	48	61.1	11.5	56.2	22.9	45.8	66.7	
			52	58.3	23.0	40.3	28.8	48.3	70.8	
M短大(女子)			119	73.1	29.4	68.9	40.3	61.3	63.0	
M大学(男子)	1人		23	43.4	13.0	43.4	34.7	60.8	34.7	
	2人		63	55.5	11.1	53.9	42.8	63.4	38.0	
	3人以上		22	59.0	40.9	54.5	59.0	54.5	45.4	

〔表-3 (造形あそびと道具)〕

(1) 粘土・折り紙などの作品は最後まで仕上げた。

粘土や折り紙細工は最後まで頑張って仕上げたか、調査結果ではM短大、S短大の児教学生、英文学生は60%以上を示したが、他は50%にも満たなかった。粘土や折り紙細工は健康とも深い関係にあると思われる。粘土、水、砂、土などの多様な素材の感触に触れることは、感覚器管を刺激し、手、指の運動機能を促すのである。手は頭脳の延長であり、幼児が自由に手で触れたり、握ったり、まるめたりできる環境づくりが大切となるのである。

(2) 玩具づくり

玩具を作り遊びにまで発展させたかをみた、調査結果から、S短大英文学生52.1%が最も体験者が多く他は体験者が少なく、M大学2人兄弟などは11%台であった。この数値は既製玩具の多い時代の背景がうかがわれるのである。しかし、親や保育者の考え方しだいで、教材の選択、作り方などを工夫して、何がよいのか、どうしたら上手にいくのか等、考えたり、工夫したり、試みたりさせることが大切である。また親や保育者はいろいろとイメージがふくらむように周囲の様子や細かい表情などに対する問いかけをすることも大切と思われる。

幼児は遊びの中で玩具や、いろいろなものを作ったり、それを作って遊ぶことと自分が生活である。幼児なりに上手にできて、よく走ったり、よくまわったり、とんだりするように工夫する。さらに友達と競争したり、比べたり、楽しく遊べるように考え、工夫する。このことは、幼児の生活のうちで将来の合理的、科学的な見方、考え方、取り扱い方などの基礎となる部分であり、それなりに玩具づくりは大切なのである。

(3) テレビ・絵本・童話から想像を膨らませたか。

幼児向けのテレビ番組、書店には絵本・童話・まんが等、実に多くの作品が幼児の周辺にある。テレビ普及時代に育った彼等は、まさにテレビに子守りをしてもらって育ったといっても過言ではない

ようである。

調査結果にもみられたように、テレビや絵本、童話の作中の主人公やまた想像を膨らませて遊ぶことがある。M大学2人兄弟63.4%で全体の中で最も多く、S短大英文学学生34.7%が最も体験が少なかった。

これを考えると親や保育者は、内容を吟味して、良い本を選ぶように注意せねばならないものと考えられる。

(4) 遊びと道具

幼児の遊びと道具との関係は大切な部分である。今日の子どもは不器用であると評価されている。世の中が便利になったためであろう、だからといって不器用が許される理由はないのである。(表-3)が示すようにハサミやホッチキスの使用はS短大1人子69.2%、M短大68.9%の体験者がみられたが、ナイフや鋸、トンカチの類になるとM大学3人以上兄弟59.0%が最も体験者が多く、他は全体に体験者は少なかった。若者の不器用を大人が批判する前に体験をさせていない親も保育者も反省せねばならないと思う。

(5) 幼児の作品と親の反応

幼児は次から次へと作品を作り持ち帰る。それを親はどのように評価しているのか、幼児の作品が家でどのように扱われているかは、その子の将来にとって大きな影響となるのである。

自分が作った作品を両親はよく誉めてくれた。と回答したグループはS短大国文学学生、81.5%が最も多かった。これとは反対にM大学の場合は誉められたという体験が全体に少なく50%にも満たないのである。これは親の男女に対する養育態度の違いの現われと思われる。幼児は永久に作品を残すために画いたり、作っているのではない。ほとんどの場合、作品を作ることにあり、その作る過程が楽しく、それ自体が遊びである。作る過程の喜びは作品ができた喜びと同じ位に、意義深いのである。どのような作品に対しても、優しい気持ちを抱き、その子の作品として、心から認めてあげることが大切である。

5. まとめ

保育の特質として「遊び」をあげることができる。調査対象者の幼児期は我が国の高度経済成長時代で、マスメディアの発達とともに

に、テレビ映像への人々の関心も高く、CMや、子ども番組の増大でにぎわった背景をみる事ができる。街には既製玩具の氾濫と科学玩具の研究で、子どもたちは手作り玩具で遊ぶことから、美しく出来あがった玩具の鑑賞か、科学玩具になれることで精いっぱい現象が見られる。

遊び仲間をみても、まず第1に兄弟が少ない。児童期は学校から帰ると多くの仲間は塾生で、そこでも同学年であり、中学へ進級してもクラブ活動で遊びの意識などで活動できるクラブはなく、幼少期は調査結果にも見られるように、異年齢集団のできる条件が見つからないのである。以上のような環境下で子どもたちは、しだいに屋内で生活することが多く、生活行動が小さくならざるを得ないのである。また、今日の若者は不器用であるといわれている理由が調査結果からよみとることができたように思う。

遊びの指導は、遊びをどのような形で育て発展させたらよいのかを考えた上で、親や保育者がその幼児との対応の中で生まれてくるのである。授業の始まる前に「遊び」がしなくなるような環境を作ることが大切であり、つまり幼児がいきいきするような教材を保育者は見つけるための工夫が必要と思われる。幼児と共に楽しさを感じることができてこそ幼児の「遊び」の本質を見抜くことができるのである。そのためには、親や保育者が日頃真の遊びを体験し、生活全体が創造性豊かであることが望まれるのであろう。

幼稚園教育指導書(1970年)(文部省(フレーベル館発行))を参考として、領域「自然」「健康」「絵画製作」の中から、からだづくりと遊びの形や体験内容の分析を試みた。

標本数、資料不足から、理論的に重複したところもあったり、違った側面を扱っているところもある。今後は各領域の概念を検討し体系的に整理すべきであると反省している。

6. 文 献

- 1) 幼稚園教育指導書 領域編「自然」 文部省 フレーベル館 (P 7-10, 27.)
- 2) 保育養成専門教科目教授内容 ソースブック 厚生省児童家庭局編
- 3) 保育効果の研究 村山貞雄著 フレーベル館
- 4) 幼児自然教育法 蛭谷、飯沼、山内、編著 建帛社
- 5) 幼児の環境認識の指導 バボディ・マクダ著 (P 137-142) コダニー芸術教育研究所 明治図書

アンケートの内容

幼児のころの行動調査

おねがい…この調査は、あなた(学生)またはお子さん(両親)の幼児のころの行動の特徴について、あなた(学生)やあなたの両親にお尋ねするものです。質問をよく読んで、すべての項目について、落ちないように答えて下さい。

あなた(学生)または、お子さん(両親)について

下の1~項目のすべてについて(1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イエのいずれかで答え、その数字を の中に書き入れて下さい。またはっきり習慣化できたと思われる年齢がわかる事項には()の中に数字を入れて下さい。

1. 食べ物に嫌いな物があっても食べましたか 2-1 (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イエ ()歳ごろ
2. 食前に必ず手を洗いましたか 2-2 (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イエ ()歳ごろ

- | | | | |
|--|------|--------------------------|---------------------------------|
| 3. 大便の後、自分で紙が使えましたか | 2-3 | <input type="checkbox"/> | (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イイエ ()歳ごろ |
| 4. 自分の服の着脱はできましたか | 2-4 | <input type="checkbox"/> | (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イイエ ()歳ごろ |
| 5. 衣服やおもちゃなど収納場所は決めていましたか | 2-5 | <input type="checkbox"/> | (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イイエ ()歳ごろ |
| 6. 自分が着る服の組み合わせは自分でしていましたか | 2-6 | <input type="checkbox"/> | (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イイエ ()歳ごろ |
| 7. 顔を洗ったり、歯をみがいたりするのは自分でしていましたか | 2-7 | <input type="checkbox"/> | (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イイエ ()歳ごろ |
| 8. 入浴時、自分で体を洗ったり拭いたりしていましたか | 2-8 | <input type="checkbox"/> | (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イイエ ()歳ごろ |
| 9. 食事の時スプーンだけでなく、上手に箸が持てましたか | 2-9 | <input type="checkbox"/> | (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イイエ ()歳ごろ |
| 10. 食事の後、自分の食器は自分で運んでいましたか | 2-10 | <input type="checkbox"/> | (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イイエ ()歳ごろ |
| 11. 使った道具、絵本などの後片付けはしていましたか | 2-11 | <input type="checkbox"/> | (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イイエ ()歳ごろ |
| 12. その時言われてからすること(片付けなど)が多かったですか | 2-12 | <input type="checkbox"/> | (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イイエ ()歳ごろ |
| 13. 家の中より外で遊ぶ方が好きでしたか | 2-13 | <input type="checkbox"/> | (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イイエ ()歳ごろ |
| 14. ブランコやすべり台、シーソーなど恐がりましたか | 2-14 | <input type="checkbox"/> | (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イイエ ()歳ごろ |
| 15. ブランコやすべり台を工夫して滑ったりしていましたか | 2-15 | <input type="checkbox"/> | (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イイエ ()歳ごろ |
| 16. 道具で遊ぶ時、けがをよくした方ですか | 2-16 | <input type="checkbox"/> | (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イイエ ()歳ごろ |
| 17. 家の中で折り紙や絵本を読んだり、絵を画く方が好きでしたか | 2-17 | <input type="checkbox"/> | (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イイエ ()歳ごろ |
| 18. ボールを使って仲間と遊ぶことが好きでしたか | 2-18 | <input type="checkbox"/> | (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イイエ ()歳ごろ |
| 19. 縄を使って遊ぶことが好きでしたか | 2-19 | <input type="checkbox"/> | (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イイエ ()歳ごろ |
| 20. 一人遊びが好きでしたか | 2-20 | <input type="checkbox"/> | (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イイエ ()歳ごろ |
| 21. 同じ年齢の子と遊ぶ方が多かったですか | 2-21 | <input type="checkbox"/> | (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イイエ ()歳ごろ |
| 22. 危険なことや、場所はわかっていましたか | 2-22 | <input type="checkbox"/> | (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イイエ ()歳ごろ |
| 23. 遊びに行く時、帰る時間は決めていましたか | 2-23 | <input type="checkbox"/> | (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イイエ ()歳ごろ |
| 24. ごあいさつ(おはよう、おやすみ、ありがとう、いただきますなど)がよく言えましたか | 2-24 | <input type="checkbox"/> | (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イイエ ()歳ごろ |
| 25. 名前を呼ばれたらキチント返事をしていましたか | 2-25 | <input type="checkbox"/> | (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イイエ ()歳ごろ |
| 26. 親や先生に頼まれたことは、よく理解して行動していましたか | 2-26 | <input type="checkbox"/> | (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イイエ ()歳ごろ |
| 27. 幼児語でなく正しい言葉で話しましたか | 2-27 | <input type="checkbox"/> | (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イイエ ()歳ごろ |
| 28. 簡単な質問や応答、報告はできていましたか | 2-28 | <input type="checkbox"/> | (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イイエ ()歳ごろ |
| 29. 絵本や童話を読んであげると筋がわかっていましたか | 2-29 | <input type="checkbox"/> | (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イイエ ()歳ごろ |
| 30. なぜ、どうしてなどの質問が多かったですか | 2-30 | <input type="checkbox"/> | (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イイエ ()歳ごろ |
| 31. 自分で体験したことを人にうまく話せましたか | 2-31 | <input type="checkbox"/> | (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イイエ ()歳ごろ |
| 32. 人が話している時、黙って聞けましたか。 | 2-32 | <input type="checkbox"/> | (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イイエ ()歳ごろ |
| 33. 絵本、童話、紙芝居には興味がありましたか | 2-33 | <input type="checkbox"/> | (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イイエ ()歳ごろ |
| 34. 園や友達、外でのできごとを自分から進んで話したりしましたか | 2-34 | <input type="checkbox"/> | (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イイエ ()歳ごろ |
| 35. お母さん自身、何かの楽器を弾くことはありましたか | 2-35 | <input type="checkbox"/> | (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イイエ ()歳ごろ |
| 36. お母さんと一緒に童唄を聞いたり歌ったりしましたか | 2-36 | <input type="checkbox"/> | (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イイエ ()歳ごろ |
| 37. 何か楽器を弾くことができましたか | 2-37 | <input type="checkbox"/> | (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イイエ ()歳ごろ |
| 38. 曲に好き嫌いを示すことができましたか | 2-38 | <input type="checkbox"/> | (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イイエ ()歳ごろ |
| 39. 曲に合わせて歌ったり、ハミングしたりする方でしたか | 2-39 | <input type="checkbox"/> | (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イイエ ()歳ごろ |
| 40. 音の高い低いや強弱がわかりましたか | 2-40 | <input type="checkbox"/> | (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イイエ ()歳ごろ |

41. 空箱、リボン、缶等を使って何かを造ることが好きでしたか 2-41 (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イエエ ()歳ごろ
42. おもちゃにすぐ飽きてしまう方でしたか 2-42 (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イエエ ()歳ごろ
43. おもちゃプレゼントなど求められれば(求めれば)与えて(与えられて)いましたか 2-43 (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イエエ ()歳ごろ
44. 買物に言って駄々をこねて困ること(困らせること)が多かったですか 2-44 (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イエエ ()歳ごろ
45. 家の中で植物や動物に親しんでいましたか 2-45 (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イエエ ()歳ごろ
46. 公園、遊園地、植物園に行くことが多かったですか 2-46 (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イエエ ()歳ごろ
47. 動物園に行くことが多かったですか 2-47 (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イエエ ()歳ごろ
48. 美術館、博物館に連れて(連れられて)行くことが多かったですか 2-48 (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イエエ ()歳ごろ
49. 野外(山、川、海など)に連れ出し(連れ出され)て行くことが多かったですか 2-49 (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イエエ ()歳ごろ
50. 粘土細工や折り紙細工などの細工を最後まで作る方でしたか 2-50 (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イエエ ()歳ごろ
51. 自分で物語を考えたり名前を付けたりして製作物を作ることがよくありましたか 2-51 (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イエエ ()歳ごろ
52. その作った物を遊びに発展させていましたか 2-52 (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イエエ ()歳ごろ
53. 作品を最後まで作り上げた時ほめて(ほめられて)いましたか 2-53 (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イエエ ()歳ごろ
54. 日頃使う道具(ナイフ、鋸、包丁、トンカチ)は意識して使わせて(使って)いましたか 2-54 (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イエエ ()歳ごろ
55. ハサミ、ホッチキスなどを使って何か形のあるものを(大人の手を借りないで)作ることができましたか 2-55 (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イエエ ()歳ごろ
56. あなたの家では虫や動物を育てるために、子どもに世話をさせ(世話をし)ましたか 2-56 (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イエエ ()歳ごろ
57. 空の青さや雲、星を眺める機会は多かったですか 2-57 (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イエエ ()歳ごろ
58. 家で植物を育て、観察したことはありますか 2-58 (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イエエ ()歳ごろ
59. 物の大きさや形の違いは分かっていましたか 2-59 (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イエエ ()歳ごろ
60. 雨の日でもよく外に出たがる方でしたか 2-60 (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イエエ ()歳ごろ
61. 物と数が一致して数えられましたか 2-61 (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イエエ ()歳ごろ
62. いつも決まった時間に1人で起きられましたか 2-62 (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イエエ ()歳ごろ
63. お母さんがいつも起こしましたか 2-63 (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イエエ ()歳ごろ
64. 遊具を利用する順番を守らせる(守る)ようにしていましたか 2-64 (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イエエ ()歳ごろ
65. 自分の物と他人の物の区別はできていましたか 2-65 (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イエエ ()歳ごろ
66. 日頃役割を与えさせて(与えられて)いましたか 2-66 (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イエエ ()歳ごろ
67. 寝る時自分の服は畳む習慣をつけ(つい)ていましたか 2-67 (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イエエ ()歳ごろ
68. 先生やお母さん、友達との約束は守れましたか 2-68 (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イエエ ()歳ごろ
69. して良いこと、悪いことの区別はできていましたか 2-69 (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イエエ ()歳ごろ
70. いつも嫌がらないで保育園や幼稚園に行っていましたか 2-70 (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イエエ ()歳ごろ
71. 寝る時お母さんと同じ部屋で寝ていましたか 2-71 (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イエエ ()歳ごろ
72. 食事の時刻はいつも決っていましたか 2-72 (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イエエ ()歳ごろ
73. 遊ぶ時必ず行先を言って出かけましたか 2-73 (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イエエ ()歳ごろ
74. お手伝いをする、ごほうびか何かを貰う習慣がありましたか 2-74 (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イエエ ()歳ごろ
75. TVを見たり、絵を画いたり童話を読んでもらおうと主人公になったり、想像を膨らませたりする方でしたか 2-75 (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イエエ ()歳ごろ
76. 家ではいつも花が飾ってある方でしたか 2-76 (1)ハイ (2)トキドキ、タマニ (3)イエエ ()歳ごろ

ソビエトのピオネールキャンプに関する研究

里見悦郎
(東海大学大学院)

高橋和敏
(東海大学)

ソビエトのレクリエーション・活動・組織

1. まえがき

ソビエトにおける青少年の課外活動を考える時、コムソモールを頂点に整然と組織されたピオネール、アクチャプリヤータの児童、青少年を対象とした課外活動組織を無視することはできない。特に10歳から15歳までの身体的、精神的成長にとつて重要な年齢にある少年少女を対象としたピオネール組織はソビエトの教育制度とその思想の上でも、最も特出した組織と見ることができよう。

本研究の目的はソビエトの少年少女の課外活動組織として知られるピオネール組織が創設後わずか60年という短い期間に急速に成長した要因について考察を加えるとともに、ピオネール組織の活動の中でも最も大きな意義を持つとされるピオネールキャンプについて、この西欧諸国と異なつたキャンプの形態がソビエトに発達したその要因と必然性について、ピオネール組織の創設の歴史的背景とピオネール組織の諸活動を支える社会的背景について考察を加え、ソビエトにおけるピオネールキャンプの意義を明らかにしていくことにある。

2. 考察

ソビエトの少年少女の課外活動組織ピオネールは、現在10歳から15歳までのソビエトの児童のほとんどすべてが所属する巨大な組織である。欧米諸国を見渡しても、一国の児童のほとんどすべてが所属している少年少女の組織はこのソビエトのピオネール組織を模範として作られた東欧等の社会主義国の組織を除いて、ほとんど例がない。

このソビエトのピオネール組織の活動はソビエト共産党の強力な保護と労働組合の援助によつて成立している。次に、ピオネール組織創設の歴史的背景を通して、ソビエトがピオネール組織を創設しなくてはならなかつた必然性とピオネール組織の急成長の要因について考察する。

1) ピオネール組織創設の歴史的背景

1917年10月25日、ロシア革命の結果、レーニンの指導の下に共産主義を目指すソビエト社会主義共和国連邦が誕生した。

革命直前のロシアは当時の西欧諸国の中でも最も社会的にも、政治的にも、さまざまな面で

遅れた国家であつた。革命前のロシアは全国の賃金労働者1000万人のうち、250万人が婦人と児童で占められ、5～6歳の児童が17時間前後の労働を強制されていた。このような児童は全体の90パーセントにもものぼつた。教育を受けることができたのは、わずか10パーセントあまりの子どもだけであつた。その結果、ロシア国民の73パーセントが文盲であつた。当時のヨーロッパ諸国の文盲率はフランス15パーセント、イギリス8パーセント、ドイツ7パーセント、それと比べるとロシアの文盲率はきわめて高かつた。さらに、幼児の死亡率は、1900年代25.2パーセント、1910年27.1パーセントと高率であつた。この背景には、国民の多くが十分な教育を受ける機会も与えられなかつたために、最低限の保健衛生の知識をも持つことができず、そのため、多くの子どもたちがチフスなどの伝染病で生後間もなく、死んでいつたのをロシア人は見てきたのである。今日、ロシア人が子どもたちに寄せる深い愛情のその根源に、革命前なら教育を受けることができなかったがために、彼らが体験してきた悲劇を再び繰返したくはないという固い決意がロシア人の中に生きつづけているためではないかと思われる。さらに、このロシア民衆の体験がロシア革命後、次々に出された教育政策に反映されることになつた。

1917年10月25日のロシア革命の後、ロシア国民の教育と保健衛生の知識の普及はソビエト政権の最重要課題の1つとなつた。

1919年3月、ロシア共産党第8回大会はソビエトの教育制度の基本的原則として、無償義務制の学校教育の実施が決定された。さらに、レーニンはこの年、赤の広場で青年と子どもたちを集め、「子どもの組織は共産主義者を教育する最適の方法である」(1)と演説した。同年12月26日、レーニンは文盲根絶に関する布告に署名、8歳から50歳までのソビエト国民はロシア語か民族語で読み書きができるようになることが義務づけられた。

1922年5月18日、ロシア共和国コムソモール第2回会議はレーニンの演説に答え、子どもの共産主義運動の単一組織「スパルターク記念ピオネール組織」の創設を正式に決定した。

この年の末にはピオネール隊員は約4千人となり、さらにモスクワのハモプニキ区に初めてピオネールの家が創設された。

1920年代の初期に次々に打出した理想主義的な教育政策（国家はすべての生徒に、食物、衣服、学用品を無料で提供する等）は第1次世界大戦によつて荒廃したソビエトにとつて、その実施は不可能であつた。

1923年8月、人民委員会は初等義務教育を全国に導入する決定を行っていたが、1921年には小学校の数は7万6千から8万2千校、生徒数は600万から680万人と推定されていたが、1922年4月には学校数6万8千に落ち、同年12月には5万5千校に、1923年10月には4万9千校、生徒数は370万人へと減少していた。

誕生したばかりのソビエトは西欧諸国の干渉を受け、さらに国内の外国資本は国外へ撤去され、資本は不足し、農産物の生産も減少するなど、ソビエトは国家存亡の危機にあつた。このような状況下においては、ロシア国民がソビエト政権に期待していた教育政策も後退せざるおえなかつた。1923年初め、人民委員会は教育のすべての段階に授教料を導入する決定を行った。この結果、共産主義教育の基本的原則、無償の義務教育は撤回されることになつた。

無償の義務教育の撤回、それは世界で初めて誕生した社会主義国ソビエトにとつてたとえような屈辱であつたろう。この無償の義務教育の撤回という事態に対して、ソビエトが取つた政策は、1922年に設立されたばかりのピオネール組織の利用であつた。すなわち、ピオネール組織はレーニンの教えを将来のソビエトの建設者となる若い少年少女に伝え、さらに、ソビエト国民としての自覚を持たせることである。このピオネール組織は教育省管理下にある学校制度とまったく別の組織であり、その指導はソビエト共産党の下にあるが、ロシア革命後ソビエト政権が立てた無償義務教育制度が国家財政上の問題で、その実施が不可能となつた今、ソビエトの将来を担う子どもたちを集め、教育を施すことができるのはピオネール組織を除いてほかになかつた。その結果、ピオネール組織はレーニンの妻クループスカヤらの教育学者の後援を受けるとともに、共産党による強力な子どもたちの加入運動が進められた。すでに、1922年にピオネールの少年少女の活動の場としてモスクワに開設されていたピオネールの家は、レーニンの教えを子どもたちに伝える思想教育の場としての一面と子どもたちの義務教育

を補う知的活動の場としての面を合せ持つことになつたと考える。現在、ピオネール組織はピオネールの家、あるいはピオネール宮殿と呼ばれる総合施設を持ち、それらは芸術活動、スポーツ、文学、歴史、数学、科学などの種々な分野のサークルを設け、子どもたちの関心に応じて、自由に参加し、その知的欲求を満足させる場を提供している。さらに、少年自然観察ステーション、少年技術者ステーションなどより高度な知識をピオネールの子どもたちに教える専門分野別の活動拠点を設置し、そこには労働組合から派遣された熟練労働者や科学者、あるいは大学、研究所から教員が派遣され、子どもたちの指導を行っている。このような教育機関としてのピオネール組織の役割が1922年の教育政策の失敗が原因となつて、新たに備わつたと考えられよう。

無償義務教育が実施されない以上、ソビエトの子どもたちの多くは義務教育を受ける機会を奪われてしまった。しかし、教育省の義務教育学校にかわつて、無償の教育がピオネール組織で実施されることになり、ピオネール組織への国民の関心と理解は急速に高まつたと考える。それは1922年のピオネール組織創設時に、ピオネール隊員はわずか約4千人であつたのが、翌1923年には7万5千人に急増したことを見ても裏付けられよう。1924年、レーニンの死去によって、ピオネール組織はその名称をレーニン記念全ソ連邦ピオネール組織と改めた。1926年11月12日子ども技術研究所が設立された。これはピオネール組織の教育機関としての役割が一層高まつたために、ピオネールの課外教育施設での技術教育の指導法を研究するために設立された施設であつた。この年ピオネール隊員は182万人と激増している。当時も、子どもたちのピオネール組織への加入は法的な強制力を持つものではなく、子どもたちの自由意思にもとずいての加入がなされていたことを考えても、ピオネール組織の教育機関としての役割が子どもたちのピオネール組織への加入の意欲を高める一因となつたと考える。

この後、1930年ソ連邦閣僚会議において無償義務教育制度の実施が決定された後、義務教育学校は教育省の定めた義務教育カリキュラムのみを教える場となり、ピオネール組織は子どもたちの興味と関心のある分野の活動のみを教える場とその役割は明確に分けられ、ピオネール組織の教育機関としての役割は、教育省の管理下の義務教育制度と互いに、その役割を補い合うシステムへと発展していった。1962

年にはピオネール組織は創設40周年記念を祝して、レーニン勲章が授与された。1980年創設60周年記念を迎えたピオネール組織は1985年には全ソ連邦に2千万人の隊員をかかえる巨大な組織へと成長した。

このようにソビエトのピオネール組織が共産党の思想教育機関としての役割のほかに、教育省管理下にある義務教育機関を補う役割を革命直後の教育政策の失敗の結果担うことになったことがピオネール組織が短期間に成長した要因の1つとなったと考えられよう。

2) ピオネールキャンプ

ピオネールの活動の場にはピオネールの家、ピオネール宮殿、ピオネールキャンプ、少年自然研究者ステーション、少年技術者ステーション、旅行ツーリストステーション、児童音楽芸術学校等がある。いずれもピオネール隊員である少年少女の自主的な関心によってその活動が選択できるように、それぞれの施設には種々なサークル活動が用意されている。これらの施設の運営と管理は労働組合の支援と協力によって行われている。これらの種々なピオネール活動の中でもピオネールキャンプは特に重視されている。次に、ソビエトにおいてピオネールキャンプが重視される要因について、考察を加えて行きたい。

ロシア人の生活観、価値観、人生観を考える時、ロシアの自然を無視することはできない。ロシア人の生活にとって自然の及ぼしてきた影響力は我々日本人にとって想像を絶するものがある。

ロシアの四季の変化は日本の四季の移り変りのように、おだやかな情緒のあるものではない。1年の内、10月から4月まで続く長く厳しい冬は日本のそれとは違い、ロシア人の生活すべてに厳しい制約を与える。ロシアの冬は10月のある日、突然到来し、ロシア人の生活のすべての環境を一変してしまう。気温はある日突然マイナス30度へと劇的に下がり、日の出は午前9時、日の入りは午後4時と日中の活動時間は大幅に制限される。一方、ロシアの春は4月突然到来する。またたく間に春はロシアの町を席卷し、冬を追い出す。10日もしない内に町の中から冬は消え、木々のこずえに若葉が吹き、町中の公園には春の花々がいっせいに咲きほころぶ、日本のようにおだやかな四季の移り変りの中で生活する我々日本人にとって四季の変化は楽しみなものである。その意味で日本人は自然とともに生きていると言える。しかし、ロシ

ア人にとって四季の変化とは自然界の巨大なエネルギーの下に人間が置かれることであり、その意味でロシア人は自然に支配されていると言える。このような自然の支配の下に生きるロシア人にとって自然とは支配者であり、その下では人間がいかにか小さな存在であるかをロシア人は幾世代にも渡つて学び、さらに、それはロシア人の国民性に大きな影響を及ぼしたのである。

このようなロシアの自然といつた観点から「ロシア人の日常生活をみていると、教育や体制などいつたレベルでは説明できない性格が浮びあがってくる。驚くほどの忍耐力、度はずれの親切心と客好き、どうにもならないほどの自己主張、劣等感と貴族趣味などが目につく、これはみなきびしい自然のなかで生きなければならぬ人間の知恵やヨーロッパの文化から遠くへだてられた国の歴史が長い年月をかけて生み出したものだろう」(2)と思われる。いずれにせよ自然がいかにか人間の生活や性格に影響を与えてきたかが察知できよう。しかし、この反面、いかにか人間の生活と性格に自然が大きな影響力を及ぼすかを知っているのはロシア人自身ではあるまいか。ロシア人は春の到来と同時に、それまで家に閉込もつていた生活から、いっせいに屋外へと出る。若若男女問わず、人々はからだいっぱい日光を浴びようとする。野山へと木々のこずえから青々とした若葉の吹き出るさまを見に出かける。ロシア人はからだで春が来たことを感じとつているのだろう。幼い子どもをつれ、森林へ木のこを取りに多くのロシア人が出かける。これは帝政ロシア時代からのロシア人の数少ない楽しみの一つであった。ロシア人にとって、古来野外活動の意義とは、春となり、厳しい冬の猛威が去っているつかの間に、やさしい自然のふところに入り込み、身を委ねることによつて、自然の恩を身心で受け取ることなのであろう。ロシア人は長く厳しい冬を生き、そして、それを迎える術としての野外活動の大切さを身をもつて代々受け継いできたのではあるまいか。

1917年のロシア革命の後、帝政ロシアの支配から開放されたロシア国民の生活観と自然観はその後のソビエト政権の教育政策へも強く反映したと思われる。1920年代の教育政策の失敗によって打ち出されたピオネールの教育組織としての役割は共産主義の思想教育との一体化へと進み、それは労働を通しての教育へと発展したと考える。1920年から1950年代のソビエト国家建設期の資金、物資、さらに

人材の極度に不足した時代にピオネール組織が教育の場として見出したのは、正に、ロシアの大自然に子どもたちの身を委ねさせ、その豊かな自然の中で子どもたちの模範となるべき若い青年労働者の指導の下に、子どもたちに共同生活の場を与え、自主的な労働活動を通し、将来のソビエトを担う子どもたちに必要とされる社会主義的な思想性と社会生活の原則を教えることであつたのだろう。それは精神的にも、身体的にも成熟した模範的な青年男女の労働者をピオネール隊長として採用し、教科書の上で子どもたちが知っている知識としての模範的なソビエト国民像に対して、自然の中で優秀な労働者であり、現実的にソビエトを担っている青年と労働を通してふれあい、共同生活を営むことによつて、少年少女と青年労働者との心に血のかよった交流をもたせようとしている。ピオネールキャンプでの子どもたちの活動と行事は当初の労働活動中心から、子どもたちの関心と興味によつて選択できるように種々な分野の活動が用意されるようになった。各分野ごとに専門家が労働組合から派遣され、ピオネールキャンプは子どもたちにとって、より自主的な活動を営むことができる場へと改善されていった。一方、このピオネールキャンプは実際にソビエトの社会を建設している労働者大衆が労働組合を通じて直接子どもたちとふれあい、彼らが理想とする人間を育てることができる場を提供することになった。この意味でピオネールキャンプは大人と子どもたちとの意思疎通、交流の場として重要な役割を果たすことになったと考える。

ピオネール組織の活動は財政難のソビエト政権の手から労働組合の手に移され、ピオネール活動に必要な物資と人材はすべて労働組合の援助によつて提供され、その後ピオネールキャンプの組織は労働組合が地域の教育施設、文化・身体活動の施設を全面的に援助するシエフ(後援団体)制度となつて確立し、現在にいたつた。

このようにロシア人の伝統的な野外活動と共産主義の思想教育活動とがピオネールキャンプとして合体し、広く国民の支持を受けることができたが故に、労働組合は毎年、多額の資金と人材をピオネール組織に投資してきた結果、ピオネールキャンプをはじめとする多くのピオネールの施設がソビエト全土に普及したと推測できよう。

3. まとめ

1922年、わずか4千人から始まったピオネール組織は創設後64年を経た今日、隊員数

は2千万人に達し、ソビエトの少年少女のほとんどすべてをその組織に抱えることになった。正に、ピオネールはロシア革命以来70年をかけてソビエトが作り上げた巨大な少年少女の組織と言えよう。

このピオネール組織のソビエト社会に果たす役割、さらにはその活動の1つピオネールキャンプの目的について、従来共産主義思想の教育組織としての1面が強調して説かれてきた。しかし、本研究は従来からの思想教育の角度からの考察のほかに、ソビエトの教育史、文化史、経済史の角度からピオネール組織の発展の歴史を見なおした結果、従来からの思想教育としてのピオネール組織の解釈の外に義務教育を補助せざるおえない立場にあつた歴史的必然性がピオネール組織の急激な発達の一因としてとらえることができるとの仮説を得た。さらに、義務教育の代用的役割を果たすピオネール組織の活動の指導を経済的破綻の縁にあつたソビエト政権から、労働組合が請負った結果、ロシア人の文化的、思想的基盤であるロシア人の自然観がピオネール組織の活動に強く影響を与え、それがピオネールキャンプという大自然の中での労働活動を通しての思想教育というソビエト独自のキャンプ活動の形態をとつた思想教育のシステムが生まれたとの仮説に至つた。

本研究はソビエトのピオネール組織の活動の1つピオネールキャンプについて、その成立過程を中心に仮説を立てるにとどまったが、今後ソビエトの青少年の課外活動とそれを支える社会制度を明らかにするため、さらに研究を進め、ソビエトのレクリエーション活動の究明に努めていきたい。

引用文献

- (1) 梅根 悟監修、世界教育史大系「ロシア・ソビエト教育史Ⅱ」、講談社、昭和53年。 P367
- (2) 川野辺 敏著、「白樺のなかの子どもたち」、大月書店、昭和58年。 P13

参考文献

- 1) 梅根 悟監修、世界教育史大系「ロシア・ソビエト教育史Ⅱ」、講談社、昭和53年。
- 2) 川野辺 敏著、「白樺のなかの子どもたち」、大月書店、昭和58年。
- 3) 大柴 衛、海老原 達訳、「ソビエトの学校」、明治図書出版、昭和51年。

児童キャンプの教育的効果に関する一研究

—自主性診断検査(DTI)からみた自主性の効果を中心として—

馬 場 進一郎 (日本体育大学)

野外教育・客観テスト・測定評価

I. はじめに

学校及び社会の中で、野外活動(特にキャンプ)が盛んに行われるようになったのは、昭和31年に、文部省から「青少年野外活動の奨励について」という通達が出されてからである。

青少年を対象としたOrganized Camp(集団で組織的に行なわれるキャンプ)は、一般に教育キャンプと解され、「総合教育の場」としてその意義が重視されている。しかし、我が国における教育キャンプの形式は、欧米等のキャンプに比べ、比較的短期間のキャンプが主流を成していることから、その期間の中で教育効果の多くを期待するのは不可能と思われる。また、1泊2日から3泊4日といった短期キャンプにおいて、どの様な効果がどの程度期待できるかについても不明である。ところが、短い日数のキャンプにもかかわらず、今日までの間、キャンプが社会の中に定着し、実施されてきているということは、何らかの効果を期待しているからに他ならない。

文部省より出された『教育キャンプ指導の手引』¹⁾によると、「教育キャンプは、何にもましてキャンパーの自主性と創造性の重んぜられるところ…」とされている。

また、キャンプに関する文献等において、自主性は、一般に教育効果が期待できるとされていることから、「自主性」に焦点を当て、研究の題材として取りあげた。

これまでの研究のうち、キャンプの効果として自主性を客観的に捉えた研究は、松田ら²⁾の他ほとんど見あたらない。

倉本ら³⁾は、キャンプの機能について、自信をもって行動する、友人関係、自立性などに効果があるとしている。井筒ら⁴⁾は、親は子供の自主性が伸びることを期待してキャンプに参加させている割合が高く、キャンプ終了3か月後の調査では、参加者のうち、27.1%の者の自主性が伸びていると報告している。ただし、これらの研究は、あくまで親からみたキャンプの効果として自主性を捉えたものであり、実際にキャンパーを被験者としたものではない。

しかし、仮りに親の判断が正しく、また、一般的な教育キャンプにおいて、教育効果を得ることが可能であるとすれば、自主性の向上を判断するのに適切な客観テストをキャンパーに対して用いた場合、その結果は向上を示すのではないかという仮説が考えられる。

したがって、本研究では、この点について検証するために、3泊4日の青少年キャンプを事例に、キャンプが児童の自主性に及ぼす効果を実際に参加児童を被験者とし、客観的検査を媒介手段として測定・評価し、さらにその効果

の定着性について検討することを目的とした。ここで明らかにしたいのは、次の点である。

課題1) キャンプの体験学習を通して、参加児童の自主性が向上するかどうか。

課題2) 仮りに向上が見られた場合、それは一時的なものか、ある程度持続的なものか。

II. 研究の方法

1. 調査の内容及び方法

本研究は、キャンプに参加した児童に対し、自主性診断検査を用いたものと、その父兄に対し、質問紙を用いた調査から成り立っている。

それぞれの内容・方法については、表1に示した通りである。

なお、課題2)の検討にあたっては、キャンプ終了時と3か月後との間に、児童の自然的な発達に伴う要素が介入する可能性が考えられることから、あくまで「自然的な発達の有無」を見ることを目的に、統制群として、キャンプ未経験児童78名を設定した。

2. キャンプの概要

A・Bキャンプの学習内容は、相互に共通する部分が多く、それぞれの学習内容が目標としている点は、類似している。

班編成は、学年・性別・過去の参加歴及び各人の健康状況を考慮した上で、各班均等になるように縦割りの編成を行い、1班10名前後で構成された。

指導方法はA・Bキャンプともに、①実施主体(指導者)の指導力を強調する方法、②参加主体(キャンパー)の自主性にゆだね指導者は助言・補助を与える方法によって展開され、後者②の方法を強調した。

参加主体の自主性に重点を置いた学習内容は、両キャンプ共に特に3日目を中心に設定された。

なお、A・Bキャンプは、日本キャンプ協会公認の上級指導者がディレクターとして配置され、カウンセラーは、日本キャンプ協会または日本余暇文化振興会の指導者資格を有する学生が担当し、指導にあたった。

3. 父兄用調査用紙の内容

質問紙は、(1) キャンプに対する親の期待、(2) キャンプの体験学習による影響の2点から構成されている。後者は主にDTIの各カテゴリーについて、キャンプ後の傾向を5段階評定法により調査した。

表 1 調査の内容及び方法

調査時期	児童に対する調査		父兄に対する調査
	1. キャンプ実施前と実施後	2. キャンプ終了3か月後	キャンプ終了3か月後
調査対象	1984年の夏期休暇を利用して実施された、「自然活動子供村：キャンプ」(日本余暇文化振興会主催)に参加した、小学校5.6年の児童145名。その内訳は、 Aキャンプ：5年生50名、6年生50名 Bキャンプ：5年生26名、6年生19名	1)Aキャンプで被験者となった5.6年生のうち、キャンプ実施前と実施後における検査の回答が有効であった児童92名。 (実験群とする) 2)S小学校の5年生44名、6年生34名の2クラス：計78名。 (統制群とする)	Aキャンプで被験者となった5.6年児童の父兄、92名。
調査方法	石川勲・藤原喜悦「自主性診断検査(Diagnostic Test of Independence:DTI)」(金子書房)を用い、キャンプ場到着時とキャンプ終了時の2回実施した。 (キャンプ地における集合調査)	1)実験群：DTIをキャンプ終了3か月後に郵送して実施した。(郵送法) 2)統制群：1回目のDTI実施から約3か月後に、再度実施した。(集合調査)	キャンプ終了3か月後に、DTIとともに調査票を同封して実施した。 (質問紙郵送法)
調査期間	1984年7月25日～8月10日	1)実験群：1984年10月25日～11月30日 2)統制群：1984年10月1日及び12月18日	1984年10月25日～11月30日
回収数等	DTI配布数145枚、有効回収数134枚 回収率92.4%	1)実験群： DTI配布数92枚、有効回収数52枚 回収率56.5% 2)統制群については、 100%の回収率を得た(78枚)。	調査票配布数92枚、有効回収数50枚 回収率54.3%

4. 結果の処理について

(1) キャンプ実施前と実施後の検定については、検査によって得られた粗点(正答数)により、学年別・性別・被験者全体についても検定(個体の比較)を用い、比較検討した。

さらに、粗点を「DTI解説」⁵⁾に基づき、すべての項目についてパーセンタイル(以下PR)として算出し、各項目について30PR以下の者をA群、40～60PRの者をB群、70PR以上の者をC群として分類し、A群を各特性または自主性の低い群、B群を中程度の群、C群を高い群として、各項目ごとにそれぞれを粗点により比較した。

(2) キャンプ実施後と実施3か月後の比較については、(1)と同様に処理した。

Ⅲ. 結果と考察

1. キャンプ体験が自主性に及ぼす影響について

児童に対する調査のうち、キャンプ実施前と実施後におけるDTI得点を比較した結果については、表2～表4に示した通りである。

キャンプは、教育効果の1つとして自主性の育成に有効であるとされているが、自主性を本検査に基づいて分類した場合、キャンプを体験することによって、その構成要素

表 2 被験者全体におけるキャンプ実施前後のDTI-得点の比較

N=134	キャンプ実施前		キャンプ実施後		有意水準
	M	SD	M	SD	
1. 自発性	14.66	4.14	15.27	4.15	*
2. 主体性	14.31	4.04	14.51	4.74	
3. 独立性	14.65	3.91	15.43	4.33	**
4. 自己主張	12.78	4.23	13.89	4.51	***
5. 判断力	13.90	3.90	13.68	3.57	
6. 独創性	15.72	4.58	16.19	4.71	
7. 自律性	14.51	4.58	15.28	4.87	**
8. 自己統制	14.47	4.54	15.30	4.66	*
9. 責任性	16.54	3.98	17.43	4.44	**
10. 役割認知	16.12	4.17	16.60	4.29	
自主性	147.66	30.28	153.54	33.86	***

* P<.05 **P<.01 *** P<.001

がすべて向上するわけではない。表2・表3からわかるように、主に(1)自発性、(3)独立性、(4)自己主張、(7)自律性、(9)責任性、(10)役割認知のような特性が向上するといえる。しかも、参加者全体が向上するのではなく、A群のようにキャンプ参加当初の段階で、各特性が低かった者に伸び率が高いといえる(表4)。

表 3 キャンプ実施前と実施後のDTI-得点の比較
学年別・性別・全体における有意差 (t検定による)

	5年	6年	男子	女子	全体
1. 自発性	**			**	*
2. 主体性					
3. 独立性	*		*		**
4. 自己主張	**	*	***		***
5. 判断力					
6. 独創性					
7. 自律性		*		**	**
8. 自己統制	*			*	*
9. 責任性	**		*	*	**
10. 役割認知	*				
自主性	***	*	***	**	***

* P<.05 **P<.01 *** P<.001

低下を示した特性：女子－ 5. 判断力(P<.05)

表 4 キャンプ実施前後のDTI-得点の比較
群別における有意差 (t検定による)

	A群	B群	C群
1. 自発性	***		
2. 主体性			
3. 独立性	***		
4. 自己主張	***		
5. 判断力	**		
6. 独創性	*		
7. 自律性	**	*	
8. 自己統制	**	*	
9. 責任性	***		
10. 役割認知	*	*	
自主性		***	**

* P<.05 **P<.01 *** P<.001

低下を示した特性：B群－ 5. 判断力(P<.05)

C群－ 5. 判断力(P<.001)

しかし、総計項目である自主性については、A群よりはむしろB群・C群に向上が認められていることから、キャンプ実施前の段階において、自主性を中程度もしくはそれ以上に備えていた者の、特に各人の低い部分における特性の伸長に、キャンプが効果的であったと推察される。

したがって、参加当初の段階で各特性が全体的に低く、自主性がA群に属するような者については、必ずしもキャンプが好影響を及ぼしたとはいえない。このように、総合的に自主性が低かった者については、指導方法を中心に、学習内容や日数等、つまりキャンプの質や量による検討を加え、改善する必要があるといえる。また、一般的な教育

キャンプでは、効果はあまり期待できないと考える。

学年別の効果に着目すると、6年生よりは5年生に向上を示している特性が多いことから、6年生に比べ5年生の方が、キャンプの体験を肯定的に受けとめていることが推察される。

また、男子は特に自己主張に、女子は自律的な統制行動に効果が認められた。

藤原⁶⁾は、自己主張について「児童期においては、友人集団に同調しようとする傾向が強まるが、他方、学習や遊びなどにおいて他者に優越し、仲間から認められたいという要求が強くなり、競争という形態で自己主張が現われる」としている。このことから、グループ単位の活動や各種の体験学習の場面が、自己主張の向上に影響を与えたものと思われる。また自己統制について藤原⁷⁾は、「子供の発達段階に応じて適度に成功体験を持たせ自信をつけるように養育することが、自己制御の順調な発達にとって必要である」としていることから、キャンプの各場面における成功体験や集団の規律を守ること、自分のことは自分の力でやりぬくこと等を協議したカウンセリングが、自己統制・自律性に好影響を及ぼしたものと推察される。

これまでに述べた自主性(各特性)の向上は、キャンパー各人がキャンプ体験をもとに、それぞれの内省によって捉えた結果と判断することができる。当然そこには個人差や学年差が存在するものの、キャンプがきっかけとなった変容に他ならないと考えられる。したがって、結果に示された有意差は、キャンプにおける指導の効果またはキャンプが有する独自性による効果(相乗効果)と判断することができる。

2. キャンプ体験によって得られた自主性の持続性について

実験群について、キャンプ実施後と実施3か月後におけるDTI得点を比較検討した結果、5年生の自発性に低下、責任性に向上がそれぞれ認められたのみで(P<.05)、6年生、男子、女子、全体においては、有意差は認められなかった。一方、統制群は、6年生の自発性、全体の自律性に関し発達が認められたが(P<.05)、それ以外の特性については、3か月という過程では発達が認められていない。

すなわち、以上の結果より、キャンプ終了時における自主性の変容は、検定結果からは一時的な効果ではなく、3か月間は持続されていると推測することができる。

また、5年生の責任性とA群の役割認知については、3か月後さらに向上が認められていることから、キャンプの刺激がその後の日常生活に好影響を及ぼしたものと推察される。

3. 親からみたキャンプ体験後の子どもの変容について

キャンプに対する親の期待及び参加させた最大の理由については、回答が分散したが両者の上位に共通した項目がみられた。特に参加させた最大の理由については、1位と

3位の項目の間で差が認められていることから(P<.05)、親は共同・協調性が養われる、友だちができ、つき合い方を覚える等を主な期待として、参加させていることが推測される。3位以下の項目は、自主的行動が身につく、自然の理解・愛好心が養われる、外交的な性格になる等であった。また、これらの参加させた最大の理由について、74%の親が効果を認めている。この結果は、井筒らの研究⁸⁾と一致するところが多く、親は何らかの教育的意図を持って、キャンプに子どもを参加させていることがうかがえる。

親がキャンプ後に、子どもの日常生活の観察を通して向上を認めた自主性の特性については、表5に示したように、役割認知のみといえる。

表5 親から見たキャンプ体験後の子どもの自主性の変容について

	+	±	-	D. K.
1. 自発性	60	38	0	2
2. 主体性	48	44	0	8
3. 独立性	46	52	0	2
4. 自己主張	42	54	0	4
5. 判断力	38	52	0	10
6. 独創性	38	52	2	8
7. 自律性	36	58	2	4
8. 自己統制	40	50	4	6
9. 責任性	58	38	0	4
10. 役割認知	60*	32	2	6
自主性	58	42	0	0

数字は%を示す

* P<.05

なお、+は 向上した、やや向上した
±は 変わらない
-は やや低下した、低下した
D.K.は わからない を示す

その他の特性については、+と±の間に差が認められなかった。

役割認知については、子どもの自己評価においても、3か月後の調査で向上が著しい特性である。

つまり、親は顕著に向上が見られた特性のみ効果を認めていることから、家庭場面に限定された親の観察には限度があり、子ども自身の内省部分にかかわる傾向までは、適確に捉えることができないものと推察される。

したがって、主に家庭場面から捉えた親の評価と検査結果の両者からキャンプの効果を検討するならば、特に役割認知については、キャンプの刺激が好影響を及ぼし、キャンプ後の日常生活の中において、最も効果が期待できる特性であると判断される。

IV. まとめ

3泊4日のキャンプ体験は、キャンプ参加当初におけるキャンパーの特に低い特性を伸長することに、有効に機能したといえる。

総合的な自主性の向上は、参加当初に中程度以上の自主性を持ち合わせていた者でなければ、期待できないといえる。

キャンプ体験によって得られた自主性は、キャンプ終了後3か月間は、日常生活の中においても持続されていると考えられる。特に役割認知は、キャンプ後に効果が期待できる特性であることが推察された。

V. 今後の課題

キャンプによって得られる効果は、自然環境下における体験学習の内容や指導者及びその指導方法によるところが大であると考えられる。しかし、本研究の範囲からは、自主性に影響を及ぼした要因までは明らかにすることができなかった。

また、参加時点において自主性が特に低かった者に、総合的な自主性の向上が認められなかったという点も不明である。

したがって、今後は以上のような点を究明するとともに、観察法等の手法も加え、教育効果の検討を計りたい。同時に参加者の能力に合わせたキャンプの在り方も検討される必要があると考える。

注記・引用文献

- 1) 文部省編 『教育キャンプ指導の手引』 P.5 1956
- 2) 松田誠一・飯田稔 「キャンパーの自主性育成に関する研究」 日本体育学会第34回大会号 P.605 1983
- 3) 倉本満枝・飯田稔・他 「キャンプ参加者の母親の意識について」 日本体育学会第34回大会号 P.682 1981
- 4) 井筒次郎・他 「子どものキャンプにおける教育的効果に関する一考察—その学習内容の質と量について—」 日本体育大学助学会研究報告第2号 P.P61-71 1983
- 5) 石川勤・藤原喜悦共著 『自主性診断検査解説』 金子書房 P.P1-17 1983
- 6) 依田新監修 『新・教育心理学事典』 金子書房 P.315 1977
- 7) 内山喜久雄監修 『児童臨床心理事典』 岩崎学術出版社 P.246 1983
- 8) 井筒前掲書 4)

キャンプ期間についての基礎的研究 —中学校教員の意識の分析—

○福田 芳 則
(大阪体育大学)

五 林 正 隆
(大阪社会体育専門学校)

高 見 彰
(関西保育専門学校)

学校キャンプ・キャンプ期間・中学校教員
はじめに

知識偏重による詰め込み教育、受験教育などと呼ばれる現在の教育環境が指摘される一方、「ゆとりある充実した」教育の必要性が叫ばれている。学校教育の過密なカリキュラムを解消し、学習内容を豊かにするために自然のふとこで仲間と寝食を共にし、直接的な生活体験、学習が期待できる教育環境として学校キャンプがあげられる。そしてこの学校キャンプは、様々な野外活動を総合的に実践できる場としてとらえられ、学校におけるレクリエーション活動の中で重要な位置をしめるものと思われる。

スキー・登山等をメインプログラムにした野外活動行事の増加、文部省の自然教室推進事業、セカンドスクール構想など、最近では、学校教育における野外活動の重要性も改めて見直されてきている。師岡は、デルファイ法を用いた小・中学校における野外教育についての将来予測で、1987年頃には学習指導要領に野外教育が明文化され、2000年頃には、多くの学校が野外活動を取り入れていることを予測している。¹⁾

これらの活動をさらに拡充するための問題点として、プログラム・指導者・施設・管理面等が指摘されている。^{2) 3)} 指導の現状として、実施校の教員にその企画・運営をゆだねている学校が多く、その成否は教員に負うところが大きいといっても過言ではない。また学校キャンプの実施期間としては、中学校の場合、種々の理由で1泊2日に限定されているのが現状で、移動に大半の時間を費やし、実施プログラムも野外炊事・ハイキング・キャンプファイヤーなどの画一的ないくつかのものにかぎられている。飯田は、移動に費やす時間、経費、子ども達の環境への適応という点から4泊5日が効果的な学校キャンプの期間であり、アメリカにおいてはほとんどが4泊5日で実施されているとしている。³⁾ もう1～2泊でも学校キャンプの期間を延長することが可能であれば、その教育的効果・レクリエーション活動の拡充も今以上に望めるものとおもわれる。そこで本研究の目的は、学校キャンプの期間を規定する要因について、中学校教員を対象とし、その意識の面から考察を加え、学校キャンプの期間延長の可能性をさぐるとともに、キャンプの期間を考える上での基礎的資料を得ようとするものである。

方 法

大阪府茨木市内の中学校教員を対象に、学校キャンプ期間に対する意識について、質問紙による調査を行なった。調査時期は1985年11月20日～12月10日で、有効回答数(率)は、12校145名(60.8%)であった。

分析の方法は、1. 適当と考える学校キャンプの泊数と、(1)性別(2)年代(3)担当教科(4)経験(5)好嫌感との関連 2. 学校

キャンプ期間に影響をおよぼす要因23項目の5段階評定得点結果と、1であげた適当と考える泊数および5つの項目との関連について有意差検定を行ない、比較検討した。1については、前回行なった同様の調査結果もあわせて考察を加えた。⁴⁾ なお、キャンプ期間に影響をおよぼす要因23項目については、キャンプ期間の長短を択一しその理由について自由記述で回答されたものを整理・再構成したものをを用いた。⁴⁾

結果と考察

1. 適当と考える学校キャンプの泊数として得た回答は表1に示した。

表1 適当だと考える泊数×期間

	1泊2日	2泊3日	3泊4日	4泊以上	計
計	40(27.6%)	89(61.3%)	11(7.6%)	5(3.5%)	145

2泊3日を適当としたものが61.3%と5分の3以上をしめ、さらに1泊を含め2泊3日以内と回答したものは、88.9%と全体のおよそ9割におよんでいる。これらは、前回の調査⁴⁾(それぞれ66.3%、85.2%)とほぼ同じ傾向を示していた。1泊の学校キャンプをおこなっている対象校がほとんどで、その活動を基準として泊数を考えたことが推測される。

適当だと考える泊数と、性別、年代、教科、経験、好嫌感についての比較は、図1～5に示した。なおX²検定は、比較項目ごとに1泊と2泊、2泊以内と3泊以上について行なった。

図1-1 回答者 性別

男性 98人 (67.5%)	女性 47人 (32.5%)
----------------	----------------

図1-2 性別×泊数

性別	1泊2日	2泊3日	3泊4日	4泊以上
男性	24人 (24.5%)	61人 (62.2%)	9人 (9.2%)	4人 (4.1%)
女性	16人 (34%)	28人 (59.6%)	1人 (2.1%)	2人 (4.3%)

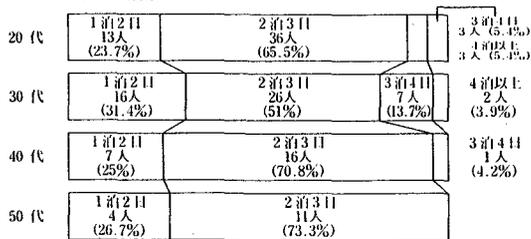
X²検定結果 有意差なし

(1) 性別(男女差)における比較では、有意差はみられなかった。これは前回の調査⁴⁾と同様の結果であった。

図2-1 回答者 年代

20代 55人 (37.9%)	30代 51人 (35.2%)	40代 24人 (16.5%)	50代 15人 (10.2%)
-----------------	-----------------	-----------------	-----------------

図2-2 年代×泊数



X²検定結果

2泊以内よりも3泊以上を志向する-30代以下>40代以上 P<0.05

(2) 年代における比較でみると、30代以下の方が40代以上よりも、2泊以内よりも3泊以上を志向している。前回の調査結果⁴⁾では、今回と同様の差はみられなかったものの、20代の方が30代以上よりも、2泊以内よりも3泊以上を志向し、30代以下の方が40代以上よりも1泊よりも2泊を志向していることがわかっている。これらのことから、若い年代の方がより長いキャンプ期間を志向していることが伺えよう。

図3-1 回答者 担当教科

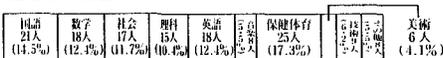
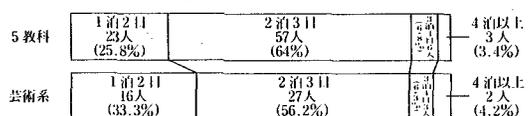


図3-2 担当教科×泊数



X²検定結果 有意差なし

(3) 担当教科と泊数においては、主要5教科(国語・数学・理科・社会・英語)担当者と芸術系教科担当者(音楽・美術・保健・他)とを比較した結果有意な差はみられなかった。

図4-1 回答者 引率経験

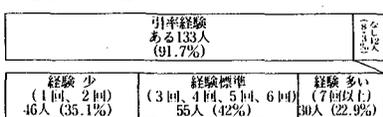
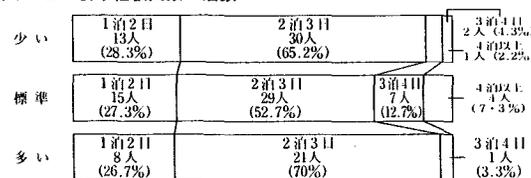


図4-2 引率経験回数×泊数



X²検定結果

2泊以内よりも3泊以上を志向する-経験標準>経験多 P<0.05

2泊以内よりも3泊以上を志向する-経験標準>経験少 P<0.05

(4) 今回は引率経験のみをとりあげた。平均経験回数±0.5標準偏差にあてはまるものを経験標準群、それ以下、以上をそれぞれ経験少、経験多群として比較した。

2泊以内と3泊以上を比較した場合経験標準群が経験多群、

少群よりもいずれも有意に3泊以上を志向している。しかし経験の多少という意味においては関連は認められないであろう。

前回の調査⁴⁾においても、引率経験と泊数との関連には有意な差はみられなかった。今回は分析できなかったが、キャンパーとしての経験の多少、最長経験キャンプ期間の長短、キャンプ講習会の参加の有無等が関連していることがわかっており、今回の結果もそれらに起因しているものと思われる。

図5-1 キャンプに対する好嫌感

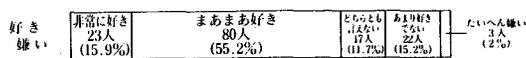
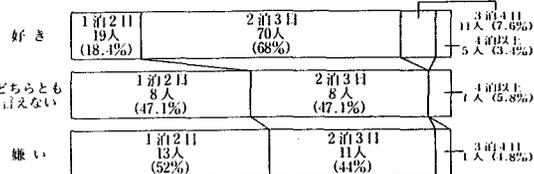


図5-2 好嫌感×泊数



X²検定結果

1泊より2泊を志向する 好感群>嫌感群 P<0.005

1泊より2泊を志向する 好感群>中間群 P<0.05

(5) キャンプ、野外活動の好嫌感をみた場合約70%の人が好きという反応を示している。それに対して嫌いと答えた人は、約17%であった。1泊と2泊の比較においては、好きと答えた人の方が、嫌いと答えた人より2泊3日を志向している。なお10%水準ではあるが、2泊以内より3泊以上を志向する傾向が、みられた。これらは、前回の調査結果⁴⁾と同様である。

2. 学校キャンプの期間に影響をおよぼす要因23項目に対する5段階評定の得点結果を、平均値の高い順から表2に示した。

表2 学校キャンプの期間に影響をおよぼす要因

順位	項目	全体X	S	D
1	教員のキャンプ経験、技術が要求される	(指) 4.000	0.993	
1	準備活動が多忙になり、引き受け手等に問題がおきる	(指) 4.000	0.942	
3	指導者の人数が不足する	(指) 3.965	0.967	
4	人数が多すぎて、さらに期間が長くなると、なかなか指導がゆき届かない	(指) 3.924	0.958	
5	教員の体力、意欲に問題がおきる	(指) 3.875	0.956	
6	プログラムとして何を行えば良いのかという教材面の不足、内容が問題となる	(指) 3.682	1.052	
7	野外活動の専門家が必要となる	(指) 3.648	1.175	
8	教師と生徒、生徒間の相互理解がより期待できる	(指) 3.579	0.894	
9	生徒の体力面で問題が出てくる	(指) 3.531	1.027	
10	時間外、超過勤務が問題となる	(指) 3.517	1.302	
11	利用場所の施設、設備の不備が問題となる	(指) 3.489	1.054	
11	天候の変化等、自然の厳しさをより味わえる	(指) 3.489	1.054	
13	生徒のキャンプに対する資質、能力が必要となる	(指) 3.482	1.007	
14	生徒の社会性や協力の精神に向上がみられる	(指) 3.427	0.948	
15	受入施設が不足すると思う	(指) 3.420	1.217	
16	適切な設備で余裕のあるプログラムが行える	(指) 3.331	1.142	
17	自然をより理解し、愛好するようになる	(指) 3.227	0.970	
18	他の教育活動への支援をきたす	(指) 3.220	1.163	
19	事故がふえ責任問題等がふえる	(指) 3.193	0.973	
20	生徒の負担する経費面が無理である	(指) 3.006	1.151	
21	教職員の経費等、財政的に支援をきたす	(指) 2.689	0.989	
22	生徒の意欲が減退する	(指) 2.655	0.967	
23	保護者の理解が得られない	(指) 2.524	0.874	

表中項目欄の(指)は指導サイドの要因、(環)は施設、勤務責任等といった環境的要因、(自)は、期間延長にともない効果が期待できる目的的要因、(上)はキャンパー自身の主体的要因である。

前回の調査結果と同様、指導サイドの要因が上位のほとんどをしめており、それ以下は、目的的要因、環境的要因、主体的要因が混在している。20位以下は、その平均値からキャンプ期間延長を阻害する要因と考えなくてもよいであろう。なお平均3.00を下まわった3つの項目は、順位は違っているものの前回の調査でも3.00以下を示した項目と全く同じであった。また18位以下の平均値の比較的低い項目も前回と同じ項目であり、そのほとんどが施設問題を除いた環境的要因を主とする項目であった。

実施期間に影響をおよぼす要因を、性別、年代、教科、経験、好嫌感、適当だと考える泊数ごとに比較した結果を表3に示した、有意差のみられた項目には、あわせてそれぞれの平均値も付記した。

- (1) 性別(表3-A)においては、環境的要因に多くの差がみられ、いずれも女性の方が期間延長を阻害する要素として強く受けとめているようである。
- (2) 年代(表3-B)においては、環境的要因に多くの差がみられ、年代が高くなるほど阻害要因として強く受けとめている。また指導的要因においても差が多少みられたが、年代との関連はあまりないように思われる。
- (3) 担当教科(表3-C)においては、主要5教科と芸術系教科では、ほとんど差がみられなかった。
- (4) 引率経験(表3-D)においては、多少の差はみられるものの、全体として関連はないようである。
- (5) 好嫌感(表3-E)においては、環境的要因に差が多くみられ、いずれも嫌感を持っている者ほど阻害要素として強く受けとめられている。
- (6) 適当と考える泊数(表3-F)においては、今後の学校キャンプ長期化の可能性をみる意味で1)、2泊以内と3泊以上について、また、2泊以内を適当としたものが約90%という今回の現状をとらえた上で2)、1泊と2泊について、T検定を行なった。
 - 1)、2泊以内と3泊以上の比較において、多くの要因について有意差がみられた。目的的要因を除いて、すべて2泊以内と回答したの方が阻害要因としてより強く受けとめており、3泊以上と回答したものの平均値は、指導的要因においてのみ3.0以上を示し、他の要因については阻害要因と受けとめていない。
 - 2)、1泊と2泊の比較においては、目的的要因にすべて有意差があらわれ、1泊と回答した者の平均値はほとんど3.0を下回っており、期間延長にともなう効果増をあまり期待、意識していないようである。また指導的要因については、1泊と回答した者はすべて平均値4点台でより強く阻害要因として受けとめている。

まとめ

以上の結果より、以下のことがわかった。

1. 約60%の者が2泊3日を、約90%の者が2泊3日以内を適当なキャンプ期間として考えている。

2. 適当なキャンプ期間に影響をおよぼす要素として、年代とキャンプに対する好嫌感があげられる。若い年代のほうが、またキャンプに対して好感を持っているものの方が、より長い期間を志向していることが明らかになった。

3. キャンプ期間の決定に影響をおよぼすものとして、指導サイドの問題が大きき要因としてとらえられていることが明らかになった。

4. 性別、年代、好嫌感の比較において環境的要因に多くの差がみられ、女性、高い年代、嫌感を持っている人ほどその要因をより阻害的なものとして考えていることがわかった。

5. より長い期間を志向する者の方が、キャンプ効果を期待できる目的的要因をより強く自覚しており、逆に主体的、環境的要因については、短い期間を志向する者の方がより高い不安を持っていることがわかった。指導的要因に対しては、両者とも不安を持っているが、その程度は短期間志向の者の方がより高いことがわかった。

中学校教員の意識を分析することにより、学校キャンプの期間に関する基礎的資料を得たわけであるが、今後の課題として、調査対象の拡大、対象の属性等とキャンプ期間の詳細な分析があげられよう。また、学校キャンプの現状と問題点をより正確に把握し、指導サイドの問題点(技術、経験、専門性、プログラム等)を解決していく方策を考えることも、学校キャンプの長期化を図るために重要な課題であろう。

文 献

- 1) 師岡文男:「野外教育の将来像—小・中学校における位置づけとプログラムについての予測」、『筑波大学体育研究科修士論文』1979
- 2) 福田芳則:「キャンプ期間についての基礎的研究—中学校教員のキャンプ期間に対する意識」、『第33回日本体育学会大会号』739、1982
- 3) 飯田稔:「野外活動を見直す」、『体育科教育』26(8)、1978

表3 キャンプ期間に影響をおよぼす要因×性別・年代・教科・経験・好嫌感・適当と考える泊数

要因	項目	A 性別		B 年代						C 教科		D 経験 ※1			E 好嫌感			F 適当と考える泊数						
		① 男	② 女	① 20代	② 30-40	③ 40-50代	④ 20.30代	⑤ 40.50代	⑥ 20.30-40	⑦ 50代	① 5教科	② 芸術系	① 経験少	② 標準	③ 経験多	① 好き	② 嫌い	③ 好き×嫌い	④ 嫌い×好き	⑤ 2泊以下	⑥ 3泊以上	⑦ 1泊	⑧ 2泊	
指導的要因	教員のキャンプ経験、技術が要求される							⑤3.396 ⑥4.266 ※※※																
	準備活動が多忙になり、引き受け手等に問題がおきる			①3.818 ②4.111 Δ		③3.896 ④4.282 ※											①3.932 ③4.352 Δ			①4.085 ②3.500 ※				
	指導者の人数が不足する																			①4.062 ②3.250 ※※				
	人数が多すぎて、さらに期間が長くなると、なかなか指導がゆき届かない							⑤3.969 ⑥3.533 Δ									①3.834 ③4.411 ※※			①4.062 ②3.125 ※※※	①4.450 ②3.887 ※※※			
	プログラムとして何を行えば良いのかという教材面の不足、内容が問題となる							⑤3.753 ⑥3.066 ※								①3.621 ②4.0 Δ			①3.782 ②2.937 ※※	①4.125 ②3.692 ※				
	教員の体力、意欲に問題がおきる									①3.775 ②4.083 Δ	①4.13 ③3.745 ※									①3.968 ②3.437 ※	①4.375 ②3.786 ※※※			
環境的要因	野外活動の専門家が必要となる	①3.469 ②4.021 ※※		①3.981 ②3.444 ※※																①3.720 ②3.187 Δ				
	他の教育活動への支障をきたす					③3.075 ④3.615 ※※	⑤3.184 ⑥3.533 ※								①3.077 ②3.56 Δ	①3.007 ③3.823 Δ			①3.310 ②2.437 ※※	①3.600 ②3.179 Δ				
	時間外、超過勤務が問題となる	①3.346 ②3.872 ※※		①3.145 ②3.744 ※※		③3.377 ④3.817 ※									①3.378 ②4.0 ※				①3.651 ②2.687 ※※	①3.925 ②3.529 Δ				
	生徒の負担する経費面で無理である	①2.806 ②3.425 ※※※							①3.111 ②2.708 ※							①2.922 ③3.647 ※	②4.0 ③3.647 Δ							
	受入施設が不足すると思う	①3.295 ②3.680 Δ		①3.090 ②3.622 ※※		③3.264 ④3.846 ※※						①3.304 ③3.833 Δ	①3.291 ②3.96 ※		①3.291 ③4.352 ※※※									
	保護者の理解が得られない															①2.485 ③3.0 ※	②2.44 ③3.0 Δ			①2.589 ②2.187 Δ				
主体的要因	事故がふえ責任問題等がふえる														①3.097 ③3.705 ※※				①3.279 ②2.625 ※※	①3.550 ②3.157 ※				
	教職員の経費等、財政的に支障をきたす					③2.575 ④3.000 ※						①2.521 ②2.933 Δ								①2.875 ②2.573 Δ				
	利用場所の施設、設備の不備が問題となる	①3.326 ②3.829 ※※		①3.254 ②3.633 ※		③3.396 ④3.743 Δ																		
目的的要因	生徒の体力面で問題が出てくる			①3.854 ②3.333 ※※※																①3.596 ②2.937 ※	①3.850 ②3.483 Δ			
	生徒の意欲が減退する								①2.514 ②2.815 Δ											①2.697 ②2.250 Δ	①3.125 ②2.505 ※※※			
	生徒のキャンプに対する資質、能力が必要となる	①3.346 ②3.765 ※					⑤3.515 ⑥3.266 Δ					①3.739 ②3.327 ※							①3.565 ②2.812 ※※					
要因	天候の変化等、自然の厳しさをより味わえる																				①3.175 ②3.606 ※			
	生徒の社会性や協力の精神に向上がみられる																			①3.372 ②3.812 Δ	①2.750 ②3.651 ※※※			
	適切豊富で余裕のあるプログラムが行える										①2.956 ②3.49 ※	①2.956 ③3.4 Δ							①3.193 ②4.125 ※※	①2.250 ②3.617 ※※※				
要因	自然をより理解し、愛好するようになる																②2.6 ③3.117 Δ			①2.775 ②3.337 ※※※				
	教師と生徒、生徒間の相互理解がより期待できる								①3.662 ②3.395 Δ											①2.900 ②3.820 ※※※				

※1 経験多×経験少 有意差なし

※ P<0.05
※※ P<0.01
※※※ P<0.005
Δ P<0.1

レクリエーション・スキーの技術評価に関する研究

金子 和 正 (共栄学園短期大学)

レクリエーション・スキー 滑走姿勢 技術評価 形態評価 滑走順番

結 論

スキーヤーの滑走に対する確かな評価を与えることは、スキーヤーのスキー技術の向上を促すとともに、スキーに対する運動欲求を高めるものとも考えられる。スキー技術の評価については、スキーが競技的であれば、時間・距離の計測により客観的に評価することが可能である。

しかし、競技スキーに対しゲレンデ・スキーと言われるレクリエーション・スキーにおいては、その評価を滑走姿勢により、指導者や他のスキーヤーが形態的评价を行っているということから、評価の客観化は困難であることが指摘されている¹⁾²⁾。

形態的评价については、他のスポーツと同様スキーにおいても、その評価基準が明確化されてなく、指導者を中心とした上級スキーヤーの主観的评价によることが多いと考えられる。形態的评价においての最大の難点は、刻々と変化する運動姿勢を評価することの難しさであると推察される。これについて、K.Meinel³⁾は、眼前の運動における瞬間的な印象分析について、その信頼性は主観的な、また客観的な不完全さによって妨げられ、その理由として1)眼ではとても追えないようなスピードをもつ運動、2)極めて大きな空間的な広がりをもつ運動、3)全身の運動と四肢の個々の動きを同時に観察しえない運動等をあげている。スキー運動は、このようなMeinelの指摘する点を多く含んでいるものと考えられる。

一般に、ゲレンデにおけるスキーヤーの滑走姿勢の形態的评价は、評価されるスキーヤーに対し、その前後を滑走するスキーヤーとの、比較評価で行われているものと考えられる。

林⁴⁾はスキー技術の評価について、スキーヤー自身による自己評価、相互評価が重要な役割を果たすことを指摘しているが、前述した観察者(指導者)によるスキーヤーの比較評価が、形態的评价においては重要であると類推される。このようにスキー技術の形態的评价は、様々な問題を含んでいるものと考えられる。

本研究は、競技スキーに対して、一般的にゲレンデで行われるスキーをレクリエーション・スキーとして捉え、その技術評価について、評価対象となるスキーヤーの直前を滑走した技術レベルの相違するスキーヤーの滑走が、スキー技術の形態的评价にどのような影響を及ぼしているのか、また、スキー技術の個々の評価項目と総合評価にどのような関連があるのかを検討し、今後のスキー技術の評価方法における一資料を得ることを目的としている。

方 法

被験者

昭和61年2月25日～29日の4泊5日で実施された、

S大学のスキー教室に参加した、スキー経験日数約1000日(S.A.J.指導員)～約50日(S.A.J.2級)のスキーヤー34名であった。

手 順

34名の被験者に対し、スキー教室の第3日目の午前の滑走前、及び第4日目の午前の滑走前に、上級スキーヤー(S.A.J.1級)、中級スキーヤー(S.A.J.2級)、初級スキーヤー(S.A.J.3級)の各々1名、計3名のスキーヤーの滑走時のビデオ・フィルムを見せ、表1に示したスキー技術評価用紙に各スキーヤーの技術能力について記入させた。技術評価段階は左から右に1～10点を配した。評価項目については、1.ストックワーク、2.脚の曲げ伸ばし、3.外向傾姿勢、4.スキーの平行操作、5.リズム、6.総合評価の6項目である。

上・中・初級スキーヤー3名の滑走順番は、1.中級→上級→初級、2.上級→初級→中級、3.上級→中級→初級、4.初級→中級→上級、5.初級→上級→中級、6.中級→初級→上級の6通りの組み合わせをとった。

結果の処理

評価項目の第6番目の総合評価について、3名の技術能力の異なるスキーヤーにおける、上級スキーヤーと中級スキーヤー、中級スキーヤーと初級スキーヤー、初級スキーヤーと上級スキーヤーのそれぞれで、滑走順番の相違による両者間の差を検出するためにも検定を行った。また、総合評価と他の評価項目1～5についての関連を検討するために、総合評価との相関を求めた。

研究の限界

本研究で実施したスキーの技術評価は、実際のスキーヤーの滑走姿勢を評価したものでなく、ビデオ・フィルムを通して観察者が行ったものであり、視覚イメージの点から限界があげられる。また、ビデオ・フィルムのモデル・スキーヤーは、上・中・初級各々1名ずつであり、スキー技術能力の一般的上級、中級、初級を反映しているという点で、さらに、34名の被験者のスキー技術は一定でないと同時に、評価基準も各々の被験者で、主観的基準がとられたことにも本研究の限界が指摘される。

結果及び考察

スキー運動における技術評価は、運動技術における客観性、信頼性及び妥当性のある評価が、運動に対する学習者の興味を左右する⁵⁾、と同じように重要な課題となっている。

今日のゲレンデにおけるスキー技術の評価方法の多くは、指導者による観察評価であり、実際の技術評価場面において、指導者は、評価するスキーヤーを数名ずつ滑走させることに

より、その形態姿勢の比較評価の方法を用いていることが多い。この点において、指導者のスキー技術に対する理解度は、スキー技術の評価場面では重要な要因となっているものと考えられる。スキー技術の相違する2名のスキーヤーの評価は、観察者である指導者にとり、評価のためには比較観察できるという観点から利点を含んでいると推察できる。すなわち上級スキーヤーの後に滑走する初級スキーヤーについては、中級スキーヤーの後で滑走するよりも、両者間の技術差を明確化できるものと考えられる。

表2は、総合評価における上・中・初級スキーヤーについての6通りの滑走順番の組み合わせに対する、それぞれの滑走順番における、総合評価の平均得点を表したものである。

表から滑走順番1～3と4～6の技術評価は、各々27日と28日の朝に数分間隔で実施したにもかかわらず、上級、中級、初級スキーヤーの総合評価得点は、滑走順番が異なる度に各々変化している。上級スキーヤーの総合評価についてみると、最も高い値は初級→上級→中級の順番の滑走時であり、次に中級→初級→上級の順番で滑走した時で、総合評価得点の平均は各々8.5、8.4と高い値を記録している。

このように上級スキーヤーは、滑走順番が初級スキーヤーの次に滑走することにより、形態的评价が最も高い値を記録するものと考えられる。一方、上級スキーヤーの総合評価が低い値を示した滑走順番についてみると、中級スキーヤーの後に滑走した場合及び、観察者において評価基準が明確化されていないと考えられる最初の滑走時に記録されており、その値はともに8.0であった。

初級スキーヤーの総合評価の高い得点は3.9、3.8であったが、この値はいずれも上級スキーヤーの後に滑走した場合であった。このことは上級スキーヤーと初級スキーヤーとの間に、中級スキーヤーが滑走していないことから、被験者である観察者がスキー技術について、単に二者間の比較をしたことによるものと考えられる。初級スキーヤーの低い得点は、上級スキーヤーの時と同様に、滑走順番が最初になった時であり、これは上級スキーヤーと同様の理由が類推できる。さらに、中級スキーヤーの次に滑走した時にも低い値を記録している。

松下ら⁶⁾は運動観察能力について、運動未経験者は比較する運動の技術水準の差が小さい場合、十分な観察ができず、それゆえ技能水準の差を利用した師範を行う場合には、技能水準の差が大きいものを用いるべきであると指摘している。

このことは、高い技術水準にある指導者は、小さい技術水準の差をもってして、技術能力の差を評価できることを示唆するものと考えられ、本研究の被験者群(観察者群)の、技術水準が一般的な上級であったことから考えれば、上級と初級スキーヤーの二者間の差を検出することは、容易であったものと推察できる。

中級スキーヤーについてみると、最も高い総合評価得点の平均は、6.3で中級スキーヤーが最初に滑走した時に記録されている。また、初級→上級→中級の順番で滑走した時も、6.2と比較的高い値を記録している。一方、最も低い値は

上級→中級→初級、上級→初級→中級の滑走順番の時であり、評価得点の平均は5.3であった。この値は最高得点の平均より約1点も低い値である。上級及び初級スキーヤーの、各々の評価得点の最高値と最低値の差が0.5点であったのに対し、中級スキーヤーにおいては約1点であったことは、中級スキーヤーの技術評価は初級、上級スキーヤーの技術評価に較べ困難性を含むものとも考えられる。

表3は総合評価について、6通りの組み合わせにおける上級と中級、中級と初級、上級と初級スキーヤーについて、総合評価得点の差について比較したものである。この表から、いずれの滑走順番においても上級と中級、中級と初級、上級と初級スキーヤーとの間には、0.1%水準で有意な差が認められる。このことは、モデル・スキーヤーの技術能力の差が明確であったものと考えられる。

表4は総合評価得点と、評価項目のその他の5項目との相関について、滑走順番が1の中級→上級→初級、6の中級→初級→上級の2つの滑走順番の組み合わせについて表したものである。

総合評価と「スキーの平行操作」の評価得点との関連については、滑走順番が1の中級→上級→初級の場合において、上級スキーヤーでは有意な関係が認められなかった。中級、初級スキーヤーにおいては、滑走順番の1と6で、ともに各々0.1%水準で有意な相関が認められた。

「外向傾姿勢」と総合評価との間には、上級スキーヤーで、滑走順番が1の中級→上級→初級の時に1%水準で、その他のスキーヤーでは0.1%水準で相関関係が認められた。

「リズム」との関係を見ると、初級スキーヤーで滑走順番が6の中級→初級→上級の場合に5%水準で、その他においては0.1%水準で、総合評価との間に有意な相関が認められた。

「脚の曲げ伸ばし」と総合評価との間には、初級スキーヤーで滑走順番が6の中級→初級→上級の場合において1%水準で、その他においては0.1%水準で有意な関係が認められた。

「ストックワーク」との関係については、初級スキーヤーにおいて滑走順番が6の中級→初級→上級の場合において、1%水準で、その他においては0.1%水準で総合評価との間に有意な関係が認められた。

以上のようなことから、スキー技術の評価において観察者であるスキー指導者は、スキーヤーの「スキーの平行操作」「外向傾姿勢」「リズム」「脚の曲げ伸ばし」「ストックワーク」といった観点到評価基準をおき、スキー技術の総合評価を行っているものと考えられる。しかし、初級スキーヤーについては上級、中級スキーヤーに較べ、総合評価の項目とこれらの技術評価項目との間の相関は小さいことから、初級スキーヤーの技術は未熟であり、これらの評価項目が総合評価のための評価基準となり難いことを示唆しているとも考えられる。

運動の知覚は、熟練者においては、大まかな運動をとらえると同時に細かな運動も知覚していく⁷⁾ことから、スキー

における技術の個々の評価は、総合評価と密接な関わりをもっているものと推察される。観察者はスキーヤーが自分の眼前に滑走してくるまでに、様々なスキー技術要素を分析しながら、総合的なスキー技術能力の評価をしなくてはならない。

あるいは瞬時に総合評価を行い、さらに個々の技術要素の評価へと移行していかなければならない。

評価によってとらえられる基準は、フォーム、運動の流れ、運動の軽快さと確実さである⁹⁾とされているが、斜面を滑降するスキーはスピードを含むことから、観察者は、そのスピードでスキー技術の評価しているとも考えられる。すなわち、スキーにおいてスピードがあるということは、スキー技術能力が高いということを示唆しているとも推察され、上級スキーヤーは初級スキーヤーに比べ、高いスピード能力を持っていることから、観察者はスピードに対し高い評価を与えているとも考えられる。さらに、スキーにおいては運動リズムも技術の重要な要素となっている¹⁰⁾¹¹⁾が、ウエーデルンのようなリズムカルな運動に主体をおいたものでは、特に重要であると指摘されている¹²⁾。このように、スキー技術の滑走姿勢からの形態的評価においては、観察者は様々な評価項目について滑降してくるスキーヤーを瞬時に分析しなくてはならない。

滑走順番の違いにより、同一のスキーヤーにおいて、評価得点が異なることは、観察者がスキーヤー同志の比較評価から、形態的評価を実施していることによるものと考えられる。スキー技術の評価基準が明確化されていないにもかかわらず、基礎スキー技能テストの受験者数は、年々増加の傾向にありスキーヤーの多くが、これを自己のスキー技術能力の適切な評価としてとらえている¹³⁾ことを憂慮する必要があることが指摘される。観察者となる指導者は、スキー技術能力が同一水準のスキーヤーを対象とした評価を数多く実施することにより、的確な評価能力をつけるとともに、スキー技術能力の明確な評価基準の設定が望まれる。

結 語

競技スキーに対し、ゲレンデにおけるスキーをレクリエーション・スキーとして、その技術評価について検討を試みた。

初、中、上級スキーヤー3名のモデル・スキーヤーに6通りの順番で滑走させ、そのビデオ・フィルムから34名の上級スキーヤーが技術評価を行った結果、以下の結論を得た。

- 1) 初、中、上級スキーヤーの滑走順番が入れ替わると、各々のスキーヤーに対する総合評価も異なる。
- 2) 上級スキーヤーは、初級スキーヤーの後に滑走した時に、総合評価は最も高く、中級スキーヤーの後に滑った時が、最も低い値を記録した。
- 3) 中級スキーヤーは、滑走順番が最初の時に最も高い値の総合評価を示し、上級スキーヤーと初級スキーヤーの後に滑走した時が最も低い値を記録した。
- 4) 初級スキーヤーは、上級スキーヤーの後に滑走した時に最も高い値を示し、最初の滑走時と中級スキーヤーの後の滑走時に低い総合評価を示した。
- 5) 初級-中級-上級の6通りの組み合わせによる、い

ずれの滑走順番においても、上級-中級、中級-初級、初級-上級スキーヤー間には0.1%水準で有意な差が認められた。

6) スキーの総合評価は、「スキーの平行操作」「外向傾姿勢」「脚の曲げ伸ばし」「ストックワーク」「リズム」等の評価項目との相関が高いことから、これらの技術項目の評価がスキー技術能力の総合評価となっていると考えられる。

引用文献

- 1) 金子和正「スキー技術の評価に関する研究-主観的一側優位性と客観的一側優位性について-」第35回日本体育学会大会号, p. 669, 1984.
- 2) 金子和正「スキー技術の評価に関する研究-主観的評価と客観的評価について-」共栄学園短期大学紀要2, pp. 163-169, 1986.
- 3) K. Meinel「スポーツ運動学」金子明友訳, pp. 122-130, 大修館, 1978.
- 4) 林利八「小・中・高のスキーのまとめ」新体育, pp. 80-82, Vol. 49, No. 12, 1979.
- 5) 青木邦男「実技測定評価に及ぼす評価者の技能水準および個人的特性の影響」学校体育, 第39巻, 第1号, pp. 132-139, 1986.
- 6) 松下雅雄、阿江通良「運動観察に関する研究-技能水準の相違の観察力について-」体育の科学, Vol. 36, No. 5, pp. 393-397, 1986.
- 7) V. S. ラマチャンドラン「人は見かけの運動をどう知覚するか」サイエンス, 第16巻, 第8号, pp. 94-104, 1986.
- 8) W. ケラー「ゲシタルト心理学」東京大学出版会, pp. 97-133, 1985.
- 9) F. フェッツ「体育の一般方法学」pp. 330-336, プレスギムナステカ, 1977.
- 10) 中枝義行「ウエデルンの構造分析-技術要素の分習と結合学習について-」広島大学教育学部紀要, 第4部, 17, pp. 97-102, 1968.
- 11) 松永英吉他「スキー回転の動きに関する研究(1)-ウエーデルンの動作について-」明治大学教養論集, No. 64, pp. 1-16, 1971.
- 12) 永田晃他「バイオフィードバック・トレーニングによるスキー・リズム動作の変容」Japanese Journal of Sports Sciences, Vol. 5, No. 6, pp. 389-393, 1986.
- 13) 日本スキー研究委員会「第1回スキーヤー意識調査報告書」1983, 「第2回スキーヤー意識調査報告書」1984, 「第3回スキーヤー意識調査報告書」1985.

星野敏男 (明治大学)

Outdoor Education Environmental Education Adventure Education Humanizing Environmental Education

諸 言

アメリカにおいてOutdoor Education という言葉が教育界も含めて広く一般に使われるようになってきたのは、1950年代に入ってからである。これはそれまでのCamping Education, School Campingとよばれていたものが主に政策的な理由によりOutdoor Education とか Resident outdoor Education という呼び名に換えられていったことが大きなきっかけとなっている。当時Camping という言葉は、サマーケーションの中で行われるレクリエーション的活動として受け入れられており、教育とは何ら関係を持っていないものと考えられていたからである。本研究は、このようにさまざまな変遷を経ながら現在に至っているアメリカの野外教育の歴史を探ることにより、それがいつ、どのように発生し発展してきたのか、また、指導者や時代の流れの中でどのように変化してきたのか、将来の展望をも含めて明らかにしていこうとするものである。

野外教育とは何か、という用語そのものの概念規定については実に多くの定義がなされており、学術誌などの専門書に定義された主なものだけでも17の異なった見解が発表されている。本研究では、これら多くの定義を包含したものとして今でも広く用いられている、“Outdoor Education is education in, about, and for the outdoors.”という定義を用いるものとする。

また、本論で扱う野外教育の歴史とは、アメリカの学校教育の中で行われてきた、主に宿泊を伴うような野外教育の歴史であり、いわゆる組織キャンプや野外活動そのものの歴史とは異なる。

野外教育の歴史

ここでは野外教育の歴史を1930年以前と以後の二つに大きく分け、さらに1930年以降については、ほぼ10年毎にその年代の特徴を述べる。また、現在の野外教育の思想的・哲学的バックボーンともなっている初期の指導者達の考え方についてもふれる。

1930年が野外教育の歴史の中でひとつの大きな区切りとされるのは、次のような理由からである。

1. L. B. Sharp のドクター論文、“Education and the Summer Camp—An Experiment—”が刊行されたのが1930年で以後の野外教育界に多大な影響を及ぼしたこと、

2. Dimock & Hendly がその著書 *Camping and Character* でキャンプの教育的効果を述べるとともに、今後学校当局はますますキャンプを含んだ教育プログラムを進展さ

せていこうと表明したのが1929年であったこと、

3. 1800年代から1930年までは、それまでのいわゆる組織キャンプから学校キャンプへのゆったりとした流れの中での移行期としてとらえることが可能であること、

4. Donald R. Hammerman が彼の論文 “An Historical Analysis of the Sociocultural Factors that Influenced the Development of Camping Education”の中で1930年代を Period of Inception としてそれ以前の時代と明確に区別したこと、また、この区別を多くの研究者が支持していること、など、以上のような理由があげられる。

1930年以前 —最初の学校キャンプ—

現在アメリカの教育界で広く行われている宿泊を伴った野外教育 (Resident Outdoor Education) や、さまざまな機関で実施されている組織キャンプ (Organized Camping) と呼ばれているものの始まりは、一般には1861年に Frederick William Gunn によって始められた School Camping が最初のものであろうと言われてきた。

しかし、最近の研究では1823年から34年にかけてマサチューセッツの Round Hill School において実施された School Camping が野外教育のはじまりではないだろうとも言われている。

この二つの学校で行われたキャンプのうちどちらを野外教育のはじまりとするのかという点に関しては今もって見解が分かれている。ここでは、この二つのキャンプに関して、その特徴的な面だけを抜き出しておく。

Round Hill School

創始者の一人 J. Cogswellは熱心な徒歩旅行者で、数年間ヨーロッパを旅行した後、その自然の美しさやハイキングを通して得られる心と身体の健康を多くの若者にも分かち与えようと考え、1823年学校を創設する。彼の学校では毎週土曜日の午後は12~16マイル (約20~25 km) 歩き、秋の感謝祭の週末には乗馬と徒歩を組み合わせた約160 Km 歩いたという。彼はまた、植物学や鉱物学に造詣が深く、ハイキングの途中でその指導を行ったとある。また、この学校はカリキュラムの一部として体育を取り入れおり、体操の教師を雇ったアメリカで最初の学校であるとも言われている。

The Gunnery Camp

このキャンプは既によく知られているように1961年、

Frederick W. Gunn によってはじめられたものであり、今でも最初のOrganized Camping と言われているものである当時多くの子供達は兵士になることを望み、特に兵士のようにテントの中で寝ることに強いあこがれを持っていた。Gunn夫妻は1861年60人の生徒全員を2週間のキャンプに連れだした。幌馬車に荷物を積み、2日間の行程でキャンプ地についた彼らは、そこでボートセーリング、フィッシング、徒歩旅行などをして過ごした。このキャンプは1861年から79年まで合計15回実施された。

この二つの学校で行われたプログラムは、いずれも、運動、健康、自然観察、娯楽、といったものの目的のために作りあげられたプログラムであり、それらが、はたして野外教育と呼べるものであったのか、あるいは、いわゆる娯楽としてのレクリエーションであったのかという点に関しては今もって論議が繰り返されている。どちらのプログラムにもそれぞれ、体育学、博物学、あるいは今日言われているレクリエーションやレジャーといったものの要素がふくまれており、一概に決めつけることは困難である。

ただひとつ言えることは、この二つの学校で行われたプログラムでは、現在アメリカの野外教育界でさかんに用いられ、教えられているような環境に対するステewardシップ (Stewardship of the Environment) や自然そのものに関する教育等は全く重要視されていなかったということである。

この二つの学校によって始められたキャンプを見てわかるように、初期の野外教育とは、いわゆる野外活動であったり、あるいはまた時期も夏期休暇中に行われたキャンプの中だけに限られているだけであった。つまり、当時はまだ普通のクラスルームの中に野外教育が取り入れられていたわけではなかった。また、教員にしても、野外での指導に長けている者、よく訓練されている者は当時まだ少なかった。

1930年以前に学校の教科の中に野外教育プログラムを取り入れた学校は殆どなかったが、この間、学校とは別に、1861年の Gunnery Camp をきっかけに全米のあちこちでいわゆる組織キャンプが活発に行われるようになってきたYMCA、YWCA、ボーイスカウト、ガールスカウト等がキャンプをはじめたのもすべて1890年から1912年のあいだのことである。同時にプライベートキャンプやチャーチキャンプ(教会キャンプ)もともに大きく広まっていった。また、1910年までには、それまでバラバラだったキャンプディレクター協会がひとつにまとまり、現在のアメリカキャンプ協会(ACA)の前身である Camp Directors Association となって設立された。

野外教育発生の思想的背景について

主にレクリエーションな活動を目的としておこなわれた初期の野外教育であったが、それらが1930年以降になって Camping Education School Camping そして

Outdoor Education へと発展していった背景には多くの指導者の指導的基盤となった教育哲学や思想が深くかかわりあっていることは論を待たない。

既に古くから、ルソー、ペスタロッチ、スペンサーといった教育学者、哲学者が教育界に大きな影響を与えてきたのは周知のことである。19世紀の後半から20世紀の前半にかけても特にその時代の野外教育の発展に影響を与えた教育者は多数いた。その中でも特に、John dewey、William H. Kilpatrick、L. B. Sharp、L. H. Bailey、Louis Agassiz、William Gould Vainal、といった教育者達を大きな存在としてクローズアップすることが可能であろう。

そして、これらの教育者達はその後の野外教育への影響を考えた場合、大きな二つのグループに分けることができる。すなわち、デューイ、キルパトリック、シャープというプラグマティズムの思想に強く影響を受けたプラグマチストグループ(体験学習グループ)、とアガシス、ベイリイ、ヴァイナルへと続く Nature Study グループ、すなわち自然学習グループである。後に野外教育の発展に大きな影響をあたえたスミス、ドナルドソン、ハンマーマンなどもこの二つのグループから大きな影響を受けたことはいうまでもない。このふたつのグループの教育思想の流れは今でもアメリカばかりか日本においても強く流れているのを感じとることができる。日本では体験学習としての野外活動や野外教育が、アメリカからキャンプが伝わってきた当時そのままに近い状態で定着していったのに対し、アメリカではこの自然学習グループの教育思想を背景とした野外教育が特に1960年以降急速に発展、拡大し、さまざまな様相を呈していくようになるのである。

スクールキャンプがオーガナイズドキャンプ・ムーブメントの中から発展してきたものであることは論を待たないこの時期、すなわち、キャンプがいわゆる教育を目的に組織されはじめた1800年代から1930年までの時期は、さまざまな組織キャンプにおけるプログラムを教育者達がスクールキャンプ・プログラムとして受け入れはじめた時期であり、この意味においては、時代的にこの時期を移行期としてとらえることができよう。

この時期、野外教育はキャンプの中で徐々にその形を整えていきつつあった。ただひとつこの段階で足らなかったものは、このようにさかに行われるようになってきたキャンプが、教育の目的とどのようなかかわりあいを持っているのかという、教育的なうらづけであった。つまり、キャンプの効果を学校教育の目的とのかかわりあいから実証し、再確認していく場や、そのための指導者といった条件が整っていなかったのである。この条件をやがて満たしてくれたのが Dimock & Hendly の Camping and Character や Bernard S. Mason の研究論文 であり、さらにまた指導者としてもその思想とともに後の野外教育に最も大きな影響をあたえた L. B. Sharp のドクター論文 Education and the Summer Camp であった。こうして時代は1930年代へと大きな変化を遂げながら進んでいった。

1930年以降の野外教育

1930年以降の野外教育の発展を歴史的にみた場合、その発展過程をいくつかの時代区分に分けて考えることが可能である。区分のしかたは、研究者やその観点によりさまざまである。代表的な例としては、ディモック、ハンマーマン、カークの区分、フィリスの指導者による区分、また、スミッセンによる研究の変遷から見た区分などがあげられる。ここでは、これらの先行研究をふまえた上で、野外教育を教育界における新しいムーブメントそのものとしてとらえ、それが成長・発展・変化していく過程を特徴的ないくつかの時代に区分し検討していくこととする。時代の区分と命名は以下の通りとした。

1. 発生期 (1930~39)
2. 啓蒙期 (1940~49)
3. 定着期 (1950~59)
4. 転換期 (1960~69)
5. 多様化の時代 (1970~79)
6. 人間化の時代 (1980~)

1. 発生期 (1930~39)

この時期は野外教育としてのスクールキャンプが実際に実施されるよりもむしろ議論された時代である。もちろんいくつかの進歩的な学校ではキャンプ・プログラムを学校教育の中に取り入れるところもあったが、全体としてみると学校教育のなかでキャンプを実施しているところは少なかった。しかし、先に述べたように、キャンプの教育的効果に関する論文や著述などを通して、教育者達のあいだではキャンプの教育的効果が徐々にではあるが認められていきつつあった。特にL. B. シャープの論文は関係者のあいだで大きな反響をよんだ。彼の論文はデュイやキルパトリックによって形づくられた教育の目標とキャンプとの関係について分析を試みたものであった。当時の彼の考え方の中では、学校教育としてのキャンプを意識したものではなかったが、彼はこの論文を通してキャンプがきわめて教育的な要素を持っているものであるとの確証をもった。

とは言え、この時期に行われたスクールキャンプは、これまでYMCAやボーイスカウトなどによって実施されてきた伝統的なサマーキャンプに近いものであった。キャンプ・プログラムとしては、自然観察、キャンプクラフト、水辺活動、ハイキング、乗馬等であった。この頃のスクールキャンプの目標は、主に共同生活や労働体験などに中心がおかれていた。これは、生活教育という、当時教育界で流行していた教育哲学に大きく影響をうけてのものであった。

一方、当時行われていたオーガナイズドキャンプ、いわゆる組織キャンプとは青少年の健全な育成を目標にボーイスカウトやYMCA、教会などの機関が中心となって行われていたもので、集団生活や規律の重視とともにレクリエーションとしての野外活動が中心的プログラムであった。

ただし、これらの各種機関が主催したサマーキャンプに参加できたのは当時の中産階級以上の子弟に限られていた。つまり、当時のいわゆるオーガナイズドキャンプを経験できたのは、ごく限られた子供たちだけであった。これに対し、スクールキャンプの場合は、貧しい家庭の子供たちや黒人の子供たちなど誰でも参加できるという点に特色があった。スクールキャンプが普及していくということは、とりもなおさず一般の多くの子供たちにキャンプへの参加の機会が与えられていくということでもあった。当時は同じような内容を持ったキャンプであったが、組織キャンプとスクールキャンプの違いはこの点にもあった。以後、組織キャンプとスクールキャンプはそれぞれ違った道を歩みはじめ、お互いに影響しあいつつもそれぞれ独自の変化、発展を遂げていくこととなる。

本論は、以後、現在アメリカの学校教育の中で用いられている野外教育の原点となった School Camping や Camping Education の発展、変化を歴史的にとらえていくとするものであり、いわゆるキャンプそのものの歴史を論じているのではないことを改めて断っておく。また、YMCA など各種の機関が主催したキャンプをここでは便宜上組織キャンプ、あるいはオーガナイズドキャンプと呼んだ。

2. 啓蒙期 (1940~49)

この時期は現在の野外教育の前身である Camping Education や School Camping がさまざまな研修会、会議等を通じてアメリカ東部を中心に各地へと広まっていった段階としてとらえることができる。そしてこの時期、野外教育の必要性を説き、その啓蒙に大きく貢献したのが、L. B. Sharp と Julian Sumith の二人であった。ここでは全く別々にはあったが、同じ時期に活躍した二人の活動を中心に述べる。

L. B. Sharp と Life National Camp

既に述べたように、1930年代の後半までには、キャンプを学校教育の中に取り入れることは、きわめて効果的、かつ価値あることであるという認識が徐々に学校教育関係者の中に広まりつつあった。また、シャープが中心になって実施していたライフキャンプには多くの教育関係者が見学にくるようになっていった。

かねてからキャンプの分野における本格的な指導者の養成やトレーニングの必要性を感じていたシャープは、1940年、キャンプリーダー養成のための第一回ナショナルキャンプを開催することとなった。このナショナルキャンプはきわめて有能なスタッフで構成されており、彼らはこのキャンプの内容を実にしっかりしたものにすると同時に、スタッフの多くはその後長年にわたって野外教育の発展にきわめて重要な役割をになうようになっていった。自然学習で著名な W. G. Vinal などこのスタッフの一員として活躍した人物であった。

1940年代を通じてこの6週間のサマーセッションは継続され、アメリカ、カナダのさまざまな地域から教育関係、教会関係、そして、Youth 関係の指導者が参加した。参加者は皆シャープの指導のもとにその理論と実践の両方を学びとっていったのである。1942年にはニュージャージー州の要請により、シャープのもと、六つの州立カレッジにおいて、最初の教員養成コースのための野外教育集中授業が開講されるまでに至った。また、1946年には教育局長や教員養成系の大学の教授、校長らを招き3日間の会議を開くなど、ナショナルキャンプを積極的に国内に広めていったこれらの活動を通して、シャープはこの時期の野外教育における第一人者として万人に認められるところとなった。

また彼は、ナショナルキャンプのリーダーとしての役割を長年務めると同時に数多くの論文や記事をさまざまな機関を通じて発表し、キャンプ教育を学校教育の中に取り入れていくことを強く主張していったのである。

今でもよく引用される彼の主張に次のようなものがある一室内（クラスルーム）において最も有効に教えることのできるものは室内で教えらるべきであり、反対に、自然の物や自然の環境を直接体験することによってより有効に学ぶことができると考えられるものは、そこ（Outside the School）で教えらるべきである。—というものである。これは、当初から彼が一貫して主張してきた学校教育の中でのキャンプ教育のすすめである。しかし、ナショナルキャンプを続けていくうちに彼の主張にもその内容にすこしずつ変化があらわれてくる。1947年に発表した記事の中では、それまでどちらかというとキャンプのための教育というような意味で用いていた Camping Education を教育のためのキャンプ環境の利用、すなわち、キャンプ場面を用いた教育としてとらえるようになっていったことが伺われる。また彼は、この頃から Camping Education という用語とともに Outdoor Education という用語を多く用いるようになっていった。

Camping Education や Outdoor Education という言葉そのものを最初に使いはじめたのは誰なのか明らかではない。しかし、少なくとも、Camping Education という言葉を定着させたのはシャープであり、さらにこの言葉を Outdoor Education へと変えていったのも彼である。彼は野外教育を、ひとつの教科に限らず、もっと大きな学際的なもの、あるいはまた、学習のための方法や条件、環境としてとらえ、その適用の場をキャンプ場面ばかりでなく、学校の校庭など身近な場所から広い自然界までに広めていった。すなわち、学習のためのすべての環境の利用といったような大きな概念として野外教育というものをとらえるようになっていった。

Julian W. Smith と Clear Lake Camp

野外教育の必要性を説き、その基盤を築きあげてきたのはL.B. シャープであるが、この野外教育が現在広くアメリカでおこなわれているような野外教育として定着していくにはミシガン州におけるスクールキャンプ運動、野外教育

運動によるところが多い。というのも、ミシガン州では全米に先駆けて州の教育法のもとで、学校が通常の授業の一部としてキャンプ場を持ちそれを運営しても良いということが法的に認められたからであった。1945年第二次世界大戦直後のことである。そしてこの教育法制定に至るプロジェクトのディレクターとして大いに活躍したのが Julian W. Smith であった。

彼はシャープがナショナルキャンプを実施した同年（1940年）に、Clear Lake Camp において、初めての年間を通じてのスクールキャンプ・プログラムを開発していった。彼が開発していったコミュニティスクールキャンプや彼が中心となって主催したナショナルワークショップは、シャープのナショナルキャンプと並び、この時代における野外教育の先駆けをなすものであった。彼の唱えた野外教育については、既に我が国でも知られているが、この時期スミスが開発したコミュニティスクールキャンプは、主に四つの大きな目標から構成されていた。労働体験、健康生活、社会（共同）生活、レジャー活動であった。とはいえ多くの場合は、野外生活技術やアーチェリー、フィッシング、ハンティングなど、いわゆるレジャー、レクリエーション的活動がそのプログラムの主流を占めていた。シャープのナショナルキャンプと同じく、このクリアレイクキャンプには多くの教育関係者が集まり、スミスの唱えるコミュニティスクールキャンプは一気にミシガン州全体へと広がってゆき、州の教育法制定のための大きな原動力となっていた。

スクールキャンプや野外教育の分野において、シャープがリーダーとして既に高い名声を得ていた1940年代、スミスはその教育活動をミシガン州のレベルまで押し上げていき、野外教育のさらなる発展のための土台づくりをしていた。スミスの野外教育への貢献は1950年代に入り、さらに一層巨大なものとなっていく。シャープに代わるニューリーダーの出現でもあった。シャープのその独特のリーダーシップ性が初期の東部アメリカにおけるキャンプ運動の中で傑出した個人的な影響力として認められているのに対し、ミシガン州が急速にアメリカ全土に対してその指導的立場を築きあげていったのは、スミスのほかに George Donaldson や Hugh Masters というきわめてすぐれた野外教育信奉者が一丸となって野外教育を押しすすめていったところが大きな要因であろう。

もちろん、場所が離れているとは言え、同じ時期に行われたこの二つのキャンプは、お互いに影響しあっていたのは事実である。ミシガン州の指導者たちはナショナルキャンプの6週間のサマーセッションに参加しているし、またシャープもクリアレイクキャンプにそのスタッフを連れて参加しているからである。1940年代から50年代にかけて、シャープとスミスはそれぞれに並行して野外教育の発展に貢献していくこととなる。

3. 定着期 (1950~59)

この時期の大きな特徴としては、それまでのレクリエーション的なプログラムから、より学校カリキュラムに関連を持ったプログラム (Curriculum Oriented Program) への移行期としてとらえることができる。さらにこのような動きにもとない、それまでさかんに使われてきた School Camping という言葉も徐々に影をひそめ、代わりに、Outdoor School, Outdoor Laboratory, School-in-the-Wood, など、新しい用語も続々と登場してきた。もちろん、Outdoor Education という用語がその主流を占めていたことは言うまでもない。また、さまざまな野外教育関係の組織が発足したり、学校キャンプ関係の規程が制定されるなど、この時期はムーブメントとしての野外教育がアメリカの教育界にほぼ定着していった時期としてとらえることが可能である。

1950年代に入り、スミスは野外教育界のニューリーダーとしてますますその頭角をあらわしてきた。この時期さかんに設立されていった野外教育関係の組織のうち、特に銘記しておかなければならないものにスミスが中心となって1955年に発足した Outdoor Education Project をあげることができる。これは AAHPER (American Alliance for Health Physical Education and Recreation) のもとに設立されたものであり、スミスはこのプロジェクトのディレクターであった。このプロジェクトは AAHPER の後援という当初の性格からして、アウトドアのレクリエーション活動を推進するためのものであったが、多くの野外教育関係の権し、ワークショップ、企画に対し、積極的に応援し、次第に野外教育運動推進の中心的存在ともなっていた。1950年代のアメリカ野外教育は、スミスとこの O・E・P を中心に動いていったと言っても過言ではない。

現在、日本の各地で実施されている学校キャンプあるいは林間学校などはヨーロッパなどからの影響も考えられるが、1940年代後半から1950年代にかけて、すなわち、戦後すぐにかけてのアメリカのこの時期の影響を強く受けたことも事実であろう。日本において、学校キャンプがその後アメリカのように野外教育として大きく発展・変化していかず、ある一定の形を保ったまま定着していった背景にはさまざまな要因が考えられる。勿論、当時日本のキャンプに影響を及ぼしたものが、YMCA やボーイスカウトなどで行われていた、いわゆる組織キャンプからのものであったことにもよるが、それとは別に、当時アメリカにおいて野外教育運動推進の中心人物であったスミスの考え方、あるいはまた、それを受け入れる日本の側にも、その後の日本の野外教育、特に、キャンプを決定づけていくような何らかの要因があったのではないかとおもわれる。以下この点についてすこし触れてみたい。

スミスの考えた野外教育は基本的に Education in the Outdoors と Education for the Outdoors に分けて考

えることができる。Outdoor Education という用語がシャープによって定着させられてきたことは既に述べたが、この Outdoor Education をより広範囲な意味を持ったものとして解釈していったのは、スミスが最初であったろうと思われる。

しかしながら、彼の発表した記事や著作などを見ると、広い意味で解釈されていた野外教育の中でも彼が最も強調していたものが、Outdoor Skill の発達やレジャー教育の必要性を説くことであったことがわかる。もちろん、彼がディレクターであった O・E・P (Outdoor Education Project) が AAHPER に属していたこと、また、このプロジェクトのスポンサーがいくつかのスポーツ用品メーカーであったことなどもこの O・E・P の持っていた性格的な背景として考慮に入れておかなばならないであろう。

さらにまた、組織キャンプや学校キャンプがアメリカから伝わってきた当時の日本では、キャンプはどちらかというところと体育の分野の中ですめられており、スミスの考える Outdoor Skill の考え方はさらに日本流に解釈されていったと見ることができるのではないだろうか。スミスの考えるカリキュラムとの関連の中でのスクールキャンピングのうち、日本では、それまでの歴史的背景や文化的背景、あるいは、後のスポーツ振興法の影響などにより、キャンプの中でも特に野外生活の体験や野外生活技術の修得、あるいは、体育的活動といったものに重きが置かれたキャンプが広まっていったものと思われる。

アメリカでは、このあと60年代に入り、スクールキャンピングが野外教育として、カリキュラムとの関連の中で大きな変化をとげていくのに対し、日本では、飯ごうすいさん、登山、ハイキング、オリエンテーリング、キャンプファイアーといった、ある一定の形を持ったキャンプや林間学校といったものが、カリキュラムとはかなりの距離をおいたところで定着していくこととなる。

この時期、すなわち1950年代は、アメリカにおいて野外教育が定着した時代であったが、反面、野外教育の出発点となった組織キャンプとそこから派生してきたスクールキャンピングとの間に最も大きな隔たりができた時代でもあった。この頃までには、スクールキャンピングは既に組織キャンプから独立し、独自の道を歩み始めていた。スクールキャンピングが、レクリエーション的なプログラムを少なくし、カリキュラムに関連したプログラムを開発していったのに対し、いわゆる組織キャンプは依然として共同生活を基本とした野外生活や、レクリエーション活動、すなわち、アーチェリー、フィッシング、ハンティングに重きを置き、学校カリキュラムに関連したプログラムは殆ど織り込んでいかなかった。この50年代は野外教育が定着していった時代であったが、それでもなお、カリキュラム中心の野外教育をしていくのか、キャンプ中心の野外教育をしていくのかということが指導者のあいだで大きな問題として論じられていたことが Robert Brimm (1959) の論文などからも充分伺うことができる。

これまでの時代に較べると、この60年代から70年代初頭にかけての野外教育の動きをひとつの言葉でくくるのは多少困難である。強いて言えば、自然資源や自然環境に対する人間の責任性が問われた時代、あるいは、野外教育から環境教育への転換期としてとらえることが可能であろう。これらを考慮しここでは転換期としてこの時代を扱うことにした。

Ecology (生態学) や Conservation (自然保護) という言葉が野外教育分野に限らずさまざまな人々によってもてはやされたのもこの時代である。また、野外教育よりもさらに大きな概念として Environmental Education (環境教育) という用語があらわれたのもこの時代であった。Environment とは、森とか湖、海といったある特定の自然つまり、Nature とか Outdoors だけを指すのではなく、それらをも含めて、都会、郊外、太陽、エネルギー、そして人類まで、我々をとりまくありとあらゆるものを指す言葉として使われている。とにかく、この60年代から70年代にかけては我々をとりまくあらゆる環境 (Environment) が国家的規模で取りざたされた時代であった。

野外教育のための各種の施設が各地に爆発的に増えたのもこの時代である。時の大統領 John F. Kennedy の声明 (1963) もさることながら、最も、強くこの傾向に拍車をかけたのは、1965年、教育委員会によって制定された、E S E A Title III (Elementary and Secondary Education Act) と呼ばれる野外教育やキャンプ教育に対する特別基金の制度であった。1966年から67年の2年間のあいだに、野外教育を含む89のプロジェクトに対して500万ドル (当時の日本円にして約18億円) が援助されたという。さらに1969年、月面からの地球の姿がテレビ画面を通じて国民の前に放送されるに及び、一惑星としての地球を見直そうとする気運や、地球の自然に対するスチュワードシップ (Stewardship) といった意識が高まり、それにつれて、野外教育も実にさまざまな方向へと枝分かれしつつ、その内容・プログラムにも大きな変化が生じていった。

また、多種多様なプログラムの発展と、それにとまなう用語やマニュアルの出現は、この時期を象徴する現象である。特にパッケージ・プログラム (Packaged Programs) とよばれる指導者のための野外教育マニュアルや指導ハンドブックは、この時期急速にアメリカ全土に広まっていった。Investigating Your Environment Series や Outdoor Biology Instructional Strategies (O B I S)、また、Project Learning Tree (P L T) などはこの代表的なものである。このような現象は、さらにその傾向を深め、次の時代へと受け継がれ、それぞれがお互いに影響しあいながらあるものはひとつのものに集約され、またあるものはさらに新しい方向へと発展、変化していった。この60年代は野外教育がその歴史のなかで最も大きな変化を見せた時期であった。

60年代の大きな転換期をむかえたあと、さまざまな方向に発展していった野外教育は、70年代に入りますますその傾向を強めていった。野外教育という概念に対する新しい考え方や、教育の場として自然を利用する場合の新しい利用の仕方の出現など、もはやひとつのラベルでその傾向を言い表すことは不可能に近い状態となっていた。多様化の時代と言うよりも、むしろ乱立の時代とでも言ったほうが良い程、野外教育の扱う対象はあらゆる分野へと広まっていった。

しかしながら、このような多様化の中にあっても、なおこの70年代の野外教育の傾向を二つの特徴的な流れの中でとらえることは可能である。Environmental Education と Adventure Education の二つである。

① Environmental Education

60年代から急速に広まっていった環境教育の動きは、70年代に入っても依然として野外教育の主流を占めるものであった。しかもこの扱う対象は、かつての40年代、50年代の頃とは較べものにならない程多くものを扱うようになった。伝統的な自然観察に類したものから、生態学、自然保護はもちろんのこと、エネルギー問題、都市問題、さらには人種問題など、我々をとりまくあらゆるものを対象とするようになっていった。小学校における3泊4日から一週間程度の宿泊野外教育 (Resident Outdoor Education) は、既にこの時期までには、ほとんど常識と言っていいほど学校教育の中に織りこまれていった。このような学校行事は依然として野外教育という言葉で言い表されていたがその扱う対象は、いわゆる自然環境から、人口問題、公害、交通問題など、トータルとしての環境問題を扱っており、内容的には、すでに Environmental Education (環境教育) と呼んだほうがふさわしい内容となっていた。

Steve Van Matre の唱えた Acclimatization や Acclimatizing、さらには Sunship Earth が野外教育の新しい試み、アプローチとして新風をまき込んだのもこの時期である。これは、個人と自然との関係を人間の五感をフルに活用して、より直接的に肌で感じとってこうとするプログラムであり、野外教育の指導原理ともいべき直接体験を改めてみなおそうとするものであった。このプログラムは現在もおおく応用されており、さらに発展していく勢いをみせている。

② Adventure Education

アドベンチャー教育は、1962年アメリカに O B S (Outward Bound School) が紹介された結果として引き起こされたものであり、当初は Secondary School Level (中高校生) に適用されはじめた。1970年代に入り、多くの野外教育関係のセンター、施設、学校が、この O B S の哲学をさまざまな方法やプログラムを用いて彼らの指導の中に生かしていった。O B S の主張する基本的哲学とは、「大自然の中で自己発見をした者はそのまま自己の認識から他人

への思いやり、あるいは、学校、家庭、社会といった、生活をとりまくすべての環境にたいする関心へと移行させることができる。」というものである。

○BSのアメリカへの上陸を契機として、野外教育場面ではもちろんのこと、一般のキャンピングスクールなどでも、バックパッキング、ロッククライミング、登山など、克服型のプログラムが提供されるようになってきた。また野外教育関係の施設などでも新しく、チャレンジコースやロープコース、イニシアティブコースなど、アドベンチャー的な要素を備えたコースや、仲間の協力を要求されるようなコースを、その施設の中に保有するところが多くなっていった。

このような、アドベンチャープログラムや、Acclimatizationプログラムがこの時期急速に広まっていったのは、先の60年代の転換期からこの70年代の多様化の中で、それまでの野外教育が、あまりにも理科教育化しすぎていったための反動とも受け取ることができよう。アドベンチャープログラムにせよアクライマティゼーションプログラムにせよ、これらはいずれも直接体験を重んじたものであり、かつてL.B. シャープが唱えた Learning Processes や Learning by Doing といった野外教育の原点に今一度立ち戻ろうとしているかのようにおもわれる。これら、直接体験を重んじた野外教育プログラムはその後70年代後半から80年代にかけて Experiential Education として、Environmental Education とはまた別な形として、新しい方向に発展していった。

6. 人間化の時代 (1980～)

レクリエーションな活動としてのキャンプが、教育の対象として考えられるようになってから既に百年以上が経った。この間、Camping Education, School Camping, Outdoor Education, Environmental Education, Experiential Education など、さまざまな用語の出現とともに野外教育の方法やその内容も大きな変化を遂げてきた。

1980年代、すなわち、現代の野外教育を論ずるには、まだまだ時を待たなければならない。しかしながら1990年代あるいは21世紀へと時代が移っていった時、将来の野外教育者達はこの80年代にどのようなラベルを貼るであろうか

70年代の多様化の傾向を受け継ぎつつ、80年代に入り、ある程度安定してきたかに見えたアメリカの野外教育であったが、ここ数年、また新しいうねりが、押し寄せて来つつあるように思われる。Humanizing Environmental Education と言われているものがそれである。日本的に意識するなら、人間化の野外教育とでも言えようか。これは、今までの野外教育プログラムのなかに、さらに人間関係や社会性を発達させるようなプログラムをより強く織り込んだものである。その意味においても、野外教育プログラムの人間化ということができよう。特に、個人主義の発達したアメリカにおいては、今、グループでの問題解決能力や、

意思決定能力を向上させるような野外教育プログラムに対しても強い関心が持たれはじめている。70年代からさかんに用いられるようになってきたイニシアティブプログラムニューゲーム、アドベンチャープログラムなどとも言え換えば、人間教育のためのプログラムであり、その意味においては、このようなプログラムの出現は現在の傾向の先駆けをなすものであったと行うことができよう。このような傾向はいずれもあまりにも多様化しすぎた野外教育への反省とも受け取ることができ、一言でいうならば、アメリカの野外教育が今再び自然の中での直接体験とそれに伴う“Learning Processes”という原点に立ち戻ろうとしている、と行うことができるのではないだろうか。

日本では、今もって、「野外教育すなわち野外活動であり、ある特定の野外活動プログラム、例えば、ハイキング歌、ゲーム、キャンプ・ファイアー等、ある一定のプログラムを消化しさえすれば結果的に野外教育になる。」といった考え方が根強く残っている。このような旧態依然とした考え方や実施方法を変えない限り、日本の野外教育に今最も欠けている環境教育の要素を加えることはもちろんのこと、レクリエーションな行事としての性格から日本の野外教育が脱皮することは困難であろう。

野外教育とは、本来、自然の持つ教育的価値を自覚した教育の一方法であり、当然、野外活動はその教育目的に応じたプログラムの一つとなるべきものである。野外教育には、さまざまな教育目標があげられているが、これら一つ一つの目標や目的を充分吟味した上で野外教育のためのプログラム理念を確立していくことが我が国の野外教育に課せられた急務ではなからうか。

日本でも近年、アドベンチャープログラムやイニシアティブプログラム、さらには、アクライマティゼーションプログラムなど、アメリカの新しいプログラムをどんどん吸収し、新しいキャンプや野外教育を展開していこうとしているところが増えてきた。このような傾向に加えてさらに環境教育的要素やプログラム理念の確立がすすめられていくなれば、近い将来、一見、まわり道してきたとも思えるほど、ありとあらゆるものを吸収し、取捨し、そして再び原点に戻ろうとしているアメリカの野外教育と、原点そのままとも言えるような古い型の中で、悪いものを捨て、良いものを伸ばそうとしてきた日本のキャンプを中心とした野外教育とが、再び、融合する時がやって来るかも知れない。

ま と め

本論は、アメリカにおける野外教育の歴史的変遷を、主に時代区分の中でとらえ、その時代の特徴的なことがらやその考え方の変化について論じたものである。したがっていわゆる組織キャンプや野外活動そのものの歴史を論じたものではない。また、本論では、野外教育に関する研究の歴史や初期の指導者たちの哲学にまで充分な考察を加えることはできなかった。これらはいずれも今後の課題としたい。

引用・参考文献

- 1) American Camping Association, Eleanor Eells' History of Organized Camping—The First 100 Years — American Camping Association Martinsville, Indiana 1986.
- 2) Bennet, Bruce L., "Camping and Outdoor Education Began at Round Hill School," *Journal of Outdoor Education* 3:14-17, Fall, 1968.
- 3) Brimm, Robert P., "What are the Issues in Camping and Outdoor Education? Camp-Centered? School-Centered?" *Camping Magazine*, 14-15, January 1959.
- 4) Dimock, Hedley S., and Charles E. Hendry., *Camping and Character*, New York : Association Press, 1929
- 5) 江橋慎四郎「野外教育」体育の科学社 1969.
- 6) 江橋慎四郎・今井鎮雄(編)「キャンプの基礎」日本 Y M C A 同盟出版部 1986.
- 7) Ford, Phyllis M., *Principles and Practices of Outdoor/Environmental Education*, John Wiley & Sons , New York 1981.
- 8) Hammerman, Donald R., "An Historical Analysis of the Socio-Cultural Factors that Influenced the Development of Camping Education," Unpublished Doctoral Dissertation, The Pennsylvania State University, 1961.
- 9) Hammerman, William M., *Fifty Years of Resident Outdoor Education*, American Camping Association, Martinsville Indiana 1980.
- 10) Hoshino Toshio., "Group Dynamics in Japanese and American Camp Programs," *Camping Magazine*, 20-23, February 1986.
- 11) Hoshino Toshio., "Outdoor Education in Japan," *Journal of Outdoor Education* 20: 30-33 1986.
- 12) Knapp, Clifford E., and Goodman, Joel, *Humanizing Environmental Education*, American Camping Association, Martinsville, Indiana 1981.
- 13) 宮下桂治「我国における野外教育の歴史的考察—野外教育の今日的課題—」*順天堂大学保健体育紀要* 第25号, 96-107 1982.
- 14) Nold, Joseph T., "Outward Bound Approaches to Outdoor Education," in *Readings in Adventure Education*, Northern Illinois University, Dekalb, Illinois 1976.
- 15) Partridge, E Dealton., "Some Psychological background of Camping," *Camping Magazine* 15:6-8 1943.
- 16) 齊藤仲次「図説 野外教育」新思潮社 1968.
- 17) 佐野 裕「野外活動における自然意識」*横浜国立大学教育学部紀要* 14 50-66 1974.
- 18) Sharp, Lloyd B., and Osborne Ernest C., "Schools and Camping," *Progressive Education* 17:236-239 1940.
- 19) Sharp, Lloyd B., "Camping and Outdoor Education," *NEA Journal* 35-6: 366-367 1947.
- 20) Sharp, Lloyd B., "Out-of-Door Education A Point of View," *The School Executive* 64:56-57 February 1945.
- 21) Sharp, Lloyd B., "Why Outdoor And Camping Education," *The Journal of Educational Sociology*, 21: 313-318 1948.
- 22) Smith, Julian., Carlson, Reynold., Donaldson, George. and Masters, Hugh., *Outdoor Education*, Prentice Hall 1972.
- 23) ジュリアン・スミス著 芳賀健治 訳「新しい野外教育」不昧堂出版 1985.
- 24) Smith, Julian W., "Outdoor Schools," *The National Elementary School Principal* 31: 30-35 1952.
- 25) Smith, Julian W., "The Outdoor Education Projects' First Year," *Journal of Health-Physical Education Recreation*, 27: 14-15 1956.
- 26) Swan, Malcolm D., *Tips and Tricks in Outdoor Education*, The Interstate Printers & Publishers 1983.
- 27) Van Matre, Steve., *Acclimatizing*, American Camping Association, Martinsville Indiana 1974.
- 28) Van Matre, Steve., *Sunship Earth*, American Camping Association, Martinsville Indiana 1979.
- 29) Winner, Morris., "Developing a Rationale for Outdoor Education," Unpublished Doctoral Dissertation, Misigan State University 1965.

B 会 場

「レクリエーション」に対するイメージの研究
 —とくに大学生の事例比較を中心に—

高橋 伸 川 向 妙 子
 (国際基督教大学) (東海大学)

イメージ レクリエーション指導 若者

7割が18歳である事から、現役で入学してきているものといえる。

I. 研究の目的

近年、若者の意識は大きく変化してきているといわれる。いわゆる「新人類」なる造語も生まれるにいたり、多様化とともに、従来までの人並み志向の常識を越えた感覚で生活を律しているといわれている。¹⁾ それぞれが直感的に感じた感覚を重視し、それによるライフスタイルの形成がみられるようになった。一方、社会全般についても、企業にみられるイメージアップを中心としたCI運動(Corporate Identity)、商品のイメージづくりなど、現代の若者に焦点を合せたマーケティングが展開されている。

このようなことは、個人の抱いたイメージが、その人の行動と極めて密接な関係を有していること、および主観的なイメージが、その人の行動や活動に大きな影響を与えていることを意味している。そして、この傾向は今後ますます強くなることが推測される。

レクリエーションに関しても同様なことが言えよう。すなわち、レクリエーションに関する概念規定が多くの学者によってなされているが、²⁾それが一般人のレクリエーション行動と必ずしも一致するとは思われない。むしろ、直感的に抱くイメージに左右されると思われる。従来まで、レクリエーションに対するイメージを的確に把握する研究はあまりみられなかった。その意図のもとになされたものには、高橋が実施した事例が見られる。³⁾⁴⁾⁵⁾⁶⁾

本研究は、同じ大学における研究事例をとりあげることができたので、高橋の追跡研究という意味を根底におき、現代の若者のレクリエーションに対するイメージの実態をとらえ、あわせて約20年前のイメージと比較検討しようとするものである。

したがって本研究のねらいは次の通りである。

- (1) 1986年度入学生のリクリエーションに対するイメージの一般傾向の把握。
- (2) 1968年度入学生との比較。

II. 研究の対象

1986年度、国際基督教大学の新生、男女387名、および1968年度238名の新生を本研究の対象とした。その内容は表1のとうりである。

1986年度入学の学生については、表2に年齢構成を示した。女子が6割と多い。年齢構成の特徴を見ると、男子において19歳以上の者が多く、彼等を受験浪人の経験者とすれば、約6割がこれに該当する。女子は反対に約

表1 対象者数

性別	年度	'68(%)	'86(%)
男	子	125(52.5)	146(37.7)
女	子	113(47.5)	241(62.3)
合	計	238	387

表2 '86年度新入生年齢構成

年齢	性別	男子(%)	女子(%)	合計(%)
18 歳		53(36.3)	116(68.9)	219(56.6)
19 歳		70(48.0)	64(26.6)	134(34.6)
20 歳		17(11.6)	9(3.7)	26(6.7)
21 歳		5(3.4)	2(0.8)	7(1.8)
22歳以上		1(0.7)	0	1(0.3)
計		146	241	387

III. 研究の方法と内容

1. 実施方法

'86年についても'68年と同様「自由連想法」⁷⁾⁸⁾により、イメージの測定を行った。

- 1) 刺激語 : 「レクリエーション」
 - 2) 時間 : 2分間
 - 3) 回答方法 : 用紙記入法
 - 4) 制限 : 反応語を名詞、形容詞のみに指定した。
- 両年度とも、本学入学後4月第2週目において、直ちに回答用紙を配布し、口答にて指示を与えた。

過去の経験と深く関わり、複雑でしかも本人の「構え」によって左右されるイメージを「自由連想法」により、単に分析、比較することには難があると言われていたが⁹⁾、その事柄の特徴を端的に表すという利点、及び'68年の調査と比較する目的からこの方法を実施した。

2. 分析の内容

(1)'86年度入学生における反応語の分析。

高橋の行った5項目の分類¹⁰⁾を用い、第1反応語、及び第3反応語まで、をまとめ検討した。

<5項目の分類>

- 感情反応→ 楽しみ、愉快、明るいなどの反応語としてあらわれたもの。
 叙述反応→ 休養、健康、遊びなど、説明的反応語を表したもの。

種目反応→ キャンプ、卓球など活動の種目をあげたもの。
 共在反応→ 山、海、椅子など活動と共にあるもの。
 印象反応→ 笑い、輪、和など活動に伴う印象反応語として上げたもの。

(2) イメージの一般傾向

再構成したイメージは、元のイメージに近いものが表わされるという観点から¹¹⁾、前述の5分類をもとに、反応語上位5種から一般傾向を見た。

(3) '86年との比較

反応語の分類とイメージの一般傾向による各年度の比較をすることにより、その関連性を明らかにし、'86年の特徴を明らかにする。

IV. 結果と考察

1. '86年の反応語傾向分析

'86年の第1反応語、第3反応語までに分けて検討した。

端的なイメージをとらえるには「第1反応語」を見ることであるが、詳しく全体をみるために「第3反応語まで」の傾向もまとめた。

表3、表4はそれぞれ「第1反応語」、「第3反応語まで」をまとめたものである。

表3 第1反応語における傾向

分類	'86年入学生	
	男子(%)	女子(%)
感情反応	21(14.2)	39(16.2)
叙述反応	48(32.4)	63(26.1)
種目反応	48(32.4)	97(40.3)
共在反応	20(13.5)	28(11.6)
印象反応	9(6.1)	14(5.8)
その他	2(1.4)	0
計	148	241

表4 第3反応語までの傾向

分類	'86年度入学生	
	男子(%)	女子(%)
感情反応	46(10.6)	90(12.8)
叙述反応	105(24.1)	118(16.7)
種目反応	152(34.9)	299(42.5)
共在反応	70(16.1)	117(16.6)
印象反応	55(12.6)	80(11.4)
その他	7(1.7)	0
計	435	704

第1反応語については、男女共、種目反応、叙述反応、感情反応が約8割を占めている。特に、スポーツ、ゲー

ム等の種目反応が多く見られる。

男女別の傾向としては、男子が種目反応と叙述反応で全体の6割以上を占め、女子では種目反応のみで4割以上を越えている。男女共、個々の活動の場に対するイメージが主であることは、種目の選択が指導上の重要な要素であることが確認される。また、男性に叙述反応が多いことから、知的なイメージが多いことを物語っているといえよう。

第3反応語までを見ると、男女共、1位種目反応、2位叙述反応、3位共在反応であり、イメージの同一化が見られる。価値観の多様化の時代において、同一化傾向を示していることは興味深い。

2. イメージの一般的傾向

反応語の上位5種までを表したものが表5、表6である。

表5 第1反応語のイメージ(上位5種)

順位	'86			
	男子		女子	
		人数		人数
1位	遊び	26	遊び	30
2位	楽しい	14	楽しい	28
3位	キャンプ	5	ゲーム	17
4位	フルーツバスケット	5	娯楽	8
5位	ハンカチ落とし	5	遠足	8

表6 第3反応語までのイメージ(上位5種)

順位	'86			
	男子		女子	
		人数		人数
1位	楽しい	31	楽しい	55
2位	遊び	31	遊び	48
3位	ゲーム	14	ゲーム	43
4位	息抜き	12	キャンプ	22
5位	キャンプ	10	フォークダンス	17
	フルーツバスケット	10		

第1反応語について多少のバラつきが見られるものの、第3反応語まででは、ほぼ同様な傾向を示している。

男女共、「遊び」「楽しい」が常に上位に位置し、種目がそれに続く。

女子に「娯楽」、男子には「息抜き」と叙述反応が入っていることは、前述の反応語の分類の傾向と考え合せで見ると、注目したい点である。

表5、表6をもとに一般的イメージを再構成してみると次のようになる。

<第1反応語による一般的イメージ>

男子→ レクリエーションとは遊びであり、キャンプに出かけたり、フルーツバスケットやハンカチ

落しをする楽しいものだ。

女子→ レクリエーションとは遊び、または娯楽であり、キャンプに出かけたり、ゲームやフォークダンスをする楽しいものだ。

＜第3反応語までによる一般的イメージ＞

男子→ レクリエーションとは遊びで、キャンプに出かけたり、ゲームやフルーツバスケットなどを、息抜きのためにする楽しいものだ。

女子→ レクリエーションとは遊びであり、キャンプに出かけたり、ゲームやフォークダンスをする楽しいものだ。

3. 各年度の傾向比較

(1) 反応語による比較検討

'68年、'86年のそれぞれ5分類した反応語の割合について第1反応語、第3反応語まで(表7)について比較検討を行った。

表7 反応語の傾向比較

分類	年度 性別 項目	'68*		'86	
		男子%	女子%	男子%	女子%
第1 反応語	感情反応	(2)30.4	(1)47.8	(3)16.2	(3)16.2
	叙述反応	(3)16.0	(3)7.8	(1)32.4	(2)26.1
	種目反応	(1)32.8	(2)32.1	(1)32.4	(1)40.3
	共在反応	13.6	(3)7.8	13.5	11.6
	印象反応	4.8	2.6	6.1	5.8
	その他	2.4	1.9	1.4	0
第3 反応語	感情反応	(2)22.3	(2)28.2	10.6	12.8
	叙述反応	13.4	(3)15.9	(2)24.1	(2)16.7
	種目反応	(1)33.1	(1)32.1	(1)34.9	(1)42.5
	共在反応	(3)18.6	12.3	(3)16.1	(3)16.6
	印象反応	7.3	9.7	12.6	11.4
	その他	5.3	1.8	1.7	0

* '68年高橋による¹²⁾()内は各項の順位

第1反応語については、両者共、感情反応、叙述反応、種目反応がほぼ8割を占めている。

'68年に比べ、'86年では男女共、感情反応が減少し、叙述反応が高くなっている。特に女子にこの傾向が強く表われている。

指導者の指導内容によって左右されると考えられる感情反応が減少し、客観的な評価と見なされる叙述反応が増加してきたことは、イメージが認識され、定着してきたことを示していると言えるであろう。

第3反応語までについては、'68年と比べても種目反応の第1位は変わっていない。その他については、感情反応が減少し、叙述反応、共在反応が'86年の男子を除き増加し、1位種目反応、2位叙述反応、3位共在反応

と男女の差はなく、イメージの傾向の固定化が確認できる。

また、加えて活動と共にある共在反応の増加はレクリエーション活動に参加する機会が20年前に比べ、増加していることを意味するものと思われる。今後、指導については、なお一層の検討、充実を図っていかねばならない。

(2) イメージの一般傾向の比較検討

'68年、'86年のそれぞれの反応語を上位5種(表8、9)で再構成したものを以下に述べる。

＜第1反応語による一般的イメージ＞

'68 男子→ レクリエーションとは遊びであり、フォークダンスなどのダンスをしたり山へハイキングに出かける楽しいものだ。

女子→ レクリエーションは余暇においてスポーツやキャンプであるいは芝生でフォークダンスをすることで、楽しくて好きだ。

'86 男子→ レクリエーションとは遊びであり、キャンプに出かけたり、フルーツバスケットやハンカチ落しをする楽しいものだ。

女子→ レクリエーションとは遊び、または娯楽であり、キャンプに出かけたり、ゲームやフォークダンスをする楽しいものだ。

＜第3反応語までによる一般的イメージ＞

'68 男子→ レクリエーションとはハイキングやフォークダンスなどのダンスを女性と一緒にする楽しいものである。

女子→ レクリエーションとは遊びであり、余暇においてハイキング、フォークダンス、ゲームなどを行う楽しいものだ。

'86 男子→ レクリエーションとは遊びであり、キャンプに出かけたりフルーツバスケットなどを、息抜きのためにする楽しいものだ。

女子→ レクリエーションとは遊びであり、キャンプに出かけたり、ゲームやフォークダンスをする楽しいものだ。

表8 反応語のイメージ比較

分類	年度 性別 順位	'68**				'86			
		男子		女子		男子		女子	
		第1 反 応 語	1	楽しい	24	楽しい	44	遊び	26
2	遊び		8	キャンプ	6	楽しい	14	楽しい	28
3	ハイキング		7	フォークダンス	6	キャンプ	5	ゲーム	17
4	フォークダンス		5	スポーツ	4	フルーツバスケット	5	娯楽	8
5	ダンス		5	芝生	4	ハンカチ落とし	5	遠足	8
		山	5	好き	4				
				余暇	4				
第3 反 応 語	1	楽しい	46	楽しい	60	楽しい	31	楽しい	55
	2	ハイキング	27	ハイキング	21	遊び	31	遊び	48
	3	フォークダンス	14	フォークダンス	12	ゲーム	14	ゲーム	43
	4	女性	14	ゲーム	12	息抜き	12	キャンプ	22
	5	ダンス	12	余暇	10	キャンプ	10	フォークダンス	17
				遊び	10	フルーツバスケット	10		

** '68年高橋による¹³⁾

第1、第3反応語まで両者において、種目の違いはあっても、'68年に比べ'86年では男女共「レクリエーションは遊びであり、楽しいものだ」という概念がはっきり出ている。

第1反応語では、'86年では「楽しい」「遊び」を除くものは種目反応が中心であるが、両年ともはっきりした傾向は見いだせない。

第3反応語まででは3位、および4、5位まで男女同様の傾向が見られ、これを総合すると、'68年では「レクリエーションはハイキングに出かけたり、フォークダンスをしたりする楽しいものだ」となり、'86年には「レクリエーションは遊びであり、キャンプに出かけたり、ゲームをしたりする楽しいものだ」となる。種目が変わってきたことに加え、「遊び」という説明を加え、より詳しいイメージとなってきた。

18年の間にイメージの傾向が固定化し、より明確なイメージが確立してきていることが伺える。

V. まとめ

以上、大学生のレクリエーションに対するイメージを1986年度学生、および1968年度学生との比較について考察してきた。これらを通してまとめられることは次の通りである。

1. 1986年度学生の特徴

1) 男女差がイメージにおいて見られない。

1986年度学生のイメージは、男女共ほぼ同様の傾向を示す。すなわち男女の平均化がイメージの上にも表れているといえよう。

2) イメージの固定化が見られる

イメージにおいて種目反応が多いことは当然である。しかし「楽しさ」「遊び」という叙述反応がみられることは、現代の情報量と関わりがあるのではないかとおもわれる。

2. 1986年度および1968年度学生の比較

1) 1986年度学生のほうが叙述反応が多くみられる。

これは、現代の感覚重視から見ると、予想外のことと言えるが、別な視点から見ると、それだけレクリエーションへの理解が深くなってきたとも考えられる。

2) いずれも種目反応が多い

レクリエーションと聞くと、実際に出てくるのは過去あるいは現在において経験し印象に残っている活動が多くなる。このことは当然とも言えるが、それだけ活動種目の重要性を示しているとも言えよう。

3) 1968年度男子学生では、「ダンス系」「女性」などのイメージが強い。しかし1986年度男子学生は「遊び」「息抜き」など、理由づけがなされている。

4) 女子学生においてはイメージの上に年度差があまりみられない。

これらのことから、今後レクリエーション指導上考えなければならないことの一つに「男女差がなくなってきた」ことがあげられよう。現代社会の風潮—モノセックス、中性化、男女雇用機会均等法、女性管理職の増加などが、レクリエーションの分野においても大きく影響を受けざるをえない。また、現代の若者は自己の感覚を重視していると言われるものの、レクリエーションのイ

メージにおいては、あまりその傾向は見られない。これは社会生活を営む上で、他人と関わる状況においては、他人並（人並み）の心も依然として残っているとも言われていることと関連があるのではないだろうか¹⁴⁾。

今回は、行動と密接に関係していると言われているイメージを端的にまとめて指導のポイントを探ろうとしたが、今後の課題として、イメージの多様化、そしてライフスタイルの多様化が進んでいる現状の中で、レクリエーションのイメージが固定化してきていることの評価をふまえ、社会の変化、個人の意識といった幅広い洞察を怠ることなく指導の内容、方法を考えてゆく必要があるであろう。

〔引用文献〕

- (1) 博報堂生活総合研究所 分衆の時代
日本経済新聞社 1985. 1 pp 78~80
- (2) 江橋慎四郎他 レクリエーション概論 現代レクリエーション講座 1 ベースボールマガジン社
1974 pp 34~60
- (3) 鮎戸 弘 イメージの心理学 潮出版
1970. 10 pp78~80
- (4) 高橋 和敏 レクリエーションに関するイメージの研究（第1報） 第4回レクリエーション研究会発表抄録 1968
- (5) 高橋 和敏 レクリエーションに対するイメージの分析 レクリエーション研究 1972. 7
- (6) 吉田他 消費行動の調査技法 丸善KK
1969. 7 pp 45~50
- (7) 吉田他 前掲(5) pp 66~69
- (8) 名東 消費者行動の研究 東洋経済新聞社
1974 pp 30~34
- (9) 鮎戸 弘 前掲(2) pp 18~20
- (10) 高橋 和敏 前掲(4)
- (11) 鮎戸 弘 前掲 pp261~262
- (12) 高橋 和敏 前掲(3)
- (13) 高橋 和敏 前掲(3)
- (14) 博報堂生活総合研究所 前掲 pp 88~89

〔参考文献〕

- 1) 水島他 イメージの基礎心理学 誠信書房 1983. 6
- 2) 塩田 静雄 消費の社会学 文真書房 1976. 4
- 3) 鈴木 秀雄 ゲームに対するイメージの比較考察
第2回レクリエーション学会発表抄録 1972 p 30
- 4) 金崎 良三 レクリエーションイメージの構造について。第5回レクリエーション学会発表抄録
1975 p 15

学生生活における RE-CREATION 行動に関する研究

— N 大学理工学部の場合 —

○阿部信博 川井 昂 吉本俊明 澤村 博 齊藤虎征 岩田 惇 小川 貫
(日 本 大 学)

学生生活 Re-creation 快 不快

1. はじめに

近年、大学の大衆化が進んできたことは周知のことである。ここ数年進学率が横ばいの状態からわずかながら減少する傾向にあるとはいえ、大学や短大に在籍する学生が同年令層のおよそ35%になる。それだけに、大学生の人間像は極めて多彩なものと思われる。

1980年に神戸大学で行われた調査では、大学進学目的のなかに「クラブ活動やレジャーなど学生生活をエンジョイするため」と答えている学生が20%であった(二肢までの重複選択回答)⁴⁾。京都大学の昭和55年度入学者のうち、進学の最も強い動機として「大学生活をエンジョイするため」と答えた学生がおよそ3%あった。そして神戸大学の調査のなかで、人生の送り方の希望に「金や名誉を考えずに自分の趣味にあった暮らしをしたい」と答えている学生が12%あった(二肢までの重複選択回答)。また、⁸⁾1977年経済企画庁の大学生の進学動機についての報告によると、「幅広い豊かな教養の修得」、「専門的な知識や技術の習得」、「学生としての自由時間をもつこと」の三つが最も多く選ばれ、「学生としての自由時間……」を選択した学生が男子で43.8%、女子で58.4%いる(三項目選択回答)。さらに、1980年日本リクルートセンターの報告による女子学生の場合では、「もっとも充実感や生きがいを感じる」ときの問いに対し、「勉強・ゼミナール」と答えた者が14.3%、「人との交流」が53.7%、「趣味・レジャー」が22.2%、「クラブ・サークル・同好会活動」が9.1%となっている。

上記の調査・報告によっても、現代学生のなかで、自由時間を持ち、それを趣味やレジャーに充てることに幸福感や充実感を覚えるという者がかなりの割合をしめることがうかがえる。

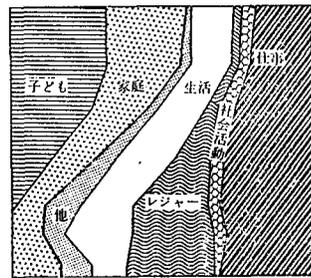
現代の学生は、かつてより、無気力、しらけ世代などといわれてきたが、併せて安定志向、遊び志向、私事主義などいろいろに評されている。現代の社会の豊かさ、価値の多様化は“より高い価値をめざして、物事にまじめに深く関心を持ち、情熱をもやす”といった生き方を希薄にさせているものと思われる。

S.フロイトは、人間を、基本的には無意識のなかのものを含め、諸欲求を充足することにより、“快”を得ようと行動するものとみている(快への意志)。A.アドラーは、フロイトの快楽原理に納得できず、人間は、より優れたものになりたい、他人の上に立ちたい、支配したいといった欲望を強くもち、「権力への意志」をもつものとみている。さらに、V.E.フランデルは、快楽への意志、権力への意志は人間存在のそれぞれの契機にすぎないとして、人

間は究極的には「意味への意志」をもつ存在であるとして、自己の生命を意味あらしめようとするのが人間であるとみている。²⁾

図-1は生きがいの年令的变化を示したものであるが、生きがいは年令によって変化していることがうかがえる。

図-1 生きがいの年令的变化 (男性)



これは、快楽への意志、権力への意志、意味への意志が人間の精神の発達に対応し、また外界に適應していることなどによる変化と考えられる。しかし、大学生にあたる

年令まではおおよそ4人に1人が遊び志向をもっていることが考えられ、安定と適應を求めがちな現代青年がほんとうの生きがいを感じているかは疑問である。大学生時代がE.H. エリクソンのいうモラトリアム期であることは間違いないと思われるが、モラトリアムをどういう意味内容でとらえるか、また、悩み苦しんでアイデンティティを問うことも大学生にとって重要なことと考える。

本研究では、恵まれた学生生活を享受しているようにみえる現代学生の日常生活のなかから、学生心理の一面を“快”“不快”の観点からのぞき、具体的にどのような行動に“快”“不快”を覚えるかをあきらかにし、学生の志向をさぐってみたい。

哲学事典によれば、“快”は環境の様相に対する受容(不快は拒絶)の態度であり、ゆえに快は、好み、望み、求め、獲得し、維持永続させようとする対象または状況に結びつく概念であるとしている。さらに広辞苑には、こころよいこと、心にかなうこと、面白いこと、とある。

このような、好み、望み、求め、心にかなうことなどの行動によって人間はRecreatされるものと考えられる。

しかし、このような環境の様相は、設定されたRecreationのための特定の場面に限らずとも、日常生活のなかで、美しい、感じがよい、好き、美味しい……といった“快”の経験が得られるはずである。つまり、「仕事や勉強などの疲れを、休養や娯楽によって精神的・肉体的に回復すること。またそのために行う休養や娯楽」、「余暇に任意で参加できる活動であり、これらの活動への参加は個人的な楽しさ、あるいは満足感によって動機づけられている」、といったRecreationの概念からすれば、睡眠や食事、授業

を受けることなどによって得られる“快”がRecreationの範疇として考えることは無理であるが、学生生活の幅広い行動のなかで得られる“快”がRe-creationとしての意味をもつものではないかと考えられるのである。

2. 調査の方法

昭和59年5月及び昭和60年5月にN大学理工学部1年生259名を対象に表-1のような調査用紙(一部)による189項目についてのアンケート調査を行った。調査項目の内容は、睡眠、食事、通学、談話、コンパ、授業、勉強、買物、読書、家事、天候、サークル活動、芸術作品や映画・音楽の鑑賞、テレビ・ラジオ、嗜好などに関するものである。

表-1 調査用紙と回答の方法

① 快-不快の程度は右のスケールのようにになっています。
 例えば、設問の状況が非常に快を感じるなら、スケールの5を○で囲んで下さい。

② わからない項目については回答しないで下さい。

1	2	3	4	5
非常に不快	不快である	どちらでもない	快を感じる	非常に快を感じる

1. 夜の睡眠 1 2 3 4 5

2. 休日(日、祭日等)の昼寝 1 2 3 4 5

3. 授業中のうたた寝 1 2 3 4 5

4. 休み時間中のうたた寝 1 2 3 4 5

5. 電車、バスの中でのうたた寝 1 2 3 4 5

6. 自由時間中のうたた寝 1 2 3 4 5

7. 一人で黙々と朝食をとる 1 2 3 4 5

8. テレビを見ながら朝食をとる 1 2 3 4 5

・
・
・

集計は「非常に不快である」と「不快である」は「不快」に、「非常に快を感じる」と「快を感じる」は「快」としてまとめ、「どちらともいえない」と3段階に分類した。

3. 結果と考察

(1) 授業について(表-2)

授業に関しては体育実技以外は快の傾向はみられず、一般教養については不快が快よりも多数をしめている。これは、はじめに述べたように進学の動機や目的を専門科目に重点を置いていることや、文化系学生と理工系学生の違いなどによるものと思われる。本調査対象が1年生であることから、授業や勉強に関しては進級とともに意識が変化し、快、不快の受けとめ方も変わってゆくものと推察される。

表-2 授業

	不快	どちらともいえない	快
大学での専門科目の授業	51人 19.7%	154人 59.5%	54人 20.8%
大学での一般教養(体育を除く)	83 32.2	153 59.3	22 8.5
大学での体育理論	69 26.7	157 60.9	32 12.4
大学での体育実技	18 7.0	64 24.9	175 68.1

表-3 勉強・相手の有無

	不快	どちらともいえない	快
一人で黙々と勉強する	70人 27.1%	140人 54.3%	48人 18.6%
友人と勉強する	51 19.8	142 55.0	65 25.2

(2) 勉強について(表-3, 4, 5)

勉強は自宅や図書館でやることに快を感じる者が多く、逆に喫茶店やサークル室、教室では不快を感じている人が

表-4 勉強・場所

	不快	どちらともいえない	快
自宅	30人 11.7%	142人 55.3%	85人 33.1%
友人宅	63 24.6	144 56.3	49 19.1
図書館	41 16.0	134 52.1	82 31.9
研究室	49 23.4	148 70.8	12 5.7
サークル室	74 35.7	126 60.9	7 3.4
教室	56 22.0	175 68.6	24 9.4
喫茶店	85 34.6	126 51.2	35 14.2

多い。これは喧騒を嫌っているためと思われ、このことは、おしゃべりやテレビをみながら勉強することにも不快を感じている人が多いことからうかがえる。しかし、1人で黙々と勉強することにも不快を感じる人も多く、音楽を聞きながら勉強す

表-5 勉強・何かをしながら

	不快	どちらともいえない	快
音楽を聞きながら	51人 19.9%	87人 34.0%	118人 46.1%
テレビを見ながら	106 41.7	108 42.5	40 15.7
ラジオを聞きながら	83 32.4	112 43.8	61 23.8
おしゃべりをしながら	113 44.1	105 41.0	38 14.8

ることに快を感じる人が多いことなどから必ずしも1人静寂のなかで勉強することが快とはいえないと考える。

(3) 読書について(表-6)

表-6 読書

	不快	どちらとも いえない	快
専門書・テキスト	89 人 34.8 %	133 人 52.0 %	34 人 13.3 %
一般教養のテキスト	103 40.1	136 52.9	18 7.0
体育理論のテキスト	110 43.5	134 53.0	9 3.6
文芸作品	73 28.5	107 41.8	76 29.7
SF小説	45 18.4	95 38.8	105 42.9
推理小説	37 14.6	81 32.0	135 53.4
自伝	70 27.7	134 53.0	49 19.4
スポーツに関する図書	17 6.7	100 39.2	138 54.1
旅行に関する図書	8 3.1	82 31.9	167 65.0
趣味の図書	2 0.7	24 9.3	233 90.0
新聞・雑誌	4 1.6	65 25.4	187 73.0
マンガ	4 1.6	47 18.3	206 80.2

趣味の図書やマンガをはじめ、雑誌、旅行、スポーツ等比較的軽い気持ちで読めるものに快を感じる者が非常に多く、さらにSFや推理小説などに興味を示す者も多い。逆

表-7 談話の相手・飲食

	友人			家族			先生		
	不快	どちらとも いえない	快	不快	どちらとも いえない	快	不快	どちらとも いえない	快
喫茶・軽食を とりながら	1 人 0.3 %	23 人 8.9 %	233 人 90.7 %	17 人 6.7 %	118 人 46.8 %	117 人 46.4 %	55 人 24.4 %	112 人 49.8 %	58 人 25.8 %
飲酒をしながら	2 0.9	25 9.8	227 89.4	26 10.7	115 47.5	101 41.7	38 16.6	89 38.9	102 44.5

表-8 談話の内容と相手

	友人			家族			先生		
	不快	どちらとも いえない	快	不快	どちらとも いえない	快	不快	どちらとも いえない	快
学問研究に 関して	36 人 14.1 %	114 人 44.7 %	105 人 41.2 %	62 人 24.8 %	148 人 59.2 %	40 人 16.0 %	59 人 25.2 %	101 人 43.2 %	74 人 31.6 %
自分の将来に 関して	17 6.7	118 46.8	117 46.4	42 16.7	149 59.1	61 24.2	39 16.8	120 51.7	73 31.5
異性に関して	1 0.4	50 19.3	208 80.3	73 29.1	136 54.2	42 16.7	46 19.8	136 58.6	50 21.6
レジャーに 関して	0 0	28 10.8	231 89.2	10 3.9	132 52.0	112 44.1	40 17.2	117 50.4	75 32.3
サークルに 関して	7 2.9	93 39.1	138 58.0	18 7.7	177 75.3	40 17.0	35 15.4	132 57.9	61 26.8
アルバイトに 関して	2 0.8	99 38.8	154 60.4	22 8.8	180 72.0	48 19.2	40 17.2	157 67.4	36 15.5

に文芸作品や自伝に対しては快を示す者は減少し、テキスト類に関しては不快を示す者が多い。しかしテキスト類に関しても快を選択している者が存在していることも見逃せないと考える。

(4) 談話について(表-7, 8)

談話の相手については友人との談話に非常に高い割合で快を示し、次いで家族との談話に快を示す者が多くなっている。先生との談話では飲酒をしながらの場合に快を感じる者が多くなっているがこれはアルコールによって普段ではうかがい知れない教師の姿がみられることや、同じ立場に近いところで語れることなどによるものと考えられる。談話の内容についても友人と語ることでは全てに快を感じる者が多くなっているが、家族との談話では学問研究や自分の将来に関する談話についてはどちらともいえず、先生との談話においても自分の将来に関しての談話では快を感じる者が多いものの、学問・研究においては快の傾向がみられる程度である。レジャーやサークルに関しては家族や先生との談話にも快を感じる者が多く、学生の快楽志向がうかがわれる。

(5) 音楽・映画の鑑賞について(表-9)

演歌、日本民謡には不快を感じ、映画や他の音楽については快を感じる者が多くなっている。特に映画とポピュラーやロックの音楽項目についてより高い割合で快を示した。若者の風俗を物語るものと推察される。

(6) 芸術品の鑑賞について(表-10)

前述の音楽・映画の鑑賞と同様、日舞、書道などの日本の芸術には不快を示す者が多いが洋画には快を示す者が多く、彫刻には快の傾向がみられる。

表-9 音楽・映画の鑑賞

	不 快	どちらとも いえない	快
クラシック音楽	40 人 15.6 %	119 人 46.5 %	97 人 37.9 %
ジャズ	38 15.0	121 47.6	97 37.4
ロック	30 11.7	58 22.7	168 65.6
ポピュラー	4 1.6	39 15.2	213 83.2
演 歌	135 52.9	76 29.8	44 17.3
日本民謡	149 59.4	85 33.9	17 6.8
西洋映画	2 0.8	32 12.4	225 86.9
日本映画	8 3.1	58 22.4	193 74.5

表-10 芸術品の鑑賞

	不 快	どちらとも いえない	快
日本画	58 人 23.1 %	127 人 50.6 %	66 人 26.3 %
洋 画	34 13.5	104 41.4	113 45.0
書 道	81 32.3	135 53.8	35 13.9
彫 刻	50 20.1	129 51.8	70 28.1
民芸品	68 27.1	123 49.0	60 23.9
生活芸術品 (ハンドクラフト)	57 22.8	136 54.4	57 22.8
日 舞	105 44.3	121 51.1	11 4.6

(7) テレビを見る(表-11)

特集番組、スポーツの実況、バラエティショウ、ドラマ、クイズ番組、歌謡番組、ニュース番組、スポーツ教室、社会番組の順で快を感じる者が多く、逆に語学教室、教養講座、政治・経済番組、劇場中継の順で不快を感じる者が多くなっている。これは前述の読書における傾向に似ていると思われる。テレビを見る時間帯や家族団らんということを考えればテレビが真剣に教養や情報を得るメディアになり得ない場面もあることがひとつの要因であることも考えられ、身近な情報や安易に受け入れられる番組に快を感じるといえる。また、スポーツの実況中継に快を感じずのはうなずけるが、他の教養講座に比べてスポーツ教室にも快を感じる者が多く、現代の学生がスポーツに高い関心を示していることを物語るものと考えられる。

(8) ラジオを聞く(表-12)

前述のテレビを見るのと同様、ポピュラー音楽、歌謡番組、スポーツの実況、ニュースを聞くなどに快を感じる者が多く、クラシック音楽を聞くことに快の傾向がみられ

表-11 テレビを見る

	不 快	どちらとも いえない	快
ニュース番組	16 人 6.2 %	130 人 50.6 %	111 人 43.2 %
歌謡番組	27 10.5	107 41.6	123 47.9
ドラマ	17 6.6	90 35.0	150 58.4
劇場中継	65 25.8	143 56.7	44 17.5
バラエティショウ	22 8.6	79 31.0	154 60.4
クイズ番組	25 9.7	96 37.1	138 53.3
スポーツ教室	28 11.1	146 57.7	79 31.2
スポーツの実況中継	19 7.4	72 28.1	165 64.5
語学教室	104 40.8	133 52.2	18 7.1
教養講座	101 40.2	126 50.2	24 9.6
特集番組	13 5.1	76 29.7	167 65.2
社会番組	44 17.3	128 50.4	82 32.3
政治・経済番組	76 30.0	125 49.4	52 20.6

表-12 ラジオを聞く

	不 快	どちらとも いえない	快
ニュースを聞く	36 人 14.0 %	155 人 60.1 %	67 人 26.0 %
交通情報	55 21.7	168 66.1	31 12.2
クラシック音楽	61 23.9	114 44.7	80 31.4
ポピュラー音楽	7 2.7	52 20.3	197 77.0
歌謡番組	26 10.2	75 29.4	154 60.4
英 語	90 35.4	133 52.4	31 12.2
スポーツの実況	38 14.8	105 41.0	113 44.1
寄 席	91 36.1	114 45.2	47 18.7

る。逆に英語、寄席、交通情報などを聞くことに不快を示す者が多く、ここでも現代学生の勉強ぎらいと、興味の問題も勿論かわることであろうが、ある程度腰を据えて話しを聞くことを嫌う傾向もうかがえる。

(9) 買い物について(表-13)

どの項目においても数字のうえでは快が不快をうわまわる割合を示している。食事の材料や専門書・テキストを買うことに快を感じる者が不快を感じる者よりもやや多い程度であるがその他の項目では快を示す者が多い。これは買物好きをあらわしているものと考えられ、特にスポーツ用品、セーターやジーンズ、あるいはスイッチひとつで操作出来る電化製品の買い物はコンパ・パーティの材料や日

用品・雑貨の買い物よりも高い割合で快を示しているのは、現代学生のスポーツ好きやファッション性を物語るものであろうか。

表-13 買い物

	不快	どちらとも いえない	快
食事の材料	50人 20.4%	123人 50.2%	72人 29.4%
コンパ・パーティーのための材料	20 8.1	97 39.4	129 52.4
日用品・雑貨	22 8.5	124 48.1	112 43.4
衣類（セータ、ジーンズなど）	16 6.4	71 28.3	164 65.3
専門書・テキスト	44 17.0	160 61.8	55 21.2
趣味の図書	5 1.9	50 19.3	204 78.8
新聞・雑誌	8 3.1	110 42.8	139 54.1
電気製品（テレビ、ステレオなど）	3 1.1	52 20.1	204 78.8
スポーツ用品	4 1.6	74 29.2	175 69.2

(10) その他について

これまで、掲載した表について述べてきたが、これらの他に、睡眠、通学、サークル活動、食事、コンパ、嗜好品、家事、天候等について概説してみたい。

睡眠については、休日の昼寝、夜の睡眠に快を感じている者がおよそ4人中3人いるのに対して、不快と答えている者が100人中8～9人の割合で存在していることは健康面で注目しなければならないと考えられる。また、授業中のうたた寝が休み時間中や電車・バスのなかでのうたた寝よりも快の傾向が高かったことは、授業中のいねむりに対してうしろめたさを感じる割合が低いことのあらわれと思われる。

次に通学では、通学的手段として一般的な徒歩、電車、バスについては快と答えている者がおよそ11～15%、不快と答えているのが40～41%あって、通学者のかなり多くの者が通学手段に関しては不快を感じているといえる（調査対象者の79.6%は電車、バスのいずれかを利用し、また徒歩と答えている）。自分で乗り物を運転して通学するものでは、自家用車、オートバイ、自転車の順で快と答えている者が多い。通学手段としてはかなり多くの学生が不快を感じているが、ウォークマン等で音楽を聞きながら通学した場合には快と答えているのが49.6%あり、不快と答えているのが13.9%であった。しかし、語学テープを聞いたり、テキストを読んだりして学習しながら通学することについては不快を感じずる者が非常に多く、新聞や雑誌を読んだり、ラジオをききながら通学することには不快を感じずる者が多い。また、友人と通学することには快を感じている者が多くなっている。

サークル活動に対しては、実際の活動をやっているときに63.4%と最も多くの者が快を示し、発表や対外試合に43.8%、活動の準備に33.7%、ミーティングに28.1%の者がそれぞれ快を示している。逆に後片付けには不快を感じている者が多くなっている。

食事については朝食、昼食、夕食に限らず1人で黙々と食事をとることに不快を示す者が多く（不快39%、快7.1%）、友人や家族と話しながら食事をとることに快を示す者が多い（友人との食事が80.2%、家族との食事が59.8%）。食事の場所についてはレストラン（外食）や自宅で食事をとることに朝、昼、夕食に限らず快を示す者が多く、さらにキャンパス内での昼食や友人宅の昼食と夕食でも快を示す者が多くなっている。また、テレビを見ながらやステレオを聞きながら食事をとることに快を感じる者が多く、テレビを見ながら夕食をとることにもっとも高い割合で快を示している。家族とテレビを見ながら夕食をとることがかなりのウエイトをしめていることがうかがえる。ラジオを聞きながら食事をとることは快、不快どちらともいえず、専門書・テキストを見ながらの食事では多くの割合で不快を示している。

コンパについては、クラス、サークル、仲間、中・高校の同窓会等のコンパにおいては当然のことと思われるがすべて快を感じる者が多く、特に仲間同士のコンパについては89.6%の高い割合を示し、中・高校同窓会コンパが85.5%、クラスコンパが63.8%の順となり、サークルのコンパは最下級生のためか53.6%とこのなかでは低い割合であった。

次に嗜好品については、酒を飲む、タバコをすう、コーヒー・紅茶を飲む、コーラ・ジュースを飲む、ケーキ・チョコレートを食べる、の項目のなかで、タバコをすう以外はすべてに快を示す者が多く、特にコーヒーやコーラを飲むことに80%以上の高い割合で快を示し、次いで酒を飲むが70.5%、ケーキ・チョコレートを食べるが59.8%となっている。しかし、空腹感や体調などによって、この快の割合は変化するものと考えられる。タバコを吸うことについては49.6%が不快を示しているものの31.5%の者が快を示しており、タバコを普段すっている者とすわないものの比率がここにあらわれたものと推察される。

家事では食事の後片付け、草花の手入れ、庭木の手入れ、家のまわりの清掃などには不快を示す者が多く、食事の準備、家・部屋の清掃はどちらともいえない結果であった。

天候は、晴れている日には92.9%、暖かい日には76.0%の者が快を示し、雨の日には72.6%、曇っている日には37.8%、暑い日には52.5%、寒い日には55.6%、風の強い日には62.4%の者が不快を示している。

4. 結 び

今調査から、N大学理工学部学生の志向や文化の一端をのぞくことができたが目立った点についてまとめてみると、先ず勉強を嫌う傾向にあり、なかでも教養志向に乏しい（専門志向が高いことではない）。1982年版「アルバイト

白書」によると、職業的知識・技術の修得、授業の熱心度、クラブ・サークル活動などから11名の学生を比較してみると明らかにアメリカの学生は勉強タイプであり、日本の学生は遊びタイプであるという。要因として様々な背景が考えられるがここでは言及をさけない。いわば快楽志向にある学生が多いと考えられ、今回の調査では随所にこうした傾向がうかがえた。

次に、友人とのかかわり合いを非常に重視していることがうかがえる。大学生は行動範囲も広くなり、新しい友人を見つけて別の世界をのぞくこともあり、そして人生観などを豊かにしていくものと思われるが、こうしたことを家族や教師よりも友人により多く求めていると考えられる。

さらに、日常のいろんな場面で音楽とのかかわりを望み、非常に音楽好きである。しかし、音楽をじっくり聞くといったものではなく、テレビの歌謡番組やポピュラー、ロックなどを何かをしながら気軽に聞くといった傾向であり、音楽を聞くというより音楽があるといった音楽とのかかわり方がうかがわれ、本当の音楽好きであるといえるかは疑問である。

読書についても格調の高い荘厳さよりも、気軽に読める趣味やスポーツ等に関する(スポーツを好む傾向が強い)図書に興味を示し、マンガを好んでいる。

買い物からは現代学生のファッション性的一端ものぞかれた。

これらのことから今研究で得られたことは、学問志向が低く、いわば学生生活の本質的なことよりも副次的なクラブ・サークル活動、音楽、マンガ等の軽い読書、ファッションなどに快を求める傾向にあり、それによって快を感じ、Recreat されていると考える。はじめに述べたV.E. フランデルの説を適用するならば人生の過渡的傾向といえるだろうか。しかしその過渡期にとどまり、そこに自己主張、アイデンティティを求めてしまうと仮定(現代のキャンパスには多分にこうした雰囲気を感じられると思われるが)するならばなしさも感じないではない。調査対象が1年生であったこと、調査の時期、大学の授業、あるいは学生心理の深層にふれる設問のしかた等を考慮し、今後検討を加えたい。

引用・参考文献

- 1) 波多野完治 著者代表
現代教育心理学大系—適応理論—
中山書店 1957
- 2) 藤原嘉悦 編
現代青年の意識と行動 3 生きがいの創造
大日本図書 1984
- 3) 神谷美恵子 著作集 1
生きがいについて
みすず書房 1985
- 4) 笠原 嘉・山田和夫 編
キャンパスの症状群—現代学生の不安と葛藤—

- | | | |
|---------------------------------|--|------------|
| | 弘文社 | 1986 |
| 5) 教師養成研究会・教育心理学会 | テキスト青年心理学 | 学芸図書 1970 |
| 6) Meyer, H.D. Brightbill, C.K. | Community Recreation: A Guide to Its Organization (Erglewood Cliff, N.J. : Prentice-Hall 1969) | |
| 7) 新村 出 編 | 広辞苑第2版補訂版 | 岩波書店 1976 |
| 8) 関 崎一・返田 健 編 | 大学生の心理 | 有斐閣 1985 |
| 9) 社会科学大事典編集委員会 | 社会科学大事典(2) | 鹿島出版会 1968 |
| 10) 哲学事典 | | 平凡社 1971 |

日本厚生協会設立までの経緯

日 本 大 学
澤 村 博

キーワード 日本厚生協会、世界厚生会議、厚生省、厚生運動
はじめに

本研究は日本レクリエーション協会の前身である日本厚生協会設立までの動きについて史的に概観する。とくに、日本厚生協会設立は厚生省設置、及び世界厚生会議の動きがひとつのカギと考え、この二点からこのテーマへのアプローチを試みる。

厚生省設置までの動きに関しては、設置の背景、陸軍省第一次、第二次新省設置案に触れる。世界厚生会議については第一回世界厚生会議（ロサンゼルス）第二回世界厚生会議（ベルリン）の動きを主として概観する。

厚生省設置

厚生省は1938年（S13年）1月11日陸軍の支持によって設立された。陸軍の意図は壮丁体位の向上という時局の要請にあった。陸軍側の新省設置の理由として、壮丁体位の低下について、次のような記事がみられる。「徴兵検査におけるいはゆる不合格者（丙・丁種）の増加は、大正十一年より同十五年までの間は、壮丁千人につき二百五十人平均の不合格者を出したが、昭和二年より同七年までの間では、不合格者の数は三百五十人平均に激増し、さらに昭和十年現在では四百人平均になっている。（中略）さらに近視眼の増加は甚だしいものがある。」¹と伝えている。

このような状況のなか近衛内閣は1937年（S12年）6月4日成立した。陸軍は近衛内閣を支持する条件として体位向上を目的とした新省を設置する約束をとりつけた。²

新省の設置については体育関係者も陸軍の杉山陸相に賛意を表している。「国民体力の低下に最近一大関心を有ったものに軍部がある。最近のニュースによると杉山陸相が此れが対策として衛生省創設の要を説き既に首相や内閣の賛意を得て特別議会に早くも具体案を作成し、所要経費を要求し得るやう取り運ぶ意気込みであるといふ。この點から我等は実行力に富む軍部の代表杉山陸相の提案に賛意を表する譯である。」³以上概観してみると、厚生省設立は軍の意図によることがよく理解できる。それは人的資源の増強と優勢な人的戦力の養成にあった。

新省設置案

陸軍より新省設置に関する案が二回提出された。第一次案は陸軍省医務局長小泉親彦（後、厚生大臣）らによって昭和11年秋結核対策と国民の体力向上のための主務官庁を設置構想をもち「衛生省」案を作成した。衛生省は官房と9局、35課から構成された。局の名称と事務内容をみてる。

1. 衛生局—公衆衛生並びにその施設及び国民衛生教育に関する事項を管掌する。
2. 体力局—国民の体力向上改善並びに施設の国家的統制に関する事項を管掌する。
3. 学務局—学校衛生並びに保育に関する事項を管掌する。
4. 業務局—産業衛生能率増進及び生活資源の静動態に関す

る事項を管掌する。

5. 社会局—労働及び社会に関する事項を管掌する。
6. 保険局—保険に関する事項を管掌する。
7. 交通局—交通衛生並びに生活資源の整理に関する事項を管掌する。
8. 移民局—移植民衛生並びに環境服合に関する事項を管掌する。
9. 民事局—医療並びに運用に関する事項を管掌する。⁴

衛生省案は内務省をはじめとする各省からの不備を指摘された。陸軍は第一案を引きさげ、1937年（S12年）6月15日第二案「保健社会省」案を政府に提出した。保健社会省は官房の外7局33課より構成され、局の名称と主な事務内容は次の通り。

1. 衛生局—公衆衛生並びにその施設に関する事項を管掌する。
2. 体力局—国民体力の向上改善並びに施設の国家的統制に関する事項を管掌する。
3. 保育局—学校衛生並びに保育に関する事項を管掌する。
4. 生活合理局—業務及び環境の衛生生活の合理化及び移住、移植民の新環境服合に関する事項を管掌する。
5. 医事局—医療並びに運用に関する事項を管掌する。
6. 社会局
7. 保険局⁵

保健社会省（仮称）設置要綱は1937年（S12年）7月9日閣議で決定した。この要綱は衛生省案と比較してわかる通り局の変更が認められる。衛生省案にみられた学務局、交通局は保健社会省案では姿を消している。「保健社会省（仮称）設置要綱」（昭和12年7月9日閣議決定）の局についてみると陸軍第二案保健社会省案と比較してわかるように5局となっている。局の名称と事務事項は次の通りである。

- 一、国民福祉ノ増進及国民体位ノ向上ニ関スル事項ヲ司掌セシムル為保健社会省ヲ設置スルコト

- 二、保健社会省ニ大臣官房ノ外左ノ五局及一院ヲ置ク方針ナルコト

労働局

- (一) 労働条件ノ改善ニ関スル事項
- (二) 労働厚生ノ向上ニ関スル事項
- (三) 労務需給ノ調整ニ関スル事項

社会局

- (一) 社会施設ノ刷新拡充ニ関スル事項
- (二) 救護、救療ノ普及ニ関スル事項
- (三) 母性、乳幼児ノ養護及児童ノ保護ニ関スル事項

体力局

- (一) 体育運動団体ノ統制及指導者ノ養成ニ関スル事項
- (二) 国民体力向上施設ノ拡充ニ関スル事項
- (三) 国民体力ノ検査ニ関スル事項

衛生局

- (一) 環境衛生及環境への適合ニ関スル事項
- (二) 住宅ノ改良及供給ニ関スル事項
- (三) 栄養ノ改善及食品ノ取締ニ関スル事項

医務局

- (一) 医薬制度ノ改善ニ関スル事項
- (二) 国民的疾ノ防滅ニ関スル事項
- (三) 伝染病ノ撲滅ニ関スル事項

保健社会省（仮称）で管掌される事務は文部省、内務省、通信省、商工省、大蔵省などから移管された。とくに体力局に限ってしてみると、学校体育関係以外の事務は主として文部省、内務省などから移管された。「保健社会省設置要綱ニ関スル閣議駁解事項」（昭和12年7月9日閣議決定）の二項をみると、学校以外で実施される体育活動は保健社会省の所管となることがわかる。以下次の通りである。

二、文部省所管体育運動及学校衛生ニ関スル事項中

(一) 左ノモノハ之ヲ保健社会省ニ移管スルコト

1. 社会体育指導者ノ養成（学校組織ニ依ラザルモノ）
2. 青少年体位調査並ニ体力検査
3. 学校伝染病予防、学校診療其ノ他疾病ノ予防治療
4. 学生生徒児童ニ関スル一般的ナル栄養ノ指導
5. 社会体育運動

イ、男女青少年団体其ノ他一般国民ニ対スル体育運動ノ指導奨励助成

ロ、全国的社会体育運動団体ノ指導奨励助成（学生生徒児童ヲ以テ組織セル団体ヲ除ク）

ハ、地方的社会体育運動団体ノ指導奨励助成（学生生徒児童ヲ以テ組織セル団体ヲ除ク）

ニ、国際的体育運動施設ノ指導助成（学生生徒ヲ以テ組織セル団体ヲ除ク）

ホ、其ノ他ノ社会体育運動事業ノ奨励助成

ヘ、学校所屬以外ノ運動場、競技上、体育館、武道場ノ施設指導

6. 国民体育館

保健社会省は直ちに設置されるかのように見えたが、生命保険移管問題で、商工省と通信省の反対にあい、約6ヶ月遅れ1937年（S12年）12月29日官制の正式決定がなされた。

官制の正式決定までの間、保健社会省という名称について議論がなされた。枢密院で「社会」という名称が不適当であるという委員、あるいは他省なみに二文字を希望する委員、また「保健」という名称が「保険」と混同されまぎらわしいとし、協議の末「厚生」を適当と認め政府に勧告した。⁶

こうして、厚生省官制（勅令七号）は1938年（S13年）1月11日の官報で公布され即日施行された。厚生省は官房の外、5局から構成されていた。局の名称と体力局の事務事項は次の通り。

第二条厚生省ニ左ノ五局ヲ置ク

- 体力局
- 衛生局
- 予防局
- 社会局
- 労働局

第三条体力局ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

- 一、体力向上ノ企画ニ関スル事項
- 二、体力向上ノ施設ニ関スル事項
- 三、体力調査ニ関スル事項
- 四、体育運動ニ関スル事項

陸軍の新省設置の第一、第二案さらに修正を重ね、厚生省管制決定までに至った。ここで見落としてならない事実がある。それは省、局の名称が変わっても体力局と衛生局は一貫して存在した。ここに杜丁体位向上を新省に期待した陸軍の意図が伺える。

世界厚生会議

第一回世界厚生会議

1932年（S7年）7月23日より29日までロサンゼルスで第一回世界厚生会議（First World Recreation Congress）が開催された。アメリカのレクリエーション協会（National Recreation Association）から外交ルートを通じて文部省へ、またアメリカYMCAから日本YMCAへ第一回世界厚生会議に代表を送るよう招待状が来た。⁷

日本からは、日本YMCA総理事斎藤憲一、YMCA体操指導者柳田享、日本水泳選手団先発連絡員白山源三郎、日本陸上競技連盟会長岸清一らが出席した。岸は会議（General Sessions）で「Recreation in Japan」⁸というテーマで報告した。この会議のスローガンは「Play unites the nations」即ち「遊戯は各国民を結合する」であった。⁹会議の議題は次の通り。

- ①成年者の厚生
- ②家庭遊戯
- ③宗教団体の厚生
- ④学校に於ける厚生訓練
- ⑤放課後の学校設備の利用
- ⑥遊戯場空地獲得の各種方策
- ⑦厚生と都市計画
- ⑧地方農村に於ける厚生
- ⑨社会施設としての厚生
- ⑩講義、空地演説、討論、読書の利用
- ⑪ハイキング、キャンピング、登山、その他の戸外運動
- ⑫アマチュア音楽家演奏—管弦楽、合唱、祭禮、バンド
- ⑬民衆スポーツ
- ⑭厚生を目的とする芸術運動—造形、塑像、絵画、彫刻、手芸
- ⑮厚生問題に関する質疑応答
- ⑯厚生を目的とする演劇
- ⑰厚生と失業
- ⑱厚生と都市行政^{10、11}

第2回世界厚生会議

1936年（S11年）7月23日～30日ドイツのハンブルグで第2回世界厚生会議が開催された。日本からの出席者はオリンピック視察員白山源三郎、東京市主事磯村英一それに江戸ハンブルグ領事であった。会議のスローガンは「Kraft durch freude」「喜びを通して力へ」であった。会議日程は次の通りである。

第1日、開会日（主なる発言者）

ルドルフ・ヘス（ヒトラー代理）、ロバート・ライ（ドイツ労働戦線指導者）、パイエ・ラツール（国際オリンピック委員長）、チャメル・オテン（ナチス党スポーツ指導者）

第2日、舞踊と民謡

野外音楽に加えて、国防軍と労働奉仕団（アルバイト・デインスト）によって編成された音楽隊の行列

第3日、国民スポーツデー

この日のプログラムは、国家社会主義団体のレクリエーションが含まれた。

第4日、ドイツデー

軍楽隊の演奏、労働奉仕団の行列、ドイツ各州民代表の行列、そのスローガンは「民族は自己のために競技する」

第5日、青年団デー

ヒトラー青少年団のキャンプ実演、同上スポーツの実演、相撲、鍔型振り等

第6日、団体デー

労働奉仕団体の実演、ナチス実警隊、親衛隊、戦車隊の訓練見学、同上の行進、騎馬訓練等

第7日、国防団体デー

保安警察の出演

第8日、閉会日

ドイツ宣伝相を歓迎する。¹²

以上第1回、第2回世界厚生会議の内容を比較してみると、両者には政治的開きが顕著であった。第1回会議の内容は民主主義をベースにしたレクリエーション活動、会議のテーマが取り上げられた。しかし、第2回会議の場合は、当時のドイツの政治状況を反映して軍国主義的色彩の強い大会であった。両会議のプログラムを見てもわかる通り前者は個人に立脚したプログラム内容であった。これに反し、後者はむしろ団体、グループで実施する実演などがプログラムの多数を占めていた。また、主席者、会議の演者に限ってみても第1回会議の場合は体育、レクリエーション関係者が顕著であった。それに反し、第2回会議の場合は政治家、軍人が目立っている。

第4回世界厚生会議日本開催

第1回、第2回世界厚生会議まではオリンピックの特別組織委員会の一組織であった。「オリンピックとレクリエーションの両者は車の両輪の如く、相伴わなければならない。」とのスローガンで第1回世界厚生会議はロサンゼルスで開催された。しかし、第2回会議ではこのスローガンを改め、オリンピックから独立することになった。世界厚生会議がオリンピックから独立することに関し磯村は、『今日に於ては国際オリンピックの元老ラツール伯をして、ベルリン大会中に、「最早オリンピック委員会が世界厚生会議の特別委員会に援助を与ふる必要なしことを欣快とし、又会は国際オリンピック委員会の期待せる以上のことを世界厚生会議はなし又将来なし得ることを確信せり」と云はしむるに至った。』¹³と書いている。そして国際評議委員会が設けられ、国際厚生会議会長にアメリカのG. T. カービー、事務総長にドイツのA. マンタイが就任した。

世界厚生会議はオリンピックから独立した組織となったので、4年ごとの開催をせず、開催等については同会議の総会で決定することになった。従って第2回世界厚生会議で2年後の1938年(S13年)第3回世界厚生会議をローマで開催することを決定した。ドイツ滞在中磯村はA. マンタイと第4回世界厚生会議日本開催について会談をした。当時皇紀2600年を記念して東京でオリンピックを開催することはすでに決定していた。会談の内容は次の4項目についてであった。

- 一、1938年6月のローマ大会に日本より必ず正式代表を送ること
- 二、1938年6月のローマ大会に可成開催都市より見学者を送ること

三、東京市に開催不可能の場合は他の都市を選定しローマ会議に報告すること

四、ローマ大会後マンタイ博士は日本を訪問第4回大会の準備につき相談すること¹⁴

以上を協議し、1937年(S12年)5月帰路ニューヨークのG. T. カービーを訪ね、1940年(S15年)第4回世界厚生会議東京大会開催の承認を得た。そして、G. T. カービーより賞書を与えられ、その一節に東京大会開催について、「事務総長マンタイ博士との会談を確認し余の出来得る限りの御助力を約束なすことを(中略)伝えられたし」と書いている。依って、磯村・マンタイ会談の4項目に関しては、国内の関係方面へ伝えられた。

オリンピック東京大会組織委員会の中でレクリエーション調査委員会設立の動きがみられた。会合の内容は次の通りである。

「6月25日 満鉄ビル内エトワールに於てレクリエーションに関する打合せ開会将来組織委員会内に「レクリエーション調査委員会」を設置し度き旨打合せり。出席者は左の如し。

内務省都市計画課	北村技師
文部省	岩原体育課長
東京市	草間秘書課長
YMCA	R. L. ダーギン
YMCA	村尾理事
YMCA	カウフマン嬢
YMCA	竹内嬢
大日本体育協会	白山氏
事務局	久保田事務局長
事務局	西四辻、大田」 ¹⁵

日本厚生協会設立

1938年(S13年)1月11日厚生省が設置された。直ちに第1回有志談話会が開かれ、これが評議会に発展し、同年4月日本厚生協会が設立された。

同協会設立に関わりをもった人は、「R. L. ダーギン、磯村英一、草間時光、井下清、白山源三郎、吉阪俊蔵、権田保之助、伍堂卓雄、栗本義彦、末広巖太郎、斉藤惣一、河合良成、下村宏、三隅達郎」¹⁶等の名前がみられる。

日本厚生協会の目的、事業内容について、同協会会則第一章から第三章までみてみる。

第一章 名称及事務所

第一条 本会ハ日本厚生協会ト称ス

第二条 本会ハ事務所ヲ東京市麹町区大手町一丁目厚生省二置ク

第三条 本会ハ必要ニ応ジ支部ヲ設置ス

第二章 組織

第四条 本会ハ本会ノ趣旨ニ賛同参加スル団体ヲ以テ組織ス
本会設立後本会ニ参加セントスル団体ハ評議員会ノ承認ヲ経ルコトヲ要ス

第三章 目的及事業

第五条 本会ハ国民生活ヲ刷新シ特ニ餘暇ノ善用ニ依リ心身ヲ鍛磨シ情操ヲ陶冶シ以テ国民ノ健全ナル心身ヲ保全ヲ図ルコトヲ目的トス

第六条 本会ハ前条ノ目的ヲ達成スル為左ノ事業ヲ行フ

- 一、関係団体ノ連絡協調ニ関スル事項
- 二、国民ノ健全ナル心身保全ニ関スル研究及奨励ニ関スル事項
- 三、世界厚生会議ニ関スル事項
- 四、其ノ他本会ノ目的達成ノ為必要ナル事項

日本厚生協会設立当時事務所は、会則第二条のように厚生省体力局体育課に置き、常時三名の有給職員がいた。¹⁷これは同協会会則で規定されていないことであるが、協会の理事長は省内の所管の局長がなり、常務理事はその課長が就任することになっていた。¹⁸

会員については、会則第四条で定められているように団体会員のみ認められていた。日本厚生協会発足当時の加盟団体は、「東京、京都、大阪、横浜、神戸、名古屋の六大都市、日本旅行協会、日本観光連盟、日本文化中央連盟、日本山岳会、日本基督教青年会、日本基督教女子青年会、日本児童遊園協会、大日本紡績連合会、大日本海洋少年団、大日本体育協会、大日本連合青年団、大日本連合婦人会、大日本武徳会、全国産業団体連合会、大日本少年団連盟、大日本女子連合青年団、講道館、公園緑地協会、国立公園協会、帝国少年団協会、協調会、勤労者教育中央会、奨健会、修養団、生命保険会社協会」¹⁹などであった。

日本厚生協会設立間もなく、1938年(S13年)6月26日～7月3日迄ローマに於て第3回世界厚生会議が開催されるにあたり、磯村・マンタイ会談の協議事項通り次の人選が決定し、派遣された。

厚生省体育課長	村田五郎(日本厚生協会代表)
大阪市清掃課長	山崎 豊(開催都市代表)
東京市記念事業部	富田 滋
組織委員会囑託	保科 胤 ²⁰

まとめ

厚生省との関係

厚生省は1938年(S13)1月設置され、そして日本厚生協会は同年4月設立した。同協会の事務所は厚生省内に置かれたことをみても、また「厚生」という名称を用いたことも、さらに厚生省局長が協会の理事長に、課長が常任理事に就任することも偶然の一致ではない。このことからみても、厚生省の影響は大きいと言える。

日本厚生協会会則第六条目的の第一項に「関係団体ノ連絡協調ニ関スル事項」という項目がある。これは「保健社会省(仮称)設置要綱(昭和12年7月9日閣議決定)の事務事項「体育運動団体ノ統制…」とある。ここに両者の事業上の一致点がみられる。さらに日本厚生協会会則第六条目的と厚生省官制体力局の事務事項を比較してみると、両者に事業上の関連がみられる。このことから日本厚生協会は厚生省の外郭団体としての性格が十分伺える。

以上の結果からみて厚生省の存在が日本厚生協会設立を容易にした要因と言えよう。

世界厚生会議との関係

日本厚生協会は第1回、第2回世界厚生会議に出席したR. L. ダーギン、白山源三郎、磯村英一ら、また厚生運動に関する

中央機関の必要性を主張した先駆者の努力によって設立に至ったわけであるが、協会設立の決定要因は1940年(S15)日本で第4回世界厚生会議開催の決定である。磯村・マンタイ会談の協議事項にもある通り日本は、「①第3回世界厚生会議(ローマ)に正式代表を派遣しなければならないこと、②開催都市を決定し、そこから代表をローマへ派遣しなければならないこと、③第3回世界厚生会議終了後A. マンタイを日本側で受け入れねばならないこと」の3項目を実行しなければならなかった。このため、事業を実施するための中央機関設立が急務となったものと考えられる。

要するに、日本厚生協会設立の直接の動機は第4回世界厚生会議日本開催の為の受皿として発足したものと見えよう。

引用文献

1. 「大阪朝日新聞」 昭和11年6月26日
2. 「厚生省二十年史」 昭和35年7月 P. 96
3. 野口源三郎 衛生省の新設を期待す「体育と競技」 16巻6号 昭和12年6月
4. 「厚生省二十年史」 P. 94～95
5. *Ibid.*, P. 96～97
6. *Ibid.*, P. 106
7. 「日本レクリエーション協会二十年史」 昭和41年11月1日 P. 13
8. National Recreation Association of America, Recreation. July. 1932
9. 磯村英一 「厚生運動概説」 東京 常磐書房 昭和14年1月30日 P. 14
10. *Ibid.*, P. 14～16
11. National recreation Association of America *op.cit.*, July, 1932
12. 日本レクリエーション協会二十年史 P. 20
日程、議題詳細は磯村英一 *op.cit.*, P. 16～37
13. *Ibid.*, P. 44～45
14. 東京市役所「オリンピック資料二輯国際厚生運動に就て」 昭和13年2月
15. 東京市役所「オリンピック資料一輯オリンピックと東京市」 昭和13年1月
16. 「日本レクリエーション協会二十年史」「日本レクリエーション協会三十年史」 昭和52年3月による。
17. 「日本レクリエーション協会三十年史」 P. 24
18. *Ibid.*, P. 24
19. 「日本レクリエーション協会二十年史」 P. 26
20. 磯村英一 *op.cit.*, P. 52

女子従業員のレクリエーション参加と職場環境認知

○増田 慧 田中 鎮雄 小俣里知子 今野 守 武田 正司
(日本大学) (日本大学) (日本大学) (日本大学) (日本大学)

フィジカルレクリエーション, 体調感, 職場環境認知,
女子従業員

I 目的

今日の企業における機械化, 自動化, 高速化などの技術革新の発展は, 労働形態を変えたばかりでなく人間関係までも変えてしまった。その結果, 従業員にさまざまな不応現象が現われてきている¹⁾。このような状況が, 従業員個人の問題にとどまらず, 企業全体の問題としても重要な意味をもたらしていることはいうまでもない。従業員の福祉やコミュニケーションの促進さらに経営上の立場から, 健康・体力づくりを中心とした積極的健康管理の推進が強く叫ばれるのもこのためである²⁾。このような現実を重視したわれわれは, 従業員のスポーツ・レクリエーション参加と職場生活との関係の研究に着手したのであった。

すなわち, (1)従業員は, 健康管理の1つとして運動・スポーツ志向性をもって³⁾いること, (2)運動・スポーツ志向性は, 職場や地域のスポーツ行事参加などのスポーツ・レクリエーション行動を促進すること, (3)このことが従業員の健康感, 体力感, 体調感を改善する傾向にあること⁴⁾, および(4)体調の良好なものは, 職場環境を好意的に認知する傾向にあることなどを示唆したのであった。

上述のわれわれの研究は, いずれも男子従業員について調査分析したものであったし, 女子従業員に関するこの種の研究は事実未開拓の状況にある。しかし, われわれは, 女子従業員に関するこの種の研究を, 男子従業員についてのデータと短絡的に比較分析しようとは考えていない。すなわち, 女子従業員には, 女性としての生理学的特性のほかに, 従業員が比較的若い年齢層に集中していること, 職域・職種などが限定されていること, スポーツ・レクリエーション行動に関しても, 男性とは異った社会的背景をもって⁵⁾いること, および運動・スポーツへの志向, 体力, 技能, スポーツ経験などに, 女性特有の傾向が存在することなどの現実をふまえながら研究を進めなければならないと考えている。

これらの女子従業員に関する特殊事情を考慮しながら, 男子従業員のスポーツ・レクリエーション行動とその機能などにみられる諸傾向との差異をいくつかの視点から分析し, 主題の解明に当らうとするのが本研究の目的である。

II 方法

- 1)調査対象: 静岡県浜松市S自動車会社男女従業員
- 2)調査方法: 質問紙調査
- 3)調査時期: 昭和59年7月
- 4)サンプルの構成

有効回収数: 1015 (男子806, 女子209)

有効回収率: 67.7% (男子80.6%, 女子41.6%)

上記サンプルのうち, 女子従業員と男子従業員との比較分析を試みるため男女とも分析するサンプルを30歳未満に限定した(表1参照)。

表1 サンプルの構成

年齢	性別	男	女
20歳未満		88 (25.1)	50 (28.4)
		263 (74.9)	126 (71.6)
計		351 (100.0)	176 (100.0)

()内%

5)質問紙の構成

- (1)基本的属性に関する項目
- (2)スポーツ参加形態に関する項目
- (3)「健康」等の自己評価に関する項目
- (4)健康管理方針に関する項目
- (5)職場環境認知(WES)に関する項目

なお, WES(Work Environment Scale)¹⁰⁾は, Moos, R.H.によって作成され, 浅井らにより日本語版が発表されている。本研究では, 浅井らによる日本語版の一部修正して使用した。

III 結果と考察

1. 健康管理方針, スポーツ参加形態, 身体に関する自己評価における性差

表2は, 健康管理方針, スポーツ参加形態および身体に関する自己評価について性差を検討したものである。

健康管理方針についてみると, 男女に共通して運動・スポーツを健康管理法のひとつとして認めているものが多いことが理解できる。

次いで, 規則正しい生活を心がけているものや食生活に注意しているものが比較的多くみられ, 特に, 女子に規則正しい生活志向性の強いことがわかる。

スポーツ参加形態についてみると, 男女ともに職場のレクリエーション行事である「スポーツ大会」に参加したものが多くみられる中で, 「職場スポーツクラブ所属」, 「健康マラソン大会参加」, 「駅伝大会参加」, 「地域スポーツクラブ所属」および「地域スポーツ行事参加」のいずれの項目においても, 女子は男子より消極的な傾向を示している。

身体に関する自己評価についてみると, 男女とも健康感

表2 健康管理方針・スポーツ参加形態・身体に関する自己評価の男女比較

項目	健康管理方針				スポーツ参加形態						身体に関する自己評価		
	運動・スポーツ志向	食事に注意	規則正しい生活志向	くすり・ビタミン剤等依存	職場スポーツクラブ所属	健康マラソン大会参加	駅伝大会参加	スポーツ大会参加	地域スポーツクラブ所属	地域スポーツ行事参加	健康の自己評価	体力の自己評価	体調の自己評価
男	212 60.4	159 45.3	161 45.9	209 59.5	133 37.9	77 21.9	104 29.6	232 66.1	86 24.5	113 32.2	100 28.5	92 26.2	146 41.6
女	91 51.7	74 42.0	101 57.4	115 65.3	44 25.0	21 11.9	13 7.4	106 60.2	17 9.7	39 22.2	42 23.9	28 15.9	62 35.2
χ ²	3.626	0.503	6.220	1.663	8.734	7.752	33.578	1.756	16.422	5.751	1.589	7.240	2.717

印：相関の有意水準 (: 5% ** : 1% *** : 0.1%)

および体調感では同様な傾向を示しているが、女子の体力の自己評価は男子よりも明らかに低い。

以上の結果から、女子従業員の特徴をみると、女子従業員は男子従業員と同じ割合で運動・スポーツを健康管理法のひとつとして認めているながら、現実のスポーツ参加形態は、その多くが職場のレクリエーションなスポーツ行事を中心としている傾向がみられ、競技性の強い行事またはクラブ参加は比較的低調な傾向を示し、体力の自己評価

は男子従業員に比べて低いことが指摘されてよいであろう。

表3および表4は、健康管理方針、スポーツ参加形態および身体に関する自己評価のそれぞれの項目をクロス分析した結果である。表中の数字はφ係数を意味しており、相関の有意水準も付記されている。これらの表の詳細な分析考察は別の機会にゆずることとし、今回は太線枠内に注目して考察を進めることとする。

表3 項目間の相関マトリックス —男子従業員の場合—

項目	健康管理方針				スポーツ参加形態						身体に関する自己評価			
	運動・スポーツ志向	食事に注意	規則正しい生活志向	ビタミン剤・くすり等依存	職場スポーツクラブ	健康マラソン大会	駅伝大会	スポーツ大会	地域スポーツクラブ	地域スポーツ行事	健康感	体力感	運動不足感	体調感
健康管理方針	運動・スポーツ志向	1.000												
	食事に注意	*** 0.269	1.000											
	規則正しい生活志向	*** 0.289	*** 0.575	1.000										
	ビタミン剤・くすり等依存	*** 0.175	0.090	0.045	1.000									
スポーツ参加形態	職場スポーツクラブ	*** 0.284	0.003	0.071	0.058	1.000								
	健康マラソン	0.077	0.040	0.032	0.110	0.054	1.000							
	駅伝大会	*** 0.245	0.011	0.016	0.024	0.149	0.274	1.000						
	スポーツ大会	*** 0.281	0.083	0.055	0.109	0.212	0.249	0.227	1.000					
地域スポーツクラブ	*** 0.258	** 0.147	** 0.140	0.043	0.088	0.130	0.167	0.212	1.000					
地域スポーツ行事	*** 0.234	0.083	0.039	0.028	0.128	0.298	0.247	0.223	0.586	1.000				
身体に関する自己評価	健康感	* 0.124	0.004	0.014	0.096	0.132	0.153	0.102	0.145	0.110	0.227	1.000		
	体力感	* 0.125	* 0.121	0.075	0.029	0.149	0.091	0.053	0.057	0.173	0.102	0.327	1.000	
	運動不足感	0.047	0.083	0.103	0.033	0.037	0.058	0.064	0.096	0.152	0.106	0.006	0.089	1.000
	体調感	** 0.163	0.056	0.047	0.201	0.115	0.069	0.060	0.140	0.043	0.099	0.428	0.194	0.073

数字：φ係数

印：相関の有意水準 (: 5% ** : 1% *** : 0.1%)

表4 項目間の相関マトリックス — 女子従業員の場合 —

項目	健康管理方針				スポーツ参加形態						身体に関する自己評価			
	運動スポーツ志向	食事に注意	規則正しい生活志向	ビタミン剤・くすり等依存	職場スポーツクラブ	健康マラソン大会	駅伝大会	スポーツ大会	地域スポーツクラブ	地域スポーツ行事	健康感	体力感	運動不足感	体調感
健康管理方針	運動・スポーツ志向	1.000												
	食事に注意	*** 0.270	1.000											
	規則正しい生活志向	*** 0.271	*** 0.501	1.000										
	ビタミン剤・くすり等依存	0.108	0.009	0.024	1.000									
スポーツ参加形態	職場スポーツクラブ	* 0.190	0.093	0.020	0.117	1.000								
	職場健康マラソン	** 0.215	0.034	0.034	0.100	0.030	1.000							
	駅伝大会	0.056	0.020	0.020	0.023	0.013	** 0.231	1.000						
	スポーツ大会	*** 0.285	0.037	0.004	0.031	* 0.174	** 0.227	0.096	1.000					
地域スポーツ参加形態	地域スポーツクラブ	** 0.201	0.006	0.029	0.036	0.033	0.058	0.019	* 0.187	1.000				
	地域スポーツ行事	0.050	0.044	0.072	0.101	0.039	** 0.226	0.098	*** 0.294	*** 0.335	1.000			
身体に関する自己評価	健康感	0.114	0.009	0.105	0.016	0.139	0.000	0.046	0.074	* 0.178	0.022	1.000		
	体力感	** 0.203	0.102	0.029	0.088	*** 0.251	0.080	0.055	0.068	0.068	0.030	*** 0.412	1.000	
	運動不足感	** 0.200	0.021	0.063	0.017	0.000	0.107	0.071	0.102	0.114	0.112	0.044	0.057	1.000
	体調感	0.046	0.047	0.130	0.087	0.069	0.015	0.019	0.105	* 0.162	0.021	*** 0.396	0.037	0.131

数字：φ係数

印：相関の有意水準 (: 5% ** : 1% *** : 0.1%)

表4に示す女子従業員の傾向を表3の男子従業員の場合と比較してみると、運動・スポーツを心かけているものは、食事に注意し、規則正しい生活を心かけているものが多いことが男子従業員と同様に認められる。しかし女子従業員の場合は、運動・スポーツ志向の有無に関係なくビタミン剤・くすりへの依存傾向を持っていることに注目しておく。

また表4から実際のスポーツ参加形態との関係についてみると、女子従業員は、男子従業員よりも全体的にφ係数がダウンしていることに気付く。この傾向は、女子従業員の場合、競技性の強いスポーツに対する消極的傾向のあることを一層明白に示すものとして注目しなければならないのである。

さらに、女子従業員の「運動・スポーツ志向」と「身体に関する自己評価」との関係についてみると、運動・スポーツ志向の強いものは、同じ女子従業員の中でも相対的に体力の自己評価が高く、運動不足感が少ない傾向にありながら、健康感・体力感のレベルでは必ずしも高くない点が指摘される。

一方、表4にみるとおり、女子従業員の場合、男子従業員に比べて職場内の競技性の強いスポーツへの参加に消極性を示しながら、彼女たちの地域スポーツクラブ参加と体調感のよさとの間に関連性が認められる点に注目すべきであろう。企業内のレクリエーションスポーツ活動参加に加えて、同じ性格をもつ地域スポーツ活動に参加することが、女子従業員の体調感を好転させる傾向のあることを示唆しているからである。

2. 体調感と職場環境認知との関係における性差

表5と表6は、体調感と職場環境認知との関係を示すものである。体調良好群（「非常に体調がいい」、「どちらかといえば体調がいい方だ」と、そうでない群（「どちらともいえない」、「あまり体調がよくない方だ」、「非常に体調がよくない」）)とに分けて、WES90項目とクロス分析した結果から有意差の認められた項目が列挙されている。

表5 「体調」の自己評価とWESとの関係 —男子従業員の場合—

項 目	回 答	体 調 感		χ ² テ ス ト
		非常に体調がいい どちらかといえば 体調がいい方だ	どちらともいえない あまり体調がよく ない方だ 非常に体調がよく ない	
仕事そのものは、本当にやりがいのあるものである。	はい	99 (67.8)	108 (52.7)	**
仲間意識が強くない。	いいえ	111 (76.0)	134 (65.4)	*
職場には、活気があふれている。	はい	84 (57.5)	89 (43.4)	**
余分な仕事をさせることは非常に難しい。	いいえ	58 (39.7)	60 (29.3)	*
概して、職場のひとびとは、感じたことを率直に表現している。	はい	91 (62.3)	101 (49.3)	*
他人のかけ口をいう人がいるので問題が起きる。	いいえ	120 (82.2)	144 (70.2)	*
上役は、従業員に対して恩に着せるような口のききかたをする事が多い。	いいえ	126 (86.3)	156 (76.1)	*
上役は、従業員からの批判を受けないようにしている。	いいえ	101 (69.2)	118 (57.6)	*
従業員は、気がねせずに昇給を要求することができる。	はい	49 (33.6)	47 (22.9)	*
上役は、従業員に極端な期待をかけすぎている。	いいえ	122 (83.6)	143 (69.8)	**
従業員は、自分自身で決断できるようにすすめられている。	はい	72 (49.3)	79 (38.5)	*
問題が生じたとき、上役は、従業員自身で解決するようにすすめる。	はい	51 (34.9)	50 (24.4)	*
従業員は、仕事に直接関係しないことでもいろいろ学ぶようにすすめられている。	はい	112 (76.7)	121 (59.0)	***
上役は、定期的に従業員の将来計画の目標について話し合う。	はい	52 (35.6)	51 (24.9)	*
従業員たちは、仕事を果すために多大の注意を払っている。	はい	128 (87.7)	151 (73.7)	**
ここは、能率のよい仕事中心の職場である。	はい	83 (56.8)	94 (45.9)	*
多くの仕事をなしとげることが、職場にとって重要なことである。	はい	118 (80.8)	133 (64.9)	**
従業員は、一生懸命働いている。	はい	136 (93.2)	174 (84.9)	*
仕事をする上でいつも圧迫を感じる。	いいえ	104 (71.2)	111 (54.1)	**
のんびりする時間がない。	いいえ	65 (44.5)	51 (24.9)	***
仕事のノルマを維持していくことはむずかしい。	いいえ	62 (42.5)	59 (28.8)	**
諸手当に関して、従業員は十分に説明されている。	はい	67 (45.9)	63 (30.7)	**
きまりや方針がたえず変っている。	いいえ	96 (65.8)	158 (77.1)	*
会社の方針や規則に従うようにきびしい要請がある。	いいえ	69 (47.3)	75 (36.6)	*
新しい違ったアイデアがいつも試みられている。	はい	66 (45.2)	61 (29.8)	**
この職場は、自分の新しいアイデアを生かせるところである。	はい	83 (56.8)	83 (40.5)	**
変った方法は、あまり重視されない。	いいえ	85 (58.2)	78 (38.0)	***
同じ方法が、かなり長時間もちいられ続けている。	いいえ	47 (32.2)	28 (13.7)	***
いろいろなことに対する新しいアプローチは、めったに試みられない。	いいえ	81 (55.5)	86 (42.0)	*
これからも、全てのことはあまり変りそうもない。	いいえ	48 (32.9)	44 (21.5)	*
照明は非常にすばらしい。	はい	44 (30.1)	38 (18.5)	*
そろそろ職場のインテリアは新しく模様かえす必要がある。	いいえ	48 (32.9)	47 (22.9)	*
部屋の換気はきわめてよい。	はい	59 (40.4)	56 (27.3)	*

() 内%

印：相関の有意水準 (: 5% ** : 1% ***0.1%)

表6 「体調」の自己評価とWESとの関係 — 女子従業員の場合 —

項 目	回 答	体 調 感		
		非常に体調がいい どちらかといえば 体調がいい方だ	どちらともいえない あまり体調がよく ない方だ 非常に体調がよく ない	z ² テスト
仕事そのものは、本当にやりがいのあるものである。	はい	37 (59.7)	48 (42.1)	*
職場の雰囲気は、人間味に欠けている。	いいえ	54 (87.1)	76 (66.7)	**
上役は、従業員の提案を常にその人の功績として十分認めている。	はい	46 (74.2)	65 (57.0)	*
ここは、能率のよい仕事中心の職場である。	はい	37 (59.7)	50 (43.9)	*
仕事をする上でいつも圧迫を感じる。	いいえ	50 (80.6)	72 (63.2)	*
時間に追われることはない。	はい	17 (27.4)	13 (11.4)	**
従業員には、通常割当られた仕事の詳細が説明されている。	はい	49 (79.0)	64 (56.1)	**
従業員は、しばしば自分のやるべきことを正確に理解できない。	いいえ	46 (74.2)	65 (57.0)	*
従業員が遅刻した場合には、残業してその分をうめ合わせることができる。	はい	20 (32.3)	19 (16.7)	*
時々、仕事場が暑すぎることもある。	いいえ	9 (14.5)	3 (2.6)	**
この職場の建物は、モダンで美しい。	はい	8 (12.9)	3 (2.6)	**
机やイスなどの備品が、いつも便利のように配置されている。	はい	36 (58.1)	44 (38.6)	*
部屋の換気はきわめてよい。	はい	21 (33.9)	19 (16.7)	**

() 内%

印：相関の有意水準 (: 5% ** : 1%)

男子従業員の場合についてみると、表5から明らかなように、体調良好群とそうでない群との間には、WES90項目中33項目に有意差が認められ、しかも、これらの項目すべてに体調良好群の方が好意的に評価するという結果が得られた。これを具体的にみると、体調良好群は、「仕事そのものは、本当にやりがいのあるものである」、「この職場は、自分のアイデアを生かせるところである」など、「従業員たちは、仕事を果たすために多大の注意を払っている」や「従業員は、一生懸命働いている」など、「仲間意識が強くない」「他人のかけ口をいう人がいるので問題が起きる」などの否定、および「照明は非常にすばらしい」や「部屋の換気はきわめてよい」などの「働きがい」、「仕事への取り組み方」、「人間関係」、「物理的環境」等に関する諸項目に好意的な反応を示しているのである。

上述のような男子従業員の職場環境認知の傾向に対して、女子従業員の場合は、表6から明らかなように、13項目に有意差が認められる。すなわち体調のよさを認める女子従業員は、「仕事そのものは、本当にやりがいのあるものである」、「ここは、能率のよい仕事中心の職場である」、「職場の雰囲気は、人間味にあふれている」および「机や椅子などの備品が、いつも便利のように配置されている」などの項目に対しても好意的に反応するものが多くみられ、仕事へのモラルの高さ、人間関係の良好さを認め、物理的環境に対する認知にまで好意的な反応を示すなど、男子同様体調良好群の方が職場環境認知に好ましい傾向を示してい

る点が注目される。

要 約

30歳未満の男女従業員（男子351名、女子176名）を対象にスポーツ行動等、体調感等、および職場環境認知について調査分析を試み、次のような知見を得た。

(1) 従業員は、男女とも過半数の者が自己の健康管理の一環として運動・スポーツ志向性をもっており、女子では同じ目的で規則正しい生活志向が目立つ。

(2) しかし、スポーツ参加の実態をみると、男子が全般的にスポーツ活動に積極性を示しているのに対して、女子の場合は、レクリエーションのスポーツ中心ないしはスポーツ行事参加型であることが特徴的であるといえよう。特に女子の場合には、企業内のほか地域のスポーツクラブへの参加者に体調感のよい者が多く認められる。

(3) 運動・スポーツ志向は、男女とも体力感の高さと結びつくが、概して女子の体力感は低い。

(4) 体調感の良好な者についてみると、性差は認められながらも男女とも職場環境認知がよく、従って職場によりよく適応していることが推察される。

以上のことから、女子従業員に対するレクリエーション的スポーツの推進は、彼女らの健康感・体調感を高め、ひいては職場環境認知を改善することによって職場への適応を促進する傾向のあることが予測される。今後この仮説を検証すべく研究を進展させたいと考えている。

文 献

- 1) 梅沢 勉, 加藤正明: 「職場のメンタルヘルスのすすめ方」, 1985, p. 105.
- 2) 早川芳太郎, 石河利寛, 糸野 豊: 「職場スポーツ」, 1982, p. 63.
- 3) 増田 慧, 田中鎮雄, 今野 守, 武田正司: 「スポーツ参加と職場環境への適応」レクリエーション研究第12号, 1984, pp. 24-25.
- 4) 増田 慧, 大橋治人, 田中鎮雄: 「スポーツ参加と職場環境への適応」研究年報第33集, 日本大学文理学部(三島), 1985, pp. 279-285.
- 5) 今野 守, 田中鎮雄, 増田 慧, 小俣里知子, 松村悦博, 武田正司: 「スポーツ参加と従業員の生きがい」レクリエーション研究第12号, 日本レクリエーション学会, 1984, pp. 26-27.
- 6) 今野 守, 小俣里知子, 武田正司: 「スポーツクラブ参加と従業員の生きがい」研究年報第33集, 日本大学文理学部(三島), 1985, pp. 287-293.
- 7) 今野 守, 田中鎮雄, 増田 慧, 武田正司: 「従業員の健康志向とスポーツ参加形態にみる構造的特徴」日本体育学会第36回大会口答発表, 1985.
- 8) 増田 慧, 田中鎮雄, 今野 守, 武田正司: 「従業員のフィジカルレクリエーションと職場環境認知」レクリエーション研究第15号。
- 9) 武田正司, 田中鎮雄, 増田 慧, 今野 守: 「従業員のレクリエーション行動と職場環境認知」レクリエーション研究第14号, 日本レクリエーション学会, 1985, pp. 78-83.
- 10) Moos, R. H.: Work Environment Scale Manual, Consulting Psychologist Press, Alto, California, 1981.
- 11) 浅井正昭: 「日本語版一職場環境尺度作成の試み」, 『組織における役割達成責任感・満足度・生産性と適正人員規模に関する日米比較文化的研究』, 昭和56年度トヨタ財団研究報告書, 1983, pp. 114-135.

余暇・スポーツデータベースの情報サービスの現状と課題

○ 山口 泰雄 池田 勝 (鹿屋体育大学)

データベース、余暇・スポーツ、情報サービス

I. はじめに

情報化社会の進行は、科学技術に関わる専門家集団だけでなく、余暇・スポーツの研究者、指導者およびプランナーをはじめ、一般のスポーツ愛好者にまで影響を及ぼすようになってきた。ニューメディアの発達と共に情報化が進み、新聞、雑誌、テレビなどのマス・メディアだけでなく、コンピュータ、ファクシミリ、複写機、ワープロ等が毎日吐き出していく情報は膨大なものになっている。例えば、1970年から1980年までの10年間に、私たちの社会の情報総量は2.34倍、テレビだけなら170倍、週刊誌で5.2倍にも増えた(新、1986)。余暇・スポーツに関する情報も例外ではなく、マス・メディアによるスポーツ番組、記事等の増加はもとより、最近ではキャプテン・サービスのようにビデオテックスを使った情報サービスも現われるようになってきた。

現代はまさに「情報の洪水」という言葉が示すような状況になってきているが、真の意味での情報化社会とは大量の情報が存在する社会ではない。滑川ら(1984)が指摘したように“高度の情報処理が万人によって行なわれ得る社会でなければならない。”またデータベースの出現は、情報伝達の歴史において画期的であるといえる。すなわち、伝統的な情報の“送り手”と“受け手”ではなく、利用者が働きかける(検索する)ことによって、情報の“送り手”にもなるからである。

さらに、余暇・スポーツ科学の専門研究者としては情報提供者(Information Provider, IP)としての役割が期待されている。誤った健康やスポーツの方法に関する情報が氾濫する中において、今程、科学的研究に基づいた、わかりやすい情報が求められている時代はないであろう。

このような情報との関わりは、決して専門研究者だけでなく、余暇・スポーツ行政の担当者や民間団体の指導者にまで拡がりを見せている。県立体育館や社会体育行政機関においては、スポーツ情報センターを開設するところが増えてきた。スポーツ振興は、これまでのエリア・サービス、プログラム・サービスとクラブ・サービス(宇土、1976)だけでなく、情報サービスが中心となるような時代に入りつつある。

余暇・スポーツ科学に関する文献データベースの重要性については、改めて記すまでもないが、欧米における余暇・スポーツ科学に関する動向については、第14回大会で報告した(山口、池田、1984)。本研究は、わが国の余暇・スポーツデータベースの内容とシステムを調査することによって、余暇・スポーツ科学に関する文献データベースの開発の基礎資料とするものである。

本研究の分析視点は、次の3点である。

- 1) データベースとしての内容
- 2) 情報サービスの方法
- 3) データベースの機能性と必要性

II. 研究の方法

上記の目的に即して、次の2つの研究方法を用いた。

- 1) 文献資料の収集分析
- 2) 現地調査によるヒアリング調査

ヒアリング調査は、1984年5月~1986年7月にかけて、データベース関連企業及び公共セクター等に対して実施した。

III. わが国の余暇・スポーツデータベースの現状と問題点

わが国の余暇・スポーツデータベースには、書誌情報や抄録を取録した文献データベースと、公共センターや営利法人が情報サービスを行っている案内データベースの2つがある。ここでは、文献データベースと案内データベースの2つに分けて、それぞれの現状と問題点を検討する。

1. 文献データベース

1) EDMARS: (Education Documentation Management and Retrieval System 教育研究文献検索システム—UTOPIA)

岐阜大学教育学部附属カリキュラム開発センター(CRDC)が開発した教育研究の文献検索システム。日本体育学会の協力で、体育学の文献情報がファイルされている。内容は、“体育の科学”を始めとする体育関係雑誌と紀要、及び日本体育学会発表の情報が含まれている。抄録はインプットされておらず、書誌情報である。

検索は、5つの要素(標題、索引語、著書発表機関、発表年度)を組み合わせて行うことができる。現在、データは岐阜大学だけでなく、筑波大学のUTOPIA (University of Tsukuba Online Processing of Information) データバンクにファイルされており、筑波大学学術情報処理センターにユーザー登録すれば電話回線を通じて利用することができる。また、スタンドアロン型パソコンによる検索方法も可能である。

2) JOIS

(日本科学技術情報センターによる科学技術文献データベース)

日本科学技術情報センター(JICST)が開発した本格的な科学技術文献情報速報のデータベース版。主要50余ヶ国の科学技術情報を漢字データベースで提供しており、CAB(農学文献)やMEDLINE(医学文献)も含まれていることから、海外のスポーツ科学、レクリエーションの情報もアクセスできる。海外データベースだけでなく、国内医学文献ファイルも収録されている。タイトル、抄録、キーワードが和文で表示され、和文データベ

スとして画期的であるといえよう。現在、大学図書館のレファレンス・サービスにおいて登録しているところが増えている。

3) TOOL-UP: Tokyo University Online Union List of Periodicals

(東京大学学術雑誌総合目録)

学術雑誌(人文・社会科学、自然科学)の書誌情報データベース。1982年から、東大大型計算機センターを通じて全国の大学図書館、研究者にオンライン・サービスが行われている。

4) TULIPS

(筑波大学図書館蔵書検索システム)

筑波大学図書館の蔵書(約57万冊)のオンライン検索システム。東京教育大学体育学部の図書もファイルしているので、余暇・スポーツ科学の書誌情報としては大規模なデータベースである。一般利用には、筑波大学学術情報センターと附属図書館への利用申請が必要である。検索は、日本語はカタカナ入力欧文はアルファベット入力で行う。

5) NEEDS-IR

(日本経済新聞社の新聞・雑誌記事データベース)

日本経済新聞社および日経マグローウヒル社の刊行物を中心に、海外の新聞・雑誌の翻訳版や経済・産業に関する雑誌記事索引も収録している大容量のデータベースである。電話回線によるオンライン検索が可能であり、レジャー産業、スポーツ産業の動向を分析する有力な情報源である。

上記データベースの他に、全国の大学図書館を結ぶ文献情報センターが、1986年4月にオープンされ、書誌情報のネットワークに参加しており、この全国ネットワークが完成すれば、レファレンス・サービスの効率化とスピードが期待できよう。

2. 案内データベース

1) 神奈川県スポーツ情報センター

(神奈川県立体育センター内にある公共スポーツ情報サービス)

1984年9月に、神奈川県立体育センター内にオープンした。情報内容は、県内の施設、教室、イベント、指導者、団体等に関してであり、約2万件の情報をファイルしている。検索方法は、電話と窓口訪問で、オンライン・サービスは行っていない。一日平均約34件の利用があり、問い合わせ内容は施設(約37%)が最も多く、続いて団体、行事、指導者の順である。施設に関する問い合わせの中では、プール、テニスコートに関するものが約5割を占め、社会体育における水泳、テニスのニーズの高さを反映している。公共セクターとしては先駆的な情報サービス機関であり、スポーツライブラリーや健康体力相談のコーナーも設置されている。

2) 横浜市スポーツ情報センター

(財団法人横浜市スポーツ振興事業団による公共スポーツ情報サービス)

横浜市スポーツ情報センターは、1985年9月に横浜新都市ビルに開設された。前記の神奈川県立情報センターをモデルにして設立されたもので、横浜駅東口にある横浜

新都市ビル(横浜ごろう)9階市民フロアーの一角という地理的に利用しやすい好位置にある。情報内容は施設、サークル、指導者、イベント等で、約1万4千件の情報をコンピュータにファイルしている。検索方法は電話と窓口訪問で、ファクシミリを使って、空き情報の提供と利用申し込みの受付を行っている点がユニークといえよう。

情報サービス以外にも、ビデオライブラリー、展示、スポーツ医事相談、ライブラリーを設置しており、一日当たり平均来所数は2300人と非常に多い。またスポーツ情報の問い合わせは、窓口43%、電話57%であり、地理的好条件にある来所者の多さを反映している。問い合わせ内容は、やはり施設に関するものが多く全体の63%、次いでサークル15%となっている。情報サービスだけでなく、利用者の多いデパートで、展示やスポーツ相談コーナーを充実させたことが成功の鍵といえよう。

3) 大阪市スポーツ情報センター

(財団法人大阪市スポーツ振興協会による公共スポーツ情報サービス)

大阪市スポーツ情報センターは、1984年に開設された。一日当たり平均約40件の問い合わせがある。情報はコンピュータにファイルされておらず、データベースとはいえないが、施設、教室、指導者、団体、行事に関する情報内容を提供できる体制になっている。教室に関する問い合わせが最も多く約56%、次いで施設約27%となっている。

4) キャプテン: Character And Pattern Telephone Access Information System

(NTTの文字図形情報ネットワークシステム)

NTTが開発したビデオテックスによる文字図形情報ネットワークで、専用端末かテレビにアダプターを接続し、電話回線によりアクセスできる。情報には、無料情報と有料情報の2つがある。情報内容は、スポーツ、娯楽・趣味、旅行・観光や健康情報もファイルされている。スポーツ・ニュースもリアルタイムでインプットされており、健康・余暇・スポーツ・観光に関するオンライン情報サービスとしては、わが国で最大規模の情報量である。

5) 東京レガイド

(営利法人東京レガイド社による飲食・買物等に関する案内データベース)

東京レガイド社によるショッピング、飲食サービスに関する案内データベース。北米標準方式(NAPLPS)のビデオテックスを用いた文字図形情報データベースで、都内の街頭や各所に端末機が設置されている。検索料は無料で、IPからの広告料で運営している。1日平均の利用者数は約7千人と推定され、20代、30代の利用者構成比が高い。

6) 鹿屋健康余暇開発情報システム

(鹿屋市による健康・余暇に関するデータベース)

1985年に、鹿屋市は通産省から「ニューメディア地区」の指定を受け、国際健康余暇開発情報システムのプレ実験中である。ニューメディア指定地区の中でも、健康・余暇情報データベースはユニークである。情報内容は、健康、スポーツ、余暇・生涯教育、地域情報に関するもの

で、1989年の完成予定である。NAPLPS方式のビデオテックスを採用しており、電話回線によるオンライン検索が可能になる。

IV. 鹿屋体育大学スポーツ科学文献情報システム(KISS)について

これまで検討してきたように、わが国において余暇・スポーツに関する案内データベースや図書館の書誌情報に関するデータベースは徐々に整備されてきている。また、欧米ではSIRCやSIRLSのような余暇・スポーツ科学に関する専門的なデータベースが開発されてから10年以上経過しており、大学図書館や研究者個人での利用が広く普及している。しかしながら、わが国では海外のデータベース利用に関しては強い関心を示してきたが、余暇・スポーツ科学に関して独自に開発された文献データベースは皆無で、わずかにEDMARSに収録された体育学文献ファイルのみである。このような背景の中で、唯一の国立体育大学である鹿屋体育大学は、わが国の余暇・スポーツ科学に関する情報システムの開発を期待されているといえよう。

国際的にみても、余暇・スポーツ科学の専門高等教育機関は情報提供者としてだけでなく、システム開発の中核として、各国において重要な役割を果たしている。カナダのウォータールー大学(SIRLS)、西ドイツのケルン体育大学(Sport Dokumentation)、イギリスのパーミンガム大学(Sport Dokumentation)、アメリカのコロラド大学(TRIC)やカリフォルニア大学サンタバーバラ校(ISPEDS)を始め、オーストラリアのグラツ大学や東ドイツのライプツィヒ国立体育大学、中国の北京体育学院にも情報センターがあり、スポーツ科学の発展に重要な役割を果たし、高い評価を受けている。

データベース産業の最近の動向の1つは、全情報型データベースが出現し、今後大きな発展が予測されることである。全情報型データベースとは、全文(フルテキスト)データベースと経済データや科学技術データを含む定型情報データベースの2つのタイプがある(高橋、1985)。これまでの文献データベースは、書誌型データベースが多く、膨大な不定型な情報を検索するツールとして脚光を浴びているが、技術的には従来の索引誌の延長上にある。これを改良したのが、文献抄録を含んだSIRLS、SIRCやJOISである。文献データベースのユーザーの立場からは、抄録だけでなく、さらにフルペーパーが欲しくなってくる。しかし、研究論文のフルペーパーを全て磁気テープにインプットするのは大変な作業であり、図表入力などを考えるとほとんど不可能に近い。そこで、これらのニーズと欠点を解決できるのが光ディスクファイルの導入であろう。これは文書をスキャナで走査し、イメージ情報として蓄積するもので、光ディスクが大容量であることから、文書ファイルのコンパクト化に有効である。コンピュータの外部メモリとして扱い、その入出力をオンライン化すれば、これまでにない全く新しいタイプの文献データベースの検索システムを開発することができる。

このような新しい文献検索システムを導入して、わが国独自の文献データベースの開発を旨とするのが、図1に示した鹿屋体育大学スポーツ科学文献情報システム(KISS: Kanoya Information System on Sport Sciences)で

ある。鹿屋体育大学はその地理的条件から、特に東南アジア地域でのスポーツ科学情報の中心としての役割を果たすことが国際関係機関から強く期待されている。それゆえ、データベースには、わが国のスポーツ科学文献だけでなく、中国、シンガポール、韓国、タイ、マレーシア等のアジア諸国の文献情報をファイルすることが望まれる。このためには、英文キーワードによる検索方法を導入する必要

があり、和文・英文両用のシーラースを作成しなければならない。効率的な検索には、特にこのシーラースの作成が鍵であり、学際的なプロジェクトチームにより進めることが必要になると考えられる。

V. 結論

本研究では、余暇・スポーツに関する文献データベースと案内データベースの内容とシステムを調査、検討した。文献資料分析とヒアリング調査により11のデータベースの内容、検索システムと機能性・必要性を検討した結果、次の4点が明らかになった。

まず第一に、社会体育の現場や市民生活レベルにおいて案内情報のニーズが高く、公共セクターや営利法人においてそのシステム化が進んでいる。社会体育分野では、特に施設の空情報に対するニーズが高く、今後は施設の予約も可能な検索システムの確立が課題となるだろう。公共セクターによる情報サービスでは、神奈川県と横浜市が先駆的であるが、スポーツ人口が増えつつある今日、地方公共団体による情報サービス機関の整備は社会体育行政として必要不可欠となってくることが予測される。

第二に、これら公共セクターの情報サービス機関にとって、今後の課題は中央情報センターと市町村あるいは地区拠点とのネットワーク化であろう。中央情報センターは、関連機関、部局でバラバラに行われている情報サービスを一元化する役割を担っているが、地区の体育館や行政機関をネットワーク化することによって、組織の合理化と施設利用の効率化が促進されるだろう。情報のネットワーク化が進むことにより、これまで居住地区を中心としてきたコミュニティ・スポーツが、情報ネットワークを基盤とした新しい形態へと広がりを見せることも予想される。さらに、中央→地方というこれまでの情報の流れが、地方→全国へという情報伝達の逆転現象が起こり、地域の交流が一段と進むという状況が出てくると思われる。

第三点は、これからの文献データベースの情報検索システムは、利用者が容易にかつ柔軟に検索を行えるシステムの開発が望まれる。スポーツ科学情報を必要とするユーザーは、研究者だけでなく、スポーツ種目団体や専任コーチや市民スポーツレベルの社会体育指導者、さらにはいわゆる健康スポーツ産業関係者にまで拡がってきている。民間スポーツクラブの成功の一つの鍵は、科学的知識を持ったインストラクターの資質の向上であり、新しいスポーツ科学と現場のギャップを埋めるためには、研究者とコーチ・指導者が共通の用語を使い、コミュニケーションを深めることが大切である(山口・深代、1985)。それゆえ検索システムは、これまでの科学文献データベースのように、英文による複雑なトレーニングを要するものではなく、ユーザーが端末機の画面に表示される和文のガイダンスメッセージを確認しながら、対話形式で操作できるものが望ましいといえよう。情報の価値は、ユーザーが自ら選

扱・操作し、検索したものを利用できるという双方向性にある時、はじめて生きてくるからである。

最後に全情報型データベースの必要性和重要性が強いことと、効率的なデータベースの構築の鍵は、適切なシソーラスの作成の2点である。一般的にデータベースを利用することは、研究の大幅なスピード化を進め、研究成果の質的向上も期待できる。しかし、データベース構築作業は膨大な手間と財源が必要とされる。わが国における独自のデータベース構築には、余暇・スポーツ研究者だけでなく、関連学会を挙げての協力体制が望まれる。

参考文献

- 1) 新睦人."情報社会と日常生活" pp 100-126 濱口恵俊編著 高度情報社会と日本のゆくえ。NHKブックス, 1986.
- 2) 滑川海彦, 下中直人, 市川昌浩. データベース. 東洋経済新聞社, 1984.
- 3) 大阪市スポーツ振興協会. 昭和59年度事業報告書. 1985.
- 4) 高橋達郎. 全情報型データベースの現状. 現代の図書館. 23(4): 240-243, 1985.
- 5) 宇土正彦編著. 体育管理学入門. 大修館, 1976.
- 6) 山口泰雄, 池田勝."欧米における余暇・レクリエーションに関するデータベースと文献情報検索システムについて", レクリエーション研究. 12: 36-37, 1984.
- 7) 山口泰雄, 深代泰子."スポーツ科学の進路を探る—国際スポーツ科学シンポジウム報告—", Japanese Journal of Sports Sciences. 4(4): 302-305, 1985.
- 8) 財団法人ニューメディア開発協会. 昭和59年度余暇関連情報システムに関する調査報告書, 1985.

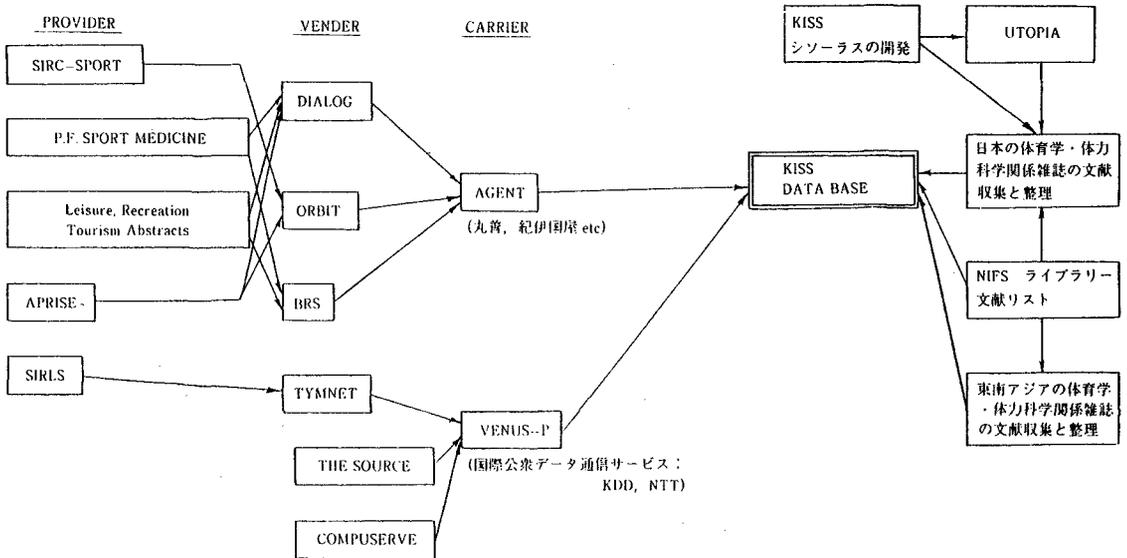


図1 鹿屋体育大学体力・スポーツ科学に関する文献情報検索システム (KISS) の開発構想
(KISS: Kanoya Information System on Sport Sciences)

体育・レクリエーション・プログラム評価に関する 経営学的研究—ライフサイクル理論の応用—

○ 原田宗彦 (鹿屋体育大学) 世戸 俊男 (大阪YMCA体育研究所)

プログラム経営、ライフサイクル理論、マーケティング、
応用研究

I. 緒言

わが国の社会体育は近年急速な発展を見せ、70年代後半に始まった総合的な健康づくりをめざすフィットネス・ブームの隆盛は、幅広い年齢層の人々が新たに体育・スポーツ活動に参加するきっかけをつくった。このような社会の動きは、民間・公共の両部門において体育・スポーツ施設に対する需要を喚起し、数多くの社会体育施設が設立された。

その結果、社会は公共の体育・スポーツ施設に対し、できるだけ多くの人々に体育プログラムを提供し、住民サービスの最大化を図ることを求めるようになった。その一方、民間資本は収益性の高い体育プログラム経営を行なうことによって、最大利益をあげることに企業努力を集中している。いずれの場合においても、利用者のニーズを適確に判断し、それを満たすことのできる体育プログラム経営が求められ、そのために科学的視野に立った体育プログラム経営が望まれるようになってきた。

本研究は、体育プログラム経営の分析に製品ライフサイクル (Product Life Cycle) 理論の適用を試み、その有効性を考察するとともに、プログラム経営に対する戦略と対応策を例示することを目的とする。データは、大阪のあるYMCAプランチ (以下Kプランチとする) の、過去14年間の社会体育プログラム参加者数を用いた。

II. ライフサイクル理論のレクリエーションプログラム経営への応用

ライフサイクルの考え方は、本来の生物界でのライフサイクル現象の他に、シュペンラー (Spengler, O) やトインビー (Toynbee, A) によって文化形態学的研究に用い

られたり、工業製品¹⁾を始め科学活動のライフサイクル²⁾を分析するためにも用いられてきた。その中でも特にマーケティングでこの考えが応用されることが多く、様々な製品や事業が分析の対象となり、経営者はその段階を知ることによって、その段階に適切なマーケティング、生産、技術などの経営の諸機能の対応策を講じてきた。³⁾

このような考えは、体育プログラム経営にも応用することが可能である。製品や事業と同様に、体育プログラムにもライフサイクルが存在し、その各段階における経営戦略と対応策は相違するであろう。このためライフサイクルをいくつかの段階に分類し、プログラムが位置している段階を把握することによってその段階の特徴と対応策を知ることが可能になる。

製品ライフサイクルの理論を最初に公共レクリエーション事業の分析に適用した Crompton と Hensarling は、ライフサイクルの考えは事業の趨勢を図を用いることによって視覚化し、将来の変化の予想を容易にする点において有効であると述べている。⁴⁾ Howard と Crompton はまた、ライフサイクル理論を体育・レクリエーションプログラム経営の分析に応用し、これをプログラム・ライフサイクル (以下 PLC とする) と呼んだ。⁵⁾

一般に PLC は、図1に示されるようなS字型の曲線を描き、その段階は導入期、成長期、成熟期、飽和期、そして衰退期の5つに区分される。導入期はプログラムが地域住民に紹介される時期であり、広告や宣伝の費用がかかるため、この時期に多くの収益を期待することはできない。また初期の参加は将来のプログラムの発展にとってきわめて重要であり、彼らの印象の良し悪しはその後のプログラムの成否の鍵となる。⁶⁾

成長期はプログラムの効用が認められ、参加者数が急速に増加していく時期であり、収益面でも相当の改善が期待される。Howard と Crompton によれば、PLC の導入期と成長期は、(1) プログラムの目新しさ、(2) 参加の容易さ、(3) 同種の競合プログラムの存在、(4) 広告や宣伝、あるいは地域におけるプログラムの認知度、そして参加者に求められる (5) 技術レベルや (6) 用具やウェアの費用といった要因によって影響を受ける。⁷⁾

成熟期では参加者数は増加し続けるものの、そのスピードは鈍り始めることが予想される。この時期には、同種のプログラムを提供する他の商業資本が参入し始め、市場内での競合が始まる場合が多い。これは製品ライフサイクルの場合も同様であり、競争企業が増加し、その間で激しい市場占拠率拡大競争が行なわれる。⁸⁾

飽和期ではこれ以上の新しい参加者は望めず、プログラム参加者数は飽和状態になる。この時期を過ぎると衰退期に入るのであるが、ここで注意すべきことは、果たしてこの時期が本当の飽和状態なのか、それとも単なる停滞 (stagnant) の状態であ

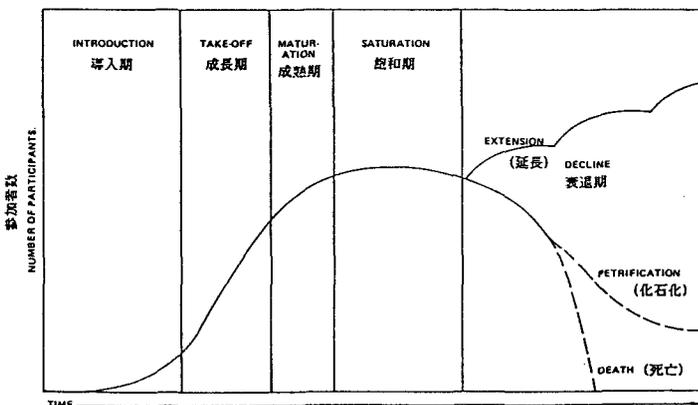


図1 PLCの段階 (Howard と Crompton, 1980, p.180 より作成)

るかという点である。もし単なる停滞ならば、プログラム参加者は、指導者やプログラム内容を変更したり、施設に手を加えることによって再び増加し始める可能性がある。⁹⁾

衰退期になると、プログラム参加者数は減少し始め、参加者は技術レベルの異なる他のプログラムに移行したり、プログラム自身に新鮮さを覚えなくなり参加を中止する。この時期にはプログラムそれ自身の中止が大きな課題となる。衰退期にはまた、プログラムがひじょうに熱心な一部の参加者により続けられるという現象も出現する。これは化石化現象 (petrification phenomena) と呼ばれ、主催者側は通常廃止する方向でプログラム運営を行なう。¹⁰⁾ 以下では PLC 理論に実際のデータを適用し、プログラム参加者数の推移の構造を検討し、同時にプログラム経営のための戦略と対応策を示唆してみたい。

III. PLCによる分析

図2には、K ブランチが事業を開始した1971年から84年までの、(1) 幼児体育、(2) 少年体育、(3) ユース・スポーツ、そして(4) 青成体育の4つの体育プログラム参加者数の推移が、それぞれ異なる折れ線グラフによって示されている。図2によれば、ピークは異なるものの、ユース・スポーツを除く他の3つのプログラム参加者数は、73年から75年を境にして減少し始めている。ユース・スポーツは、74年、81年、そして84年に参

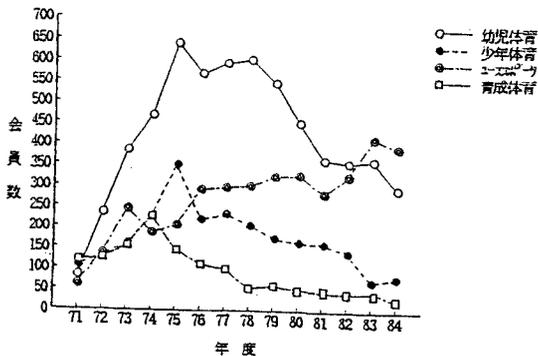


図2 K ブランチにおける4つの体育プログラム参加者数の推移

加者が一時的に減少したものの、その数は増加傾向にあることがわかる。

次に個々のプログラムに対し、PLCを用いた分析を試みた。ここで重要なことは、すべての体育プログラムが図1で示されるようなS字型のライフサイクルを描くわけではないということである。これは製品ライフサイクルにおいても同様であるように、プログラムが導入期を経ないで最初から急成長を始めたり、導入期から成長期を経ないですぐ成熟期へ入ってしまう場合も考えられる。

ライフサイクルの各段階がどこで始まりどこで終わるかという判定には、統計的判定方法と定性的判定方法の2つがあるが、本研究では定性的判定方法を用いてライフサイクルの段階を把握した。Kotlerが述べているように、この方法では各段階の始まりと終りは、ある程度まで恣意的判断に委ねられる。¹²⁾ 本研究のPLCでは、各プログラムに対する年度ごとの総参加者数の増加率あるいは減少率が明確になった時点を決断の区切りとして用いた。

1. 幼児体育

幼児体育のPLCは、導入期、成長期を経て参加者が急激に増加していき、75年～78年に飽和期を迎え、その後減少の傾向を見せ、現在は衰退期にあると判断できる(図3)。84年度の参加者は、ピークにあった75年に比べ約半数となっているものの、それでも300名近い幼児が参加している。参加者数減少の要因は、(1) 幼児人口の減少、(2) 地域内に新設された複数のスイミング・プール、そして(3) 地域の幼稚園の終園時間が延長され、それがプログラム開始時間と合わなくなった、という3点に要約される。これ以外にも幼児体育がひじょうに稀少価値であった70年代初めに比べ、近年同種のプログラムが普及してきたことも理由のひとつに挙げることができよう。

衰退期にあるプログラムへの対応策としては、サービス受益者である幼児と、その保護者である親のニーズの変化を適確に読み、プログラム内容や指導者を変えてプログラムの活性化を図ることが、ひとつの方法として考えられる。あるいは今後、クラス数や参加者数を縮小させたり、対象を低年齢化して新しい顧客(クライアント)を探しながらプログラムの延命を図る方法も可能である。

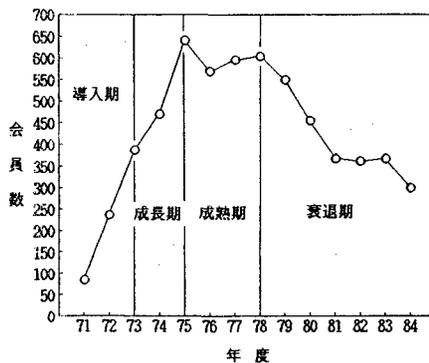


図3 幼児体育のPLC

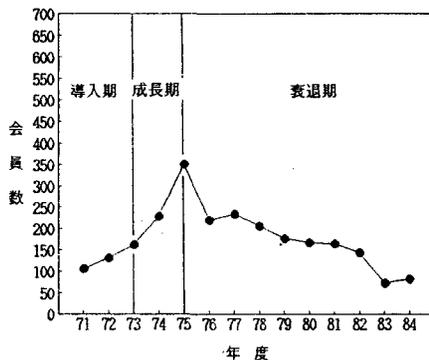


図4 少年体育のPLC

2. 少年体育

少年体育は導入期から成長期へと続き、75年度にはピークを迎えたものの、その後成熟期と飽和期を飛び越し

て衰退期に入ったと判断することができる(図4)。84年度に一時的に増加したもののPLCは下降を続けており、会員数も最盛期の3分の1以下に減少した。これは、このプログラムの持つ、体育の苦手な子供に運動のきっかけを与えるというオールラウンドな性格が、利用者のニーズに合わなくなったところに原因があると考えられる。具体的な対応策としては、少年体育プログラムの縮小・中止を検討し、成長期にあるユース・スポーツに経営努力を集中していくことが望ましいと考えられる。

3. ユース・スポーツ

ユース・スポーツは少年体育と異なり、サッカー、バスケットボール、体操、クラシックバレーといった特定のスポーツ種目の技能やルールなどの習得を目的としたプログラムである(図5)。このプログラムのPLCは、図5より3つの小さな変則的なライフサイクルを含むライフサイクル複合型¹³⁾のパターンを持っていることがわかる。ユース・スポーツは、Kプランチにおいて唯ひとつ成長を続けている体育プログラムである。このような成長期にあるプログラムに関しては、それが成熟期、飽和期に入った時の対処方法を考えておく必要がある。すなわち製品ライフサイクルの場合と同じように、成長期のプログラムは、他の競合サービスの出現やプログラムの新鮮さの喪失、あるいは流行の変化等の要因によって参加者が減少する危険性を常にはらんでいるからである。以下では、Kotlerによって提示された、成熟期の製品に対する3つの基本的戦略を体育プログラム経営にあてはめ、その独自の戦略と対応策を考えてみたい。¹⁴⁾

第1の戦略は「市場修正」と呼ばれ、プログラム担当者は常に新しい顧客を見つけ出す可能性について検討しなくてはならない。具体的には潜在需要を抱える地域に対する出張サービスや、地域センターの設立などによって新しい市場を開拓する方法がある。これは鶴田がサービス産業の特徴のひとつとして挙げられるように、異時点間、異空間間におけるサービスの移動は不可能であるという理由から、¹⁵⁾特に体育プログラムの新しい市場の開拓には、潜在需要を抱える地域までサービスの拠点を移動することが最も効果的であろう。

第2はプログラムの特性を変え、それによって新しい参加者を獲得したり、現在の参加者の参加頻度を増加させるための「プログラム修正」が考えられる。たとえば、不人気の指導者を変えたり、施設の改築・改装によってプログラムとそれをとりまく環境の質を向上させてゆく方策がある。あるいはプログラムの強調点を変えたり、その持つ付加価値を高めることによって、プログラムの差別化を進めていくことも可能であろう。たとえば、エアロビクス・ダンスの強度を段階別に分けたり、プログラムの強調点を変えることによって参加対象の年齢幅を広げるといった、プログラムの差別化が試みられるべきであろう。

第3は「マーケティング・ミックス修正」と呼ばれる戦略で、マーケティング・ミックスの一要因、あるいは複数の要因の変更を通してプログラム参加を促進、刺激するやり方である。一般にマーケティング・ミックスの構成要素には、製品(product)、場所(place)、プロモーション(promotion)、価格(price)の4つが用いられるが、Booms and Bitnerは体育・レクリエーション経営を含むサービスの分析には、これに参加者(participants)、物理的環境(physical evidence)、そしてサービス提供のプロセス(process of delivery)の3因子を加えることを提唱している。¹⁶⁾具体的な戦略としては、価格(参

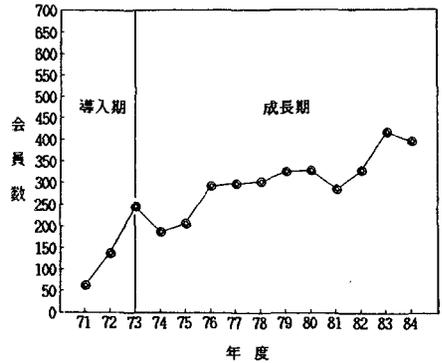


図5 ユース・スポーツのPLC

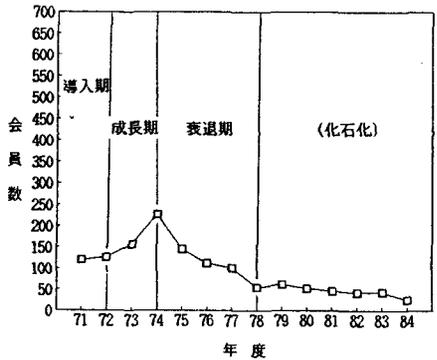


図6 育成体育のPLC

加費用)の操作や新しいプロモーション方法の開発によって新しい顧客の注意と関心を喚起したり、指導者や従業員の応接態度を研修によって、向上させ、サービス提供のプロセスに改善を加えていく方法が考えられる。

3. 育成体育

育成体育とは、青年・成人を対象としたウェイト・トレーニング、ジョギング、ストレッチ体操、サーキット・トレーニングといった基礎的運動と、バドミントン、バレー・バスケットボールといった各種スポーツ活動が組み合わされたプログラムであり、平日の午後7時から8時半まで行われている。育成体育は74年度を境に衰退期に入り、78年度に参加者数はピーク時の約4分の1にまで減少した(図6)。それ以後の衰退の速度はひじょうにゆるやかであり、典型的な化石化減少が出現したと考えられる。

衰退期にあるプログラムへの経営戦略としては、継続か廃棄の2つの方法が考えられる。¹⁷⁾継続戦略では、これまでどおり同じ対象に同じプログラムを提供し続け、プログラムの自然消滅を待つことになる。また思い切って現行のプログラムを廃棄するか、それに代る新しいものを開発していく方法が考えられる。特にKプランチが事業を行なっている私鉄ターミナル駅の1日の乗降客は、過去14年間に8倍強に増加しており、¹⁷⁾青年・成人という対象

の潜在市場はひじょうに大きい。それゆえ、これらの人々のニーズを的確に把握した新しいプログラムの開発を進めると、同時にプロモーション努力を怠らないことが重要な経営戦略となる。

IV. 統計的判定法の可能性

本研究ではひじょうに簡便な方法として、ライフサイクルの変動を恣意的判断によって各段階に區別してきたが、統計的判定方法では、一般にロジスティック曲線、ゴンベルツ曲線、正規確率曲線の累積曲線、そしてジグモイド曲線といった数学的成長曲線をライフサイクルにあてはめ、その変動パターンを探る方法が試みられている。図7は少年体育のグラフに成長モデルの判定によく用いられるロジスティック曲線をあてはめた例で、よく見ると80年以後成長がわずかながら鈍くなり、成熟期にさしかかりつつあることがわかる。このことよりPLCの段階を統計的根拠をもって判定することが可能になるわけである。

しかしながら、上に述べた数学的成長曲線の大部分は変曲点をただひとつしか持っておらず、季節やブームに左右されやすく、複合ライフサイクルが多く見られる体育プログラムの分析にはあまり有効ではない。実際、現実との整合性の高いライフサイクルの変動パターンを完全に解き明かすことのできる、複雑な「非線型」モデルを導き出すことは現在の数学的解析方法では、ほとんど不可能である。それゆえ、ライフサイクルの判定には、あらゆる理論を加味した総合的な判断が必要であり、パラメーターを制限することによって、近似の曲線をあてはめる統計的判定方法は、かえって現実との整合性を失わせてしまう危険性を持っているといえよう。

V. 結論

本研究では、合理的かつ科学的な体育プログラム経営のためのライフサイクル理論の応用を提唱し、同時に実際のデータを用いて分析を試みた。PLCの有効性は、まず第1にその簡便さにあるといえよう。PLCでは結果が図式化され、参加者数の増減の傾向をひじょうに簡単に把握することができる。第2には、図式化によってPLCがどの段階にあり、そこでどのような経営戦略が必要であるかを経営する側に知らしめてくれるという利点がある。実際にKブランドの体育プログラムを分析した結果、4つのプログラムのうち3つが衰退期にさしかかり、ここで何らかの対症療法がなされない限り、体育プログラムが縮小、あるいは廃棄されるであろうことがわかった。その結果、様々な対応策が示唆されたが、これはPLCが把握されることによって初めて可能になったのである。

PLCを有効に活用するためには、「サービス財」としての体育プログラムの特性と、参加者、物的環境、そしてサービス提供のプロセスといったサービス財に特有のマーケティング・ミックスの理解が必要である。また、将来の体育プログラムの科学的経営をより確かなものにしてゆくために、今後、多くのケーススタディによる知識の集約と、集約された知識を現実問題に照らし合わせ適確な意志決定のできる経営センスと科学的知識の活用のできる人材の育成が望まれる。

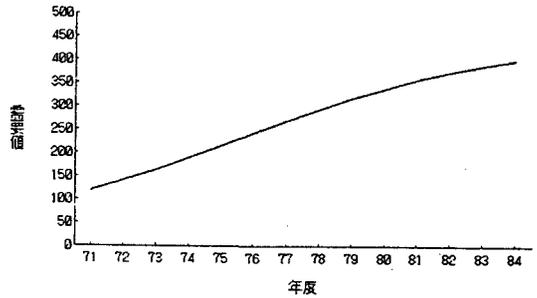


図7 ロジスティック曲線によるPLCの分析(少年体育)

(注・引用文献)

- 1) 山田圭一「現代化学技術史」コロナ社、1966.
- 2) 林雄二郎・山田圭一編「科学のライフサイクル」中央公論社、1975.
- 3) 今居壽吾「ライフサイクルの理論と実際」日本能率協会、1980. p.p. 6-7.
- 4) Crompton, J.L., and Hensarling, D.M. "Some suggested Implications of the product life cycle for public recreation and park agency managers", Leisure Sciences, 1-3:295-307, 1978.
- 5) Howard, D.R., and Crompton, J.L. "Financing managing and marketing recreation and parks", Wm. C. Brown Company Pub: 1980. p.377.
- 6) 前掲書 3) p. 379
- 7) 前掲書 3) p. 379
- 8) 前掲書 3) p. 380
- 9) 前掲書 3) p. 380
- 10) 前掲書 3) p. 380
- 11) コトラー (小坂惣他他訳), マーケティングマネジメント、プレジデント社、1984, p.223. (Kotler, p. "Marketing management". Prentice-Hall, 1980.)
- 12) 前掲書 11) p. 222
- 13) 前掲書 11) p. 223
- 14) 前掲書 11) p.p. 231-235
- 15) 鶴田俊正編「成熟社会のサービス産業」有斐閣選書、1982. p. 21.
- 16) Booms, B.H. and Bitner, M.J. "Marketing Strategies and Organization Structures for Service Firms" In Donnelly, J.H. and George, W.R. "Marketing of Services" American Marketing Association, 1981, pp.47-51
- 17) K電機鉄道株式会社広報課の1984年度資料による

高齢者の健康・レクリエーション教室参加とその効果

○小俣里知子 田中鎮雄 増田 慧 今野 守 武田正司
(日本大学) (日本大学) (日本大学) (日本大学) (日本大学)

「健康・レクリエーション教室」「参加効果」「高齢者」

目 的

わが国における人口の高齢化が急速に進むなかで、高齢者に関する深刻な諸問題が指摘され、国や公共団体などによる種々の施策とともに、高齢化社会対策が各機関において総合的に研究開発されていることは周知のとおりである。

特に高齢者の健康づくりと社会参加のニーズにこたえて、ゲートボールをはじめ各種スポーツ、レクリエーションが推進されてきたことが注目される。このような動きを反映して、体育学会、レクリエーション学会でも、これら高齢者のスポーツ参加等に関する諸研究が試みられるようになってきた。

上述の状況をふまえて、われわれは、「高齢者健康指導教室」の社会教育的機能に注目し、その第1報³⁾を昨年の学会大会で発表した。すなわち、当該教室参加者の参加動機を各人の身体的、心理的、社会的様態との関係から分析する方法により、「健康指導教室」参加者の参加動機はかなり具体的複合的な要素から成り、その意味で極めて個性的であることを報告したのであった。

今回は、昨年度参加動機を分析した参加者について、参加(達成)動機の実現過程をはじめとする諸効果を、事例的追跡的に調査分析した結果について報告する。

方 法

調査対象：静岡県沼津市厚生年金休暇センターで開催された「高齢者健康指導教室」参加者41名のうちの7名。詳細は次のとおりである。

1) 「高齢者健康指導教室」(以下「教室」という)は、国の高齢者福祉事業の一環として実施されたものである¹⁰⁾。

2) 調査対象7名は、昨年度の学会大会で報告された12名の「教室」参加者のうち、最終調査に協力した者である。

調査期間：昭和60年6月～昭和61年1月(「教室」開設期間)。なお、第1回の調査は「教室」開設当初に実施され、指導過程における面接調査ならびに参与観察を経て最終調査(質問紙法)は、昭和61年1月に実施された。サンプルの構成は表1に示すとおりである。

表1 サンプルの構成

項 目	男 性	女 性	合 計
サンプル数	9 (1)	25 (6)	34 (7)
平均年齢	71.4	64.7	66.6

()内ホーム入居者

質問紙の構成：最終調査は厚生団作成の質問紙によるものであるが、下記の質問項目から構成されている(今回の研究で分析した項目には○を付した)。

1. 基本的属性。
2. 「教室」の情報経路と参加動機。
- ③. 「教室」参加に伴う生活及び保健行動の変容。
- ④. 「教室」参加に伴う心理的变化。
- ⑤. 「教室」参加に伴う体調の変化。
- ⑥. 「教室」参加に伴う啓蒙行動等。
- ⑦. 「教室」修了後の運動志向等。

調査結果は臨床例の報告にならない、7事例について、関連生活及び保健行動の変容を追跡的に分析する。

結果と考察

1. 「教室」参加者7事例の分析

〔事例1 A氏(83歳)の場合〕

A氏(83歳)の場合、「教室」参加者の中で最も年齢が高いにもかかわらず生活意欲もあり、老化の兆候も少なく、健康状態が良好な例として注目された。しかし「教室」参加後まもなく家庭での作業中に腰を痛め、欠席せざるをえなかったが、その後復調し再び「教室」に戻ってきた。A氏の場合は腰痛の回復過程において「教室」で学習した知識や実践を積極的に活用し、それらが生活化、日常化されて効果をあげた事例であるとみることができる。具体的には、関節運動や歩行・ランニングを毎日行うこと、栄養のバランス・摂取量の加減をすること、規則正しい食事をすることなどが配慮された。このようなA氏の生活改善努力が生活意欲を高めたばかりでなく、家族の健康志向を強めたことは見逃せない。

表2 「事例1」 A氏（男，83歳）の場合

	「教室」参加前	「教室」参加後
仕事の内容	花壇管理	花壇管理
食事への配慮	○栄養のバランス ○過食要注意	○食事の内容（献立や材料）に注意することが多くなった。 ○食事の量を加減することが多くなった ○食事を規則正しくとることが多くなった ○間食を減らした
運動実施頻度	週3回・50年間	
体操・柔軟	ときどきやった	○毎日20分以上やる
歩や走	ときどき10分～30分やった	○毎日30分～1時間やる
スポーツ実施状況	していない	○毎朝6時全身関節運動
老化の兆候	○時々もの忘れ ○かぜをひきやすい ○のどがかわく	○睡眠時間が長くなった ○眠りが深くなった ○腰痛が良くなった
健康状態		○首・肩のこり・筋肉の痛みが良くなった ○神経痛・手足のしびれ等が良くなった ○風邪をひきにくくなった ○食欲が出てきた
既往症	なし	
生活意欲	○気分がめいりやすい	○憂うつになることが少なくなった ○気分が動揺することが少なくなった ○神経質なところが少なくなった ○人の立場で物事を考えることが多くなった ○協調性が身についた ○物事に積極的にとりくむことが多くなった ○てきぱきと物事をかたづけることが多くなった ○何んでもよく考えることが多くなった ○人の先に立って働くことが多くなった ○人と広くつきあうことが好きになった
身体的変化		○身体の動きが軽くなった ○持久力がついた ○柔軟性がついた
生活・保健行動の変容		○友人・仲間ができた ○規則正しい生活をするようになった ○積極的に体を動かすことが多くなった ○家族も健康に注意することが多くなった
その他		○健康になり勇気ができた ○健康の維持に自信ができた
通院回数	3ヶ月に1回通院	通院していない（体調が良くなり必要がないと判断）
啓蒙行動		話をして運動するようにすすめた10人 運動を始めた1人
参加動機	○体力をつけたい ○健康状態を知る ○トレーニング方法を知る ○栄養の知識を得る ○老いを感じたくない ○仲間づくりのため ○運動・スポーツに興味がある	

〔事例2 Uさん(71歳)の場合〕

Uさん(71歳)の場合、当初からA氏と同様に健康状態が良好な例であるが、「教室」参加に伴い以前からの歩行やランニングに加えて毎日進んで体操をするようになっていった。この日常的な体操実践の効果が実を結んで「腹筋

が10回できるようになった」「手すりなしで階段の昇り降りができるようになった」と体力が向上したことを報告している。さらに「孫の家に行く回数がふえた」「乗り物を利用する回数が減った」など、日常生活行動を意欲的なものに変えていったのである。

表3 〔事例2〕Uさん(女, 71歳)の場合

	「教室」参加前	「教室」参加後
仕事の内容	野菜づくり	野菜づくり
食事への配慮	○塩分ひかえめ	○間食を減らした ○塩分をひかえている
運動実施頻度	していない	
体操・柔軟	やっていない	○毎日10分位やる
歩や走	毎日30分～1時間やった	○毎日30分～1時間やる
スポーツ実施状況	ゲートボール週2回・6年間	
老化の兆候	なし	
健康状態	良好	○首・肩のこり・筋肉の痛みが良くなった ○風邪をひきにくくなった
既往症	S20. 肋膜炎	
生活意欲		○憂うつになることが少なくなった ○気分が動揺することが少なくなった ○劣等感を感じるものが少なくなった ○人の立場で物事を考えることが多くなった ○協調性が身についた ○物事に積極的にとりくむことが多くなった ○てきぱきと物事をかたづけることが多くなった ○楽天的なところが多くなった ○人の先に立って働くことが多くなった ○人と広くつきあうことが好きになった
身体的変化		○身体の動きが軽くなった
生活・保健行動の変容		○友人・仲間ができた ○規則正しい生活をするようになった ○積極的に体を動かすことが多くなった
その他		○健康の維持に自信ができた ○孫の家に行く回数がふえた ○乗り物を利用する回数が減った ○手すりなしで階段の昇り降りができるようになった。 ○腹筋運動が自分で10回できるようになった ○気分転換が楽にできるようになった
通院回数	2週間に1回	1ヶ月に1回(体調が良くなり必要がないと判断)
啓蒙行動		話だけした8人 運動を始めた人0人
参加動機	○体力をつけたい ○健康状態を知る ○トレーニング方法を知る ○栄養の知識を得る ○老いを感じたくない ○運動・スポーツに興味がある	

〔事例3 O氏(70歳), Kさん(59歳, 資料割愛)の場合〕

O氏, Kさんの場合についてみると, 両者とも以前から運動及びスポーツの実践者であることが表4から理解できる。O氏は5年前からゲートボールを日課としている。Kさんはテニスや卓球を週6日実施してきた。いずれの場合

も日常のスポーツの実践が健康増進に役立っていることは言うまでもないがこのような場合, 「教室」参加に伴ういちじるしい体力の向上は認められないことが多い。しかしながら, 家族の健康志向が高まるほか, 食生活の改善や交友関係の拡大, さらに集中力や物事への積極的な取り組み姿勢が身につくなどの効果が認められることは注目に値する。

表4 〔事例3〕O氏(男, 70歳)の場合

	「教室」参加前	「教室」参加後
仕事の内容	なし	なし
食事への配慮	特になし	○食事の内容(献立や材料)に注意することが多くなった ○食事の量を加減することが多くなった ○間食を減らした
運動実施頻度	していない	
体操や柔軟	毎日10分位やっていた	○毎日10分位やる
歩や走	ときどきやっていた	○ときどきやる
スポーツ実施状況	ゲートボール毎日・5年間	
老化の兆候	時々もの忘れ	
健康状態	良好	○変らない
既往症	なし	
生活意欲	あり	○人と広くつきあうことが好きになった
身体的変化		○変らない
生活・保健行動の変容		○友人・仲間ができた ○積極的に体を動かすことが多くなった ○家族も健康に注意することが多くなった
その他		なし
通院回数	通院していない	通院していない
啓蒙行動		話だけした2人 運動を始めた人0人
参加動機	○健康状態を知る ○体力をつけたい	

〔事例4 T氏(64歳)の場合〕

T氏の場合「教室」参加者の中で特に健康状態が良くない例であった。表5にみるように「せき・たんがでる」「動悸・息切れがする」「ねつきが悪い」「身体のふしぶしが痛む」「胃の具合が悪い」などの症状を訴えていたほか、重い神経痛に悩まされていた。T氏の「教室」参加動機が神経痛を治すことにあったことも事実である。「教室」参加後のT氏の体調の変化をみると「神経痛が全くなくなっ

た」「通じの回数が減った」などにみられるように、参加当初の身体の不調感がかなり解消されたことが理解できるのである。T氏にみられたこのような「教室」参加メリットは、運動の必要性を特に強く認識させるものと考えられる。事実、運動の必要を仲間や友人15人に話したところ、15人全員が運動を始めたというT氏による報告は、彼の積極的な啓蒙行動を示すばかりでなく、運動に対する価値観の変容を明確に裏付けるものとして見逃すことはできない。

表5 〔事例4〕T氏(男, 64歳)の場合

	「教室」参加前	「教室」参加後
仕事の内容	内職	内職
食事への配慮	特になし	○食事の内容(献立や材料)に注意することが多くなった ○食事の量を加減することが多くなった ○食事を規則正しくとることが多くなった ○間食を減らした
運動実施頻度	していない	
体操や柔軟	やっていない	○ときどきやる
歩や走	ときどきやっていた	○ときどきやる
スポーツ実施状況	ゲートボール週3回・3年間	
老化の兆候	なし	
健康状態	○せき・たんがでる ○動悸・息切れがする ○ねつきが悪い ○体のふしぶしが痛む ○胃の具合が悪い	○腰痛が良くなった ○首・肩のこり・筋肉の痛みが良くなった ○神経痛・手足のしびれ等が良くなった ○風邪をひきにくくなった ○通じの回数が増えた
既往症	なし	
生活意欲	○年をとっていくことを気にする	○憂うつになることが少なくなった ○人の立場で物事を考えることが多くなった ○協調性が身についた ○てきぱきと物事をかたづけることが多くなった ○人の先に立って働くことが多くなった
身体的変化		○身体の動きが軽くなった
生活・保健行動の変容		○友人・仲間ができた ○積極的に体を動かすことが多くなった
その他		○神経痛をなおすため参加した ○健康の維持に自信がついた
通院回数	通院していない	通院していない
啓蒙行動		話をして運動するようにすすめた15人 運動を始めた人15人
参加動機	○トレーニング方法を知る ○仲間づくりのため	

〔事例5 N氏(79歳), Mさん(66歳, 資料割愛)の場合〕

N氏, Mさんはいずれも身体の不調感を訴えていたが, 特に, 高血圧, 狭心症などの持病を持っていたN氏の「教室」参加動機は, 医師の指示に従って高血圧の運動療法を

表6 〔事例5〕N氏(男, 79歳)の場合

意図したものであり, 予期以上の成果をあげた事例であるといえる。Mさんの場合も, 日常生活が改善され, 体力の向上に伴って生活意欲も積極的になるなど, 「教室」参加の効果は著しい。

	「教室」参加前	「教室」参加後
仕事の内容	軽作業	軽作業
食事への配慮	特になし	○変らない
運動実施頻度	していない	
体操や柔軟	ときどきやっていた	○ときどきやる
歩や走	毎日10分～30分やっていた	○毎日10分～30分やる
スポーツ実施状況	していない	
老化の兆候	○階段の昇り降り少し不自由 ○長い間の立位少し不自由 ○長い間の坐位少し不自由	
健康状態	○尿の出が悪い ○疲れを感じる ○のどがかわく	○睡眠時間が長くなった ○眠りが深くなった ○腰痛が良くなった ○首・肩のこり・筋肉の痛みが良くなった ○風邪をひきにくくなった ○食欲が出てきた ○血圧が下がった
既往症	S58. 高血圧 狭心症	
生活意欲	○年をとっていくことを気にする	○憂うつになることが少なくなった ○気分が動揺することが少なくなった ○神経質なところが少なくなった ○人の立場で物事を考えることが多くなった ○協調性が身についた ○物事に積極的にとりくむことが多くなった ○てきぱきと物事をかたづけることが多くなった ○楽天的なところが多くなった ○人の先に立って働くことが多くなった ○人と広くつきあうことが好きになった
身体的変化		○頭の働きが良くなった ○身体の動きが軽くなった ○持久力がついた
生活・保健行動の変容		○友人・仲間ができた
その他		○健康の維持に自信ができた
通院回数	2週間に1回	2週間に1回
啓蒙行動		話をして運動するようにすすめた2人 運動を始めた人2人
参加動機	○もっと健康になりたい ○健康状態を知る ○栄養の知識を得る ○老いを感じたくない ○体力をつけたい ○運動・スポーツに興味がある	

2. 「教室」修了者による組織化と継続学習の動向

以上みてきたような「教室」参加に伴う諸変化の認知は、運動に対する価値観を変えるとともに運動の必要感を一層強化させたものと考えられる。事実、参加者のほとんどが「教室」修了後も運動を毎日続けていきたいと決意しているのである。しかもこれら修了者の有志グループによる同窓会が結成され、自主的に活動を行っていかうとしている点を見逃してはならない。この活動内容は、会員相互の親睦を深め、「教室」参加によって習得した運動・スポーツに親しみ、講師をまねいて話を聴き、定期的に健康・体力診断を受けるなど、自己の健康管理に努め、多彩なプログラムへの参加を計画していることに注目したい。このように「教室」修了者の組織化が計画される一方、家族をはじめ近隣の高齢者や友人にまで運動の重要性について語り伝えているのである。このような「教室」参加者にみられる啓蒙行動によって、地域の高齢者が運動・スポーツに興味をもつようになるばかりでなく、「教室」そのものへも関心を示すようになる事実注目したい。

結 論

以上のように「高齢者健康指導教室」参加に伴う諸効果について、7事例の追跡的分析を試みた結果、次のような知見を得た。

- 1) 「教室」参加に伴う体調の好転、体力の向上などは、高齢者の自信の強化につながり、積極性、協調性、思いやり、社交性を高めるなどの、副次的機能が認められる。
- 2) 「教室」参加をとおしての健康づくり、体力づくりは、参加者自身の運動の必要感を一層強化するばかりでなく、身近な仲間の運動実践や、プログラム参加を促進するなどその波及効果には計り知れないものがある。

文 献

- 1) 野尻雅美：「公衆衛生学」，真興交易医書出版，1983，pp. 313-314.
- 2) 経済企画庁国民生活局：「第4回国民生活選好度調査」，大蔵省印刷局，1984，pp. 133.
- 3) 文部省：「生涯スポーツ推進指定市町村設置事業—高齢者スポーツ活動推進指定市町村設置事業—」，昭和53年.
- 4) 金崎良三，徳永幹雄：「高齢者のスポーツに関する社会心理学的研究—ゲートボールの実態と効果について—」，レクリエーション研究第9号，1982，pp. 1-14.
- 5) 金崎良三，徳永幹雄：「高齢者のスポーツに関する社会心理学的研究(2)—ゲートボール実施の規定要因について—」，レクリエーション研究第11号，1984，pp. 27-28.
- 6) 岩崎健一，庭木守彦，古閑広登，井上勝子：「ゲートボール愛好者の実態に関する研究」熊本大学教養部紀要第14号，1979，pp. 37-49.

- 7) 藤田純男，芹沢幹雄：「焼津市における老人ゲートボールに関する考察」静岡女子大学研究紀要第12号，1978，pp. 103-113.
- 8) 小俣里知子，田中鎮雄，増田 慧，今野 守，武田正司：「高齢者のための健康・レクリエーション教室参加とその機能」レクリエーション研究第14号，pp. 74-77.
- 9) 小俣里知子，増田 慧，今野 守，田中鎮雄，武田正司：「高齢者スポーツ行動の構造と機能(I)—健康指導教室」参加者の場合—」日本大学三島学園生活科学研究所報告第9号，1986，pp. 163-175.
- 10) 静岡厚生年金休暇センター：「昭和60年度こうねん高齢者社会福祉開発事業—高齢者健康指導教室—」。

高齢者スポーツの振興に関する研究

—— 高齢者スポーツの在り方とその方向性について ——

山本英毅 (日本福祉大学) 藤田匡肖 (三重大学) 鈴木文明・中島豊雄 (名古屋大学)
西垣完彦 (愛知県立芸術大学) 寺沢 猛 (豊橋技術科学大学) 坪田暢允 (名古屋学院大学)
上田湧一 (中京短期大学) 山本秀人 (日本福祉大学)

高齢者スポーツ・スポーツ振興・スポーツ観の転換

はじめに

昭和61年7月に発表された厚生省の「60年簡易生命表」によると、日本人の平均寿命はさらに延びて、女性は80.46歳、男性は74.84歳になったという。「人生80年時代」が定着し始めたとみなされるが、一方では予想される年金や医療・福祉の費用増大の問題が取りざたされ、福祉見直しの動きも急である。61年度には、老人医療費が上がり、年金制度が改正されるなど福祉水準の切り下げを心配する声は高い。

弱い所にシワ寄せがないよう、高齢者がいきいき暮らしていける長寿社会を構想することは政治的課題であり、そのための社会保障制度の確立を急がねばならない。しかし同時に、健康で、いきいきとした老後を迎えるために、一人ひとりが努力することが重要であろう。「高齢者の幸福追及の第一条件は健康の確保である」とする科学技術庁資源調査会¹⁾や、国民健康会議の慢性的に具合のよくないところがあっても、普通に社会生活を営む「病気と共生する健康」観への転換の提言²⁾などは、社会負担軽減のための政策的色合いが濃いように思われるが、病気とか寝たきりの期間を短くして生涯を終えたいとの願いは万人のものであり、健康確保の努力はそれなりになされてきたといえよう。むしろ、老化研究の遅れに問題が感じられる。

高齢者の調査研究は、副田³⁾によれば1960年ころから主として貧困や疾病、身体的障害に悩む老人、家族を対象に、その予防・解消をめざしてはじまったという。それが高齢化社会に向かって、しかも人口構造の急激な高齢化の中で、「人生80年」にふさわしい個々人の生きがいや社会保障負担といった観点から、ライフスタイル全体の問題としてとらえられるようになり、高齢者の運動やスポーツについての研究も注目されるようになってきた。また、高齢者のスポーツ振興についても、医療費節減とのかかわりから関心を集めたりしたが、多くはゲートボール中心の施策に終始しているのが現実である。

「高齢者スポーツと言えばゲートボール」という一律のお仕着せな発想ではなく、柔軟で多様な取り組みがなされてしかるべきであろう。マスターズ大会の隆盛は恵まれた体力、健康それに一定水準の技術があれば、年令を越えた取り組みが可能なことを示している。「あの人は別、かつて選手だった人だから」と特別視するのではなく、「還暦祝いに新しいスポーツを始めませんか」と気軽に声が掛けられるような、またそれを受け入れられるような状況をつくり出していくことが重要と考える。たしかに、加藤⁴⁾が危惧する「60代や70代の老人にとって、ゲートボールや水泳のような比較のおだやかなスポーツなら向いているこ

とはよく理解できるが、マスターズ陸上の100mや三段跳び、砲丸投げなどのように激しい筋肉や骨へのショックを与える種目が果たして老人の健康保持にふさわしいものかどうか」という問題は、早急に解明されなければならない。しかし、ここで重要なことは、これからも社会の主人公として生きることが求められる高齢者にとって、高齢者のみを切り離した諸施策、たとえば高齢者のためのスポーツ教室とか施設づくりが、本当に有効であるかどうかの問い直しをすることである。大橋が⁵⁾、今後の高齢化社会には「一般のあらゆる成人に対して開放している学習や文化、スポーツなどの諸活動が高齢者をも包含する積極的な環境づくりへと拡大させていく必要が生じてくる」と述べているように、高齢者が若者と共に参加できるスポーツ条件を問い直しの中で明らかにすることが必要であろう。

現在、人生50年時代の生活観や社会観の切り換えの必要があると同様に、スポーツ観も転換を迫られている。たとえば、生涯体育という視点から昨今の学校体育が問い直され、余裕ある学生時代に好きなスポーツをみつけ、得意なスポーツ分野を開拓し、生涯にわたってスポーツを楽しむことが追及され始めた。生涯体育ということばが示す理想は、いくつになってもスポーツを愛好し、実践しながら学び続けることにあろう。しかし、その理想と現実との隔たりは大きく、高齢者スポーツ振興の方向は必ずしも見えていない。

筆者らは、昭和59年度より「高齢者スポーツに関する社会学的研究」に取り組み、これまでに高齢者の生活の諸相をはじめ、スポーツや運動に対する意識や実態を明らかにし、高齢者のスポーツ活動を成立させるための諸条件を究明してきた。

今回は、高齢者スポーツの振興に視点をあてた「中・高齢者の生活とスポーツに関する調査」を実施し、研究をすすめてきた。本稿では、この調査結果から主として年齢別の考察を行い、高齢者スポーツ振興の在り方とその方向性について明らかにしようとした。

研究の方法

1. 調査方法：質問紙による配票調査法（市の委託する統計調査員により配布・回収したが、一部面接聴取を入れた。）
2. 調査時期：昭和61年2月
3. 調査対象：三重県名張市の50歳(男 356人、女 318人)
55歳(男 320人、女 278人)
60歳(男 311人、女 329人)
65歳(男 150人、女 239人)

70歳(男 124人、女 228人)

75歳(男 100人、女 148人)

の住民の中から、各年齢、男女それぞれ50名を基準に、若干の地域性を考慮した系統抽出法によって抽出した 601名。

有効回答数は死亡、転居先不明、病身、回答拒否などもあり最終的に 496、有効回収率82.5%であった。

調査内容と標本の特性

本研究では、スポーツは連続的に志向されそして実践されるとの立場から、対象を高齢者のみにしぼらず、高齢者に近接する50歳、55歳、60歳のいわゆる「実年」といわれる者も含めて調査を実施した。調査内容と標本の特性は、表1~4に示す通りである。

結果と考察

1 生活諸相

(1) 余暇時間について

高齢者固有の問題のひとつとして無為時間増の問題があげられるが、平日及び休日における余暇時間はどの位あるのだろうか。

平日では2~4時間が最も多く、加齢に伴って増大している。休日については5時間以上が6割を占め、年齢による差は平日程大きくない。(表5、6)

(2) 健康・体力について

「一病息災」的な健康観が叫ばれるようになったが、病氣・病弱とか体力に自信のない人を含めてスポーツや運動を定着させていくことが大切であろう。いずれの年齢でも、7割以上が「無病息災」か「まあまあ健康な方」と回答している。体力についての自信も、70歳を除くと6割以上

表1 調査内容

基礎事項	F 1 性別 2 年齢 3 居住地 4 学歴 5 収入のある仕事 6 居住形態 7 余暇時間 8 収入	スポーツや運動	Q 7 過去のスポーツ経験 S.Q 運動経験の度合い 8 スポーツクラブへの所属 9 熱心に行っているスポーツ 10 1年間のスポーツ実施の程度 S.Q その目的・理由 11 ぜひやってみたい・続けたいスポーツ	ゲートボール	Q12 ゲートボールの関心 13 ゲートボールの経験 14 ゲートボールの魅力 15 ゲートボール観
	健康・体力		Q 1 健康状態 2 体力の自信 3 運動制限(医者より) 4 日頃の健康法		行事への参加 23 スポーツ行事への参加

表2 標本の性別・年齢別構成

		年齢						計
		50才	55	60	65	70	75	
男性	N	53	44	46	36	37	39	255
	(%)	(20.8)	(17.3)	(18.0)	(14.1)	(14.5)	(15.3)	(51.4)
女性	N	44	38	47	44	36	32	241
	(%)	(18.3)	(15.8)	(19.5)	(18.3)	(14.9)	(13.3)	(48.6)
計	N	97	82	93	80	73	71	496
	(%)	(19.6)	(16.5)	(18.8)	(16.1)	(14.7)	(14.3)	(100)

表3 学歴

事項		学歴							その他	
		義務教育終了程度	旧制中・新制高卒	短大・高専卒	卒業程度	自営業	家族従事者	被雇用者		主婦(無職)
年齢	50歳	97	30.9	52.6	16.5	16.5	7.2	30.9	22.7	3.1
	55歳	82	26.8	51.2	19.5	15.9	9.8	35.4	29.3	6.1
	60歳	93	45.2	47.3	5.4	17.2	12.9	19.4	41.9	3.2
	65歳	80	51.3	32.5	10.0	12.5	10.0	13.8	58.8	2.5
	70歳	73	56.2	30.1	8.2	9.6	16.4	0.0	71.2	1.4
性別	75歳	71	56.3	28.2	9.9	8.5	8.5	1.4	76.1	5.6
	男性	255	42.4	39.6	15.3	22.4	4.7	26.7	31.4	3.1
女性	241	44.8	43.2	7.9	4.6	17.0	8.7	65.6	4.1	
計	496	43.5	41.3	11.7	13.7	10.7	17.9	48.0	3.6	

注：表中NA、DKを除いてあるので(%)は100にならない。以下同じ。

表5 平日の余暇時間

事項		平日の余暇時間				休日の余暇時間				
		1時間未満	2~4時間	5~7時間	8時間以上	1時間未満	2~4時間	5~7時間	8時間以上	
年齢	50歳	97	23.7	59.8	13.4	3.1	10.3	35.1	35.1	19.6
	55歳	82	19.5	52.4	22.0	6.1	9.8	29.3	32.9	28.0
	60歳	93	17.2	47.3	25.8	9.7	11.8	30.1	32.3	25.8
	65歳	80	13.8	38.8	23.8	23.8	12.5	28.8	28.8	30.0
	70歳	73	6.8	28.8	21.9	42.5	8.2	21.9	24.7	45.2
性別	75歳	71	14.1	16.9	23.9	45.1	14.1	12.7	23.9	49.3
	男性	255	18.8	43.9	12.9	24.3	8.6	20.0	28.2	43.1
女性	241	13.7	40.2	30.7	15.4	13.7	34.4	32.0	19.9	
計	496	16.3	42.1	21.6	20.0	11.1	27.0	30.0	31.9	

表7 健康状態 %表8 体力についての自信 %表9 医師からの運動制限 %表10 心がけている健康法(複数回答) %

年令別	事項 N	健康状態			体力についての自信					医師からの運動制限					心がけている健康法(複数回答)						
		無病者の方	少くとも健康な方	どちらかといふ方	調子調子の方	大いにある	まあまあある	あまりない	まったくない	自由に運動できる	少しあるが気がつけばよい	かなり制約ささげればよい	できない	けがを繰り返している	食事や栄養	睡眠や休養	適当な運動	物事にこだわらない	趣味などを楽しむ	規則正しい生活	適当な運動
年齢別	50歳	97	36.1	54.6	7.2	1.0	17.5	66.0	12.4	3.1	80.4	15.5	3.1	0	59.8	52.6	41.3	39.2	22.7	34.0	10.3
	55歳	82	25.6	57.3	15.9	1.2	9.8	58.5	31.7	0	45.1	45.1	4.9	0	65.9	69.6	24.4	34.1	32.9	34.1	13.4
	60歳	93	32.3	61.3	3.2	2.2	21.5	57.0	16.1	4.3	64.5	30.1	4.3	1.1	64.5	69.9	11.9	40.8	37.6	28.0	14.0
	65歳	80	25.0	62.5	8.8	3.8	11.3	65.0	17.5	6.3	56.3	35.0	6.3	2.5	63.8	62.6	17.6	55.1	31.3	23.8	7.5
	70歳	73	8.2	63.0	19.2	9.6	6.8	49.3	27.4	13.7	31.5	38.4	17.8	8.2	63.0	79.4	17.9	39.6	23.3	35.6	16.5
	75歳	71	22.5	46.5	16.9	12.7	21.1	39.4	22.5	14.1	42.3	31.0	14.0	8.5	56.3	77.5	18.3	31.0	25.4	35.2	14.1
性別	男性	255	26.7	57.3	10.2	5.5	15.3	60.0	17.3	6.3	57.3	31.4	7.8	2.7	55.7	64.7	26.3	39.2	27.5	29.4	23.2
	女性	241	24.9	58.1	12.4	3.7	14.5	53.1	24.5	6.6	52.7	32.4	7.9	3.3	69.3	71.0	18.2	41.1	30.7	34.0	1.2
計		496	25.8	57.7	11.3	4.6	14.9	56.7	20.8	6.5	55.0	31.9	7.9	3.0	62.3	67.7	22.3	40.1	29.1	31.6	12.5

が「まあある方」と自己評価している。性差も小さい。

医師から、「あまり運動してはいけない」あるいは「まったくいけない」といわれている者は、70歳、75歳では4人に1人と多い。自由に運動できる者は50歳が80.4%とずば抜けており、加齢とともに減少している。しかしながら、なぜか55歳の大きな体力の落ち込みが目立つ。

心がけている健康法としては、多いものから順に①休養をとる、②栄養に気をつける、③物事にこだわらない、があげられている。しかし、「適当な運動」をあげた者は、50歳の41.3%が最高で、他の年齢では半減している。性差はほとんどない。(表7~10)

(3) 生活の「生きがい」と「ポッキリ死」観

高齢者の直面するさまざまな生活障害は、意欲の減退と

深くかかわっている。高齢者が、ふだんの生活の中で「生きがい」や「はり合い」を感じる者の割合は高く、8割の者が持っており年齢差、性差はほとんどない。

またマラソン中のポッキリ死を例にあげ、その受けとめ方を問うてみた。70歳、75歳で「気の毒だが幸せかもしれない」、「うらやましい、自分もあやかりたい」というようなポッキリ死に対する肯定的反応が5割をこえ、老人の複雑な心境をのぞかせている。(表11、12)

2 スポーツや運動の好嫌と活動の実態

(1) スポーツや運動の好嫌

スポーツ参加を規定するともいわれる「する」スポーツの好嫌度については「とても好き」、「どちらかといえば好き」ともいわれる

表11 生きがいについて % 表12 マラソン中のポッキリ死について %

年令別	事項 N	生きがいについて		マラソン中のポッキリ死について					
		もっている	もっていない	悲しい不幸なこと	しかたない	あきらめる	罪のせいでない	あつた	とくになし
年齢別	50歳	97	86.6	10.3	18.6	30.9	38.1	5.2	5.2
	55歳	82	89.0	3.7	20.7	24.4	37.8	3.7	8.5
	60歳	93	84.9	6.5	22.6	30.1	31.2	3.2	6.5
	65歳	80	78.8	16.3	17.5	28.8	41.3	1.3	2.5
	70歳	73	83.6	13.7	17.8	20.5	41.1	11.0	8.2
	75歳	71	76.1	18.3	9.9	19.7	53.5	8.5	2.8
性別	男性	255	84.7	11.4	16.9	30.2	37.3	4.3	8.6
	女性	241	82.2	10.8	19.5	22.0	42.7	6.2	2.5
計		496	83.5	11.1	18.1	26.2	39.9	5.2	5.6

表13 「する」スポーツの好嫌度

年令別	事項 N	「する」スポーツの好嫌度					スポーツ番組・記事の視聴度				
		とても好き	どちらかといえば好き	どちらか	どちらでもない	嫌い	よく見たり聞いたりする	時々見たり聞いたりする	あまり見たり聞いたりしない	全く見たり聞いたりしない	
年齢別	50歳	97	21.6	34.0	34.0	9.3	1.0	47.4	37.1	13.4	1.0
	55歳	82	12.2	37.8	39.0	8.5	1.2	45.1	39.0	13.4	2.4
	60歳	93	15.1	26.9	47.3	6.5	3.2	41.9	34.4	19.4	4.3
	65歳	80	12.5	21.3	51.3	13.8	1.3	45.0	28.8	20.0	5.0
	70歳	73	11.0	21.9	41.1	15.1	6.8	47.9	28.8	20.5	1.4
	75歳	71	12.7	19.7	43.7	14.1	2.8	46.5	29.6	15.5	5.6
性別	男性	255	16.1	29.8	43.1	7.5	2.7	59.6	29.0	9.4	2.0
	女性	241	12.9	24.9	41.9	14.5	2.5	30.7	37.8	24.9	4.6
計		496	14.5	27.4	42.5	10.9	2.6	45.6	33.3	16.9	3.2

表15 運動クラブの加入

年令別	事項 N	運動クラブの加入		
		入っている	入っていない	
年齢別	50歳	97	18.6	78.4
	55歳	82	8.5	87.8
	60歳	93	5.4	89.2
	65歳	80	11.3	81.3
	70歳	73	12.3	84.9
	75歳	71	7.0	78.9
性別	男性	255	12.2	84.7
	女性	241	9.1	82.2
計		496	10.7	83.5

表16 加入クラブの種目名(複数回答)

年令別	N	加入クラブの種目名(複数回答)											
		ゲートボール	民謡踊り	登山	ハイキング	剣道	バドミントン	ゴルフ	野球	ソフトボール	バレーボール	テニス	卓球
年齢別	50歳	18	0	11.1	16.8	5.6	5.6	16.7	16.7	44.5	11.2	16.7	11.1
	55歳	7	14.3	14.3	14.3	0	0	14.3	28.6	0	0	14.3	0
	60歳	5	0	0	20.0	0	0	20.0	0	0	0	0	0
	65歳	9	44.4	0	0	0	0	0	0	0	0	11.1	11.1
	70歳	9	77.8	11.1	0	0	0	0	0	11.1	0	0	0
	75歳	5	100.0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
性別	男性	31	32.3	6.5	13.0	3.2	0	16.2	16.1	25.8	0	6.5	3.2
	女性	22	31.8	9.1	4.5	0	4.5	0	0	9.0	13.6	9.0	0
計		53	32.1	7.6	9.5	1.9	1.9	9.5	9.4	17.0	3.8	9.4	5.7

表17 熱心にやっている種目の有無 %
表18 ぜひやりたい種目の有無 %
表19 ぜひやりたい種目名 (複数回答) %

事項	N	あ		な		種目	歩	歩	民	ボウ	登山	登山	ゴ	野	ソフト	テ	卓	水	バ	ゲ
		る	い	る	い															
年齢別	50歳	97	23.7	71.1	40.2	51.5	39	17.9	12.8	0	28.2	17.9	43.6	10.2	20.6	5.1	12.8	15.4	7.7	2.6
	55	82	13.4	78.0	42.7	50.0	35	20.0	2.9	14.3	22.9	12.2	21.5	5.7	8.6	20.0	8.6	11.5	0	20.0
	60	93	9.7	81.7	31.2	52.7	29	17.2	3.4	3.4	20.6	6.8	27.5	0	3.4	3.4	13.7	10.3	0	34.4
	65	80	17.5	76.3	28.8	63.8	23	8.6	0	3.4	34.7	8.7	17.3	0	0	8.6	17.3	8.6	0	43.4
	70	73	15.1	80.8	20.5	68.5	15	26.7	6.7	0	13.3	13.3	0	0	6.7	0	6.7	6.7	0	40.0
	75	71	11.3	76.1	15.5	73.2	11	36.4	18.2	0	0	0	0	0	0	9.1	18.2	0	0	54.5
性別	男性	255	19.2	76.1	40.4	52.5	103	18.5	1.9	6.8	25.2	10.7	36.8	5.9	13.6	9.7	9.6	13.6	0	25.2
	女性	241	11.2	78.4	20.3	66.0	49	20.3	16.3	0	18.4	16.4	4.0	0	2.0	6.1	18.3	4.1	6.1	28.5
計	496	15.3	77.2	30.6	59.1	152	19.1	6.6	4.6	23.0	12.5	26.3	4.0	9.9	8.6	12.5	10.4	2.0	26.3	

好き」と答えた者は合わせて42.9%で、50歳の55.6%から75歳の32.4%へ加齢とともに漸減している。

スポーツ記事や番組の視聴度については、各年齢そろって高く（「よく見たりする」45.6%、「ときどき見たりする」33.3%）、とりわけ男性の視聴度は高い。年齢差はほとんどなく、「みるスポーツ」の定着ぶりをうかがわせるものがある。（表13、14）

(2) スポーツや運動クラブへの加入

スポーツや運動クラブへの加入状況は、50歳（18.6%）が最高で以下55歳（8.5%）、60歳（5.5%）と漸減している。しかし、60歳（11.3%）、65歳（12.3%）と再び高まるのはゲートボールに取り組み始めたことによる。（表15、16）

(3) 現在のスポーツ実施状況と今後の意向

現在、熱心にやっているスポーツや運動の有無について「ある」と答えた者は15.3%で、クラブ加入率をそれぞれの年齢で5%程度上回っている。

今後「ぜひやってみたい」あるいは「ぜひ続けていきたい」スポーツや運動が「ある」とする者は30.6%で、現在のクラブ加入率と比較するとその割合は2倍にもなる。加齢による漸減傾向が顕著であるが、70歳で20.5%、75歳で15.5%の者が「ぜひやりたい」と積極的であり、受け皿の条件整備によってスポーツ参加を高めうる可能性をしめしている。

また実施希望種目の第一位は、ゲートボールとゴルフで

事項	N	表20 ゲートボールへの関心 %				表21 ゲートボールの経験 %			
		大いにある	かなりある	あまりない	全くない	全くしていない	ほんの少しある	かなりある	大いにある
年齢別	50歳	97	3.1	10.3	42.3	41.2	91.8	3.1	0
	55	82	3.7	12.2	57.3	23.2	87.8	6.1	0
	60	93	3.2	19.4	36.6	32.3	87.1	5.4	0
	65	80	6.3	13.7	33.8	37.5	81.3	5.0	2.5
	70	73	5.5	13.7	37.0	34.2	71.2	9.6	4.1
	75	71	12.7	9.9	23.9	42.3	69.0	14.1	5.6
性別	男性	255	7.1	12.9	43.1	31.8	81.2	7.8	2.0
	女性	241	3.7	13.7	34.4	38.6	83.4	5.8	1.7
計	496	5.4	13.3	38.9	35.1	82.3	6.9	1.8	

4人に1人が希望している。しかしながら、加齢に伴う種目の好みは対照的である。ゴルフは年齢の低い程、ゲートボールは年齢の高い程志向が強い。その他登山やハイキング（23.0%）、歩け歩け（19.1%）、かけ足やランニング（12.5%）、卓球（12.5%）、水泳（10.4%）、ソフトボール（9.9%）、テニス（8.6%）など多様な種目が希望されている。年代別では、若い程希望種目が多く、高齢になる程ゲートボールと歩け歩け運動に限られていく傾向がある。（表17～19）

(4) ゲートボールについて

高齢者スポーツの代名詞ともなっているゲートボールであるにもかかわらず、よく経験している者はそれ程多くない。また、ゲートボールへの関心の度合いも低く、ゲートボールに絞り込んでいく高齢者スポーツの在り方に疑念を抱かざるをえない。（表20、21）

3 高齢期を迎えた時のスポーツや運動の予想

高齢者の仲間入りをしたと想定して、50歳、55歳、60歳の者に (1)その時、スポーツた運動をすると思うか (2)ゲートボールを始めるか (3)いろいろなスポーツを楽しむことができると思うか (4)仕事から解放されたらやってみようスポーツや運動があるか、について回答を求めた。結果の概要はおよそ次ぎの通りである。

(1) 高齢期になってからのスポーツ実施の想定では、「大いにやる」(18.0%)、「少しはやる」(44.9%)とした者が6割以上を占める。年齢差では年の低い層程、性差では男性の方が「する」とした割合が高い。（表22）

(2) ゲートボールについては、「その年になったら始めたい」(13.2%)よりも「いくつになってもやらない」(17.3%)とした者の方が多い。しかし、「他にすることがない」とか「お付き合いで始めるかもしれない」とする者が59.9%と多い。このことは高齢者スポーツの貧困な状況からすると、高齢者だからゲートボールに関心があるというのではなく、実施するスポーツとしてゲートボールしかあげられないとみた方がよいと考えられる。（表23）

(3) 高齢期を迎えた時に、いろいろなスポーツや運動ができる可能性について、50歳・55歳ではそれぞれ71.1%、

表22 高齢者の仲間入りをしたときスポーツをやると思うか

表23 高齢者の仲間入りをしたときゲートボールを始めるか

表24 高齢者になっていろいろなスポーツができると思うか

事項	N	%							%				
		大いにやると思う	少しはやると思う	あまりやらないと思う	全くやらない	その年にならなかった	他に始めるかも	お付き合いで始める	やらないだろう	他の	思	思	
年齢別	50歳	97	18.6	52.6	22.7	4.1	10.3	27.8	43.3	12.4	2.1	71.1	25.8
	55歳	82	19.5	50.0	23.2	6.1	19.5	25.6	29.3	20.7	2.4	70.7	23.2
	60歳	93	16.1	32.3	34.4	6.5	10.8	20.4	32.3	19.4	3.2	57.0	30.1
性別	男性	143	23.1	49.0	22.4	4.9	14.0	32.2	32.2	16.1	2.8	74.8	21.0
	女性	129	12.4	40.3	31.8	6.2	12.4	16.3	38.8	18.6	2.3	56.6	32.6
計	272	18.0	44.9	26.8	5.5	13.2	24.6	35.3	17.3	2.6	66.2	26.5	

表25 高齢者になって仕事から解放されたときやってみようとするスポーツの有無

事項	N	%		
		あ	な	
年齢別	50歳	97	53.6	36.1
	55歳	82	58.5	34.1
	60歳	93	37.6	38.7
性別	男性	143	53.8	35.0
	女性	129	45.0	38.0
計	272	49.6	36.4	

表26 やってみたいスポーツ種目

事項	N	%										
		ゲートボール	歩	民	登山	陸	ゴルフ	ソフト	テ	卓	水	
年齢別	50歳	52	32.7	11.5	5.7	26.9	9.5	38.4	5.7	9.5	11.4	7.7
	55歳	48	25.0	10.4	4.2	27.1	6.3	20.9	8.4	18.8	12.6	10.5
	60歳	35	48.6	25.8	0	31.4	5.8	22.9	5.7	5.7	8.6	8.7
性別	男性	77	35.1	15.6	1.3	28.6	7.8	40.3	11.7	13.0	10.4	11.7
	女性	58	32.7	13.7	6.8	27.5	6.9	12.0	0	10.3	12.0	5.1
計	135	34.0	14.8	3.7	28.2	7.4	28.2	6.6	11.8	11.0	8.9	

70.7%、また60歳では57.0%が肯定しており、これからの高齢者スポーツの発展を示唆している。(表24)

(4) 仕事から解放され、自由時間が十分とれるようになった時、とくにやってみようとするスポーツがある者は、50歳代では5割をこえ、60歳でも4割近い。(表25) 具体的に上げられた種目は、第1位がゲートボール(34.0%)、2位がゴルフと登山・ハイキング(28.2%)、次いで歩け歩け運動、テニス、卓球、水泳、ランニングと続いている。先に述べた、現在やってみようとするスポーツ種目と同様な傾向が求められているが、年齢差はそれ程大きくない。(表26)

4 これまでのスポーツや運動の経験の度合い

高齢者スポーツの在り方と発展の方向を展望する時、重要なことは各年代のスポーツを連続的にとらえることである。それは、過去におけるスポーツとのかかわりの度合いが、高齢期のスポーツ実施に深くかかわっていると考えられるからである。

図1は、それぞれの種目についての経験の度合いを確かめ、「少しやったことがある」、「うまくないがまあまあである」、「かなりできる、得意である」者の割合を示したものである。

ゲートボールと歩け歩け運動の2種目については、年齢の高まりに伴って経験の度合いが高まっている。ところが、その他の種目については、逆に年齢の高まりに伴って経験の度合いが漸減し、かつその傾向がきわめて顕著である。ゲートボールと歩け歩け運動は高齢期スポーツ振興の二大施策ともいべき存在であろうが、他の種目とに大きな

断絶がみられる。現在の高齢者は、スポーツ無縁世代だからとか、高齢者に適したスポーツが他にないからという理由で、過去のスポーツ経験とは無関係にゲートボールとか歩け歩け運動だけが推奨されることは、高齢者スポーツの発展につながらないのではなかろうか。

まとめ

周知のように、総理府の「体力・スポーツに関する世論調査」によれば、加齢とともにスポーツの実施率は低下している。このことは、年をとれば体力や気力、活動力が低下するという実感からも、また有病率や受療率が増加している事実からも、容易に納得するところであろう。

しかし同時に、スポーツをしない理由の「金がない」「忙しい」「時間がない」を認めながら、経済的余裕と自由時間が確保される高齢期には「年だから」「体力がないから」とスポーツや運動から離れていくことも認めてしまっているように思われる。

世論調査のような横断的研究の結果のみから、スポーツ参加者が加齢とともに離脱していくと結論づけていいのかという森田ら⁹⁾の指摘や、海老原⁷⁾の過去にスポーツを実施していた者は連続的にスポーツを指向し実際におこなう意欲を持つという「連続説」の有効性の指摘は、高齢者スポーツの在り方を鋭く問うものと言えよう。

「年寄りの冷や水」のこぼに端的に示されるように「スポーツは若者のもの」という伝統的なスポーツ観にいまなお中・高齢者は縛られているのが現状であろう。若者のスポーツと高齢者のスポーツが別々に存在してしまうのでは

数字は経験者の合計(%)

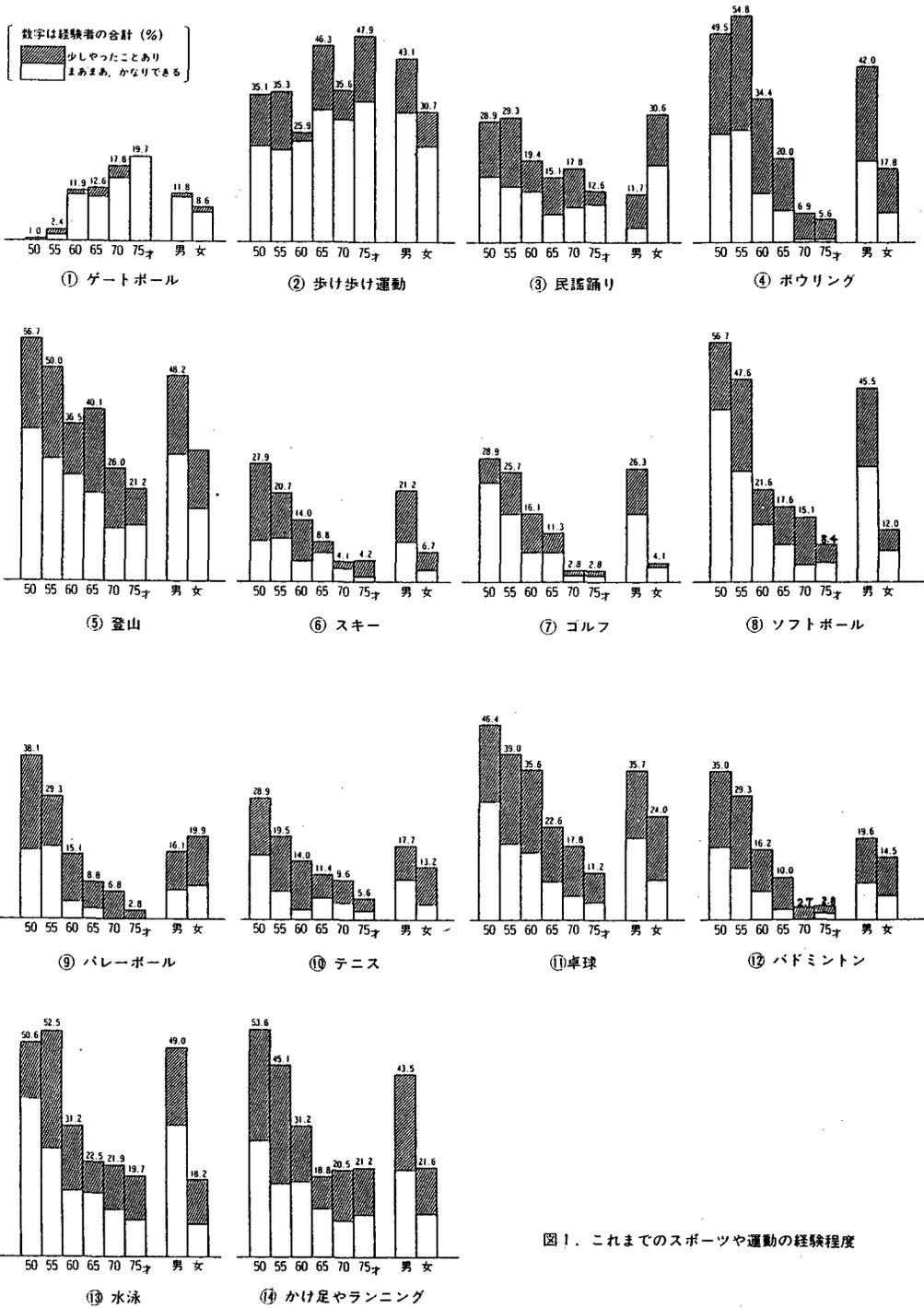


図1. これまでのスポーツや運動の経験程度

る。ゲートボールや歩け歩け運動が、高齢者スポーツ振興策の切り札として位置付けられ、それなりの成果をあげてきた。しかし同時に、高齢者スポーツのイメージを歪めてきた事実も見逃すわけにはいかない。「ゲートボールを始めるほど、年をとっていない」とか「老人呼ばわりは不愉快」とつっぱったり、逆に無為に時を過ごすような人々をも巻き込める、多様で柔軟な高齢者スポーツの在り方が追究されなければならない。

このような視点で、調査の結果をまとめ、これから的高齢者スポーツを考えてみたい。

1) 中・高年齢者の健康・体力状況は、加齢とともに低下するが、高齢者のスポーツ活動にダメージを与える程のものではない。

2) スポーツの愛好度は「する」「みる」スポーツともに高い。加齢に伴う愛好度の低下は小さい。

3) スポーツをする目的・理由に、技術の向上、記録への挑戦を上げている者は皆無に等しい。ゲートボールにみられる勝利指向は一部のエリートのもので大衆的に支持されるものではない。しかし、これから的高齢者スポーツは、できる喜びやうまくなる喜びが共有できるものが追求されるべきと考える。

4) ぜひやってみたいとか、続けてやってみたいと思うスポーツや運動があるとする者の割合は、50代で約40%、60代約30%と漸減しているが、スポーツ参加の現実からすればこの値は高い。これに応えられる条件整備が課題となろう。

5) 高齢者のスポーツを代表していると思われるゲートボールの経験者は意外と少ない。しかし、ゲートボールの魅力はそのゲーム性よりも社交性にあり、社会関係からの孤立傾向にある高齢者にとって大きな魅力を持っている。多様なスポーツの中に、ひとつの選択肢として位置付けていくことが重要と考える。

6) 生きがいは8割以上の者が持っており、加齢に伴う減少傾向は小さい。生きることにはずみをつける生きがいとしてのスポーツが期待されよう。

7) 美しく老いるとか、寝込まないことへの願望は、だれもが持っていよう。スポーツ中のボックリ死を肯定的に受けとめる者は高齢層多く、70歳代では5割をこえる。高齢者の複雑な心理状態を示すところでもあるが、スポーツの爽やかな受けとめとも考えられよう。

8) いわゆる高齢者予備軍ともいえる50歳代と60歳代の人々、幾つになってもいろいろなスポーツや運動を楽しめると考えており(50歳代71.1%、60歳代57.0%)、高齢期に達した、自分がスポーツしていると想定した者は6割強と多い。スポーツ実践に意欲的な姿勢をみせる彼らに、現実にもどのように働きかけていくかが問題となろう。

9) 過去のスポーツ経験は、中・高年齢全体としてあまり高くない。しかし、加齢による差は顕著で、ゲートボールと歩け歩け運動は高年齢層高く、それ以外の種目では若年齢層高い。このことは、高齢者スポーツの振興策の成果とも受け

取れるが、過去のスポーツ経験と高齢者スポーツとの断絶の大きさを意味する。高齢化の進行に伴う過去のスポーツ経験の変化に着目し、高齢者スポーツを、多様な社会のニーズと地域の実態に即していくことが重要と考える。

付 記

この研究は、昭和59～61年度文部省科学研究費総合研究(A)「高齢者スポーツに関する社会学的研究 その現状と高齢化社会に即した在り方について」(代表者: 藤田匡肖)の一部である。

引用・参考文献

- 1) 科学技術庁資源調査会編、「健やかな新高齢期 — 老化防止と高齢期の社会適応に関する調査報告 —」、P.15 198 5.9
- 2) 「国民健康会議提言」、中日新聞 1984.11.20付 (国民健康会議は、渡辺前厚相が人生80年時代の健康づくりを探るために私的諮問機関として設立したもので、座長は本田宗一郎)
- 3) 副田義也「老人の社会参加」、ジュリスト増刊総合特集 ②「高齢化社会と老人問題」、P.299 1978
- 4) 大藤博夫「いまスポーツをどう考えるか」、体育の科学 Vol.36 P.31 1986
- 5) 大橋謙策「高齢化社会における教育・福祉・文化」、月刊社会教育、No.345 P.11
- 6) 森田真楨・岩岡研典「高齢者のスポーツを考える」、体育の科学Vol.36 P.21 1986
- 7) 海老原修「高齢者の運動・スポーツ活動の動向と新しいスポーツ種目の開発」、福永直・原沢道美編「高齢社会への対応」第3巻「高齢社会の保健と医療」、東京大学出版会、pp.352-358 1985

コミュニティ・レクリエーション活動圏と日常生活圏の関係について

○海老原修（東京大学教育学部）・横山文人（筑波大学体育科学系）

コミュニティ・レクリエーション、コミュニティ、範域、レクリエーション・コミュニティ

緒言

コミュニティ・レクリエーションをコミュニティとレクリエーションを結びつけた合成造語としてとらえるとき、その活動にコミュニティの要件がそなわっているか否かは基本的な問題となろう。

コミュニティは、R. M. マッキーバーによる提起以来、生活圏論（農村社会学）、人間生態学論（都市社会学）、社会計画論、地域権力構造の視点より、多くの研究者によって究明されてきた古典的な研究課題である。と同時に、今日においても、その概念や構造ならびに計画などについて論議がなされている現代的な研究課題でもある。

コミュニティの定義や要件について、一義的な回答が得られないなかで、松原¹⁾は、コミュニティを、「地域社会という生活の場において、市民としての自主性と主体性と責任とを自覚した住民によって、共通の地域への帰属意識と共通の目標と役割意識とをもって、共通の行動がとられようとする、その態度のうちに見出されるもので、とくに、生活環境を等しくし、かつ、それを中心に生活を向上せしめようとする共通利害の方向で一致できる人々が作り上げる地域集団活動の体系が、コミュニティの発現形態である。」と定義している。そして、その構造上の要件として、次の4つの意味が含まれていることを指摘している²⁾。

(1) 範域性 (territoriality、地理的規定要件)

一定範域内での人々の定住の生活集群が、コミュニティたらしめる基底条件となるが、この範域性という特質には、土地をもとにした、ないしは土地への共属の認識を支えにした社会というように、人間社会における「地域性」(locality)という性格をも伴っている。

(2) 社会的相互作用性 (social interaction、相互作用的规定要件)

コミュニティを規定する第2の要件は、一定の地理的範囲内に生態学的な人々の集群があり、地域性を認識した人々の間には、生活上になんらかの相互連関があり、個人の不特定多数の日常的な生活欲求（あれやこれやの欲求）が、それらの相互連関を通して充足されている点に求められる。こうした日常的な生活欲求充足上の相互作用のからみ合いは、長年の間に、なんらかの特微的な慣習のパターンを生み出す。すなわち、「相互作用性」ないしは「共同性」である。

(3) 社会的資源 (social resources、施設体系的規定要件)

前期の2要件を結びつける要件、すなわち、人々の生活上の相互連関を一定の地理的範囲内で果たさしている条件としての、「社会的資源」、とくに「生活環境施設の体

系」である。人々の定住の生活は社会的にいて共通の生活環境施設の利用を通して、一定の地理的、空間的な範囲の上で充足されているものと考えられ、コミュニティは、これら諸施設が組合わさって、体系化された場合ととらえることができる。

(4) コミュニティ感情 (community sentiment、態度的規定要件)

第3の要件としてあげた施設に媒介された生活利害の共通性がテコになって、同じ土地に共属するという感情が呼び醒まされて、人々は共通の生活防衛や維持や向上という目標に向かって活動を展開させようとするが、こうしたコンセンサス（合意）のなかにコミュニティの存在を見出そうとするのが、第4の規定要件の設定の仕方である。

社会の変動、交通・通信・情報体系の発達、伝統的、牧歌的なローカル・コミュニティの存在を次々に打ち壊して、人々の生活の空間を拡げ、共同体的秩序や地域連帯を失わしめた。そうした「地域性」と「共同性」というコミュニティの規定上の柱が弱まるにつれて、逆に、もしコミュニティが存在するならば、あるいは、コミュニティを存在せしめなければならないとすれば、それを人々の心のなかに、態度のなかに求めようということになる。すなわちコミュニティの態度的規定である。

問題の設定：研究目的

筆者らは、これまでに、コミュニティ・スポーツについて、図1に示すような枠組を提起してきた³⁾。これは、行政側と住民側の2方向から、コミュニティ・スポーツをとらえようとしたものである。

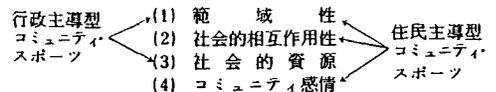


図1. コミュニティ・スポーツの枠組

すなわち、各種のスポーツ・レクリエーション教室、健康・体力づくり教室などが、地域社会のなかに行政側より導入されて、それをコミュニティ形成の契機にする場合（コミュニティ形成のための戦略的手段としてのスポーツ・レクリエーション活動⁴⁾）と、既成のコミュニティにおいて展開される住民の自主的なスポーツ・レクリエーション活動に分けられるのである。

そして、前者の行政主導型コミュニティ・スポーツは、
 領域性と社会的資源がすでに決定されてサービスされる点
 に特徴が求められ、この活動を通して、社会的相互作用性
 やコミュニティ感情を喚起することが期待され策定されて
 いる。これに対して、住民主導型コミュニティ・スポーツ
 は、すでに領域性、社会的相互作用性、コミュニティ感情
 を内在している地域社会のなかで、社会的資源を自ら
 作り出す、あるいは行政側に要求するという方向
 性を持つ活動ととらえてきた。

しかしながら、政策的視点より、より地域社会に
 密接したプログラムを策定するにあたっては、当該
 コミュニティの社会的特性、たとえば、都市・農村、
 市街部・住宅部・農村部、商業地帯・工業地帯・農
 業地帯・漁業地帯など、さらには、スポーツ・レク
 リエーションの種目や内容などと地域社会との関連
 について検討することが重要であり、いい換えれば、
 スポーツやレクリエーションの展開されるコミュニ
 ティ（スポーツ・コミュニティ、レクリエーション・コミ
 ュニティ）と日常生活が営まれるコミュニティの関連につ
 いて考慮されるべきと考えられる。とりわけ、コミュニ
 ティ・スポーツやコミュニティ・レクリエーションの領域に
 関して、学校体育施設を社会的資源の核としたときには、
 その領域を市町村小・中学校通学区域に設定してきたが、
 社会的資源を中心としたレクリエーション・コミュニティ
 と日常生活を営むコミュニティが重層的な広がりをもつ
 ことが持ち、同時に結局的な広がりを持つ可能性が指摘
 されており5)、改めて、コミュニティ・レクリエーションの
 領域について、さらには、レクリエーション・コミュニティ
 とコミュニティの関連について検討される必要があると考
 えられる。本研究では、コミュニティ・レクリエーションの
 領域の設定上の問題点を明らかにし、さらに、レクリエ
 ーション・コミュニティとコミュニティの領域の関係につ
 いて検討することを目的とした。

研究方法

本研究では、1983年千葉県柏市において実施した研究調
 査「柏市教育計画樹立のための基礎調査報告書—社会体育
 とスポーツ活動の現状と課題」（柏市教育計画研究委員会、
 1985）6)のなかより、家庭婦人スポーツ団体と学校体育施
 設開放事業利用団体を対象とした調査結果を用いる。とく
 に、コミュニティ・レクリエーションの領域の設定に関連
 する、活動内容、利用施設、交通手段、地域特性などの項
 目を取り出して研究資料とした。なお、活動内容は、表1
 と表2が示すように、バレーボール、軟式テニス、硬式テ
 ニス、バドミントン、卓球、美容体操であり、本研究での
 レクリエーション活動は、身体活動を伴ったレクリエー
 ション活動（フィジカル・レクリエーション）を意味する。

論議

表1は、家庭婦人スポーツ団体におけるフィジカル・レ

クリエーション活動と交通手段の関係を表わしている。全
 体では、「自転車」が59.1%と過半数を占めており、次
 いで「自家用車」が21.8%、「徒歩」が13.3%の順に
 なっている。

表1. レクリエーション活動と交通手段の関係

活動内容 N数	交通手段	1.	2.	3.	4.	5.
		徒 歩 で	自 転 車 で	バ ス で	自 家 用 車 で	オ ー ト バ イ で
1. バレーボール (n=108)		10.2	70.4	0.9	13.9	4.6
2. 軟式テニス (n=40)		10.0	40.0	2.5	45.0	2.5
3. 硬式テニス (n=45)		2.2	35.6	0	44.4	17.8
4. バドミントン (n=87)		18.4	64.4	2.3	13.8	1.1
5. 卓球 (n=64)		23.4	56.3	0	15.6	4.7
6. 美容体操 (n=92)		12.0	63.0	2.2	21.7	1.1
合 計 (n=436)		13.3	59.1	1.4	21.8	4.4

活動内容別にみると、バレーボール、バドミントン、美
 容体操、卓球では、「自転車」がそれぞれ70.4%、64.4
 %、63.0%、56.3%と高い数値を示しているが、これに対
 して、軟式テニスと硬式テニスはそれぞれ40.0%、35.6%
 と低い数値となっている。この自転車利用の数値に、徒歩
 利用のそれを加算すると、バレーボール(80.6%)、バドミ
 ントン(82.8%)、卓球(79.7%)と80%前後の数値となる。

一方、「自家用車」では、軟式テニス45.0%、硬式テ
 ニス44.4%であるのに対して、バレーボール13.9%、バド
 ミントン13.8%、卓球15.6%と、テニスの数値の約3分の
 1となっている。

このような交通手段の結果より、それぞれのレクリエ
 ーション活動の領域の広さを推定し、相対的に比較すると、
 バレーボール、バドミントン、卓球は、自転車や徒歩で集
 まることが可能な広さの領域を持つものに対して、軟式テ
 ニスや硬式テニスは、自家用車利用の数値が示すように、バ
 レーボール、バドミントン、卓球に比べて、より広い領域
 を持つと考えられる。

また、美容体操については、「徒歩」12.0%、「自転
 車」63.0%とその合計75.0%は、バレーボールなどに準
 ずる数値を示すが、同時に、「自家用車」21.7%とバレー
 ボールなどよりも高い数値を示す。したがって、その領域
 は、バレーボールなどの領域より広く、テニスよりも狭
 い、中間的な広さであると推定される。

さて、表1では、交通手段より、それぞれのレクリエ
 ーション活動の領域を推定したが、このコミュニティ・レク
 リエーションの領域は、社会的資源と密接な関係にあると
 考えられる。表2は、コミュニティ・レクリエーションの
 社会的資源と考えられる体育・スポーツ施設とフィジカル
 ・レクリエーション活動の関係を表わしたものである。全
 体では、公共体育・スポーツ施設42.4%、近隣センター・
 地区体育館30.6%、学校体育・スポーツ施設25.1%となっ
 ているが、レクリエーション活動ごとにそれらの数値は異

なっている。

軟式テニス、硬式テニスでは、公共体育・スポーツ施設がそれぞれ92.9%、91.1%を示し、一方、バレーボールでは学校体育・スポーツ施設78.5%、バドミントンでは近隣センター・地区体育館78.2%と、いずれの場合も高い数値が示すように、レクリエーション活動の展開される施設が限定的、固定的であることがわかる。

表2. レクリエーション活動と利用施設の関係

活動内容	利用施設 N数	1. 2. 3. 4.			
		公共体育・スポーツ施設	近隣センター・地区体育館	学校体育・スポーツ施設	民間の体育・スポーツ施設
1. バレーボール (n=107)		3.7	17.8	78.5	0
2. 軟式テニス (n=42)		92.9	2.4	0	4.8
3. 硬式テニス (n=45)		91.1	0	0	8.9
4. バドミントン (n=87)		19.5	78.2	2.3	0
5. 卓球 (n=62)		38.7	24.2	37.1	0
6. 美容体操 (n=91)		64.8	33.0	0	2.2
合計 (n=434)		42.4	30.6	25.1	1.8

前記4つの活動は、主として単一の体育・スポーツ施設を利用するのに対して、卓球と美容体操では複数の施設を利用していることがわかる。卓球は、公共体育・スポーツ施設38.7%、近隣センター・地区体育館24.2%、学校体育・スポーツ施設37.1%と3種類の施設をほぼ均等に利用している。また、美容体操では、公共体育・スポーツ施設64.8%、近隣センター・地区体育館33.0%と2種類の施設を利用していることがわかる。

表1および表2に示した交通手段と利用施設を、各レクリエーション活動の範囲に関連づけて検討すると、公共体育・スポーツ施設を利用する軟式テニスと硬式テニスでは自家用車やオートバイがその交通手段として用いられ、一方、学校体育・スポーツ施設や近隣センター・地区体育館を利用するバレーボールとバドミントンでは、主に自転車や徒歩を用いることが推察される。また、美容体操では、公共体育・スポーツ施設を利用する割合に応じて自家用車やオートバイを用いると推察され、卓球においても、美容体操でみられる施設と交通手段の関係と同様の傾向を示すものと考えられる。

これらの関係より、コミュニティ・レクリエーションの範囲について検討すると、テニスは市全体を範囲とし、バレーボールとバドミントンは小・中学校通学区域を範囲とし、そして、卓球と美容体操はその中間の広さの範囲を持つと推定されるのである。

この場合、範囲を決定する要因として、当該レクリエーション活動の施設数をあげることができる。すなわち、学校体育・スポーツ施設の数に公共体育・スポーツ施設のそのよりも明らかに多いので、その範囲はより狭くなる(図2)。たとえば、テニスコートを学校で利用することが可能になれば、バレーボールやバドミントンと同じような交

通手段と利用施設の結果を示すかもしれないのである。

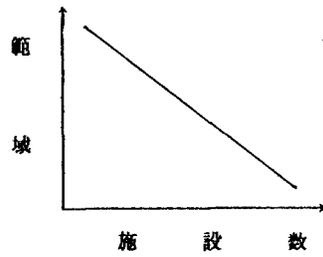


図2. 範囲と施設数の関係

さらに、この施設数を決定する要因としては、当該レクリエーション人口、開放時間、単位時間数などをあげることができるが、原則的にはレクリエーション人口に対する施設数の比であると指摘できる。したがって、図2の横軸を、施設数/レクリエーション人口(レクリエーション参加者1人当たりの施設指数)と置き換えることも可能である。

これまでは、家庭婦人スポーツの結果より、コミュニティ・レクリエーションの範囲について検討したが、次に同一の施設を利用した場合についても検討することにした。

表3は、学校体育施設開放事業利用団体の利用時に用いる交通手段を、社会的地域特性別に示した結果である。全体では、表1と同様に自転車52.9%、自家用車27.9%、徒歩14.9%の順になっている。

表3. 地域別にみた学校体育・スポーツ施設への交通手段

地域別	交通手段 N数	1. 2. 3. 4.			
		徒歩	自転車	自家用車	オートバイ
地 域	市街部 (66)	9.1	59.1	22.7	9.1
	周辺住宅部 (58)	25.9	67.2	5.2	1.7
	周辺団地部 (47)	21.3	59.6	17.0	2.1
	農村部 (37)	0	10.8	86.5	2.7
合計	(208)	14.9	52.9	27.9	4.3

地域別にみると、周辺住宅部、周辺団地部がそれぞれ自転車67.2%、59.6%、徒歩25.9%、21.3%と同じような結果を示している。これに対して、農村部では、自家用車86.5%と、他の3地域とは全く異なることがわかる。

さらに、市街部では、自転車利用が59.1%と周辺団地部の59.6%と同じ数値を示す。しかしながら、前者では、徒歩9.1%、自家用車22.7%であるのに対して、後者では、徒歩21.3%、自家用車17.0%と異なっている。

以上に示したように、交通手段から各地域ごとの範囲を推定すると、その範囲の広さは周辺住宅部、周辺団地部、市街部、農村部の順に狭くなっていると考えられる。すな

わち、同一の類型になる学校体育・スポーツ施設を利用する場合でも、領域の広さはその社会的領域特性によって異なると考えられる。

松原7)は、コミュニティ形成の方法上の問題点の第1として、コミュニティ地区の範囲、すなわち、領域性の問題をあげている。そこでは、適合的なコミュニティ地区の領域として、「小学校区」もしくは「中学校区」ないしはそれに準ずる広がり求めている。同時に、領域内のオプティマムな人口規模を想定する場合に、人口と面積の関係より、都市型コミュニティと農村型コミュニティに2分し、コミュニティ形成の領域の基準が、前者では面積、後者では人口規模であるとしている。

すなわち、表3に示した交通手段より推定されたコミュニティ・レクリエーションの領域と地域特性の関係においても、松原の指摘する都市型コミュニティと農村型コミュニティの特徴を認めることができるが、さらにはこの2つのコミュニティに中間型コミュニティを加えて設定する必要があると考えられるのである。いい換えれば、学校通学区域の設定と同様に、当該地域の人口と面積、つまり人口密度によって、学校体育・スポーツ施設を社会的資源に想定した場合のコミュニティ・レクリエーションの領域を決定できると考えられよう。表3に示した結果より、以上の論議に沿って、領域と人口密度の関係を図示すると、図3のようになろう。

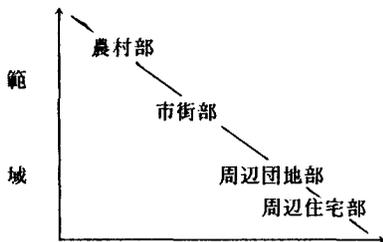


図3. 領域と人口密度の関係

以上のように、コミュニティ・レクリエーションの領域の設定に際しては、コミュニティ・レクリエーションの種目特性に関わる要因群(施設数、参加人口、施設数/参加人口など)とその活動が展開される地域の特性(市街部、周辺部、農村部など:これらは人口密度や就業別人口など関連すると推察される)の2つの視点より決定されると考えられる。

これまで示してきたのは、コミュニティ・レクリエーションにおける領域性と社会的資源についてであったが、さらに外的基準としてより重要なことは、コミュニティ・レクリエーションの領域とコミュニティの領域の関係である。なぜならば、それぞれの活動圏域の関係は、コミュニティの要件を充足する上での残る要件となる社会的相互作用性とコミュニティ感情をコミュニティ・レクリエーションと

関連せしめるか否かという基本的な問題と関わるからである。

江橋8)は、社会体育が展開される場として、(1)職住近接型、(2)職住分離型、(3)職住一体型、(4)住レクリエーション一体型の4類型を示し、日常生活の営まれるコミュニティ(地域社会)や職場の関係を示しながら、同時に、レクリエーションの展開される地域プログラムや職場体育などのレクリエーション・コミュニティとの位置関係についても言及している。

この考え方に準拠して、本研究で取り扱ってきたデータより、レクリエーション・コミュニティとコミュニティの関係を示したのが図4である。社会的相互作用性やコミュニティ感情に関わる指標を用いてコミュニティの領域を推定し、レクリエーション・コミュニティとコミュニティの位置関係を考えれば、このような4類型が提示できよう。

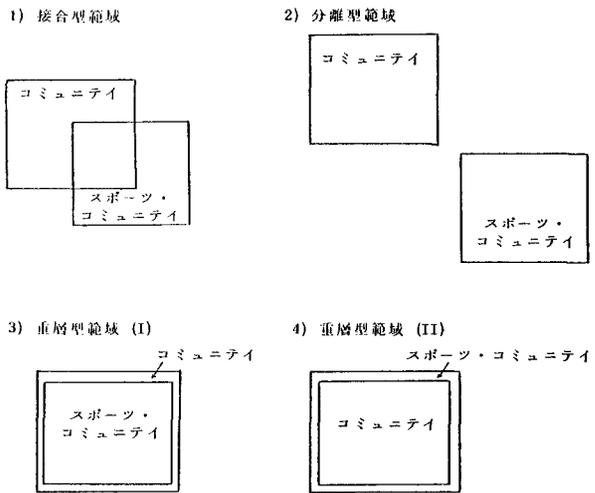


図4. レクリエーション・コミュニティとコミュニティの関係
～レクリエーション活動圏と日常生活圏の関係～

すでに家庭婦人スポーツ団体の調査結果より、レクリエーション・コミュニティの領域には、市町村全体を領域とするテニスに例示された、広域レクリエーション・コミュニティ、パレーボールやバドミントンのような学校区域程度の広がりを持つ居住域レクリエーション・コミュニティ、さらにその中間の広がりを持つ、卓球や美容体操において推定された、中間域レクリエーション・コミュニティを設定した。

したがって、このレクリエーション・コミュニティを図4にあてはめると、4)重層型領域(II)は、広域レクリエーション・コミュニティにあてはまることになろう。つまり、レクリエーション・コミュニティは市全体であり、日常生活圏はそれより狭い領域で営まれると考えられるのである。また、3)重層型領域(I)は、パレーボールやバドミントンにみられた学校区域のレクリエーション・コミュニティを表わし、たとえば、レクリエーション・コミュニティを小学校区域とし、コミュニティを中学校区域と

らえることができよう。

さらに、農村部における学校開放事業による活動は、2)分離型領域という、レクリエーション・コミュニティとコミュニティが分離する関係に、もしくは、1)接合型領域にあてはめることができよう。この分離型領域というカテゴリーには、都心部のスポーツ・レクリエーション活動、すなわち、職住分離型の人々によるフィットネス・スポーツや職場レクリエーションなどが含まれる。

また、1)接合型領域には、表3に示した市街部の活動、あるいは、表1や表2に示した卓球や美容体操の活動もあてはまるものと考えられる。

まとめ

本研究では、コミュニティ・レクリエーションの領域の設定上の問題点を明らかにし、さらに、レクリエーション・コミュニティとコミュニティの関係について、千葉県柏市で実施した家庭婦人スポーツ団体と学校体育施設開放事業利用団体に対する調査結果を研究資料として検討した。

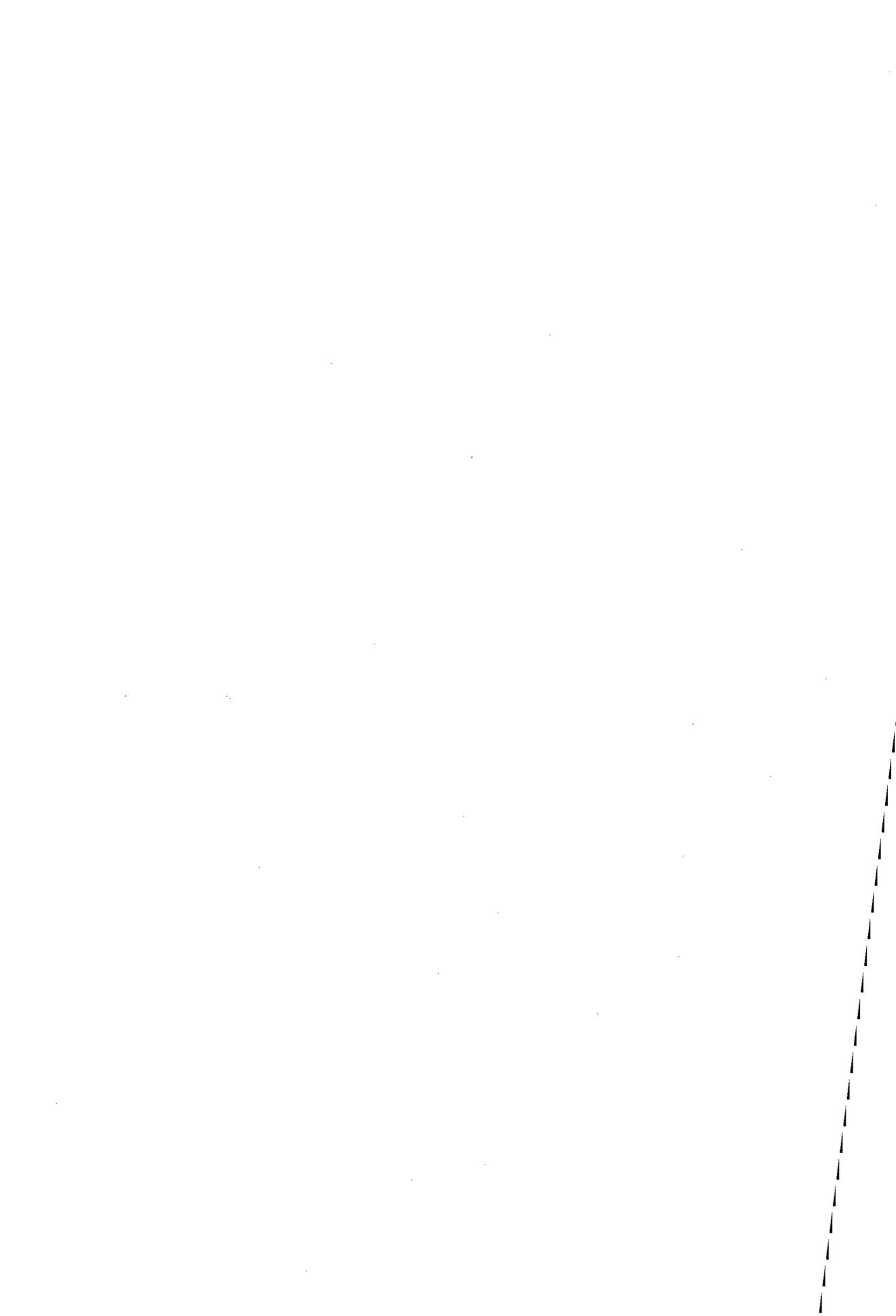
コミュニティ・レクリエーションの領域の設定については、基本的には、(1)施設数と(2)参加人口によって影響されるが、実際的には、(3)レクリエーション活動内容と(4)当該レクリエーションの利用施設数によって決定されていると判断される。

また、コミュニティ・レクリエーションの領域とコミュニティの領域については、社会的資源と領域の設定によって決定されるレクリエーション・コミュニティと従来の研究や社会的相互作用の広がりより推定されるコミュニティの関係を4類型する試みが提示できた。すなわち、図4に示す、1)接合型領域、2)分離型領域、3)重層型領域(I)、4)重層型領域(II)である。

今後の課題としては、日常生活の展開されるコミュニティの領域を、レクリエーション・コミュニティと同時に調査することによって、図4に示した4類型の検証をあげることができよう。

参考文献

- 1)松原治郎、コミュニティの社会学、pp25、東京大学出版会、1978
- 2)前掲書1)、pp25-28
- 3)海老原修、地域におけるスポーツの展開、松原・久富編著、学習社会の成立と教育の再編、pp333-364、東京大学出版会、1983
- 4)海老原修・江橋慎四郎、コミュニティ・スポーツの社会的機能について—コミュニティ形成に果たす役割の検討—、レクリエーション研究 第8号:41-50、1981
- 5)厨義弘、地域社会の生活とスポーツ、桑野豊編著、現代社会とスポーツ、pp170-183、不味堂出版、1984
- 6)海老原修、柏市教育計画のための基礎調査報告書—社会体育・スポーツ活動の現状と課題—、柏市教育計画研究委員会、1985
- 7)前掲書1)、pp179-183
- 8)江橋慎四郎、体育の領域—社会体育、水野忠文、猪飼道夫、江橋慎四郎編著、体育教育の原理、pp96-108、東京大学出版会、1973



ニュージーランドの都市空間における創造的 野外レクリエーションの実態とその事例

○ 杉尾 邦江 (株式会社ブラック研究所)

New Zealand, 創造的野外レクリエーション, Parks & Recreation, New Zealand のレクリエーション行政組織, Environmental Trail, Home Gardening

1. はじめに

我が国のレクリエーション政策には、現在2つの大きな問題がある。第一は、行政の不統一化による政策の競合化、それによるレクリエーション行政の非効率、第二には、年間約4000億円を投入するレクリエーション関連予算の殆どが施設整備費であり、レクリエーションに関する基礎的研究と、利用のためのプログラム整備の不足、この2点が指摘される。

一方、ますます都市部への人口の集中化による、都市生活のやすらぎの低下や自然環境の消失、又、高度安定化と情報化社会の進捗の中で、人々は精神の不安定化を感じ、「物的豊かさ」から「心の豊かさ」を強く望む傾向にあることは、現在一般的に承知のことである。

余暇活動にあっても、快適環境の創造や、生活に潤いと感性を高める知的、創造的レクリエーションの要望が強まっている。このことは、最近各地の都市アメニティを高める環境創造計画の中に、自然のみならず、文化や歴史等にもふれあうレクリエーション施設の整備とそれらのソフトづくりの要望が高い事からもうかがえる。

しかし、我が国には、現在、すぐれたプログラムに乏しく、これらのプログラムを早急に開発、用意することは、緊急的課題である。そのためには、先進的諸国に事例を学ぶことが考えられる。そこで、一例として、先進的諸国の中でも、特に野外レクリエーションが活発で、ユニークな活動を行っているニュージーランドの実態について、特に都市の身近な環境での、幾つかの事例と理想的と考えられるレクリエーション行政(地方行政)のシステムについて紹介するものである。

2. 歴史的背景

ニュージーランドは開国の歴史も浅く、人口も少ない。(開国開拓が始まって百数十年、人口は約330万人)これまでその国土はよく保全されてきたと言える。優れた自然景観地域は、National Parksとして、アメリカに次いで世界でも早くに指定され、積極的な景観資源の保全と更にこれらを活用した野外レクリエーションやスポーツを発展させてきた。公園やレクリエーション空間としての都市の緑地は、開拓時代の初期段階で既に、母国イギリスの都市計画手法を導入して、保留に努めている。すなわち、Aucklandにおいては、domain・公園という形で、大面積の緑地が保留され、南島のChristchurch市では、公園・ガーデン・都市広場として、更にTown beltの構想のもとに、巾の広い並木のある大通りが設置された。Wellington市では、

都市部と住宅地との境界地域に両海岸を結ぶTown beltとして緑地を保留した。また、Dunedin市においては、市内及び市外の街区ごとに、それぞれTown beltとして緑地がベルト状に保留され、今日これらが公園・レクリエーションスペースとして活用されている。

一方、1941年、David Tannockはニュージーランドの主要な産業を支える広大な放牧地のグリーンは、広く一般国民のスポーツやレクリエーションに活用されるべきであると述べている。更に、最も価値あるレクリエーションは、Gardening(庭づくり)であり、庭づくりによって、人間は最も純度の高い喜びを得ることができ、精神をリフレッシュさせるものであると述べており、ニュージーランドにおける、創造的レクリエーション活動として、Home Gardeningを最も高く評価している。

このように、ニュージーランドの公園・レクリエーションは、現在では広く原始的環境地域、広大な牧草地・海岸地域は勿論、都市公園、さらに私的空間を含めて、積極的にレクリエーション活動を展開している。

3. ニュージーランドにおけるレクリエーション地方行政システムについて

ニュージーランドのレクリエーション空間、資源の確保は、先に述べた様に開拓、都市の建設と同時に、都市計画によって保留された。これによって、今日多大なレクリエーション活動を可能にしている。また、ニュージーランドのレクリエーションが効果的に行われている事は、優れたレクリエーション行政システム及び「ニュージーランド公園・レクリエーション行政協会(New Zealand Institute of Parks and Recreation Administration Inc.: NZIPRA)による支援に起因していると考えられる。

[3-1] レクリエーション行政システム

ニュージーランドのレクリエーション行政は、地方行政が、その主体を成している。地方行政は、CITY Councilといった独特な行政単位を形成しており、レクリエーション行政システムは、図()のとおりである。

市長の下に、公園レクリエーション市議会が設置され、その下に公園レクリエーション局長が配され、ここで公園及びレクリエーションの総ての業務が総括されている。従って、一つの局の中で、公園・レクリエーションのハード・ソフト、更にコミュニティ・学校各種団体のレクリエーション活動まで所管されている。

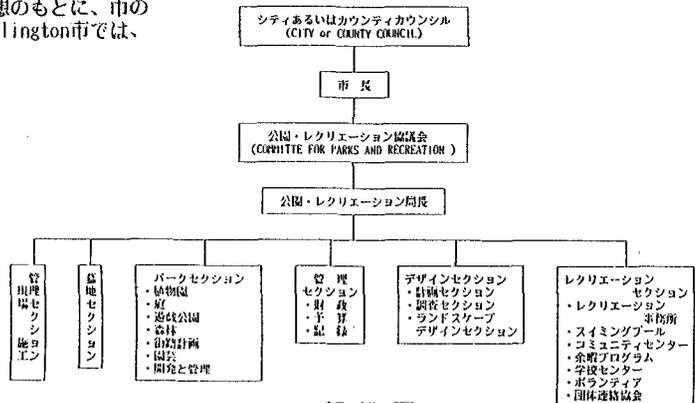


図1 公園・レクリエーション行政システム

[3-2] レクリエーション行政を支援する組織

更に、レクリエーション行政を支援するため、公園・レクリエーションに係わる地方行政官、政府関係者、ナショナルパーク、森林・環境保全の専門家、大学、研究機関の研究者、民間人から成る NEW ZEALAND INSTITUTE OF PARKS AND RECREATION ADMINISTRATION INC.(NZIPRA) が組織され、ニュージーランドのレクリエーション及び公園、環境に関する研究、教育（公園・レクリエーションに係わる行政官や関係者に対する教育）及び一般利用者の教育・普及活動等が行われ、一層の成果を上げている。

4. ニュージーランドの都市空間における創造的野外レクリエーションの事例

[4-1] オークランド(Auckland City) の都市公園内におけるソフトプログラムによる Environmental trail

オークランドシティカウンシル(Auckland City Council) は、オークランド市内の5つの都市公園に環境歩道を設置している。これらは、いずれも既存の公園内に、環境教育のための観察と思索のためのポイントを設定し、質問に答える形式を用いている。それぞれ公園の歴史的背景・自然環境の特性を生かし、公園の性格に基づいたコースと設問が設定されている。各公園の管理事務所でこれらの環境歩道のリーフレットが用意されているが、このリーフレットは、自由に利用者が求めることができる。リーフレットはA5判の小冊子で、まず公園のあらまし、歴史等が詳しく解説されている。更に、公園の各部分の解説と全体の平面図に Environmental trailのコースが書かれ、Work sheet(質問紙)がついていて、これに設問が記され、この Work sheetによる設問に答えながら、公園を利用する。設問数はおよそ 8~10、公園内の解説ポイントは、20数箇所におよんでいる。どの公園のコースもニュージーランドの開拓の歴史、先住民族マオリ族の歴史と文化、開拓時代のニュージーランド人の生活、環境要素としての地形・地質、ニュージーランド原産の植物、ヨーロッパから移植された植物、園芸等を一体的に学ばせようとする他、今後の公

園整備に関する意見を聞く等、工夫をこらしたプログラムとしている。5つの公園のうち、3公園の Work sheet を以下に紹介する。

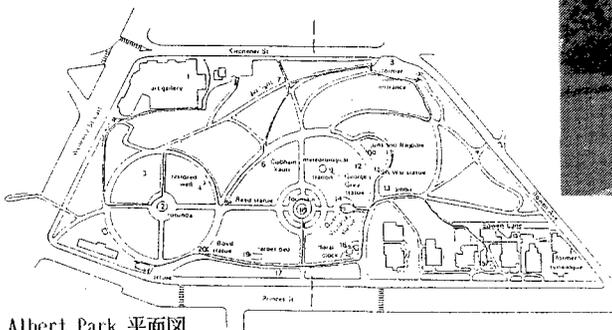
(1) Albert Park Environmental Trail

- ① 公園のある場所を、先住民も移民者も同じ目的で使用した。その理由は？
- ② 1880年代の公園の、ある天気の良い日曜日の午後、この公園を人々はどうのように利用し、楽しんでいたか、その様子を想像して、詩に書か、絵に描いてみよう。
- ③ ニュージーランド原産の植物名を上げよ。
- ④ 公園に設置されている、ビクトリア女王等の像についてどう思うか、撤去したり、別の場所に移動させた方が良いと思うかどうか。
- ⑤ 新しく公園を拡張するためには、古い昔の家を撤去しなくてはならない。多くの人達はその保存を望んでいるが、あなたは思うか？ その理由は？
- ⑥ 公園管理事務所のコテージを簡単にスケッチしてみよう。あなたは、この小屋が好きですか？ それとも、みにくいと思いませんか？

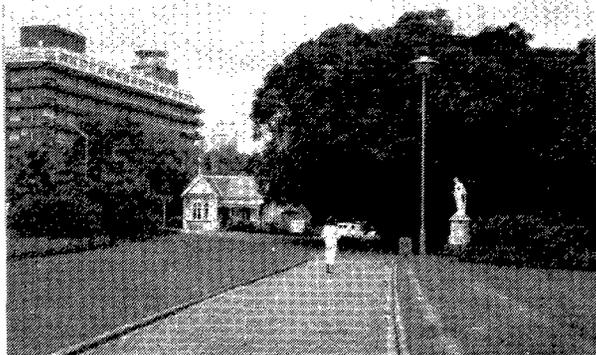
以上のようにこの Albert Parkでは、公園をリフレッシュさせることに対する、市民の声を聞く等、公園管理に向けての努力も同時に図られている。

(2) Western Springs Environmental Trail

Western Springs は、湿地・池を主体とした自然風景式公園で、水鳥のサンクチュアリーともなっている。



Albert Park 平面図



⑥の地点



Albert Park ④の地点



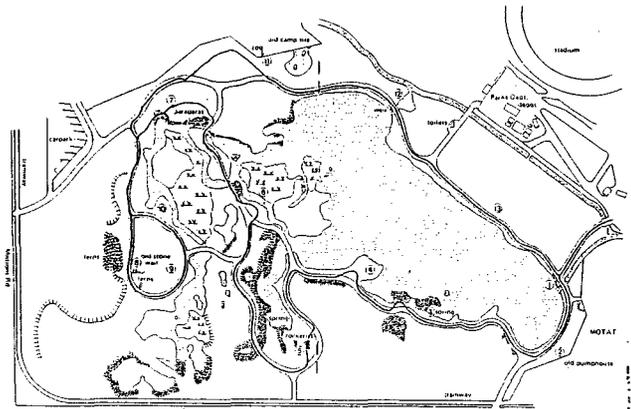
Western Springs

ここでの Work sheet は、①池の水の問題、②水性植物に関する生態的問題、植物の遷移、③水鳥や植物の観察を、スケッチをする事によって行う事、④水鳥の繁殖に関する観察、⑤ニュージーランド原産植物の環境への適応性、⑥シダ植物の成長過程をスケッチすること、⑦ニュージーランド原産の植物を植栽することの必要性和その理由。これらの設問のように、池をめぐる湿地の生態系を学習させることを意図している。

(3) Auckland Domain Children's Nature Trail
ドメインは、オークランド市内の最も大きな公園で、中にはオークランド最大の戦争記念博物館、観賞用温室ガーデン、クリケットフィールド、庭園、サンクチュアリー等がある総合公園である。

ここに設置されている子供の為のネイチュアトレイルは、観察ポイントとルートが設定されているだけで、特別に園路等が設置されているわけではない。パンフレットに観察ポイントとルートの人った全体マップ、それにポイントの解説がなされており、これによって、セルフガイドで利用するものである。

ここでのポイントは、①まず「地形について」で、ドメインの地形的成因を学習する。それは、ドメインの中心の最も高い場所にある博物館の位置から、ドメイン全体の地形を概観し、ドメインは火山に

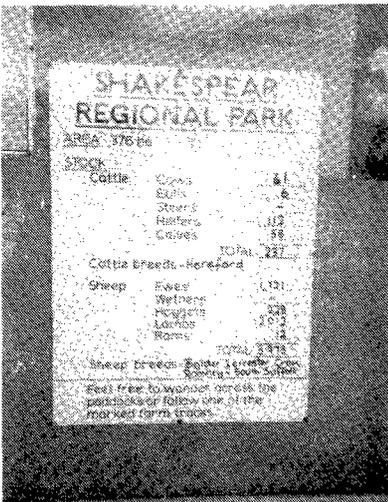


Western Springs 平面図

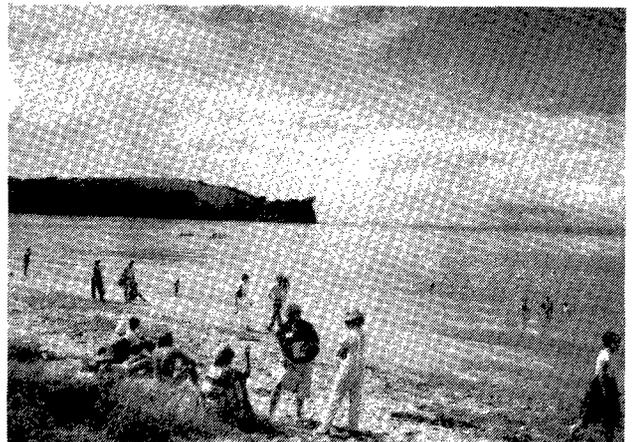
て形成され、その痕跡をとどめている「クレーター (Cretator)」等を観察するようになっていいる。②ドメインの歴史として、先住民マオリ族との戦争後、新しいヨーロッパからの移住者がここを公園とする事を定め、更に、狩猟のためにここに水鳥を導入した等の、移民者達の生活と歴史を学習する様になっている。③更に、ダックポンド (Duck ponds) には、マラードダック (Mallard duck) やマスを初めてヨーロッパから導入したこと、又、池の植生、生態等をイラストでわかりやすく説明している。④フォーモルガーデン (Formal Gardens) 英国式庭園、英国の伝統を受け継いだ花壇のある庭園については、周辺の自然のままの環境との違いを学ばせ、植物や動物について、注意深く観察させる。又、これらの庭園が、昔に比べ、大きく変化した過程等を、昔の写真をパンフレットに載せてこれも見せながら、認識させようとしている。⑤自然環境そのものを、保護・保全されている谷部や凹地、谷部では、自然のままの植生や野生動物の生息環境を学ばせるようにしている。⑥ウインターガーデン、ここでは、伝統的な、ニュージーランドの園芸植物を観賞させ、園芸への関心を高めることを工夫している。



Auckland Domain Children's Nature Trail ③のポイント



Shakespeare Regional Park の指示板



Shakespeare Regional Park の海岸風景

以上、オークランド市の公園の中に設置されている環境教育トレイルについて若干の事例を紹介したが、身近な公園にテーマを見つけ、少しの工夫で公園利用の質を高め、レクリエーションを通して、知的創造性を養い、ニュージーランドの文化と歴史と環境について、常に理解と親しみの機会を用意している。

〔4-2〕牧場の公園化とその利用

ニュージーランドは、都市近郊に、更に野外に親しむための Regional Parks Net Work を持っている。オークランド近郊には、およそ11箇所の Regional Parks を設置し、Christchurch Garden Contest 工場部門優勝の庭 test 住宅部門市民に親しまれている。それぞれ地域の環境の特性を生かした地域自然公園であり、利用の主体は、ハイキング、トラッピング、ピクニック、水泳、ボート、キャンピング、サーフィング等であるが、中には特別に、ファームウォーク (Farm Walks) というのがあり、牧草地を公園化している。

その例として、シェイクスピア・リージョナルパーク (Shakespeare Regional Park) について紹介する。この公園は、面積約 376ha、オークランドより56kmの位置にある。最初の農場公園として指定され、海水浴、ピクニックが楽しめ、更にファームトレイルが公園内に整備され、農場風景を楽しみ、農場経営を学ぶことができる。また、海岸に面しているため、ニュージーランドの海岸の自然植生を学習する事もできる。ここの公園の特徴は、9500頭の羊と、1600頭の牛を飼育しているが、これらの牛は売却されるまでストックされているものである。又、ここでは、羊および牛の品種の保存にも努め、全て放し飼いされている。この農場公園の目的は、

- ①家畜の種の保存
- ②牧場経営
- ③牧場経営への知識、教育、啓蒙、普及
- ④海岸の自然植生の保存
- ⑤レクリエーション

以上のような目的は、1941年 David Tannock がニュージーランドの広大な牧草地を多くの人達の多様なレクリエーションに利用されなければならないと提唱した事に始まると思われる。このように産業教育と農場経営を行いながら、

レクリエーションと調和させている。又、これらのリージョナルパーク (Regional Park) には、レンジャーステーションが設置されており、数々の利用者指導として、ガイドツアー等各種のサービスが行われている。身近な環境に創造的レクリエーション資源をみつけ、更に開拓時代からの歴史、先住民の文化の保存、ニュージーランドの原生な自然に愛情を注ぎ、それらについて親しみ、学び、守り育てる事が常に公園、レクリエーションの重要なテーマとしている事は興味深い。

〔4-3〕ニュージーランドにおける、最も創造的レクリエーション活動としてのホームガーデニングの実態 (南島クライストチャーチ市の事例)

(1)ホームガーデニングのレクリエーションとしての意義
J・ブノワメシヤン (Jacques Benoist-Me'chin) は、彼の著書「人間の庭」で、「庭の創造は余暇によって、もたらされる表現の最高のものであり、人類がその地上への出現以来、世界中に木や花に飾られた空間を造り続けて来

た謎を解くものであり、ある種の文明において、偉大なる庭園芸術は、抽象的ではなく、自然それ自体の要素を用いて、至福の概念を表さんとする望みに結びついている。」と述べている。又、「これらを生み出す余暇とは、無為や怠惰ではなく、それはすばぬけて創造的な状態である。」と説いている。又、先にも述べたように、1941年に David Tannock の言明も同様、ガーデニングこそ人間の最も高い喜びを得る事ができるレクリエーションであるとしている様に、ニュージーランドにおけるホームガーデニングは、極めて高い水準に到達し、個人のレクリエーションから住環境の美観を形成し、更に、都市のアメニティを高めるに至っている。アメリカ及びニュージーランドのホームガーデンの歴史は、開拓時代に始まる。留守を預かる家庭の主婦が、菜園と薬草等を育てた事に始まる。

従って、古い時代に造られた、すぐれたホームガーデンは、婦人の作品によるものが多い。

しかし、現在では、ニュージーランドのホームガーデンは多様な階層に愛好され、とりわけ、定年後のシルバーエイジの人達の主要なレクリエーション活動となっている。南島クライストチャーチ市では、これらのホームガーデニングの活動を一層高め、活発なものにしている方策として極めてユニークなガーデンコンテストを挙げる事ができる。

(2)クライストチャーチ市のガーデンコンテストの実態
ガーデンコンテストは、クライストチャーチ美化協会が主催・実施している。協会は、1897年に創立して以来、クライストチャーチが誇りあるガーデンシティとなる事に努力して来たボランティアの団体である。各種の美化活動を精力的に行っているが、特にこのガーデンコンテストは、極めて高い成果を得ている。ガーデンコンテストは、一般



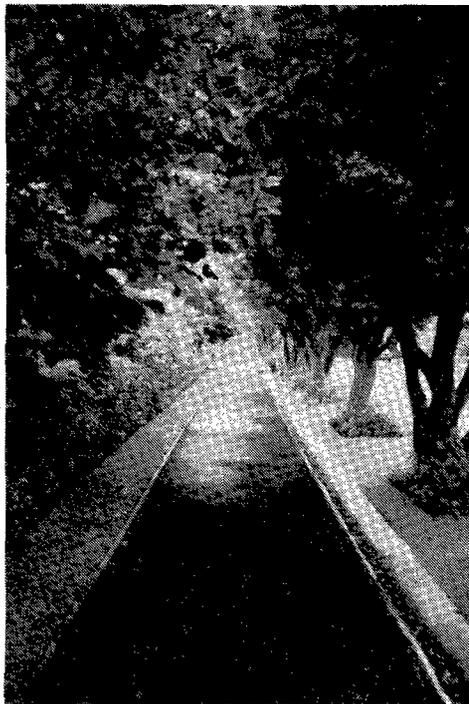
Christchurch Garden Contest 工場部門優勝の庭



Christchurch Garden Contest 住宅部門

の家庭の庭以外に、事務所、工場、病院、アパート、商業建築、ホテル等の庭他に、道路が含まれる。春期及び夏期の2回行われ、綿密なコンテストの規定が定められている。審査員は、約20名程度、協会員であり、全てボランティアである。町中の応募したガーデンを見てまわり、審査し、最終的には、市長を交えた審査会によって優勝者が決定される。これには市の公園、レクリエーション局がサポートしているが、あくまでも支援の形であり、全ての主体はこの市民のボランティア団体の美化協会である。審査のポイント及びコンテストの理念は町的美観形成に寄与する事にある。従って、道路から見て美しく、魅力的である事が最大のポイントとされているので、審査は常に道路から観察する事によって行われる。

- 次に、コンテストの規則の一部を記す。コンテストは、次のおよそ20部門で行われる。その内容は、
- ① ANDREWS CUP : 春のガーデンが対象。道路に面していない庭。
 - ② H.M.TAILOR CUP (NOVICE) : 初心者が対象。道路に面していない庭が対象。次の年には好きな部門に応募できる。
 - ③ H.TILLMAN CUP : 道路に面して住宅の建築後3年以内の庭。次の年からは、好きなクラスに応募できる。
 - ④ DACRE CUP : 集合住宅の庭。
 - ⑤ HACK CUP : 公共交通機関によって管理されている道路に面している庭。
 - ⑥ DOBSON CUP : 周囲に対して最も効果的であった庭。
 - ⑦ HERBERT CUP : 60フィート以内の道路に面した庭。
 - ⑧ SLSDEN CUP : 60フィート以上の道路に面した庭。
 - ⑨ McMA STER CUP : 規定外。道路に面していても可。
 - ⑩ WALSH TROPHY : 30才以下の若い人の家の庭。この入賞者は、このクラスに再度の応募はできない。



Christchurch Garden Contest 道路部門

- ⑪ HOWMAN TROPHY : アパート部門。
- ⑫ WATLING CUP : 研究所、工場、商業建築の庭。
- ⑬ DALLEY CHALLENGE TROPHY : 企業、事務所、娯楽施設部門。
- ⑭ JEFFERIES TROPHY : ホテル、モーテル、宿泊施設部門。
- ⑮ GOWER CHALLENGE CUP : クラスに関係なく最も優れた庭に与えられる。
- ⑯ RUSKE CUP : 最高作品、部門の中で最も高い得点を得た庭の中から、特別に全審査員によって推薦される。
- ⑰ RICCARTON WORKINGMEN'S CLUB CUP : リカートンワーキングクラブの周辺にある庭で、このクラブから見られる最も魅力的な庭。
- ⑱ CHRISTCHURCH BEAUTIFYING ASSOCIATION TROPHY : 過去の人選者で、入賞時の成績を維持している庭に与えられる。

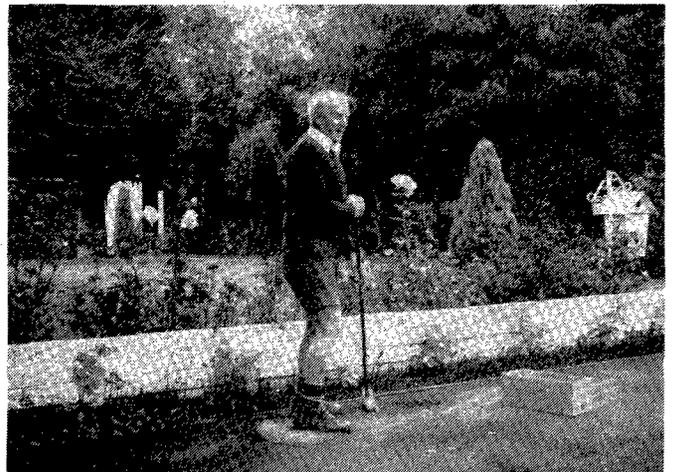
以上の部門ごとに、以下の項目について、それぞれの得点配分が異なる。得点の配分は、下記の通りであり、更に、かん木類には、ニュージーランド原産種の植栽が必要とされている。審査は、春期は 9月~11月、夏期は 2月の第一日曜日とされており、審査の結果、与えられるトロフィー及びカップには、「貴方の庭が我がクライストチャーチ市の美化に多大の貢献をした事を賞します。」と記されている。

デザインとハーモニー	30 点
花(一年草・多年草)	20 点
樹木及びかん木	30 点
園芸技術と管理	10 点
芝生及び地被	10 点
	100 点

(3) ガーデンコンテストの意義と効果

このガーデンコンテストには、以下のような3つの効果を認める事ができる。

- ①市民参加・ボランティア活動による市民の強い連係と町への愛着心の向上と強化
 - ②町の景観美化への寄与
 - ③余暇活動としてのレクリエーション
- このうち、②に対する効果は極めて大きく、市民による住環境のガーデン化は今では観光ルートになる程の美しい町並とガーデンストリートを形成し、見学者が絶えない。又①については、特にストリート部門のコンテストは、道路に沿った一帯の家々全てが対象となるので、市民の協調性が高まる事となる。又、植栽木には、必ずネイティブな樹種を混植する事が定められ、ニュージーランド原産の植物の保存・保護の精神も育まれる事となる。③については、特に高齢者の良き余暇としての活動を活発化している。



庭の手入れをする老人

5. 考察及びまとめ

	ニュージーランド	日本
国土総面積	264,000 sqkms	372,000 sqkms
人口	3.3 million	120 million
人口密度	12/sqkm	323/sqkm
国立公園面積	21,500sqkm	20,000sqkm
総公園面積 (保全地域を含む)	65,700sqkm	52,000sqkm
公園利用者	3~5 million	600 million

(1)我が国とニュージーランドとでは、国土面積や公園面積は同じに近い。自然環境も非常に似ている。しかし、人口は、日本はニュージーランドの約40倍、公園利用者は約200倍と極めて高い。従って、ニュージーランドでは、日本に比べ、良質のレクリエーション資源と、良好なレクリエーションサービスを国民が享受出来る事は、当然と思われるが、このニュージーランドの極めて高い水準のレクリエーション活動を行っている背景とその要因としては、レクリエーション行政の理想的なシステムにある。レクリエーション行政は、公園・レクリエーション局が、全ての業務を所管する事によって、効率の良い行政を実行する事が可能となる。また、レクリエーション及び公園行政に携わる行政担当者、教育関係者、民間人より成るニュージーランド・パークアンドレクリエーション行政学会 (New Zealand Institute of park and recreation Administration Inc.: NZIPRA) を組織し、様々な研究・教育活動を行なっている。更に、市民レベルでは、ボランティアとしての各種団体の自主的活動も活発で、同時に行政が、力強く支援している。

(2)次に開拓時代の初期段階から、レクリエーションのためのパークシステムを確立し、土地・緑地の保留に努めた事、良き指導者によるレクリエーションのコンセプトが明確化していた事。

(3)ニュージーランドの原生な自然の保全に努める、愛護心を育成した事。

(4)ニュージーランドの歴史、先住民の文化に対する関心と教育に努めている事、則ち、創造的レクリエーションとしての身近な公園での環境教育プログラムに、その思想を反映させている事。

(5)母国英国の園芸技術を更に高め、一般市民のレクリエーションとして、ホームガーデニングを定着・普及させ、併せて、老人の良き余暇活動としても効果を上げ、更に都市景観の美観形成に寄与している事。

参考文献

- (1) A History of PARKS & RECREATION
- (2) Guidelines for Park and Recreation Administration in New Zealand
- (3) Albert Park Environmental Trail
- (4) Western Springs Environmental Trail
- (5) Auckland Domain Children's Nature Trail

都市公園の利用者による 評価等に関する研究

—— 船橋市内二公園の比較から ——

○小川 貫 齊藤虎征 菊地君男 阿部信博 朝倉徳雄 澤村 博

(日本 大 学)

都市公園 スペース 緑 自然

1. 調査・研究の目的

わが国における高度経済成長に伴う環境破壊は日常生活へも影響を及ぼし、生活空間としての総合的な人間の生活環境の整備や保全は立ち遅れているといわざるを得ない。

環境庁の調査では「校内暴力は緑地の少ない都市周辺に発生率が高い」とされ、東京農業大学造園地被・植栽学研究グループの実験によれば、「自然の緑が多いほど疲労の回復が早く、注意力や集中力が高い」という結果が出ている。さらに、神山は「森林浴は自律神経の働きを高める」として、「自然」と「緑」の必要性を強調している。過去の日本の都市には、「原っぱ」や「鎮守の森」、「屋敷の林」といった「自然」や「緑」が身近に存在していた。しかし、現在では、自然のある静的スペースやスポーツ・レクリエーション活動にも対応できるような動的スペースは著しく減少した。また、住民の価値感の変化や多様化の進む中で、コミュニティの形成の場としての多目的スペースも要求され、生活環境基盤施設として公園の需要はますます高まりつつある。

本研究は、現在の生活環境下に既存する公園施設の内容を分析し、その利用状況および利用者による評価について調査を実施し、公園の性格や利用者の期待などを把握することによって、主にスポーツ・レクリエーションの見地から公園施設のあり方に対する具体的提案の基礎資料を得ようとするものである。調査の対象とした公園は、それぞれ特徴を持った住区に設置された2公園を選んだ。いずれの公園も児童公園としての性格を持つものと思われる。

2. 公園の概況

(A公園)

名称 「夏見台中央公園」 図. 1, 2
所在地 千葉県船橋市夏見台4丁目
交通 船橋駅より新京成バス10分、徒歩 2分
設置年 昭和30年12月
面積 約 0.32ha
付帯設備 ベンチ12, ゴミ箱 6, 便所 1, 水のみ場 2, 鉄棒 2, ぶらんこ 6, すべり台 1, コイルトンネル 1, シーソー 2, チェーンジャングル 1, 砂場 1, 樹木 (数種) 約20

国鉄船橋駅の北方約 2.5kmに位置し、戸建住宅や小規模の商店などが混在する中心にある。当公園は、広さや施設の内容からみて児童公園といえるが、付近にはさらに小規

模の児童公園と「街かどスポーツ広場」が設置されている。

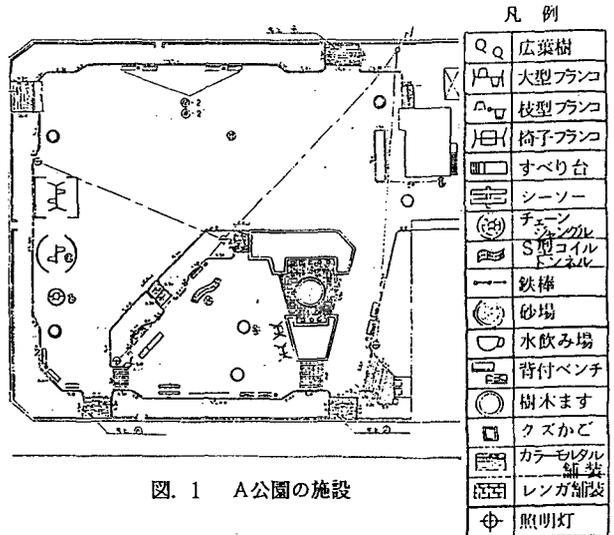


図. 1 A公園の施設

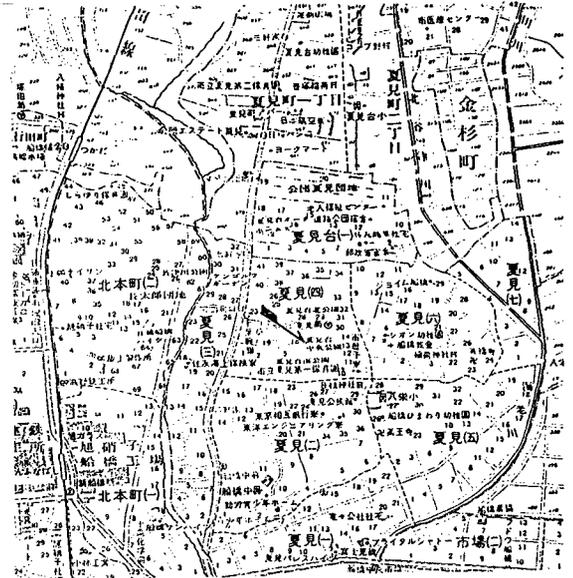


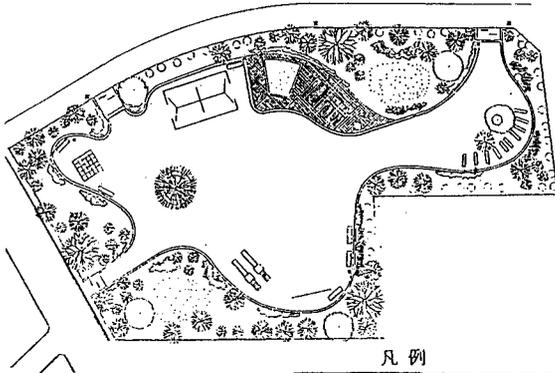
図. 2 A公園の周辺

(B公園)

名称 「海神二丁目公園」 図. 3, 4
所在地 千葉県船橋市海神町2丁目
交通 船橋駅より京成バス10分、徒歩 5分

設置年 昭和53年12月
 面積 約 0.21ha
 付帯設備 ベンチ 6, ゴミ箱 2, 鉄棒 2, ぶらんこ 2, すべり台 1, ドラム缶トンネル 10, ジャングルジム 1, 砂場 1, 樹木 (数種) 約20

国鉄船橋駅の西南西約 2kmに位置し、付近にはおよそ300世帯の高層住宅と戸建住宅がある。また、各種の中小会社の建物 (事務所, 工場, 倉庫) や工事・運搬用の駐車場が混在しているのでかなり雑然とした雰囲気であり、さらに隣接する道路の交通量も多く騒音が大きい。



凡例

	ブランコ		背付ベンチ
	すべり台		モルタル舗装
	鉄棒		ごみかご
	ジャンクルジム		砂場
	ドラムかん		水飲み場
	各種広葉樹		照明灯
	芝生		

図. 3 B公園の施設

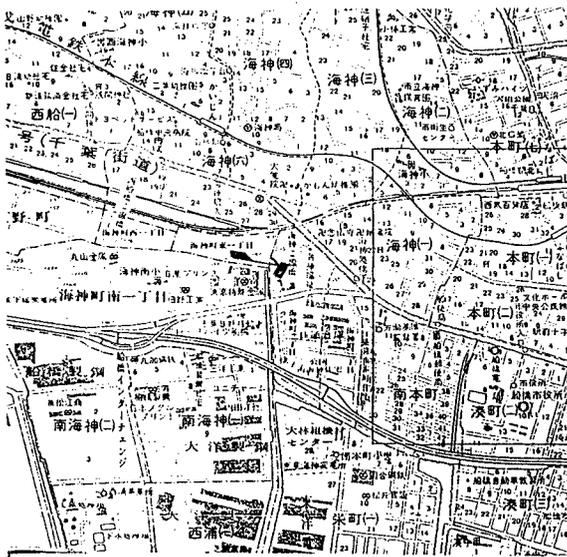


図. 4 B公園の周辺

3. 調査方法

(1)調査日時

A公園 昭和60年10月10日 (祭), 10月20日 (日)
 B公園 昭和60年 9月22日 (日), 10月10日 (祭)

①午前 9時30分～正午 ②午後 1時～ 3時30分

(2)観察調査: 出入り口からの入園者の行動を観察, 記録した。

(3)アンケート調査: 13才以上の入園者を無作為に選び質問紙に回答を求めた。

(4)アンケートの概要

(A)利用者について

性別, 年齢, 職業, 住居, 交通手段, 住居から公園までの所要時間, 同伴者, 過去の利用回数, 来園の理由, 公園の混雑度, 公園に対するイメージ, 公園に対する期待, 実施したレクリエーション活動など。

(B)利用者の公園に対する評価について

公園のスペース, 清潔さ, 樹木の数, 樹木の配列, 草花の種類, 草花の配列, 虫の種類, 虫の数, 鳥の種類, 鳥の数, 芝生のスペース, 芝生の状態, 遊具の種類, 遊具の数, 遊具の配列 (間隔), ベンチの数, ベンチのデザイン, ベンチのサイズ, ゴミの数, ゴミ箱の配列, ゴミ箱のデザイン, ゴミの処理状態, トイレの数, トイレの清潔さ, トイレの広さ, トイレの配色, トイレのデザイン, 出入り口の数, 出入り口の場所, 水道の数, 水道の配置, 公園全体の配置など。

(Bの設問に対しては, 「十分である」「不十分である」「どちらともいえない」の3つのスケールを設けて回答を得た。)

4. 結果と考察

表1は, 観察による性別および年齢層別入園者の概数を示したものである。年齢層の判別は, 観察者の主観的判断によった。

年齢層から見ると両公園とも小学生, 幼児が多く, 児童公園としての性格をうかがうことができる。A公園では中年層の男性の利用が比較的多くみられたが, これはA公園の周辺に商店とともに食堂なども点在し, 屋食後や仕事の合間の休息といった利用がみられたためである。また, 中・高校生の男子や青年の利用も多くみられたのは, A公園には, 待ち合わせの場所としてあるいは通りがかりにちょっと立ち寄るという都市公園の雰囲気があることを示していると思われる。B公園では, 近接する高層集合住宅の主婦層が, 子守りをしながら過ごしている姿が多くみられ, その他の年齢層の利用は少なかった。このように, 公園付

近の環境や後述する公園の性格などによって、利用する性別や年齢層にそれぞれ特徴があるといえる。

表. 1 観察による入園者の概要

(人数)

	A 公 園				B 公 園			
	男	女	計	%	男	女	計	%
幼 児	74	62	136	23.4	53	52	105	33.5
小 学 生	118	81	199	34.2	91	57	148	47.3
中 高 校 生	31	8	39	6.7	0	2	2	0.6
青 年	29	4	33	5.7	3	0	3	1.0
中年 (主婦を含む)	51	67	117	20.3	18	34	52	16.6
老 年	18	39	57	9.8	1	2	3	1.0
合 計	321	261	582		166	147	313	

(通り抜けを含まない)

表. 2 行動の観察

(人数)

	A 公 園			B 公 園		
	男	女	計	男	女	計
自転車乗り回し	74	33	107	31	21	52
ぶらんこ	91	142	233	39	65	104
コイルトンネル	12	15	27	-	-	-
ドラム缶	-	-	-	5	2	7
鉄棒	12	14	26	15	29	44
すべり台	24	26	50	44	49	93
シーソー	22	30	52	-	-	-
チェーンジャングル	17	17	34	-	-	-
ジャングルジム	-	-	-	38	27	65
サッカーボール遊び	49	0	49	29	5	34
野球・キャッチボール	65	2	67	26	0	26
バドミントン・テニス	13	6	19	0	0	0
なわとび	4	2	6	0	3	3
体操・ジョギング	1	2	3	0	0	0
かけっこ	34	27	61	12	9	21
砂遊び	47	29	76	30	28	58
その他の各種遊び	56	18	68	14	21	35
紙飛行機・竹とんぼ	7	0	7	4	0	4
子供のお守り	32	46	78	12	27	39
散歩	34	29	63	10	9	19
犬の散歩	9	9	18	1	1	2
ベンチで休む	80	74	154	9	7	16
談話	20	40	60	5	6	11
飲食	18	11	29	0	0	0
読書	3	4	7	0	1	1
植物採集	0	2	2	3	3	6
虫とり	0	0	0	3	2	5
あみ物	0	1	1	0	0	0
通り抜け	97	178	275	6	9	15

表 2 は、観察による入園者の主な行動内容を示したものである。A公園では、幼児のぶらんこ、小学生の自転車乗り回しなどの動的行動が目立つ反面、ベンチで休む、子供

のお守りといった中年層の静的行動も比較的多くみられた。また、「通り抜け」が多く、公園を生活道路の一部として利用するなど行動様式の多様さが観察された。

B公園では、ぶらんこ、すべり台、ジャングルジムのような遊具を使った動的行動が目立っているが、散歩やベンチで休むなどの静的行動が非常に少なかった。これは、公園の雰囲気あるいはオープンスペースなどの全体的なレイアウトについて一考を要するものと考えられる。例えば、ドラム缶トンネルなどの利用は極めて少なく、スペースを無駄にしているといわなければならない。

公園の評価に直接かかわることはないが、両公園に共通してぶらんこの利用が最も多かったが、その利用の仕方は、幼児期には男女の差はみられないのに対して学齢に達した年齢層では女の子の利用が増加し、男の子はより活動的なキャッチボールやサッカーボールを使った遊びを好む傾向が観察された。

観察によって在園時間をチェックした結果では、母親と子供の在園時間が一番長く、A公園で平均44分、B公園で30分であった。各年齢層でもA公園の在園時間が長く、全体の平均で約11分の差が認められた。このことは、前述した公園全体の雰囲気などの差が反映しているものと思われる。

表. 3 性別 (人数)

	男	女	計
A公園	20	32	52
B公園	9	33	42
合 計	29	65	94

表. 4 年 齢 (人数)

	13~20	21~30	31~40	41~50	51~
A公園	2	25	16	7	2
B公園	0	19	21	2	0
合 計	2	44	37	9	2

表. 5 住居の種類 (%)

	戸 建	高層集合	アパート
A公園	68	15	17
B公園	14	86	0

表 3~5 まではアンケート回答者の内訳である。性別では、A公園ではある程度男性の回答も得ることができたが、B公園では男性の回答は少なく、全体として女性からの回答が3分の2を占めた。

年齢別では、21~40才台の年齢層が全体の80%を超えており、やや偏った年齢構成となった。

住居は、A公園が戸建住宅街の中心にあること、B公園が高層の集合住宅に隣接していることを反映していると思われる。

次に、来園のための交通手段についてみると、A公園では徒歩(59%)、自転車(28%)、車・バイクなど(13%)と多少変化があるのに対して、B公園では100%徒歩による来園であった。これは、B公園でのアンケートの対象者の多くが主婦層であったことによると思われる。

徒歩での所要時間では、1~10分と答えた者がA公園の58%に対してB公園では88%あった。A公園では、11~20分および21分以上要した者もそれぞれ21%あったが、B公園ではすべての者が20分以内の来園者であり、近くの高層住宅に居住する人たちの利用率が群を抜いて高いことを示している。

同伴者は、A公園では家族が65%、次いでひとりで21%、友達13%、B公園でも、家族76%、ひとりで12%、友達5%とほとんど同様の結果であり、両公園とも家族づれの利用が主であることがわかる。

過去1ヶ月間における利用率についてみると、両公園とも10回以上と答えた者が半数を超えており、初めてと答えたのはA公園の13%だけであった。両公園ともかなりの頻度で利用されているといえる。

来園の理由について、該当する項目にいくつでも○印をつけさせる方法で回答を求めた結果、A公園では、広くて安全、近い、息抜き・休息などの項目が多く、B公園では、近いと答えた者が圧倒的に多く、さらに、子供の遊びと答えた者もかなりの数に達した。入園理由は公園の評価に関係する重要な要素と思われるが、A公園は多様な評価を受けており、B公園のように単に近いという入園理由では不十分のように思える。

公園の混雑度に対しては、「ちょうど良い」と答えた者がいずれも約8割に達しており、まずまず適度な混雑度であるといえる。

公園に対するイメージでは、A公園の回答者は広場、遊び・運動をあげており、B公園では緑、自然、花、あるいは静かさや空気のうつくしさをあげている。住環境や身近にある公園の違いによってイメージするものに変化があることがわかる。

公園に対する期待については、イメージの実現を望むのが当然であって、A公園では動的活動が安全に行える広々とした空間を期待し、B公園では自然の豊富な、清潔な環境、静かな雰囲気を楽しんでいる。比較的騒音の多い雑然とした環境にあるB公園周辺の住民が、安らぎの場として公園に期待するところは大きいと思われる。

実施したレクリエーション活動の種類をみると、両公園とも「子供のお守り」という回答が一番多かった。「子供のお守り」が母親にとってレクリエーションであるかどうか

かは意見の分かれるところであろうが、義務観念にとらわれた行動としてではなく、より積極的に子供と活動するという意味でレクリエーションの一端としてとらえてもいいのではないかと考える。公園は、幼い子供たちの社会経験の場として重要な役割を果たしていることは明らかである。次いで、A公園では散歩のような比較的静的なものが多く、B公園ではかけっこ、おにごっこ、かくれんぼや遊具を使った遊びなど子供たちの活発な活動が目立った。

表. 6 A公園とB公園の評価の相違

項目	χ^2 の値	P
公園のスペース	12.532	***
公園の清潔さ	26.039	***
公園内の樹木の種類	5.617	*
公園内の樹木の数	12.236	***
公園内の樹木の配列	0.187	
公園内の花の種類	2.363	
公園内の花の数	1.142	
公園内の花の配列	0.291	
公園内の虫の種類	0.590	
公園内の虫の数	0.183	
公園内の鳥の種類	4.335	*
公園内の鳥の数	1.604	
公園内の芝生のスペース	1.664	
公園内の芝生の状態	0.015	
公園内の遊具の種類	9.849	**
公園内の遊具の数	10.177	**
公園内の遊具の配列(間隔)	4.325	*
公園内のベンチの数	2.809	
公園内のベンチのデザイン	6.115	*
公園内のベンチのサイズ	0.035	
ゴミ箱の数	5.889	*
ゴミ箱の配列	3.010	
ゴミ箱のデザイン	0.919	
ゴミの処理状態	5.349	*
トイレの数		
トイレの清潔さ		
トイレの建物の大きさ		
トイレの建物の配色		
トイレの建物のデザイン		
公園の出入り口の数	0.694	
公園の出入り口の場所	2.256	
公園内の水道の数		
公園内の水道の配置		
公園内全体の配置	0.009	

* P<.05 ** P<.01 *** P<.001

公園に対する評価の相違について χ^2 検定した結果が表6である。

公園のスペースについては、A公園とB公園で明らかに評価の相違がみられた。A公園では十分と答えた者が63%あったが、B公園では十分の17%に対して不十分と答えた者が40%に達した。しかし、B公園では、混雑度で「ちょ

うどよい」と答えた者が81%もあることから、スペースに対する評価は公園全体の面積ばかりではなく、オープンスペースのレイアウトによってもかなり影響を受けるものと思われる。すなわち、B公園においては、すべり台が広場の中央付近に設置されていることが全体に対して圧迫感を与えておりレイアウトの改善で評価も変わることも考えられるのである。設計者は、より年少者の利用を考慮したものであると思われるが、公園におけるオープンスペースの重要性を考えるならばレイアウトに一考の余地があるといえる。

公園の清潔さについては、十分と答えた者がA公園では37%、B公園では14%であった。これは満足できる状態ではないと思われるが、特にB公園では計画的な管理、整備の必要性がうかがえる。

公園内の樹木の種類（A公園の十分である60%に対してB公園33%）や樹木の数（A公園の十分である64%、B公園21%）でも差がみられたことは、樹木の種類や数が公園評価として重要なファクターであるといえることができる。しかし、両公園とも樹木の種類や数にほとんど差はなく、むしろ面積との対比でみるならばB公園の方が樹木の密度は濃いといえるにもかかわらずこのような評価を受けたのは、設置年数の長いA公園では樹齢の古い樹木が多く、うっそうとした緑の環境を現出しているからと思われる。

公園内の樹木の配列、花の種類や配列、虫や鳥の種類や数などの項目では、わずかに鳥の種類でB公園の評価が高かった程度で、特に相違は認められなかった。

芝生のスペース、状態についてもその評価に差はなかったが、両公園とも不十分という回答が70~80%を占めており、こうした面での整備が望まれるところである。

公園内の遊具については、種類、数、配列（間隔）などいずれの項目でもA公園の十分であるという回答が50%を超えたのに対して、B公園では、どちらともいえない、不十分であるを合わせるといずれも80%を超えている。これは、A公園にはB公園に設置されていないシーソーが2基設置されてあることや、ふらんこの利用者数に対する設置数（A公園 6に対してB公園 2）の差、10本のドラム缶の無駄などが起因するものと考えられる。

ゴミ箱やベンチの数、デザイン、サイズなどについては、ベンチのデザインでA公園（木製で座りやすい）では十分の回答が33%あり、B公園（プラスチック製で破損がある）では不十分の回答が39%あった。両公園とも、どちらともいえないの回答が40%以上あったことから、ひと工夫することによって高い評価が得られることも考えられる。ゴミ箱の数でも、A公園は50%の十分であるという回答を得ているが、B公園は、どちらともいえないと不十分を合わせて50%を超えている。

ゴミ箱の中のゴミの処理状態では、A公園（自治会による週1回の清掃）が十分であるの回答が18%、B公園（市

の管理により月1回の予定だが確認できない）では6%、不十分の回答はA公園で36%、B公園で75%あった。このことから、両公園ともゴミの処理に関しては十分満足のいく評価を得ているとはいえず、特にB公園での改善が望まれるところである。

トイレや水道については、一般的に評価の低い事項ではあるが、A公園に対する評価は「不十分である」という回答がいずれの項目でも60%を超えていた。B公園にはトイレの設備がないために評価の相違を検討することはできないが、水道の設備と掲示板は破損状態のままであり、いずれにしても高い評価が得られるとは思われない。トイレや水道の設備が整備されていないというのは、公園としての最低条件さえ満たしていないといえるし、また、たとえ設置されていても数やスペース、清掃などに対する配慮がなされなければ十分な評価は得ることができないと思われる。もちろん利用する側のマナーの悪さも指摘できることであり、利用者の公園に対する意識の改善も問題となろう。

出入口の場所や数、公園全体の配置などについてはいずれの公園でもある程度の評価があり差はみられなかった。

5. まとめ

本研究は、船橋市内のふたつの公園について施設の内容、利用状況および公園に対する評価を調査した。結果は次のようにまとめられる。

(1) 観察調査結果

- ① 調査期間中の入園者の概数は、A公園で男性 321名、女性 261名、合計 582名、B公園では男性 166名、女性 147名、合計 313名であった。
- ② 両公園とも、小学生、幼児の利用が最も多く、次いで、A公園では中年層の男性、B公園では主婦が多かった。大人の利用者に違いがみられたのは、公園付近の環境や公園の性格の相違によるものと思われる。
- ③ A公園では各年齢層による行動の多様さがみられた。B公園では子供の遊具を使った動的な行動が目立った。
- ④ 両公園間で在園時間に差がみられ、平均で約11分A公園の方が長かった。

(2) アンケート調査結果

- ① 来園のための交通手段、所要時間で明らかな違いがみられたが、これは、B公園でのアンケート回答者の多くが主婦であったことによるものと思われる。
- ② 両公園とも家族での利用が多く、利用頻度では一ヶ月10回以上と答えた者がいずれも半数を超えた。
- ③ 来園理由は、A公園では広くて安全、近い、休息などが多く、B公園では近いと答えた者が最も多かった。
- ④ 公園に対するイメージ、期待では、A公園では動的活動が安全に行える広場を、B公園では、豊かな自然と

清潔で静かな雰囲気あげており、これは、回答者の住環境や公園の現況などが影響しているものと思われる。

⑤公園内での活動内容では両公園とも子供のお守りが最も多く、次いで、A公園では散歩のような比較的静的な行動が多いのに対して、B公園では遊具を使った子供の動的な活動が目立った。

⑥評価に相違がみられたのは、公園のスペース、清潔さ、樹木の数、遊具の種類や数などであり、A公園では比較的高い評価を得たのに対して、B公園では「不十分」とした回答が多かった。

以上、船橋市内のふたつの公園について、その施設の内容および利用者による評価を比較しながら検討を試みたが、今回はアンケートの回答者に偏りがある断定的な結論を導き出すまでは至らず結果を報告するに止まらざるを得なかった。今後、観察調査の徹底と質問内容の充実、対象者の選別などに検討を加え、さらに調査・研究を継続したいと考える。

参 考 文 献

- 1) 神山恵三著 「森の不思議」岩波新書 1983
- 2) アルバートJ. ラットン著 白井彦衛訳「公園の解剖」鹿島出版会 1981
- 3) ベンホイッター、ケネスブラウン 都市問題研究会訳「人間のための公園」鹿島出版会 1980
- 4) 田畑貞寿他「緑と住居環境」古今書院 1984
- 5) 日本公園緑地協会編「公園緑地」Vol 43 No.3 1982
44 No.3 1983
44 No.5 1984
45 No.5 1984
45 No.6 1985
- 6) 日本建築学会論文報告集 第 287号 1980
第 303号 1981
第 306号 1981
第 311号 1982
- 7) 福富久夫、石井 弘「緑の計画」地球社 1985
- 8) 松原治郎「余暇社会学」垣内出版 1977

キャンプ場の利用状況と 施設の評価について

—— 白州町菅尾白の森キャンプ場の場合 ——

○朝倉徳雄 永嶋正俊 澤村 博 川井 昂 吉本俊明 菊地君男 岩田 惇

(日 本 大 学)

キャンプ場施設 利用状況 評価

1. はじめに

近年、余暇時間の増大に伴い余暇に営まれる野外活動の成長はめざましいものがあり、特に、広大な自然の中で行われるキャンプは自然志向の高まりもあって、ますますその需要を拡大していくものと思われる。

わが国のキャンプは、学校教育、ボーイスカウト、YMCAその他の団体によって、組織的・計画的に運営される組織キャンプとして、あるいは仲間や家族などで楽しむレクリエーションのためのキャンプとして発展してきた。それに伴い数多くのキャンプ場が設置され、その数は、2,500ヶ所近くにも及ぶといわれている。

しかし、これらのキャンプ場の施設の内容については著しい格差のあることが指摘されている。充実したキャンプは、キャンプ場の施設・設備の内容によって大きく左右されることから、本研究は、昭和56年林業構造改善事業の一環として、自然林の中に設置された町菅尾白の森キャンプ場の利用状況および評価について調査し、現状を把握することによってキャンプ場のあり方について具体的提案をするための基礎資料を得ようとするものである。

2. キャンプ場の概況

名称	町菅尾白の森キャンプ場
所在地	山梨県北巨摩郡白州町白須
経営主体	白州町役場
営業開始	昭和56年
交通	中央本線葦崎駅から山梨交通バス30分 で白州町、徒歩15分

施設

面積 3,200㎡

施設内容

- ・管理棟/木造平屋/40㎡
- ・バンガロー/丸太造り (10人用) 5棟
- ・" / " (6人用) 10棟
- ・" / " (5人用) 10棟
- ・テント (5人用) 10張
- ・テントサイト/林間平地/80㎡
- ・便所/木造モルタル/25㎡× 1棟 (男子用大小各3, 女子用4)
- ・簡易便所/リース/ 2棟

- ・シャワー室/木造平屋/55㎡ (シャワー 4基)
- ・共同炊事場/ブロック平屋/40㎡ × 3棟 (水道の蛇口 8ヶ所が 2棟, 10ヶ所が 1棟, かまど12ヶ所が 2棟, 10ヶ所が 1棟)
- ・アズマヤ/木造平屋/9㎡× 5棟
- ・キャンプファイヤー場 80㎡× 2
- ・駐車場 1,486㎡ (120台)

配置 図-1
 収容人員 210人
 開設期間 5月~10月
 管理体制

- ・管理方法 民間人に委託
- ・管理者数 3名 (うち 2名臨時)
- ・給水 簡易水道
- ・排水 分流式 (し尿はくみとり, 他は放流)
- ・ゴミ処理 焼却, 埋没, 搬出

周辺の状況

- ・遊歩道: キャンプ場から駒ヶ岳神社まで45分, 日向山まで 2時間30分

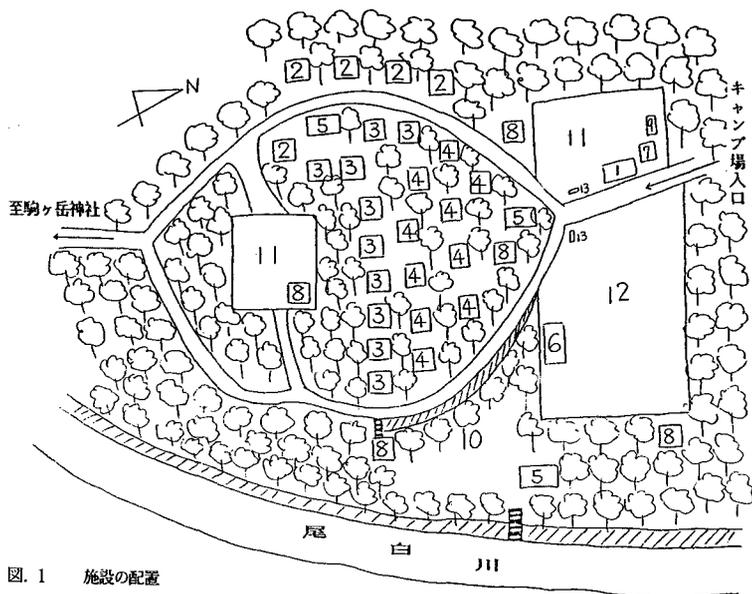


図 1 施設の配置

- | | | | |
|---------|-----------------|----------------|----------------|
| 1. 管理棟 | 2. バンガロー (10人用) | 3. バンガロー (6人用) | 4. バンガロー (5人用) |
| 5. 炊事場 | 6. 便所 | 7. シャワー室 | 8. アズマヤ |
| 9. 物置 | 10. テントサイト | 11. キャンプファイヤー場 | 12. 駐車場 |
| 13. 案内板 | | | |

分のハイキングコースが整備されている。

- ・河川：日本名水百選に選ばれた尾白川がキャンプ場の横を流れており、ヤマメやサワガニが生息し、魚つり、水遊びができる。
- ・登山：甲斐駒ヶ岳（標高 2,965m）、日向山（標高 1,659m）がある。
- ・駒テニスセンター（アンツーカー）：キャンプ場から徒歩15分。
- ・樹木：クヌギ、アカマツ、カラマツ、ヒノキ、クリ、シラカバ、タラ、ハギ、ヤマサンショウ、ウリカエデなど。
- ・野草・草花：ウツギ、バライチゴ、オダマキ、ガクアジサイ、アヤメ、ホタルブクロ、スエカズラ、ワラビ、キノコなど。
- ・小鳥・小動物・昆虫：ウグイス、ホトトギス、キジ、カッコウ、カケス、ムクドリ、コジュケイ、キツネ、タヌキ、ウサギ、テン、ムジナ、クワガタ、カブトムシ、カミキリムシ、チョウ、セミなど。

3. 方法

(1)調査期間

昭和59年 7月上旬～ 9月上旬

(2)調査対象

中学生以上のキャンプ場利用者無作為に 263名選んだ。
(表-1)

(3)調査方法

キャンプ場の利用者にアンケート用紙を配布して回答を求めた。アンケート用紙の配布および回収は管理人に委託し、来場時に配布して退場時に回収した。

(4)調査項目

- A. 利用者について：職業、キャンプ経験の有無、属するグループ、グループでの立場、住居、利用した交通機関、キャンプ場選択の理由、宿泊期間、宿泊の方法、実施したレクリエーションの種類など。
- B. キャンプ場に対する評価について：テント内のスペース、テント内外の清潔さ、テントとテントの間隔、バンガロー内のスペース、バンガロー内外の清潔さ、バンガローとバンガローの間隔、炊事場のスペース、炊事場の清潔さ、炊事場の使いやすさ、水道の蛇口の数、水道の水質、かまどの使いやすさ、かまどの数、ゴミ箱の数、ゴミ箱内のゴミの処理、トイレの清潔さ、トイレの数、トイレのスペース、キャンプファイヤー場のスペース、キャンプファイヤー場の使いやすさ、キャンプファイヤー場の間隔、駐車場のスペース、駐車場の利用しやすさ、管理棟のスペース、管理棟からの情報提供、管理棟の機能、管理人の親切さ、管理人のキャンプに関する知識、バンガロー・テントサイトから炊事場・トイレ・キャン

プファイヤー場・駐車場・管理棟までの距離、自動販売機の数、樹木・草花・野草などの数、野外レクリエーション活動に利用できる樹木の数、小鳥・小動物の数、河川の水質、河川の水質、河川の水遊びに利用できるスペース、レクリエーション工芸に利用できる河川の流木・石・岩石などの数、魚つりの場所、登山・ハイキングコースの道しるべ、登山・ハイキングコースの歩きやすさ、オリエンテーリングの場所など。

(Bの設問に対しては、「十分である」「どちらともいえない」「不十分である」のスケールを設けて回答を得た)

4. 結果と考察

表1は、アンケート対象者の内訳を示したものである。社会人が46.8%、大学生が35.7%、中高校生が17.5%であった。なお、これらの対象者の83.7%は当キャンプ場を初めて利用する者であった。

表. 1 アンケート対象者の内訳

中・高校生	大学生	社会人			
N	%	N	%	N	%
46	17.5	94	35.7	123	46.8

表2は、利用者のキャンプ経験の有無についてみたものであるが、利用者全体の約80%が経験者であり、特に社会人はその90%が経験者であった。

経験年数は、5年未満が全体の63.6%であったが、社会人の場合は約50%が5年以上の経験者であり、そのうちの

表. 2 キャンプ経験の有無

	中・高 N=46	大学 N=94	社会人 N=123	全体 N=263				
	N	%	N	%	N	%		
経験有	39	84.8	59	62.8	111	90.2	209	79.5
経験無	7	15.2	35	37.2	12	9.8	54	20.5

表. 3 属するグループ

	中・高 N=46	大学 N=94	社会人 N=123	全体 N=263				
	N	%	N	%	N	%		
授業	0	0	56	59.6	0	0	56	21.3
個人	2	4.3	0	0	0	0	2	0.8
家族	10	21.7	0	0	30	24.4	40	15.2
友達	5	10.9	0	0	16	13.0	21	8.0
ボーイスカウト	0	0	1	1.1	17	13.8	18	6.8
ガールスカウト	0	0	1	1.1	3	2.4	4	1.5
子供会	0	0	0	0	13	10.6	13	4.9
学校のサークル	8	17.4	7	7.4	2	1.6	17	6.5
教会の集い	11	23.9	23	24.5	20	16.3	54	20.5
その他	10	21.7	6	6.4	22	17.9	38	14.4

約半数が10年以上の経験者であった。

利用者がどんなグループに属しているかをみると(表3)、学校や団体・組織に属しているグループが多いのがわかる。これは、わが国のキャンプが、ボーイスカウトやYMCA、学校、地域・職場団体による教育キャンプなどを主流として発展してきたことを考えると当然の結果とも思われる。しかし、最近の傾向として、キャンプを「生活の一部」として楽しむという、いわゆる「ファミリーキャンプ」とよばれるキャンピングの分野が拡大されており、本調査でも「家族」と答えた者が比較的多かったことからみて今後さらにこの分野のキャンプが発展していくものと思われる。

表. 4 住 居

	中・高 N=46		大学 N=94		社会人 N=123		全体 N=263	
	N	%	N	%	N	%	N	%
山 梨	5	10.9	0	0	37	30.1	42	16.0
東 京	17	37.0	45	47.9	36	29.3	98	37.3
神 奈 川	16	34.8	28	29.8	32	26.0	76	28.9
千 葉	4	8.7	8	8.5	6	4.9	18	6.8
埼 玉	3	6.5	6	6.4	3	2.4	12	4.6
茨 城	0	0	0	0	4	3.3	4	1.5
そ の 他	1	2.2	7	7.4	5	4.1	13	4.9

次に利用者の住居についてみたのが表4である。県内の利用者は16%と少なく、そのほとんどが県外の利用者であった。特に、東京都および神奈川県の利用者が多かった。また、利用した交通機関(表5)をみると、貸し切りバスやマイカーでの来場が多いことがわかる。これは、当キャンプ場が中央自動車道小淵沢1・Cに近いことから、首都圏から車を利用して来場しやすい位置にあることを示しているものと思われる。

表. 5 利用した交通機関

	中・高 N=46		大学 N=94		社会人 N=123		全体 N=263	
	N	%	N	%	N	%	N	%
中央線	12	26.1	3	3.2	10	8.1	25	9.5
路線バス	3	6.5	3	3.2	0	0	6	2.3
貸切バス	19	41.3	93	98.9	52	42.3	164	62.4
車(マイカー)	16	34.8	0	0	61	49.6	77	29.3
バイク	0	0	0	0	0	0	0	0
自転車	0	0	0	0	0	0	0	0
徒歩	1	2.2	4	4.3	1	0.8	6	2.3
その他	7	15.2	0	0	7	5.7	14	5.3

表. 6 キャンプ場選択の理由

	中・高 N=46		大学 N=94		社会人 N=123		全体 N=263	
	N	%	N	%	N	%	N	%
1.住居から近い	0	0	0	0	9	7.3	9	3.4
2.以前に利用し知っていた	11	23.9	0	0	16	13.0	27	10.3
3.紹介された	8	17.4	2	2.1	37	30.1	47	17.9
4.他のキャンプ場より費用が安い	1	2.2	0	0	4	3.3	5	1.9
5.他のキャンプ場より自然がある	0	0	1	1.1	14	11.4	15	5.7
6.組織・グループが決めた	27	58.7	89	94.7	54	43.9	170	64.6
7.その他	0	0	2	2.1	5	4.1	7	2.7

キャンプ場選択の理由(表6)は、「組織・グループが決めた」という回答が多かった(64.6%)。これは、学校や組織・団体による利用が多く引率される者の絶対数が多いことを考えれば当然のことであるが、リーダーの立場ではどのような選択理由であったかを分析してみると、「組織・グループが決めた」というのは47.3%であり、「紹介された」というのが38.2%あった。対象者別にみると、中高校生および大学生のリーダーではほとんどが「組織・グループが決めた」と答えているのに対して、社会人のリーダーでは半数以上が「紹介された」と答えている。当キャンプ場が開設間もないこともあり、知名度が低いことを考えるならば、組織・団体に対する積極的なPRによってかなりの来場者を誘致できるのではないと思われる。しかし、「他のキャンプ場より費用が安い」、「他のキャンプ場より自然がある」の項目で回答が少なかったことは、他のキャンプ場との比較において検討されなければならない問題であろう。

表. 7 宿泊期間

	中・高 N=46		大学 N=94		社会人 N=123		全体 N=263	
	N	%	N	%	N	%	N	%
1泊	6	13.0	1	1.1	36	29.3	43	16.3
2泊	28	60.9	25	26.6	67	54.5	120	45.6
3泊	0	0	61	64.9	9	7.3	70	26.6
4泊	1	2.2	2	2.1	8	6.5	11	4.2
5泊	0	0	0	0	0	0	0	0
6泊	10	21.7	0	0	0	0	10	3.8
7泊	1	2.2	0	0	0	0	1	0.4
無記入	0	0	5	5.3	3	2.4	8	3.0

表7は、宿泊期間についてみたものである。利用者全体の平均宿泊数は2.4泊であるが、中高校生、大学生、社会人によってその内容を異にしている。中高校生は2泊が最も多く、次いで6泊という長期宿泊になっている。この長

期宿泊者の属するグループは9名が「塾」と答えておりすべて中学生であった。大学生は3泊が最も多く、そのほとんどが「授業」として参加した学生であった。社会人は、1泊および2泊を合わせると83.8%を占めており概ね2泊以内の宿泊期間であった。これは、昭和58年の企業における夏季休暇用特別休日の平均日数が2.5日（レジャー白書1986年版）という結果とも一致するもので、社会人の場合は短期キャンプにならざるを得ない状況にあるといえる。

表. 8 宿泊方法

	中・高 N=46		大学 N=94		社会人 N=123		全体 N=263	
	N	%	N	%	N	%	N	%
バンガロー	17	37.0	26	27.7	79	64.2	122	46.4
テント	27	58.7	6	6.4	41	33.3	74	28.1
バンガローとテント	2	4.3	61	64.9	3	2.4	66	25.1
テントとキャンピングカー	0	0	1	1.1	0	0	1	0.4

宿泊の方法については表8のとおり中高生ではテントの利用者が多く、社会人はバンガローの利用者が多かった。大学生が、バンガローとテントを併用したと回答した者が

表. 9 実施したレクリエーション活動

	中・高 N=46		大学 N=94		社会人 N=123		全体 N=263	
	N	%	N	%	N	%	N	%
1. 野外料理	42	91.3	86	91.5	104	84.6	232	88.2
2. キャンプファイヤー	32	69.6	94	100.0	77	62.6	203	77.2
3. ハイキング	25	54.3	35	37.2	55	44.7	115	43.7
4. 登山	12	26.1	59	62.8	14	11.4	85	32.3
5. 写真	11	23.9	25	26.6	25	20.3	61	23.2
6. 絵画	0	0	4	4.3	4	3.3	8	3.0
7. 自然研究	10	21.7	30	31.9	36	29.3	76	28.9
8. 野外教育の聴講	4	8.7	47	50.0	18	14.6	69	26.2
9. ゲーム	23	50.0	73	77.7	53	43.1	149	56.7
10. 魚つり	1	2.2	1	1.1	13	10.6	15	5.7
11. 工作	2	4.3	25	26.6	14	11.4	41	15.6
12. 演劇	9	19.6	15	16.0	15	12.2	39	14.8
13. 踊・ダンス	16	34.8	45	47.9	31	25.2	92	35.0
14. 歌	15	32.6	76	80.9	42	34.1	133	50.6
15. チームスポーツ	4	8.7	17	18.1	17	13.8	38	14.4
16. 水遊び	40	87.0	51	54.3	68	55.3	159	60.5
17. ピクニック	3	6.5	7	7.4	6	4.9	16	6.1
18. 読書	12	26.1	13	13.8	8	6.5	33	12.5
19. ラジオを聞く	5	10.9	11	11.7	12	9.8	28	10.6
20. テレビを見る	0	0	0	0	0	0	0	0
21. その他	9	19.6	10	10.6	15	12.2	34	12.9

半数を超えたのは、授業で参加した学生のキャンププログラムの内容によるものと思われる。

表9は、今回のキャンプで実施したレクリエーション活動の種類である。回答の多かった順に、「野外料理」「キャンプファイヤー」「水遊び」「ゲーム」「歌」であった。キャンプで実施するレクリエーション活動については、前野が全国のキャンプ場を対象に調査しており、それによると、自然観察やハイキング、山菜採り、登山およびオリエンテーリングといった活動が上位にランクされている。今回の調査ではそれとは異なる結果を得たが、これは、当キャンプ場の施設の配置（図-1）に関係しているのではないかと推察される。

すなわち、バンガローとテントサイトの近くに炊事場が3ヶ所設置されており野外料理を楽しむスペースがあること、キャンプファイヤー広場が2ヶ所あること、そして、尾白川がキャンプ場のすぐ近くを流れていることなどが、レクリエーション活動をある程度条件づけているものと思われる。また、対象者別では、中高生は「ハイキング」、大学生では「登山」と答えた者が半数を超えており、若者にとってはこれらの活動が実施度の高い活動であることがうかがえる。

キャンプ場の混雑の度合いについては、「ちょうどよい」と答えた者が86.7%あった。これは、このキャンプ場へまた来たいかという問に対して「来たくない」と答えた者が皆無であったことと併せて、当キャンプ場に対する評価が概ね好意的であることを表しているものと思われる。

表10は、施設に対する評価について表したものである。キャンパーがキャンプ場を決定する場合、施設の内容、豊富な自然、レクリエーション活動のできる場所などがその条件になっているものと思われるので、そのような観点から検討してみよう。

まず、各施設間の距離や間隔については「十分である」という回答がいずれも50%を超えておりまずまずの評価を得ている（バンガローおよびテントの間隔は5~10m、そこから炊事場までは10~30m、キャンプファイヤー場までは20~70m、さらに、便所・管理棟・駐車場などの施設までは30~70mの距離である）。

施設のスペースについては、キャンプファイヤー場に対する評価が高かったが（71.5%）、これは、2ヶ所ある広場が多目的広場としての機能を果たしている結果ではないかと推察される。また、駐車場に対する評価も67.3%が十分であると答えており、キャンプ場の収容員からみてまず十分な広さと考えてよいと思われる。テント内のスペースについては評価の分かれるところであり、団体で利用した場合適性な人数で使用されているかどうか検討しなければならないと考える。

施設の清潔さに対する評価は、水道の水質に関して非常に高い評価を得ている（80.6%）ことが顕著である。対象

者にキャンプ経験者が多数含まれていることを考えれば、他のキャンプ場と比較しても当キャンプ場の水質が優れているとみてよいと思われる。しかし、トイレの清潔さでは「不十分である」と答えている者が多く（37.6%）考慮すべき問題点であろう。

表. 10 施設に対する評価

N=263

項 目	十分である		どちらとも いえない		不十分である		無回答	
	N	%	N	%	N	%	N	%
1. テント内のスペース	75	28.5	68	25.9	45	17.1	75	28.5
2. テントの内外の清潔さ	87	33.1	76	28.9	23	8.7	77	29.3
3. テントとテントの間隔	133	50.6	42	16.0	12	4.6	76	28.9
4. バンガローのスペース	125	47.5	62	23.6	31	11.8	45	17.1
5. バンガローの内外の清潔さ	106	40.3	79	30.0	28	10.6	50	19.0
6. バンガローとバンガローの間隔	158	60.1	40	15.2	14	5.3	51	19.4
7. 炊事場のスペース	116	44.1	82	31.2	63	24.0	2	0.8
7. 炊事場の清潔さ	138	52.5	94	35.7	30	11.4	1	0.4
9. 炊事場の使いやすさ	130	49.4	101	38.4	28	10.6	4	1.5
10. 水道の蛇口の数	145	55.1	59	22.4	58	22.1	1	0.4
11. 水道の水質の良さ	212	80.6	39	14.8	7	2.7	5	1.9
12. かまどの使いやすさ	141	53.6	78	29.7	30	11.4	14	5.3
13. かまどの数	155	58.9	58	22.1	32	12.2	18	6.8
14. ゴミ箱の数	104	39.5	74	28.1	73	27.8	12	4.6
15. ゴミ箱内のゴミ処理	110	41.8	87	33.1	50	19.0	16	6.1
16. トイレの清潔さ	74	28.1	88	33.5	99	37.6	2	0.8
17. トイレの数	111	42.2	57	21.7	95	36.1	0	0
18. トイレのスペース	152	57.8	65	24.7	41	15.6	5	1.9
19. キャンプファイヤー場の スペース	188	71.5	45	17.1	10	3.8	20	7.6
20. キャンプファイヤー場の 使いやすさ	157	59.7	73	27.8	9	3.4	24	9.1
21. キャンプファイヤー場の間隔	167	63.5	62	23.6	8	3.0	26	9.9
22. 駐車場のスペース	177	67.3	53	20.2	5	1.9	28	10.6
23. 駐車場の利用しやすさ	149	56.7	67	25.5	9	3.4	38	14.4
24. 管理棟のスペース	135	51.3	79	30.0	2	0.8	47	17.9
25. 管理棟からの情報提供	80	30.4	105	39.9	28	10.6	50	19.0
26. 管理棟の機能	108	41.1	101	38.4	8	3.0	46	17.5
27. 管理人の親切さ	177	67.3	51	19.4	6	2.3	29	11.0
28. 管理人のキャンプに関する知識	116	44.1	91	34.6	7	2.7	49	18.6
29. バンガロー・テントサイトから 炊事場までの距離	157	59.7	82	31.2	13	4.9	11	4.2
30. バンガロー・テントサイトから トイレまでの距離	145	55.1	80	30.4	31	11.8	7	2.7
31. バンガロー・テントサイトから キャンプファイヤー場までの距離	169	64.3	64	24.3	10	3.8	20	7.6
32. バンガロー・テントサイトから 駐車場までの距離	171	65.0	63	24.0	8	3.0	21	8.0
33. バンガロー・テントサイトから 管理棟までの距離	175	66.5	59	22.4	9	3.4	20	7.6
34. キャンプ場の自動販売機の数	88	33.5	72	27.4	90	34.2	13	4.9

自動販売機の数（駐車場に 3台、バンガローサイトに 1台）に対して「不十分」と答えている者が34.2%あったが、自然を生かそうとする林間キャンプ場の性格からみて、あまり人工物を増設するのは問題があるといえる。

次に、自然に関する評価では、樹木・草花・野草などの豊富さ、河川の水質などではある程度の評価を得たといえるが、河川の水量や水遊びに利用できるスペースについては「不十分である」という回答も多く、改善の余地があるものと思われる。

レクリエーション活動のできる場所については、野外料理やキャンプファイヤーなどの活動には十分応ずることができるようであるが、河川の流木・石・岩石などの数、魚つりの場所、登山・ハイキングコースの道しるべおよび歩きやすさなどの項目で、「どちらともいえない」という回答が多かった点を考慮し今後検討しなければならないであろう。

オリエンテーリングのコースは特に設けてないが、学校や団体によるキャンプのレクリエーションプログラムにはオリエンテーリングが含まれることが多いので、このような面での配慮も必要であろう。

管理体制についてはどうであろうか。当キャンプ場を開設するに当たっては、林業就労者の雇用機会をつくりだすという意味もあり、管理人は町が民間に委託している。その管理人に対する評価では、親切さで高い評価（67.3%）を得ている。楽しい雰囲気のカンパ場であるかどうかは、最初に接する管理人の対応に大きく左右されるといってよいだろうから、その点ではまずまずの評価といえる。しかし、親切さだけでは管理・運営者としての役割を十分に果たしたとはいえない。情報提供や管理棟の機能に対しては「どちらともいえない」という回答が多く、十分な評価を得ているとは言い難い。キャンプ場のイメージアップには、管理人の働きが大きなウェイトを占めるものと思われるので、より一層の積極的なサービスが望まれるところである。

35. キャンプ場としての樹木・ 草花・野草などの数	188	71.5	52	19.8	16	6.1	7	2.7
36. 野外レクリエーション活動に 利用できる樹木の数	143	54.4	81	30.8	22	8.4	17	6.5
37. 小鳥・小動物の数	114	43.3	92	35.0	36	13.7	21	8.0
38. 河川の水質	108	41.1	64	24.3	77	29.3	14	5.3
39. 河川の水質	151	57.4	68	25.9	23	8.7	21	8.0
40. 河川の水遊びに利用できる スペース	112	42.6	70	26.6	66	25.1	15	5.7
41. レク芸に利用できる河川の 流木・石・岩石などの数	100	38.0	102	38.8	29	11.0	32	12.2
42. 魚つりの場所	30	11.4	123	46.8	64	24.3	46	17.5
43. 登山・ハイキングコースの 道しるべ	88	33.5	102	38.8	29	11.0	44	16.7
44. 登山・ハイキングコースの 歩きやすさ	74	28.1	98	37.3	44	16.7	47	17.9
45. オリエンテーリングの場所	78	29.7	108	41.1	25	9.5	52	19.8

参 考 文 献

- 1) 前野淳一郎「全国キャンプ場の実態調査」, レクリエーション研究 第7号 (1980)
- 2) 日本観光協会編「観光レクリエーション施設の計画 No.1 (キャンプ場)」 (1973)
- 3) 日本観光協会編「観光情報ファイル No.1 (キャンプ場特集)」 (1978)
- 4) 兼松保一「野外活動」, ベースボールマガジン社 (1986)
- 5) 兼松保一「キャンプ」, 成美堂出版 (1985)
- 6) 山内昭道 他「キャンプ」, 不昧堂出版 (1984)
- 7) 余暇開発センター「レジャー白書 '86」

5. まとめ

町営尾白の森キャンプ場の利用者 263名を対象に、利用状況および施設に対する評価についてアンケート調査を実施した。主な結果は次の通りであった。

- 1) キャンプ場の利用形態は、学校や団体、組織での利用が多かった。
- 2) 利用者の住居は、東京都および神奈川県が多く、利用した交通機関は貸し切りバスやマイカーであった。
- 3) 宿泊期間は、学校キャンプは3泊が多く、その他のキャンプは2泊以内の短期キャンプが多かった。
- 4) キャンプで実施されたレクリエーション活動は、野外料理やキャンプファイヤーが多く、次いで水遊び、ゲーム、歌などの順であった。
- 5) 施設に対する評価では、水道の水質、キャンプファイヤー場や駐車場のスペース、樹木・草花・野草の数などで高い評価を得た。また、施設間の間隔や距離、使いやすさなどにも好意的評価を受けた。評価の低かった項目では、トイレの清潔さ、自動販売機の数、魚つりの場所などであった。
- 6) 管理体制に対する評価では、管理人の親切さで高い評価を得た。しかし、情報提供や管理棟の機能については十分な評価を得ることができなかった。

以上、過疎地の振興策と町の活性化をめざして開設されたキャンプ場に対して、管理・運営面での一助とすべき資料を得るために、キャンプ場の利用状況と施設の評価について調査を試みた。今後、調査の内容、方法などにも改善を加えつつ調査を継続したいと考える。

第16回日本レクリエーション学会大会行事

研 究 発 表

1. 日 時 10月24日 (金) 9時～14時30分
2. 場 所 パシフィックホテル沖縄
(沖縄県那覇市西3丁目5-1 Tel 0988-68-5162)

理 事 会

1. 日 時 10月24日 (金) 12時～12時45分
2. 場 所 パシフィックホテル沖縄

1. 日 時 10月24日 (金) 12時45分～13時10分
2. 場 所 パシフィックホテル沖縄
3. 議 題 1) 1985年度決算報告
2) 1986年度予算案審議
3) そ の 他

総 会

1. 日 時 10月24日 (金) 14時30分～15時
2. 場 所 パシフィックホテル沖縄
3. 演 者 金城 光子(琉球大学教授)
4. テ ー マ 沖縄の生活とレクリエーション
ー 沖縄の伝統芸能や年中行事とレクリエーションー

学会大会記念講演

1. 日 時 10月24日 (金) 15時～16時
2. 場 所 パシフィックホテル沖縄
3. 演 者 Cor Westland(世界レジャー・レクリエーション協会副会長)
(前オタワ大学教授・レクレオロジー)
4. テ ー マ 「 北米におけるレジャー・レクリエーション研究の動向 」

会員懇親パーティー

1. 日 時 10月23日 (木) 午後6時30分より
2. 場 所 パシフィックホテル沖縄
3. 参 加 費 5,000 円

大 会 組 織

名 譽 會 長	三笠宮崇仁親王殿下	
名 譽 顧 問	小 川 寿 一	(大阪成蹊女子短期大学)
"	高 橋 眞 照	(淑 徳 大 学)
"	三 隅 達 郎	(国 際 基 督 教 大 学)
"	山 崎 進	(第 一 経 済 大 学)
會 副 會 長	江 橋 慎四郎	(鹿 屋 体 育 大 学)
"	浅 田 隆 夫	(目 白 学 園)
"	梶 山 彦三郎	(福 岡 大 学)
監 事	青 木 泰 三	(大阪薫英女子短期大学)
"	鈴 木 忠 義	(東 京 農 業 大 学)
"	深 町 一 夫	(松 戸 商 工 会 議 所)
実 行 委 員 長	高 橋 和 敏	(東 海 大 学)
実 行 委 員	秋 吉 嘉 範	(福 岡 教 育 大 学)
"	池 田 勝	(鹿 屋 体 育 大 学)
"	今 井 毅	(日 本 体 育 大 学)
"	金 崎 良 三	(九 州 大 学)
"	木 下 茂 徳	(日 本 大 学)
"	進 士 五 十 八	(東 京 農 業 大 学)
"	鈴 木 秀 雄	(関 東 学 院 大 学)
"	蘭 田 碩 哉	(日 本 レ ク リ エ ー シ ョ ン 協 会)
"	田 中 祥 子	(津 田 塾 大 学)
"	田 中 鎮 雄	(日 本 大 学)
"	田 畑 貞 寿	(千 葉 大 学)
"	仲 村 要	(同 志 社 大 学)
"	夏 目 暁	(神 戸 市 立 母 子 寮 ひ よ ど り 荘)
"	西 野 仁	(東 海 大 学)
"	長 谷 川 純 三	(筑 波 大 学)
"	日 比 野 朔 郎	(京 都 府 立 大 学)
"	藤 本 祐 次 郎	(日 本 体 育 大 学)
"	前 野 淳 一 郎	(特 ス ペ ー ス ・ コ ン サ ル タ ン ツ)
"	松 浦 三 代 子	(東 京 女 子 体 育 大 学)
"	松 原 洋 三	(立 教 大 学)
"	宮 下 桂 治	(順 天 堂 大 学)
"	渡 辺 貴 介	(東 京 工 業 大 学)
事 務 局 長	西 野 仁	(東 海 大 学)
事 務 局 員	浅 野 晃	(日 本 レ ク リ エ ー シ ョ ン 協 会)
"	麻 生 恵	(東 京 農 業 大 学)
"	梅 津 迪 子	(女 子 聖 学 院 短 期 大 学)
"	川 向 妙 子	(東 海 大 学)
"	寺 島 善 一	(明 治 大 学)
"	芳 賀 健 治	(東 京 家 政 学 院 大 学)

(運 營 委 員 会)

委 員 長	高 橋 和 敏	(東海大学)
副 委 員 長	進 士 五 十 八	(東京農業大学)
本 部 長	西 野 仁	(東海大学)
受 付	麻 生 恵	(東京農業大学)
理 事 会	西 野 仁	(東海大学)
研究発表・講演	芳 賀 健 治	(東京家政学院大学)
接 待	梅 津 迪 子	(女子聖学院短期大学)
補 助 役 員	東海大学大学院生 筑波大学大学院生 中京大学大学院生	
＊協 力	日本レクリエーション協会 第40回全国レクリエーション大会沖縄県実行委員会 琉球大学体育学研究室	

日本レクリエーション学会大会のあゆみ

1965年から1971年3月までの6年間、日本レクリエーション研究会として年1回研究大会を開催し、「レクリエーション研究」第1号～第6・7号を発行して地道な実績をかためた上で、日本レクリエーション学会は1971年3月に誕生した。

回	年度	開催場所	発表 演題数	講演数	シンポ ジウム 数
1	1971年	北九州市戸畑文化ホール（福岡県）	21	—	—
2	1972	日本都市センター（東京都）	34	—	1
3	1973	水戸市常陽銀行会議室（茨城県）	21	1	—
4	1974	唐津市市立文化会館（佐賀県）	18	1	—
5	1975	徳島県郷土文化会館（徳島県）	20	—	—
6	1976	秋田大学教育学部（秋田県）	19	—	—
7	1977	富山大学教養部（富山県）	30	—	—
8	1978	横浜市教育文化センター（神奈川県）	20	—	—
9	1979	徳山大学（山口県）	14	—	—
10	1980	石川県社会教育センター（石川県）	22	1	1
11	1981	国立婦人教育会館（埼玉県）	30	—	2
12	1982	日名子ホテル（大分県）	22	1	1
13	1983	北浜労働センター（大阪府）	28	—	1
14	1984	鹿屋体育大学（鹿児島県）	20	1	1
15	1985	三重厚生年金休暇センター（三重県）	20	—	1
15	1986	パシフィックホテル沖縄	25	1	—

参加者への御案内

1. 受 付

10月24日(金) 午前8時30分より受付を行います。下記参加費をお支払い下さい。
事前に参加費を送金された方は、送金時に沖縄ツアーリストから渡された「受領証」
を当日ご持参の上、ご提示下さい。

正会員・特別会員	1,500円
学生会員	1,000円
名誉会員・賛助会員	無料
全国レクリエーション大会参加費納入者	無料
その他一般の方	2,000円

2. 本 部

パシフィックホテル沖縄内

3. 車輛の入構について

入構および駐車可能です。駐車場をお使い下さい。

4. 休憩と食事

ホテル内の食堂が営業していますのでご利用下さい。

5. 会場内禁煙のお願い

発表会場内は禁煙です。喫煙は、喫煙所をお願いします。

(発表者へのお願いとお知らせ)

1. 発表受付

各発表会場の入口で発表受付を行います。各自の発表時刻の30分前までに受付を
すませ、「次演者席」におつき下さい。

2. 発表資料

研究発表50部を発表受付時に提出して下さい。資料には、必ず演題番号(例・
A-1, A-2), 演題, 演者氏名を明記して下さい。

3. スライド

スライド映写を希望される方は、発表受付にあるホルダーに、各自で順序正しく正像に写るように入力して、発表20分前までに発表受付にご提出下さい。スライドの大きさは、35mmフィルム用の標準マウント（50×50mm）に限ります。

4. 発表時間

発表12分、質疑討論7分程度です（10分ーベル1回、12分ーベル2回、19分ーベル3回）。

（座長へのお願いとお知らせ）

各発表会場の入口で座長受付を行います。座長開始30分前までに必ず受付をお済ませいただき、開始20分前までに「次座長席」におすわり下さい。

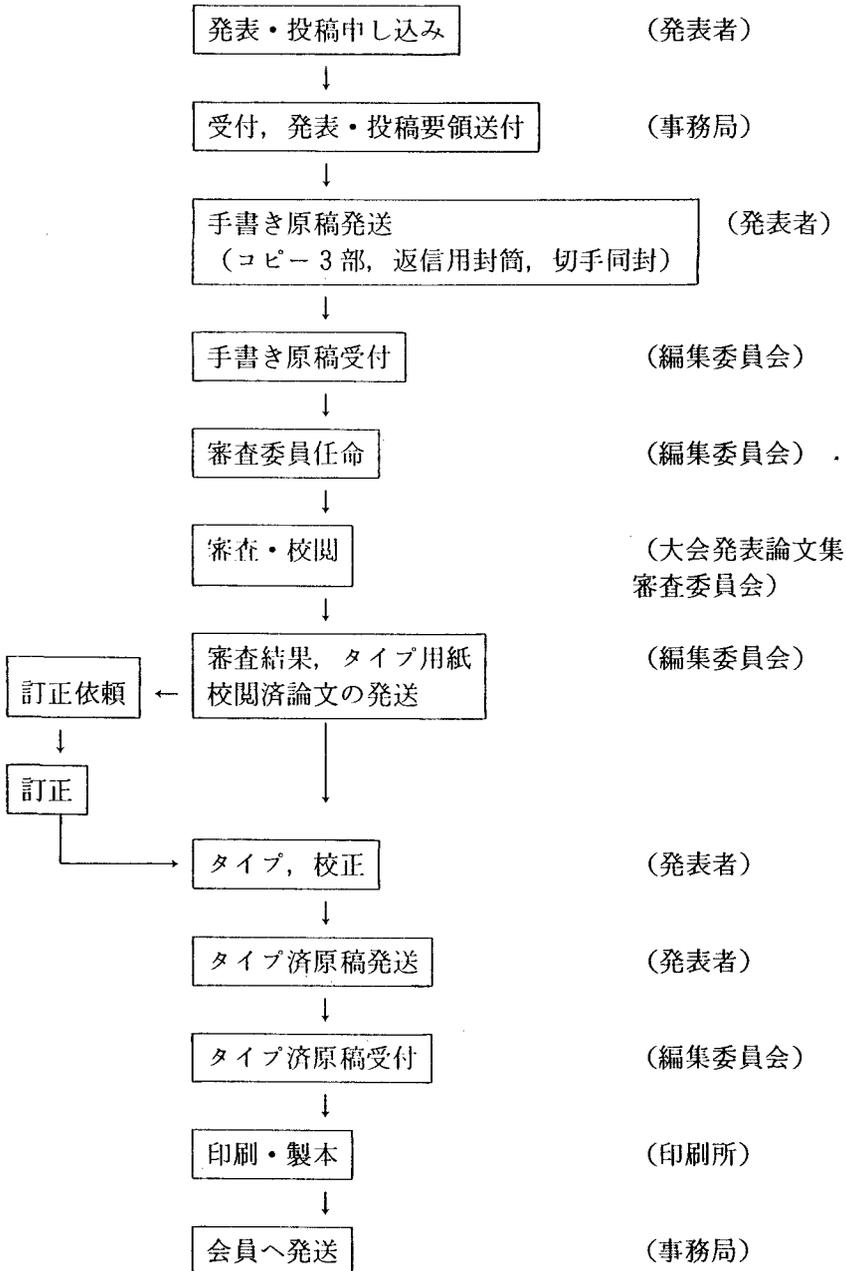
時間を厳守して進行させるようにご協力下さい。

発表取消などで空き時間ができた場合は、討論や休憩にあてられるなど、自由にご裁量下さい。

（討論者・質問者へのお願い）

挙手のあと、座長の合図を待って、所属、氏名を告げたのち、参加者にわかるように発言して下さい。

「大会発表論文集」発行の手順



62.1月刊行予定

レクリエーション基礎理論

池田 勝・永吉 宏英・西野 仁 著

■序章 現代社会とレクリエーション／余暇をめぐる社会の変化、
他 ■第1章 レクリエーション／レクリエーション運動の発展、
他 ■第2章 レクリエーションの展開 ■第3章 レクリエーションの施設 ■第4章 レクリエーションの指導 ■第5章 レクリエーション調査研究

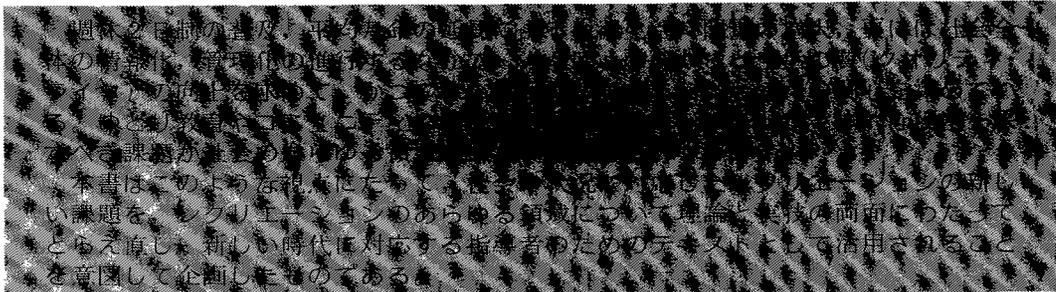
レクリエーション活動の実際

池田 勝・永吉 宏英・西野 仁 他著

〔共同執筆者〕

守能信次 塚本信也
五林正隆 福田芳則
林 信恵 橘 直隆

■第1章 レクリエーションプログラムの企画と運営 ■第2章 レクリエーション指導 ■第3章 レクリエーション活動の実際 ■付・レクリエーション関係団体、組織



各A5・約200頁・図写真多数・定価未定

62.1月刊行予定

野外教育の理論と実際

江橋慎四郎編著

〔執筆者〕

永吉宏英 仲川寿男
菊池秀雄 酒井哲男
川西正志 佐野信二
原田宗彦

■序章 全体の概観と意義づけ ■第1章 野外教育 ■第2章 野外教育の歴史 ■第3章 現代社会と野外教育 ■第4章 野外教育の展開 ■第5章 野外教育の指導者 ■第6章 わが国における野外教育の現状 ■第7章 野外教育の評価 ■第8章 野外教育の国際的発展

A5・約180頁・図写真多数・定価未定

杏林書院

〒113 東京都文京区湯島4-8-1

☎03-935-7920(仮)

編 集 委 員 会

今 井 毅 (委員長) 秋 吉 嘉 範
鈴 木 秀 雄 田 中 祥 子
前 野 淳一郎 寺 島 善 一 (幹 事)
芳 賀 健 治 (幹 事)

Editorial Committee

T.Imai(Chief Editor) Y.Akiyoshi
H.Suzuki S.Tanaka
J.Maeno Z.Terashima (Secretary)
K.Haga(Secretary)

Subscription Published three times a year : one issue in Japanese with abstracts in English and two issues in only Japanese, by Japanese Society of Leisure and Recreation Studies. Subscription is available to libraries, institutions, department, and individual members at the equivalent amount of foreign currency of 6,000 Japanese yen as a member (U.S.\$30 at present inclusive of postage).

Address : Subscription Manager, Japanese Society of Leisure and Recreation Studies, Physical Recreation, Tokai University, 1117 Kitakaname, Hiratuka-shi, Kanagawa 259-12, Japan.

「レクリエーション研究」 第16号

～第16回日本レクリエーション学会(大会発表論文集)～

1986年10月15日 印刷

1986年10月20日 発行

編集発行人 高橋和敏

発行所 日本レクリエーション学会

〒259-12 平塚市北金目1117

東海大学体育学部社会体育研究室内

担当・西野、川向

電 話 0463-58-1211

内線 3508, 3531

郵便振替 横浜 8-31789

印刷所 有限会社勝文堂印刷

〒229 相模原市二本松1-10-23

JOURNAL
of
Leisure and Recreation Studies

No. 16

Special Issue:

Papers Presented at The 16th Japanese Society of Leisure
and Recreation Studies Congress

(October 24,1986)

(Pacific Hotel Okinawa)

Japanese Society of

Leisure and Recreation Studies(JSLRS)

OCTOBER 1986